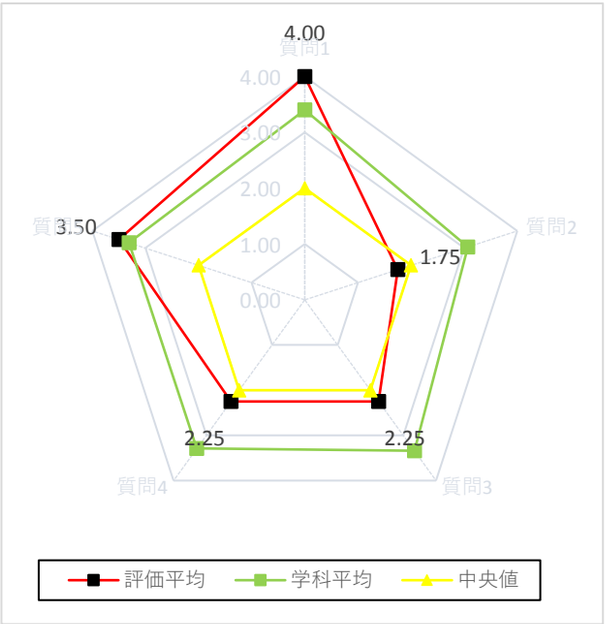
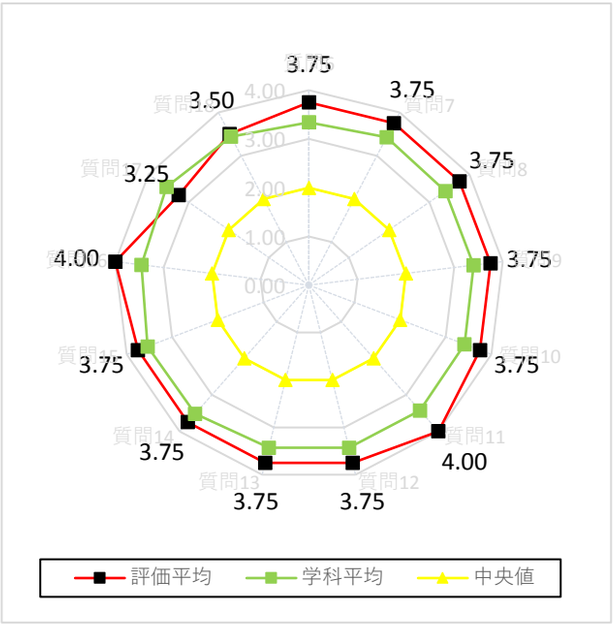
学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

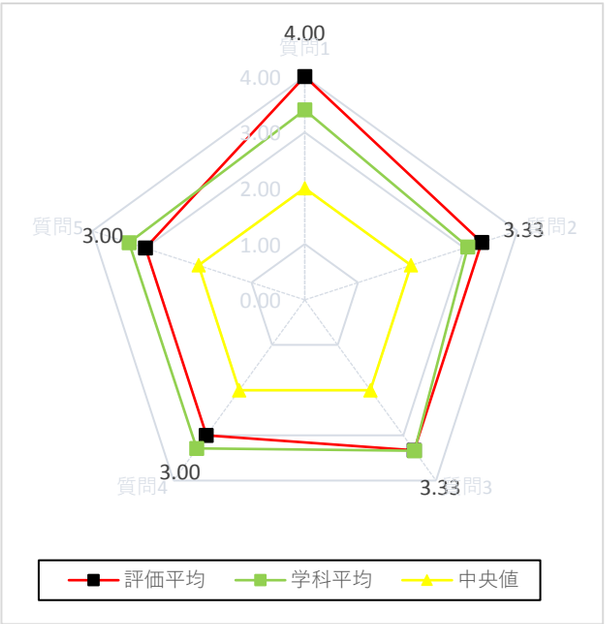
質問項目の２の部分は全体として課題であると考える。項目３、４についてはこの授業の意図の必要性がなかなか伝わらなかった問題であり学科で共有していく課題である。項目１７に関しては講義の形態上、毎週のゼミでない部分が難しいと考えられる。個人では少ないゼミの中でもそれを感じさせない関わりを行うことが課題である。

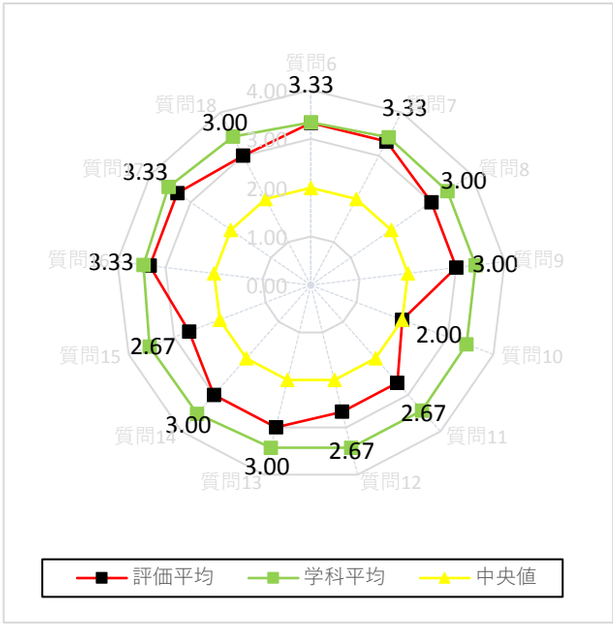
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けて授業自体の反省を学科で行い各担当教員の関わりを増やすゼミの時間を多く取り入れること、テキストを共通で導入すること等になった。これを基に初年度教育として意義を学生に伝え積極的に関わるようにしていきた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

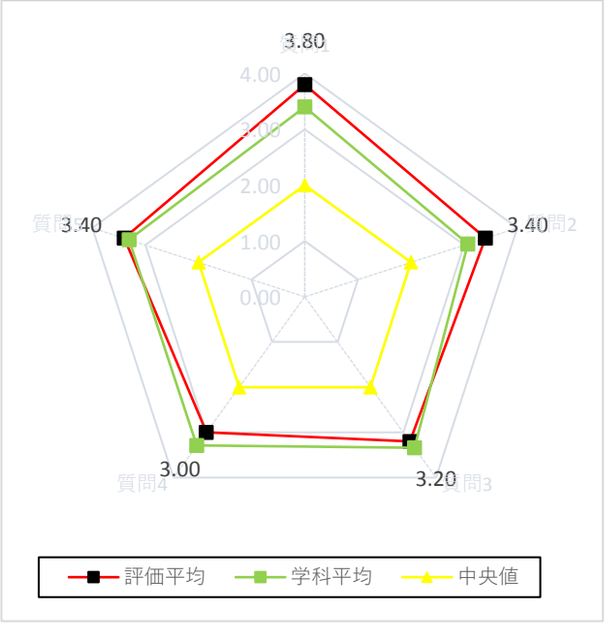
ここ三年の授業評価で初めて、ほとんどの項目で平均を下回った。その原因はどこにあったのか。いろいろ考えてみた。考えられる理由の一つは、学生間及び、教師と学生間の「コミュニケーションや人間関係づくり」にあるのではないかと思う。教師として様々な点を考慮し、学生が意欲的に学べるような準備をしてきたつもりではあったが、その趣旨や思いが十分に伝わっていなかったように感じている。学生一人一人を眺めていると、真面目に出席はしているものの、自分の方から教師や友達に働きかけようとする姿勢が余り感じられなかったように思う。自分で考えるのではなく、教えてもらう。結論や答えをすぐに求めてくる。そんな姿勢を強く感じた一年であった。大学に入学して最初の授業、学問の入り口として「あすなろうⅠ　基礎」をどう展開していくか。今の学生の実態や気質を考えながら、学生一人一人の困り感をつぶさに感じ取りながら実践をしていかねばならない。本学で最も難しい科目の一つであると思っている。

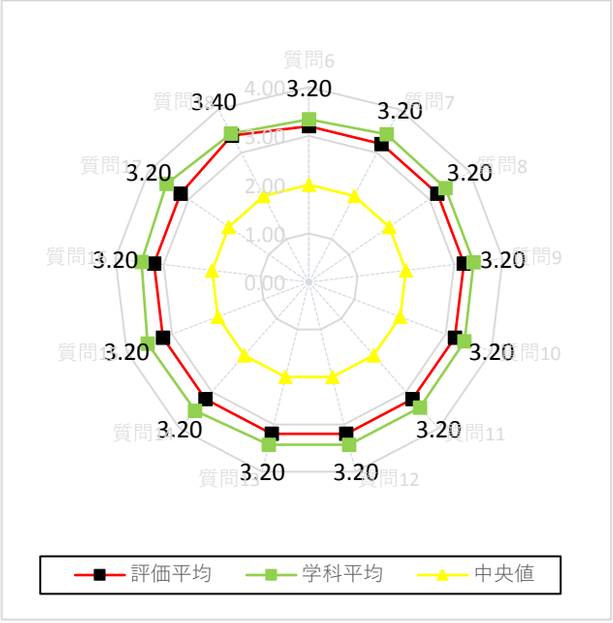
（３）次年度に向けての取り組み

「体験」を「経験」にまで高めていく、言い換えれば、「生きた知識」として定着させる手立てや見通しを明確に持って授業に臨んでいきたい。改めて、学生個々に確かな学力（スタディ・スキル）を身に付けさせなければならないと痛感している。年度末に学科全体で本授業の計画を練り直したところである。それを踏まえて、共通実践を積み上げるとともに、一人一人の学生が学習成果を可視化できるような手立て（例えば、資料やレポート課題などを綴じていく）、学生一人一人が自己肯定感や自信を持てるような教師の声がけの工夫、ポートフォリオの効果的な活用方法などを確実に実践していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

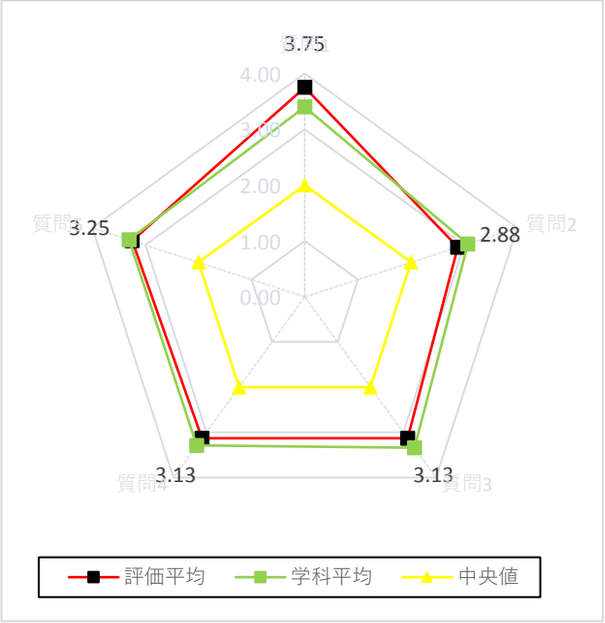
質問1の自己評価にもあるように、この授業へ学生の出席は良好であった。また、ボランティア活動への取り組みも順調にポイントを重ねていくことができ、特に顕著な問題は見られなかった。この授業において学生たちは、学外で様々なボランティア活動にも取り組んでいく。前期の段階では、初対面の地域の方と取り組むボランティア活動に対し、戸惑いを持つ学生も見受けられたが、徐々に自ら行動していくことができるようになっていたことが、活動後に提出するレポートの文面から伺えるようになっていった。初年次はこれまでとの生活や学習環境が大きく変わることから、ゼミ別活動では年間を通じて個々の学生の様子を観察することに努めた。

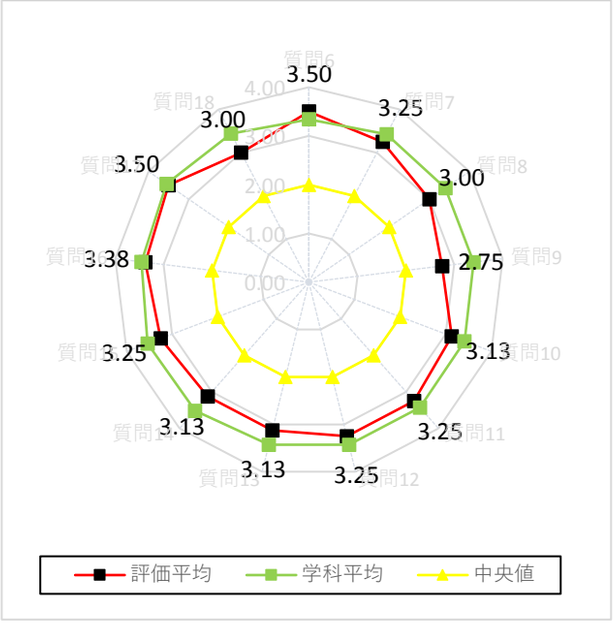
（３）次年度に向けての取り組み

年間を通じて担当する学生たちに対しては、学習面に加え生活面での指導も丁寧に対応していきたいと考えている。ゼミ別活動時における学生の発言内容や態度、レポートやポータルサイト上への記入事項に目を向け、将来の目標に向けて充実した学生生活過ごすことができるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

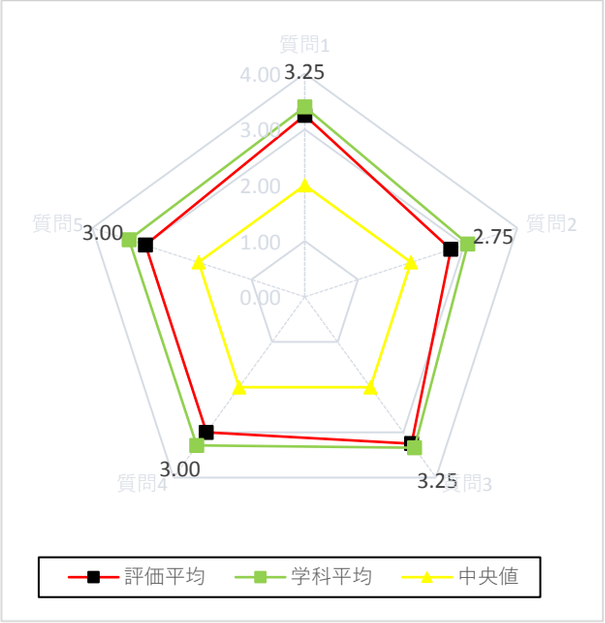
担当学生8名のうち4名が本アンケートに答えている。出席状況は良好であり、積極的に授業参加していると自己評価している。すべての質問項目に亘って、おおむね3.0以上の評価である。低いのは授業の工夫と学生自身の総合評価で、3.0となっている。
質問15,16,17については3.75の評価で、教員としての対応を評価してくれていることが分かり、熱心さや、公平さを追求する態度が伝わった。学生との授業での良い関係が築けたことが喜びである。

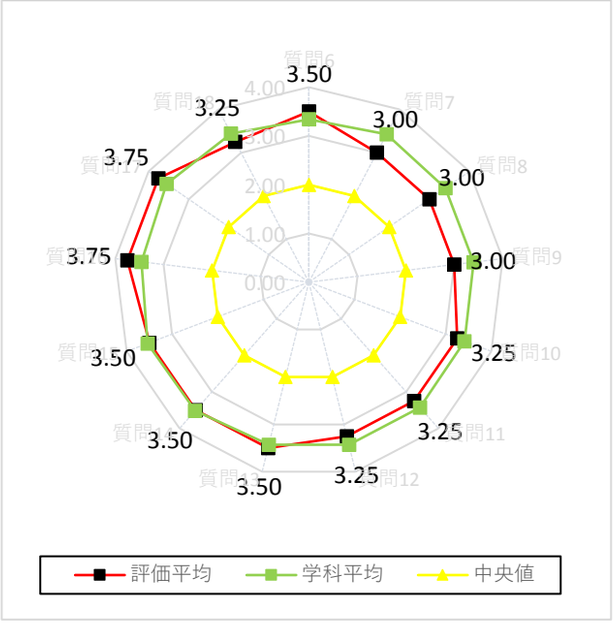
（３）次年度に向けての取り組み

本科目は、大学共通の科目として、また、学科で決められた授業として、ほとんどの学科教員に分担されながら、教員の積極性や、独自性などがほとんど考慮されていない。キャリア教育への教員のかかわりが見えるようにすべきだと思う。授業改善といっても決められたプログラムだから、教員一人一人の努力では難しいのではないかと思う。科目の位置づけについて、もっと個々の教員の主体性が発揮できるように見直しが必要だと思う。少なくとも、来年度も学生との良い関係の構築によって、学生の大学生活の順調な開始をサポートしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

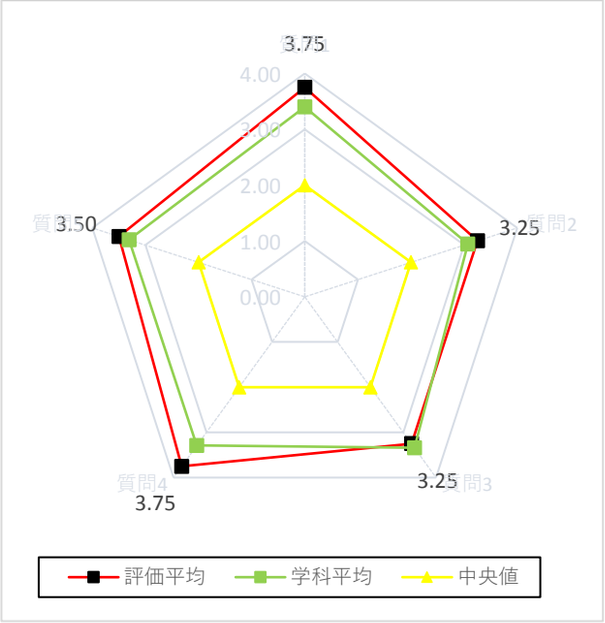
例年よりも，全般的に評価が低かった。その主たる理由として，本年度は，６名中２名の学生が，出席状況が悪く欠席が多かったことが，ゼミ全体の士気を低下させたように思われる。

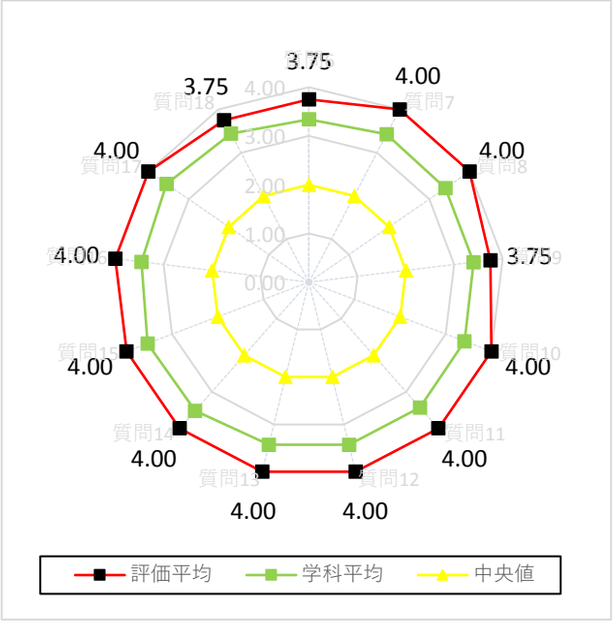
（３）次年度に向けての取り組み

「質問16」，「質問17」の評価は学科平均を上回った。教員の熱意や思いは伝わっていたと判断できる。この点を核として，次年度の評価向上をめざしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

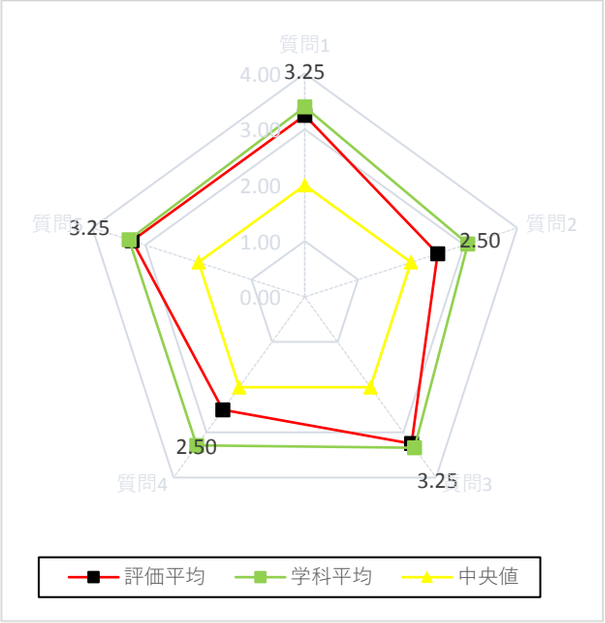
・評価平均が3.84と高い評価であり、またすべての項目で高い評価であった。
・あすなろうⅠ基礎のメニューが多すぎないか、年間通した継続的な指導が必要である。（断片的にならないように）

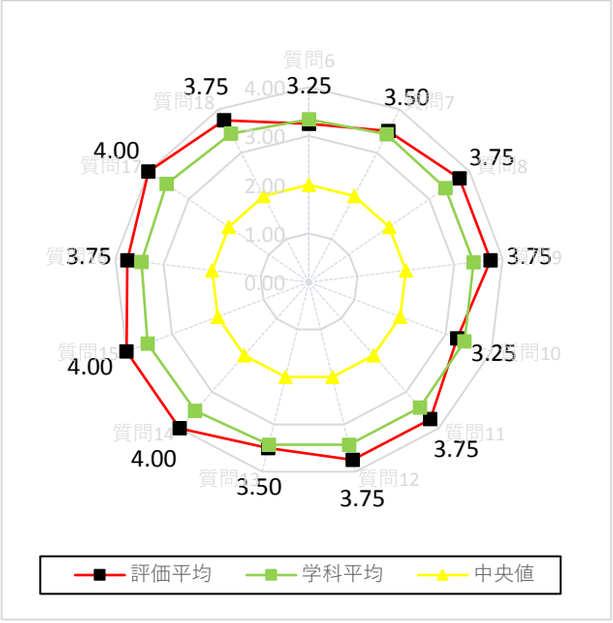
（３）次年度に向けての取り組み

・社会人基礎力について、どのような力をつけていく必要があるか、どのようにして力をつけるのかなど、わかりやすく説明して、授業を進めていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

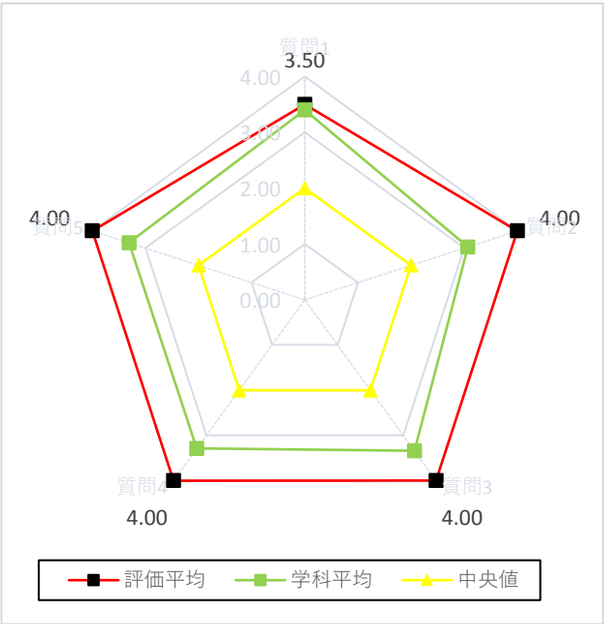
問２・４、特に問４の評価が低い。これについては、全体指導の中で、受け身の授業になっているのではないかと考えている。ゼミ別・少人数指導の中での「アクティブ・ラーニング」の場が必要であると考えている。

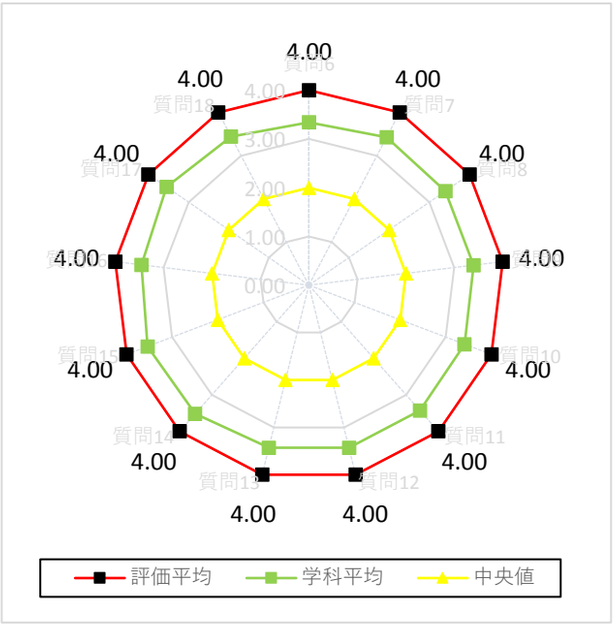
（３）次年度に向けての取り組み

上記の考察・反省をもとに、次年度はゼミ別・少人数指導の時間・場を確保することが必要であると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

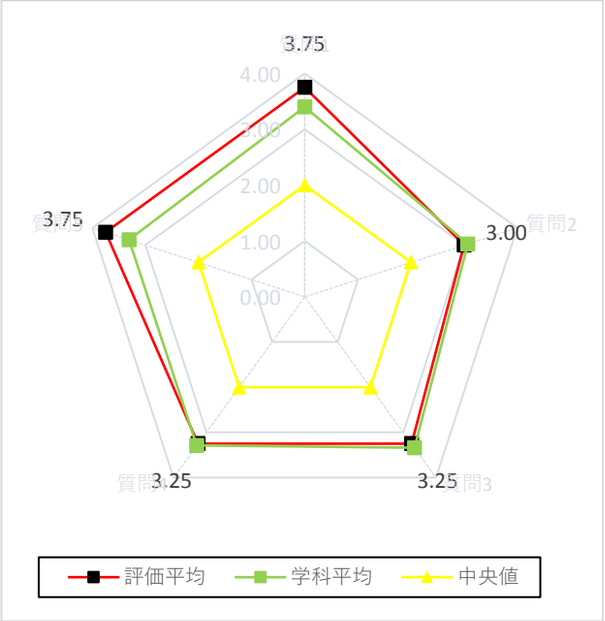
回答者僅少のため、考察を省略する。

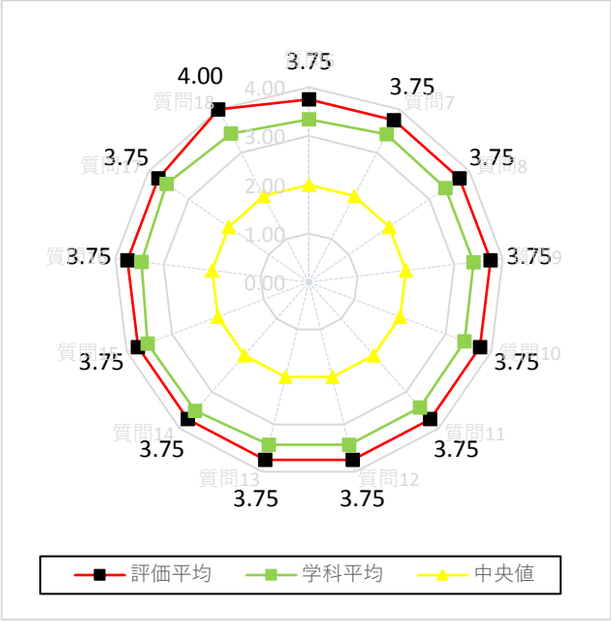
（３）次年度に向けての取り組み

回答者僅少のため、考察を省略する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

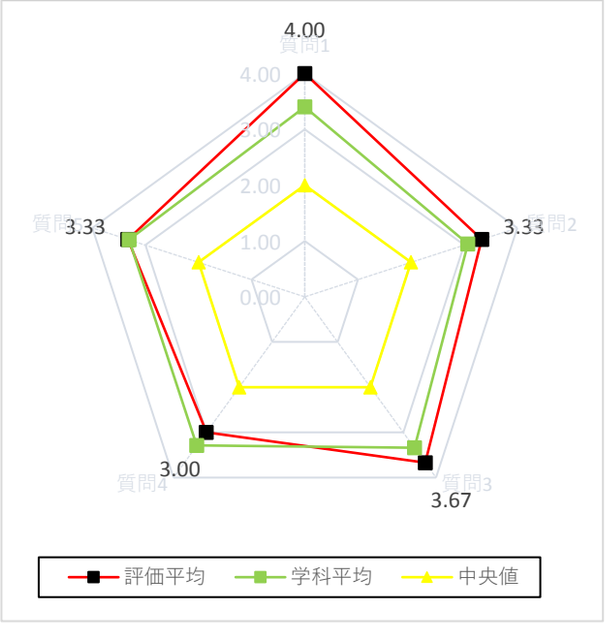
回答率100%（4/4）、総合評価3.67
自由記述：社会人基礎力についてや、それに関し自分が足りない社会人基礎力に気づき、どうやってそれを身に付けていくかを学べた。
本授業の目標は、大学での生活を快適にするための知識習得・環境構築と、大学生としての学びを可能にするためのスタディ・スキルの習得を通して、学士力養成のための学習基礎を定着させることである。
質問6～18について、3.75～4.0と高く、学科平均をすべて上回った。質問18の「この授業を総合評価して下さい。 」については、全員が4.0と評価した。
質問2「シラバスを活用したか」が3.0と最も低い結果となった。シラバスの内容を細分化して学生に配布したが、配布した内容とシラバスが連動していることを周知していなかった。

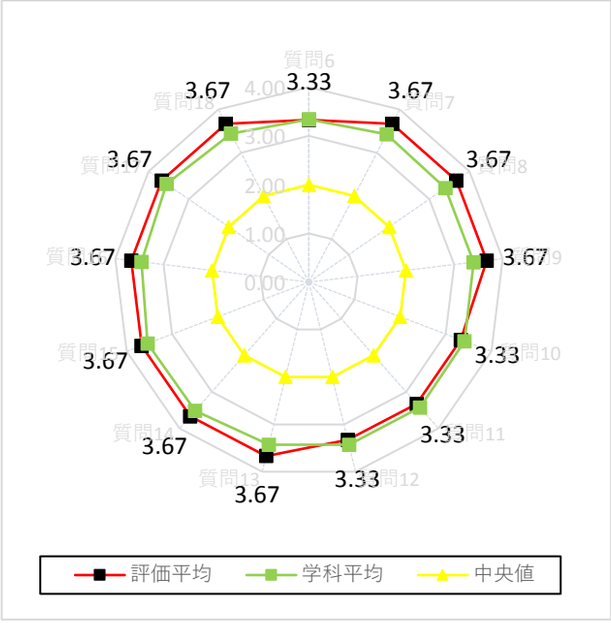
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの活用について、学生に分かりやすいように提示することに加えて、シラバスの内容と一致していることを周知するようにつとめる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

「あすなろうⅠ基礎」については、年間計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

ゼミの学生については、今年度非常に真面目に課題に取り組む学生が多く、お互いに刺激し合うかかわりが持てたように感じる。あすなろう体験発表についても本ゼミから代表が選ばれ、発表についての評価も高かった。

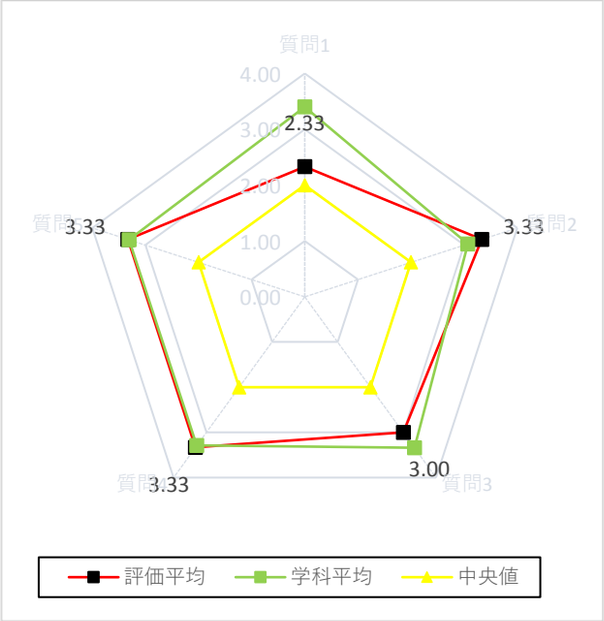
また、今年度はポートフォリオの利用についても、さまざまな場面で有効活用がなされたのではないかと考える。

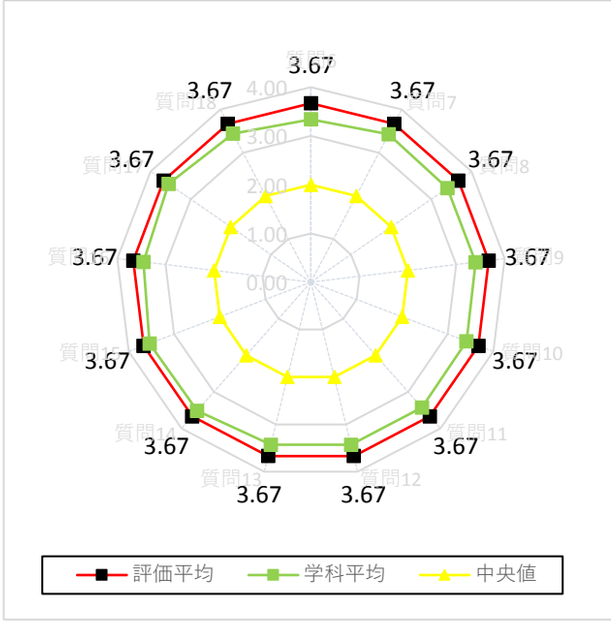
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においては、今年度の成果を踏まえて、さらに一人ひとりの学生に対し、より配慮したサポートができるよう、特にゼミごとの時間を大切にして取り組んでいきたいと考える。また、年間計画に基づく到達目標の明確化についても、一人ひとりの学生が十分理解できるよう工夫して臨み、無理なく大学生活を送ることができるようサポートしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

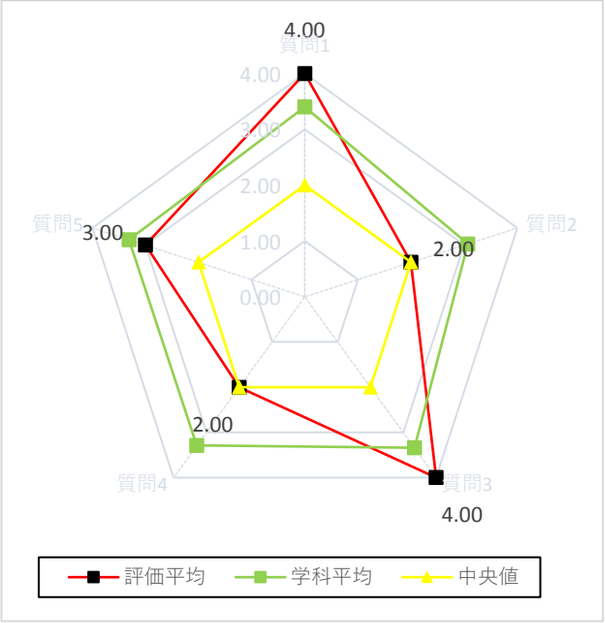
本科目受講学生の回答率は、担当学生7名中3名で、回答率43%と約半数であった。本科目への総合評価は3.50で高評価であり、学生自身の取り組みに関する評価は3.33で、前回出席はしていないが、シラバスも活用しつつ、真剣に取り組むことができたと評価している。また、授業に関する評価は3.67と高評価で、興味関心のもと、授業に取り組み、教員や友人とのやり取りを行いつつ授業が進んだことが窺える。

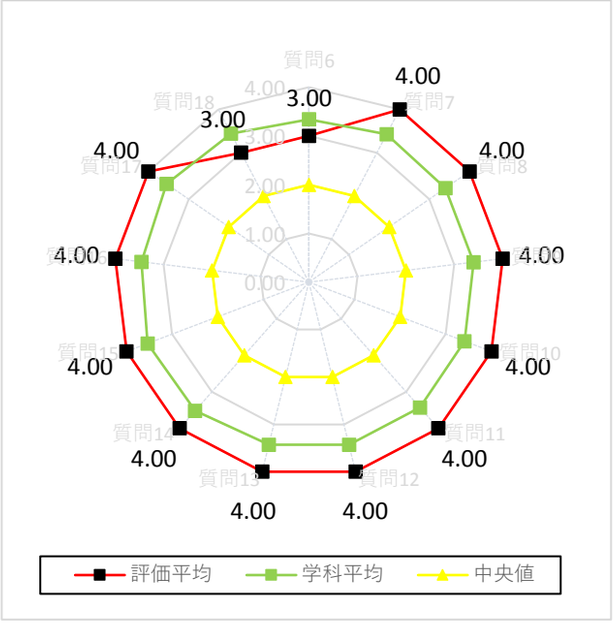
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、学生一人一人の受講状況を、把握し、引き続き細やかな指導を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

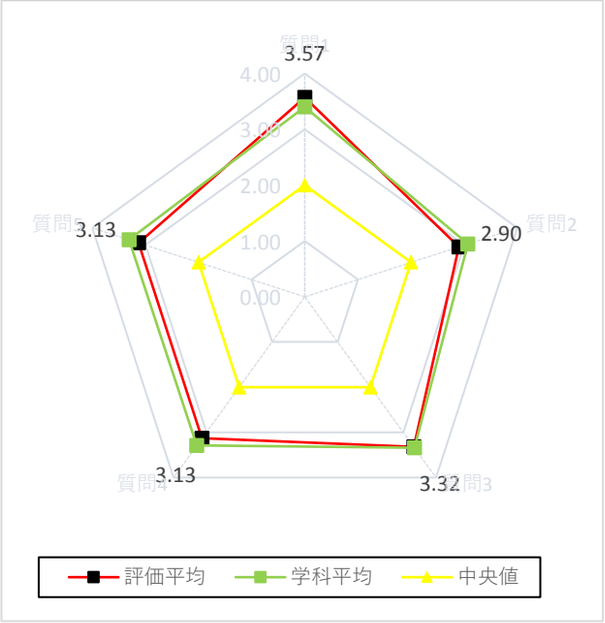
・授業の評価平均値は、ほとんどの項目で4となっているが、質問6、18は3となっている。
・シラバスについては、授業における説明、学生自身の活用ともに、他の項目より低い結果であった。
・学生の自己評価で、総合自己評価は学科平均に近いものの、質問4の値が低いことも目立っている。

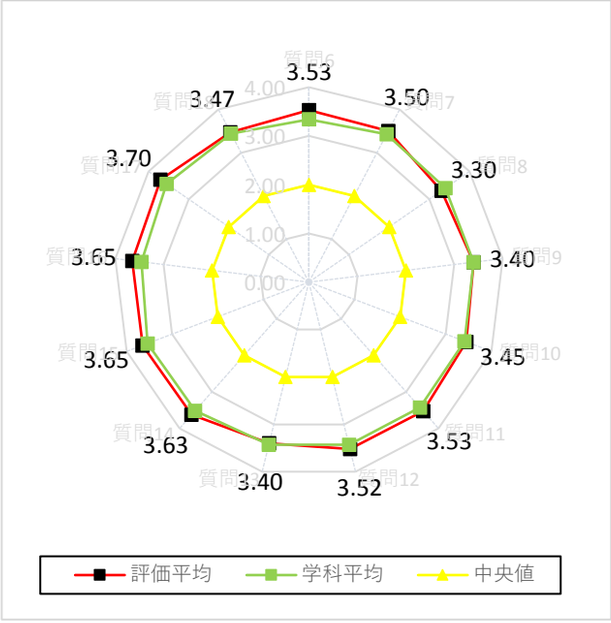
（３）次年度に向けての取り組み

・シラバスを説明、活用しながら、学生が目的を明確化し、自分自身で工夫しながら主体的な学修が定着するよう工夫していく。学外での体験活動や学内の授業における諸活動の一つ一つについて、目的を確認しながら取り組むことを習慣化し、社会人基礎力を向上させる意識の高揚を図っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		文学と言語	91名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

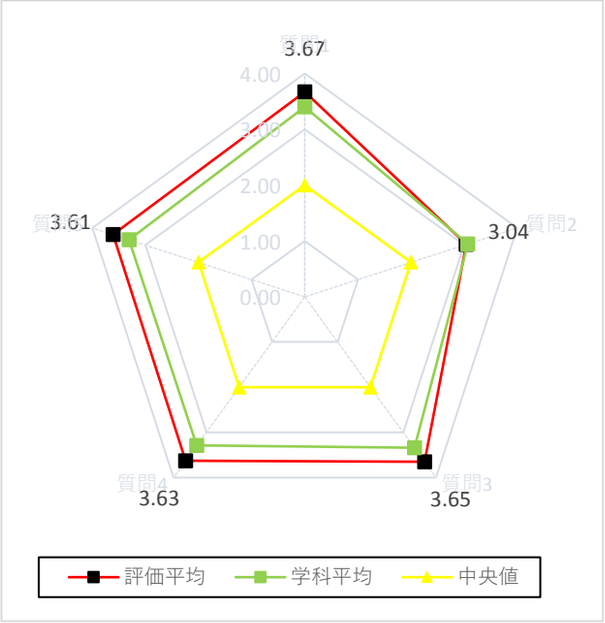
質問16「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか」と質問17「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか」及び、質問18「この授業を総合評価して下さい」の評価が高かった一方で、質問4「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか」と質問5「あなた自身の総合自己評価」が若干低かった。このことは、本授業に対する私と学生の思いや考えが一致していることを裏付けた結果になっている。妥当性のある授業評価が得られたと思う。

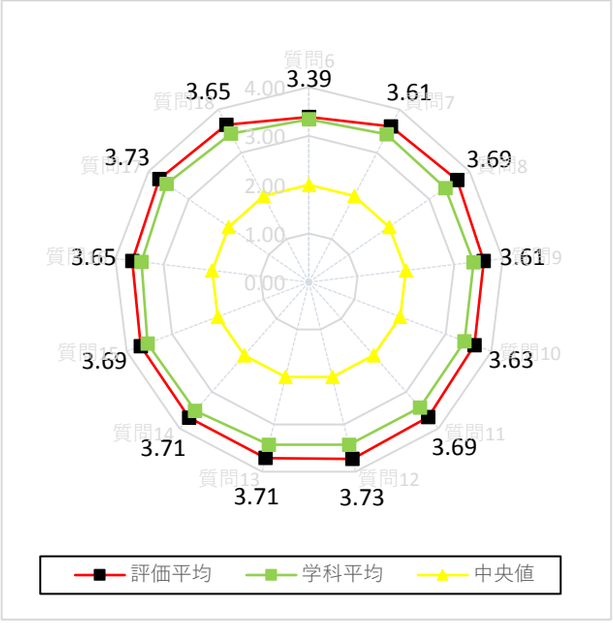
（３）次年度に向けての取り組み

次年度の本授業は、「全学部の学生に向けて」開講される大人数の授業となる。そこで、文学作品の鑑賞や作者像の理解を通して、文学作品に内包されている自然観・社会観・豊かな心情・ものの見方や考え方・感性など、教育に関わる者のみならず、「人としてどう生きていくか」「文学を読むことの意義とは何か」などについて、学生とのやり取りをできる限り取り入れた授業を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーションⅠ	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

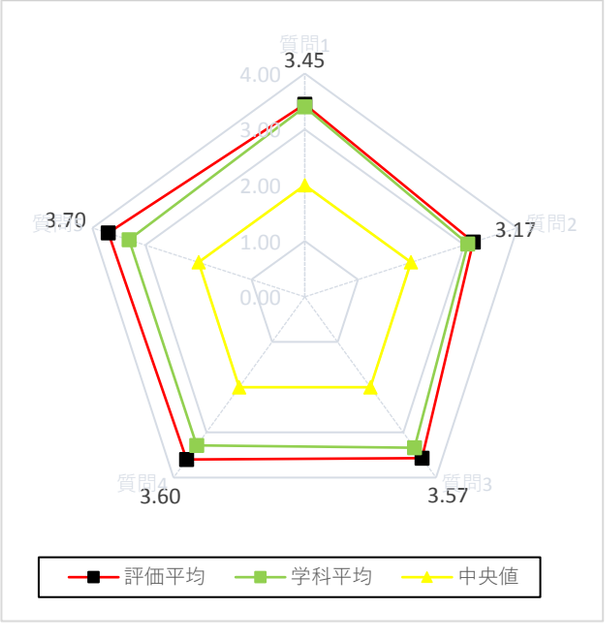
去年からテキストを変えました。したがってシラバスも変えました。学生の反応はよかったと思います。
質問１－５に関しては学生の授業に対する取り組みで評価がよかったと思います。学生の出席率、真剣に取り組み姿勢や自己評価は平均並みでした。
質問６－１８に関しては、質問６は評価平均と同じで、ほかの答えは評価平均より少し下回る数字となりました。

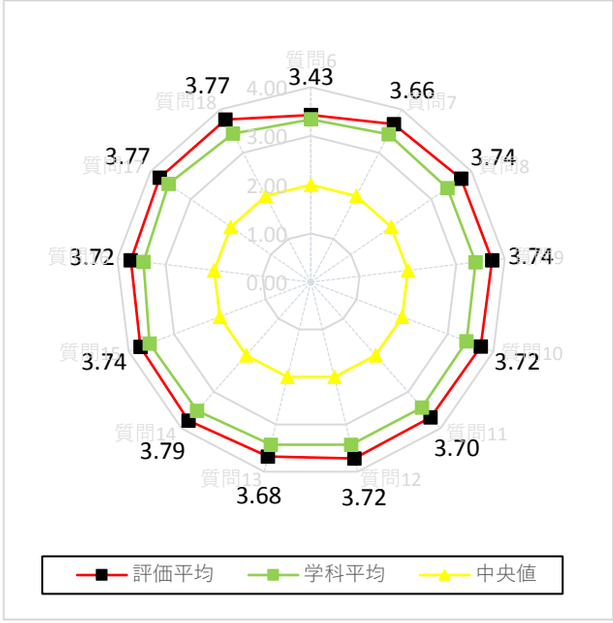
（３）次年度に向けての取り組み

まずは、学生がこの評価を積極的にするように指導します。パソコンになってから、学生が回答したかどうかの確認が難しいと感じます。回答率が１００％になったらいいデーターだと思われますので、１００％を目指して回答してもらいたいです。
次年度は回答するようのリマインドを行いたいです。データーを見ますと授業の内容ややり方を変える必要ないと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーションⅡ	90名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

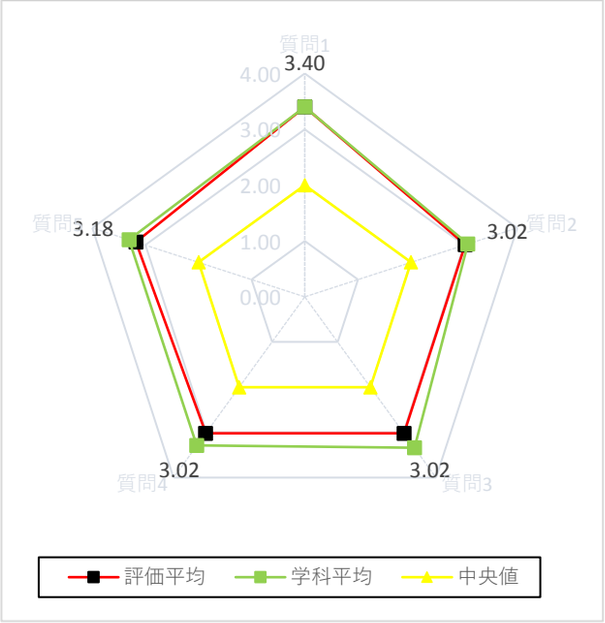
総合評価は３．５８で５０％の回答率でした。コメントありませんでした。学生は大変満足していると思われます。一点だけ気になるところありますが、シラバス活用しましたの点数が高いのにシラバスの説明ありましたかの点数が低いです。毎回最初の授業にて説明しますので、話を聞いてないのか覚えてないのかのどっちでしょう？コメントいくつかありました。「毎回の授業で少しずつ英文を足していくという活動は、英語を身近に感じることができた。また、少し英文を足すことで、負担が大きすぎることもなくて、楽しいと思った。」「分かりやすかった」のフィードバックうれしく思います。

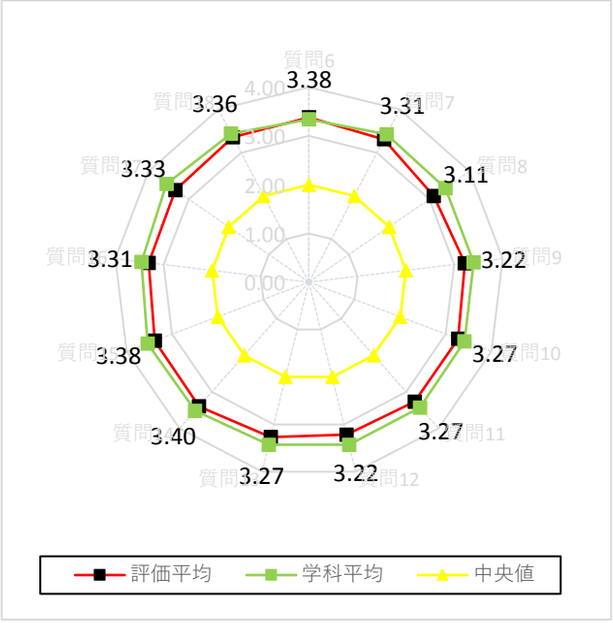
（３）次年度に向けての取り組み

来年度満点を取りたいです。毎年シラバスの工夫をしますが、点数変わりません。不思議です。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		情報処理入門	90名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

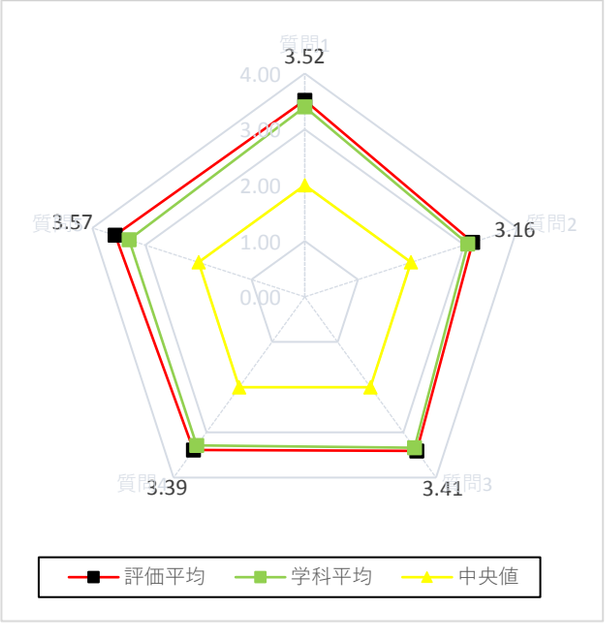
概ね良好な授業ができたものと判断する。

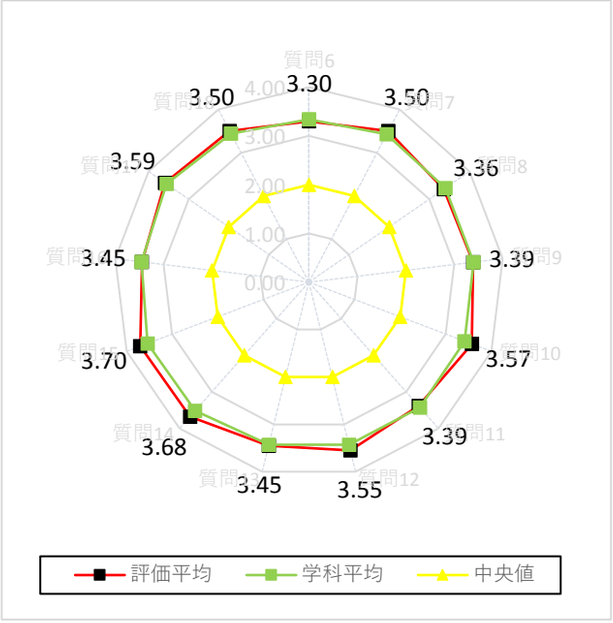
（３）次年度に向けての取り組み

次年度もわかりやすい授業を心掛ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		情報処理基礎	85名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

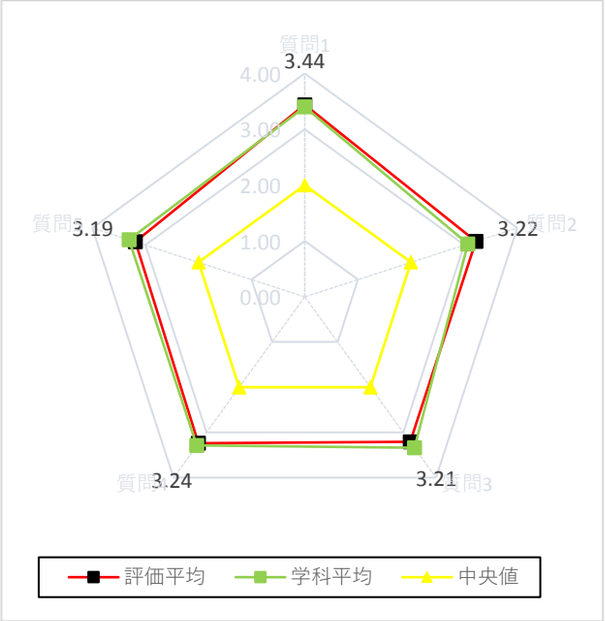
概ね良好な授業ができたものと判断する。

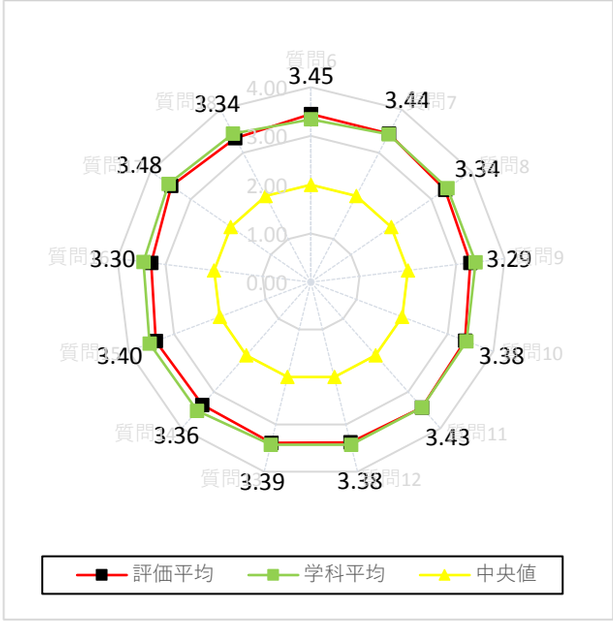
（３）次年度に向けての取り組み

次年度もわかりやすい授業を心掛ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子ども学総論	137名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

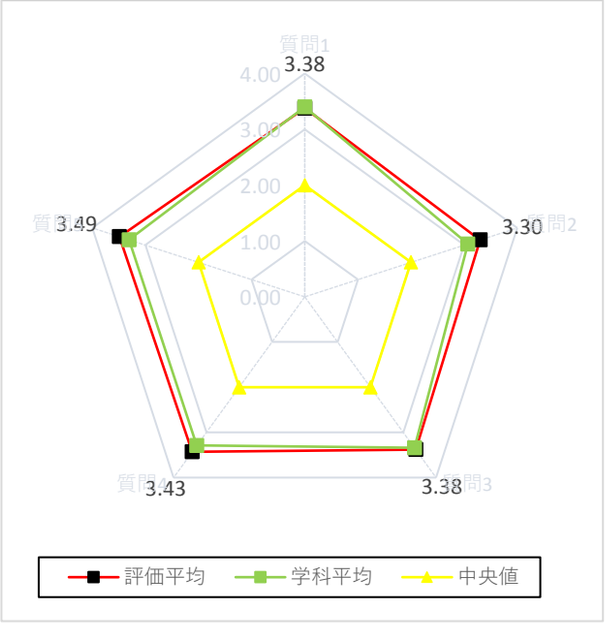
オムニバス科目科目であるため、代表者が記述することなっている。

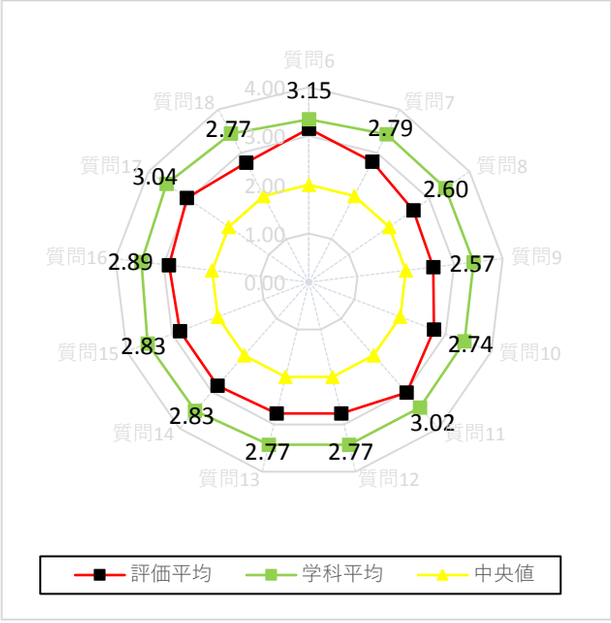
（３）次年度に向けての取り組み

オムニバス科目であるため、代表者が記述することになっている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育原理	86名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

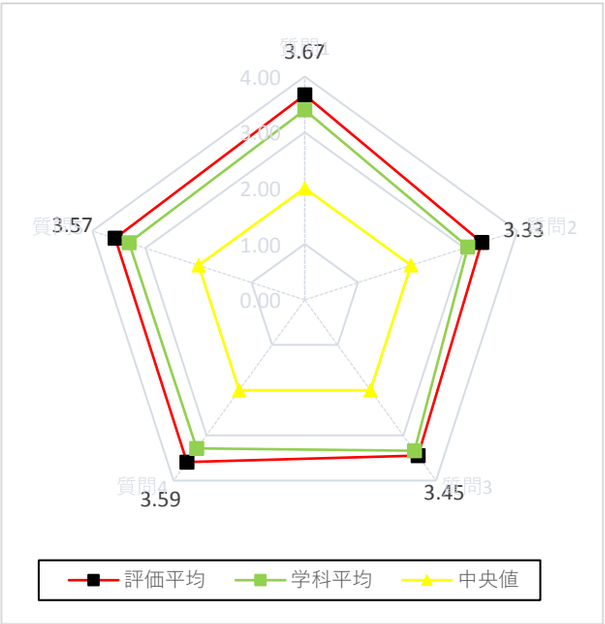
受講学生92名のうち47人が回答。回答した学生の自己評価はおおむね高い。熱心な学生たちであることが分かる。いっぽう、授業に対しては、かなり厳しい。とくに、質問8と質問9の数値が低い。興味関心が持ちにくく、わかりやすい工夫に欠けていたということだ。学生にはもう少しわかりやすく工夫知ってほしいという思いがあることが分かった。教員としての学生への態度や熱心さについては、ある程度肯定的な評価がある。ケガをして授業ができず、補講が増えたことも学生には受け入れがたかったようだ。

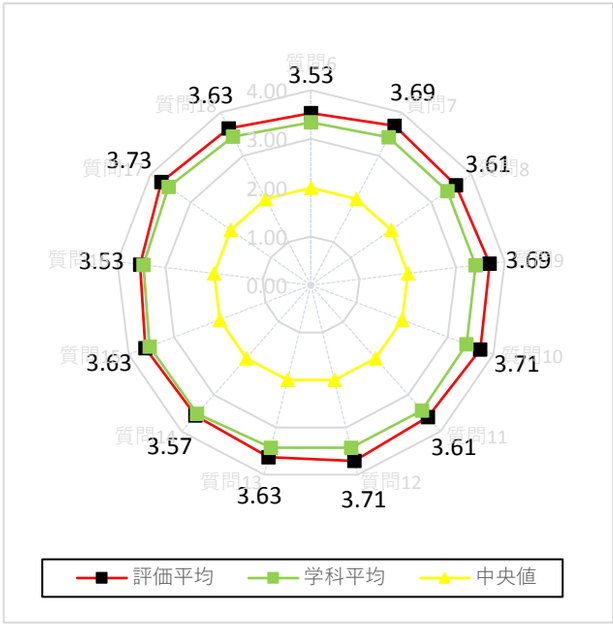
（３）次年度に向けての取り組み

まず、ケガや病気をして授業を休むようなことがないようにできるだけ気をつけたい。
また、学生の側も、年々理論的な内容への対応が難しくなっていると感じる。物事を根源的に追求していく態度を育成したいと思うこと自体が無理なのだろうか。学生自身が、自ら問題を見つけて、自分で考えることの重要性を知り、身につけてほしいと思って、能動的な学習内容を取り入れた指導に努力しているが、それは学生にはなかなか伝わらない。また、100名近い学生数では、元来そのような指導はなかなか効果をあげにくい。そのことを考えながら、今後も指導方法を工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	90名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

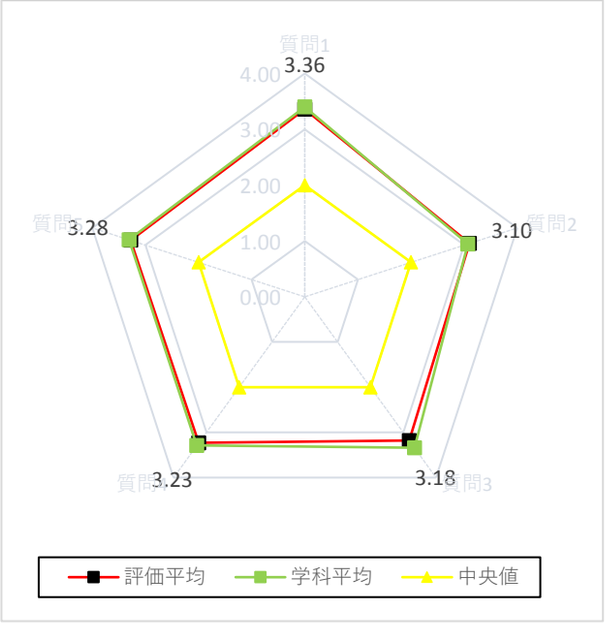
子ども学科の平均値との比較により、自らの評価を分析する。総合評価は学科の３．５０に比し０．１ポイント以上良好な評価となった。子ども学科の評価より低かったのはＱ３の「授業中に居眠り・・・。」のみであった。相対的に最も高く評価された事項はＱ１２の「声の大きさ・・・。」であり、０．２０高かった。声は授業実践の最も重視すべき手段と考えている。以降高い順に、Ｑ１０「視聴覚機器・・・。」Ｑ９「授業・・・。」Ｑ７「教員は授業の到達・・・。」でいずれも０．１７以上高く評価されている。授業者は学生が志望している、教育者、保育者の活動を引き合いに出しながら、発達心理学の知見を説明している。そのことがこの評価につながったものと思われる。ほとんどの事項が０．１以上高く評価されたいた。ただし、Ｑ１６「教員は双方向的な・・・」Ｑ６「シラバス・・・。」Ｑ１１「教科書・配布資料・・・。」が、学科平均値とほとんど差がない評価である。双方向的なやり取りは、これを実行するには、実行の強い意志と技術、実施を支える準備を要する。その影響が評価に現れたものとも思われる。シラバスはもう少し念入りに説明すべきであったかもしれない。

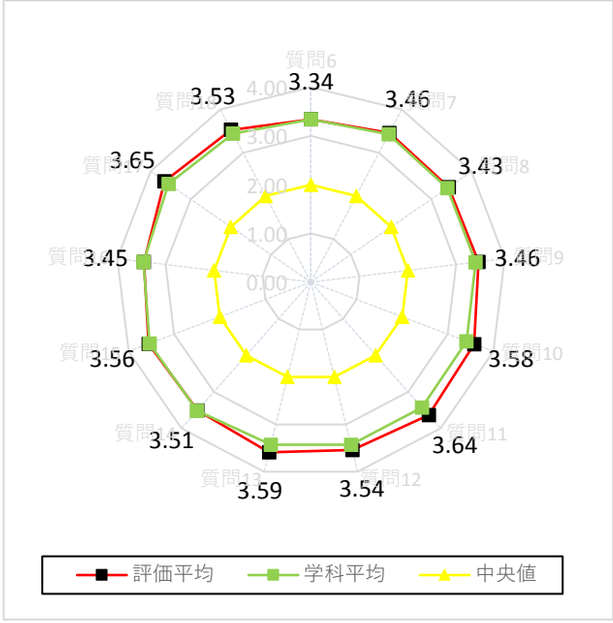
（３）次年度に向けての取り組み

従来より高く評価された事項は、しっかりと高く評価され、その授業実践の高さが客観的に評価された、と考えている。やはり、入学した学生の進路志望を意識し、授業内容と授業技術を一定水準に保つことをしっかり自覚して、今後とも授業実践に努力したい。学生の私語等が多いと学生自ら評価していることは驚きであった。授業者の意識としては、授業中は静かな環境になっていると考えていたので驚きであった。今後この点は留意して、学生の授業中の静粛を促したい。双方向的な授業は容易ではない。今後１年生の実態を的確に予測し、授業内容に沿ってどのような質問をなすべきか、思案することにする。シラバスはより詳しく説明することが必要かもしれない。ただしそれは程度が肝腎と思われる。現在の所、「発達心理学」の授業では配布資料が必要がないので配布していない。配布資料により、授業内容がより豊かになると考える時、そのような資料に出会ったときには活用するようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育総論	111名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

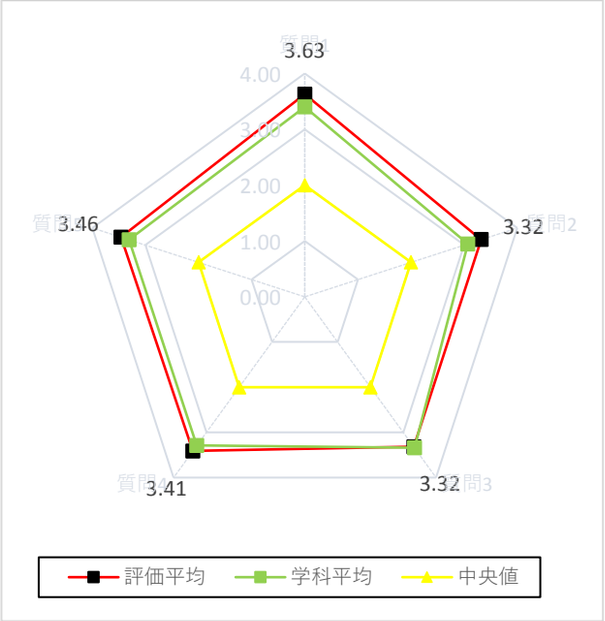
・評価平均がおおむね学科平均と重なっている。
・障害のある子どもとかかわった経験が少ない学生が多かったので、各障害（知的障害、肢体不自由、病弱、視覚障害、聴覚障害）についてＤＶＤを視聴しな　がら説明していくことで、理解が深まったと思う。視聴覚教材の活用が必要である。実際にかかわれる時間が取れるとよいが、人数が１１０名の受講者であ　るため、困難である。
・パワーポイントを使い、その資料も配布して講義を進めていった。そのため、教科書は予習・復習に使うようにしたが、あまり、予習復習が行われていな　　い。
・毎回授業終了前に「授業で分かったこと、質問、感想」を書かせ出席代わりに提出させた。中には、知りたいことや、疑問点等も記入する学生が見受けられ　た。
・ワークショップで授業を進めてみたが、１００名超えると困難であった。
・１年生から４年生まで履修していたため、学習内容をどこまで深めるかべきか、悩ましい。

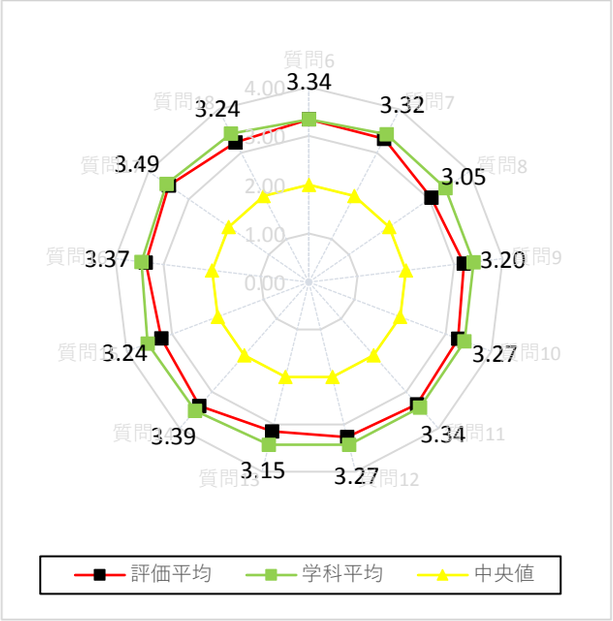
（３）次年度に向けての取り組み

・ＤＶＤなど視聴覚機器の活用は有効であるので、次年度も活用したい。
・次年度は１年生が受講する科目として、基礎的・基本的な知識を中心に進めていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教師論	95名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

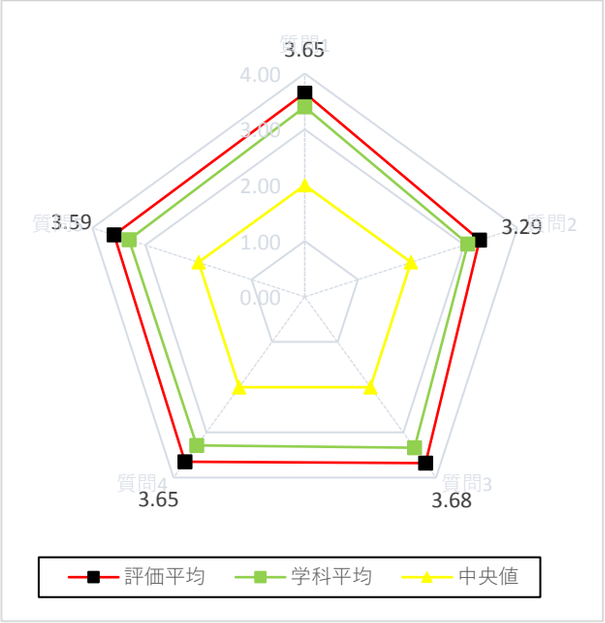
回答者は95名中41名である。全般に、自己評価も、授業についても評価が高く、満足度も高いようである。どの項目についても1や2を付ける学生数は非常に少ない。2をつけた学生が何人かいるところを見ると、課題は、質問8,9,13,15に現れている。興味関心を持てるか、わかりやすい工夫がしてあるか、というのは、すべての学生を満足させることが難しいと痛感せざるをえない。学生によって、授業の理解のスピードが違うのも事実である。そういったことに配慮できるかというのは、大学教育の本質を問うものでもあろう。また、教員としては、公平な態度を重視しているつもりであったが、学生の捉え方には思いがけない面もあった。必ずしもそうとは受け取っていなかった者もいる。きちんと受けとめたい。

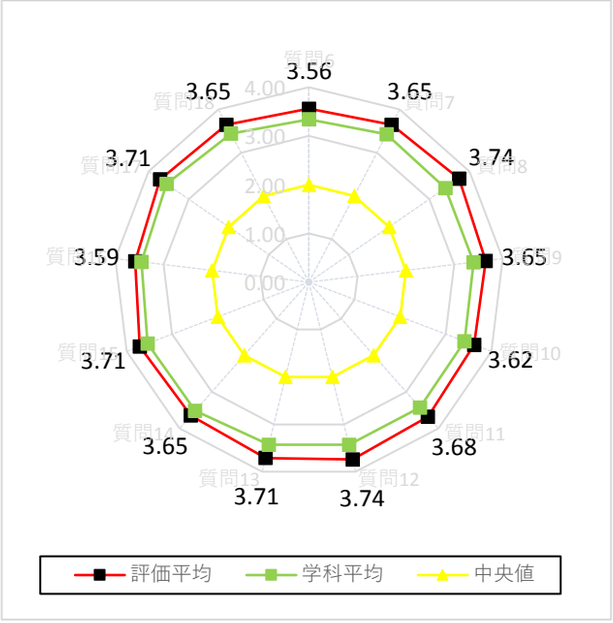
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の評価を糧として、貴重な反省として、学生を主体として授業に参加させる方法を、さらに工夫し、よいものとして追求していきたい。試行錯誤を経ながら、何より授業を学生の手に戻すように工夫することを大事にしていきたい。授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。また、学生との信頼関係の構築に努めたい。とくに、学生が授業への不満を抱くというのは、どういうことか、よく考え、学生の状況を理解するように努力したい。教師の態度としての公平さとは何か、その本質を見きわめるということは、教師論の本質でもある。授業においては、細心の注意を払うとともに、学生との信頼関係づくりに努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	64名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。座学であるが、一方通行の授業にならないように、できる限り双方向的な授業であるアクティブラーニングを意識して進めたことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

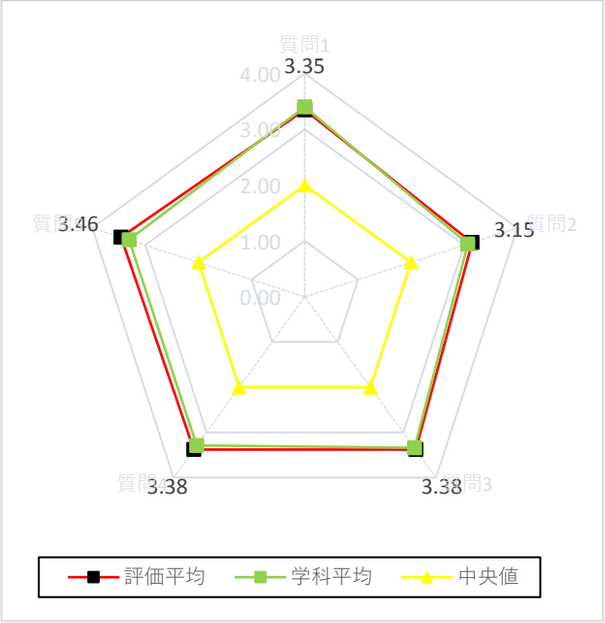
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。そのため、特に保育現場で求められる「記録」の取り方については実際にワークをとおして重点的に行った。その成果は現場での実習に活かされると期待する。

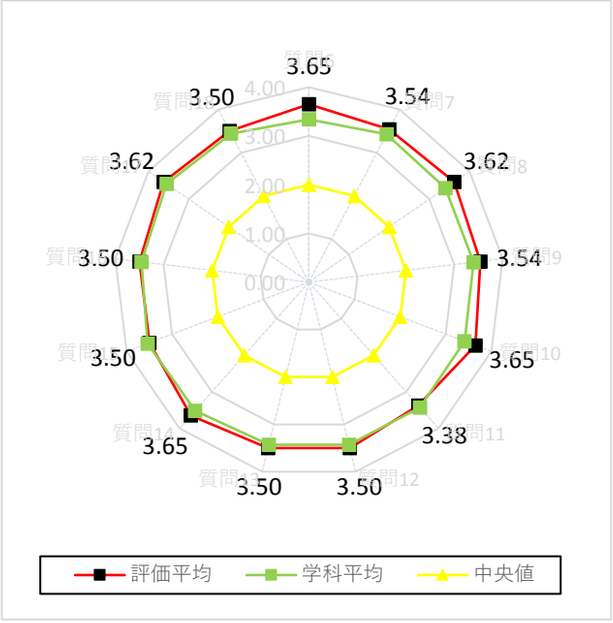
（３）次年度に向けての取り組み

次年度については、基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。実際に保育現場に実習に出る際に、その成果が発揮されるよう細かくサポートする体制が必要である。今後も、より現場に即した内容の授業ができるよう、アクティブラーニングの形で行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（健康）	72名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

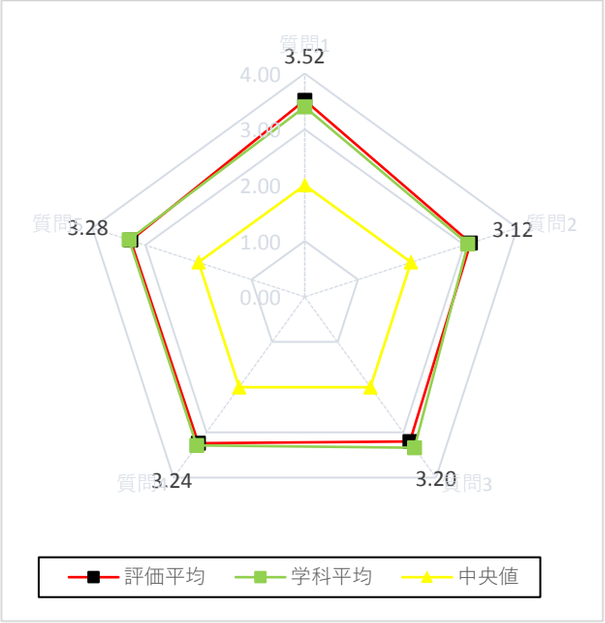
全ての項目が学科平均値と同等である。よく言えば及第点であり悪く言えば代わり映えのない授業であったと言える。次年度は講義形式を減らし、学生のALを促すグループ学習やプレゼンテーションを今年度以上に取り入れたい。

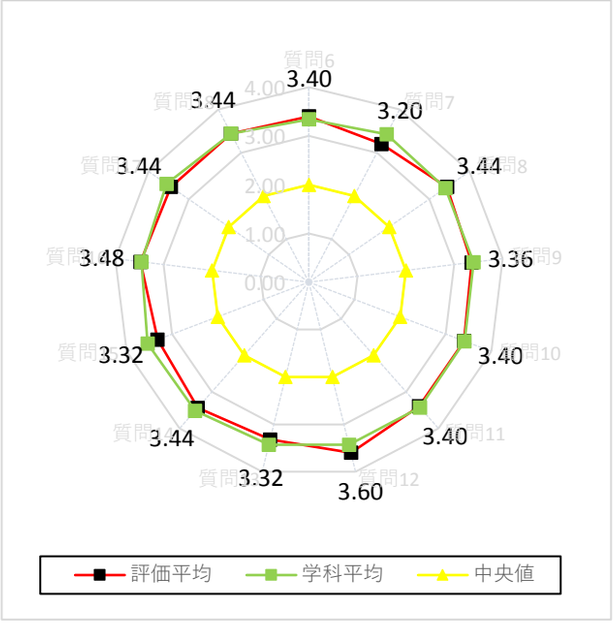
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は講義形式を減らし、学生のALを促すグループ学習やプレゼンテーションを今年度以上に取り入れたい。また今年度から活用したOPPAの学習カードを自由記述式のみならず構造的に思考の流れが整理できるように工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	70名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

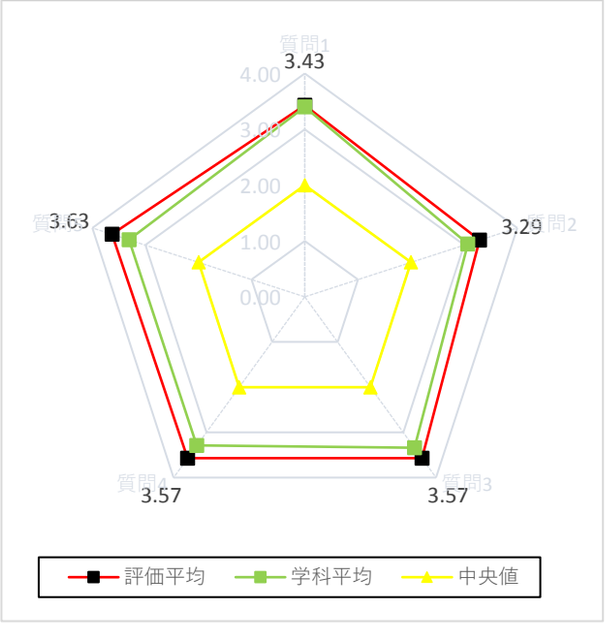
欠席者が少なく、自己評価が比較的に高かった。自己評価に繋がるのは２点あると考える。①人とのかかわりに関する力の保育について自分の考えを深め図解にした事②実習経験エピソードを記述し、仲間で共有し、それをもとに分析した事。授業の分析は、力を入れていた部分の評価が高かった。重要な資料や教科書を活用し、実践的な話を心がけ熱心に問いかけた。評価がやや低かったのは、工夫・分かりやすさである。授業方法としては学生の参加を重視し、考えを発表する機会や手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後に感想ラベルを書き活用していったので学生の反応を把握していった。ビデオは特に「人とかかわる力の発達と課題」「子どもを支える保育者の役割」という点で、とても貴重な実際のドキュメンタリーを見ることが出来た。見る視点と捉え方について丁寧に説明していく必要性は感じた。

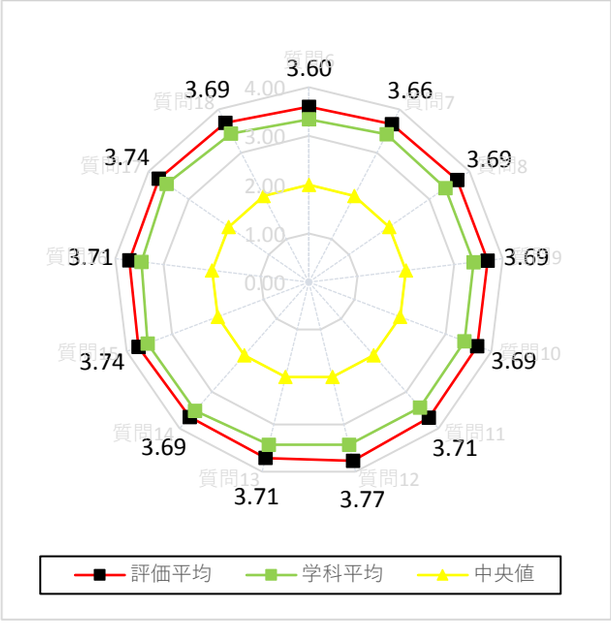
（３）次年度に向けての取り組み

内容的なことは毎回の明確な授業到達点を置き、学生の反応を見ながら深める必要がある。伝わるような話術と深まるような問いかけを行い、今後とも授業感想ラベルを取りたい。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかデイスカッションをし、学び合いを深めていきたい。課題は時間の確保である。理解と互いの学びの共有が鍵になるので、毎回発言しやすい雰囲気を作っていきたい。更には模擬保育における保育実践力の高まりを工夫し、学びのプロセスに繋がるように組み込みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（言葉）	72名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

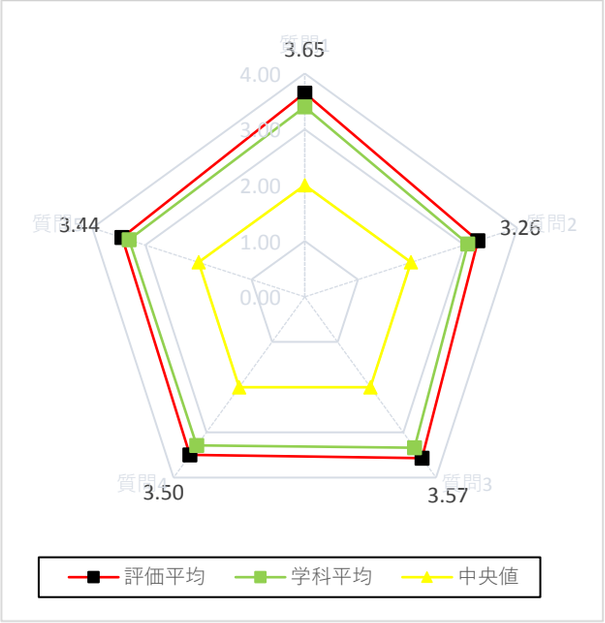
質問6から質問18までの全ての項目で、昨年度に引き続き平均を上回ることができた。また、学生の学習意欲や態度も良好で、計画通り授業を展開することができた。ただ、今年度からのカリキュラムの変更で、小学校教師を目指しているので幼児教育関係の科目は履修しないという学生も散見されるようになってきたことにやや心配がある。幼・保の仕事に従事するからこそ小学校教育を理解する。小学校教師になるからこそ幼児教育について理解を深める。改めて、幼保小連携教育の重要性を大事にしたい。

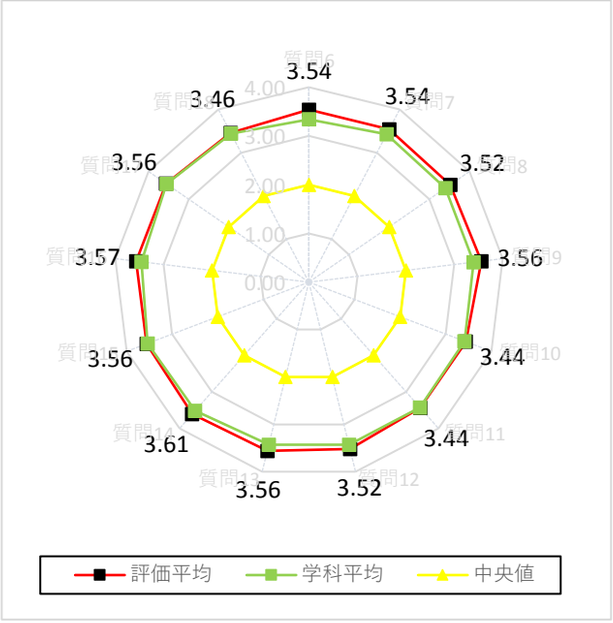
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も今年度と同様の思い、つまり、どの学生に対しても「子どもの前に立つ喜びと責任の重さ、使命感の大きさ」を感じさせていきたい。そのためには、日々の授業のねらいを一層明確にするとともに、学生が毎時間の授業で得た知識や技能が幼児教育の現場にどのようにつながっていくのかを実感し、自信をもてるような授業実践に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	129名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

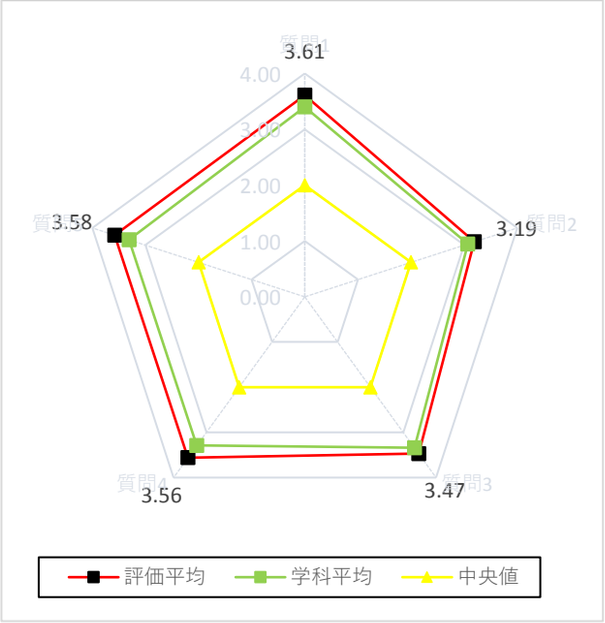
学生たちの受講態度は良好で、授業時間以外にも自分たちで自主的に集まって作品づくりに取組む姿がよく見受けられた。また、幼児期の子どもの表現活動に関するグループ活動時においては、積極的に意見を述べ合い、試行錯誤を繰り返しながら課題に取組んでいた。これらのことが、質問1矢質問3の自己評価に表れている。質問6以降の教員への評価に関しては、極端に落ち込んだ項目は無かったことから、基本的には現状を維持しながら授業内容の拡充を図ることができるよう努めていきたい。

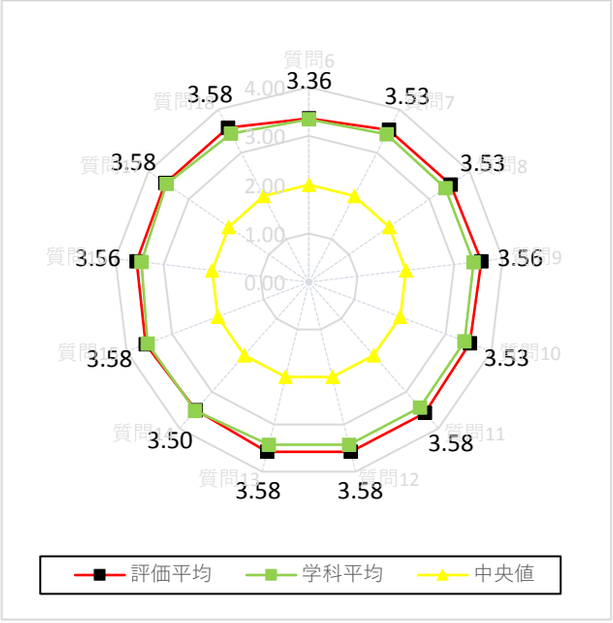
（３）次年度に向けての取り組み

この授業は2名の教員が担当しているため、事前に詳細な打ち合わせを行うとともに、必要に応じて連絡調整を図りながら授業進めてきた。次年度は、これまでの指導の内容及び方法を踏まえ、担当教員間のより一層の連携を図りながら個々の教員の専門性を生かした授業構成となるよう努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	67名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

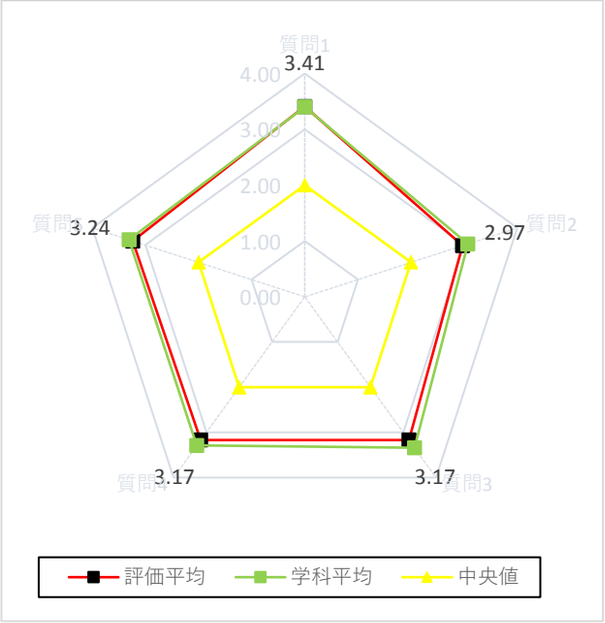
総じて平均より高い結果が得られている。ただし、質問６「シラバスについて説明がありましたか」は学科平均が３．４２に比し、授業者は３．３６であり、０．０６低い結果となった。シラバスの説明は口頭で一通り行ったつもりである。しかし、受講者には十分な説明と受け取られていないことが推測される。改めるべきことと思われる。また、質問１４「学生の質問に誠実に対応しましたか」は学科平均が３．５１に比し、授業者は３．５０であり、０．０１低い結果となった。授業者に「学生に質問の機会を与えても、質問は出ないだろう」との思い込みがあり、そのため、学生が質問できる機会を与えなかったことが影響してのの結果と思われる。

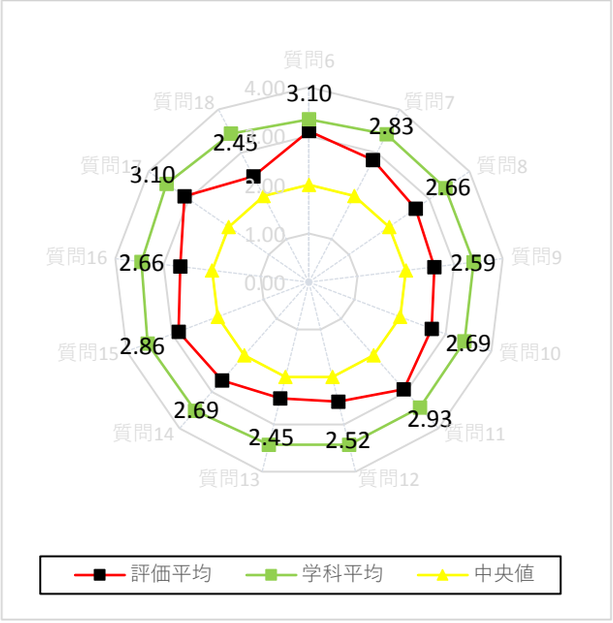
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスについて、プリントにして配布し、十分な時間をとって説明したい。また、学生に質問する機会を与える発言をしたい。学生が質問できるような発問は、学生の理解の程度を的確に把握しておく必要がある。このことを意識して発問するつもりである

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育行政学	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

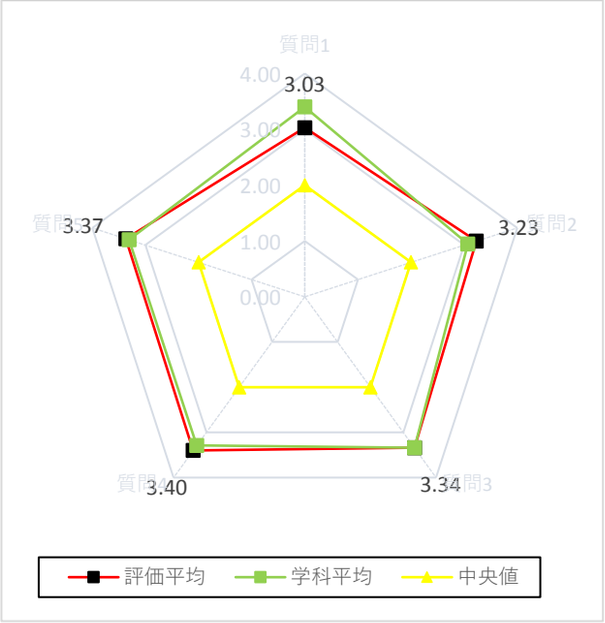
回答者は、受講学生87名中29名である。全般に、自己評価はまあまあであるが、授業のやり方については厳しく、満足度が低い。とくに、授業のやり方については、ほとんどの項目にわたって、1と2をつける学生が一定数おり、自由記述にも不満をぶつける記述があり、かなり厳しい評価であると受けとめている。法令という難しい内容を理解させるため、色々と工夫し、参加型の授業を目指したが、回答した学生には届いていない。したがって、授業方法には、多くの課題が残っていることは間違いない。また、授業者がケガをしたこと、途中で学生の実習等（幼稚園実習、及び介護等体験。後者では、学生が順に授業をバラバラに抜けていき、学習が中断する。）があったことにより、休講が発生し、補講が多くなった。そのため、問題意識を継続して高めていくことが困難で、かなり苦労した。この制約はやむを得ないものであるが、良い対処方法を考える必要がある。学生との信頼関係の構築がうまくいかなかった部分があるということだろう。

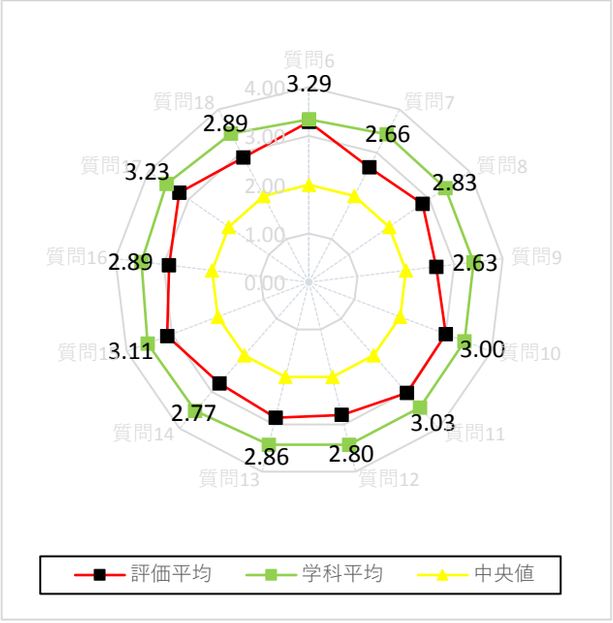
（３）次年度に向けての取り組み

まず、ケガや病気をして授業を休むようなことがないようにできるだけ気をつけたい。何より、今年度の厳しい評価を糧として、深く反省し、良い授業を工夫し、追求していきたい。
また、引き続き、授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。とくに、学生との信頼関係の構築に努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		カリキュラム論	97名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

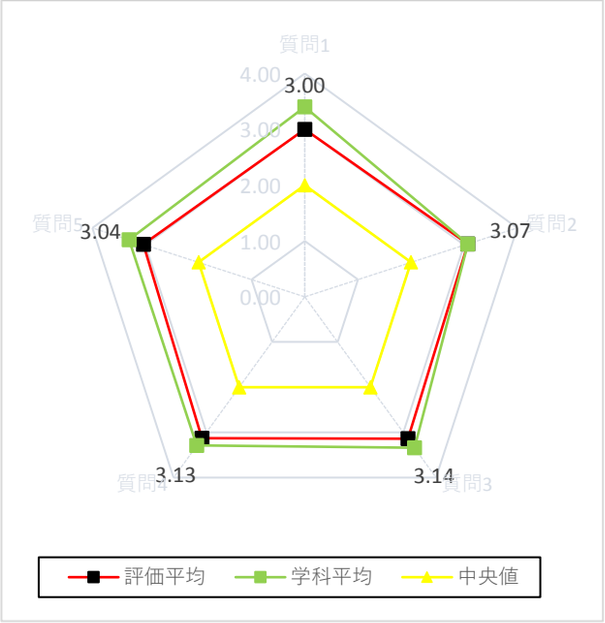
回答者は97名中35名である。回答者数が少ない上に、全般に、自己評価はまあまあであるが、授業者の授業のやり方については厳しい評価である。とくに、授業のやり方についてみると、ほとんどの項目にわたって、1と2をつける学生が一定数いる。自由記述にも不満をぶつける記述があり、かなり厳しい評価であると受けとめている。とくに質問7,9,12,13,14の項目に1や2の評価をつける学生が多い。授業の理解に困難を感じる学生が一定数いることをどう考え、改善するかが課題だと思う。
いっぽう、学生自身の授業参加の状態は全般によく、授業のあり方もある程度の水準を確保できたのではないかと思う。
さらに、授業者は丁寧に対応し、公平に対応しているつもりでも、声掛けなど、その必要性を学生が皆同じように理解しているとは限らない。問題がない授業であることが良いわけでもなく、逆説的であるが、厳しい評価を受けたことは、それは良い授業をしようと努力した結果、うまくいかないことも多かったということでもある。そのことも忘れないようにしたい。

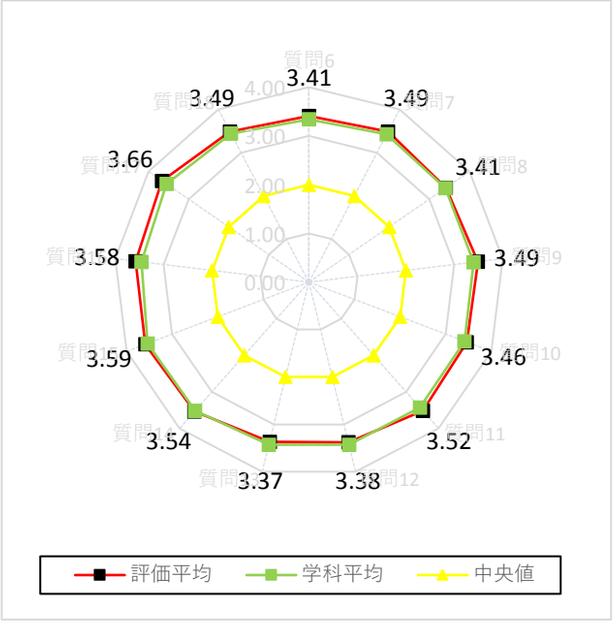
（３）次年度に向けての取り組み

引き続け、より良い授業とするために、失敗を恐れず、色々の試みや挑戦を行いたい。
何より、学生が一層授業に参加しているという実感を持ち、自由に意見を述べることができるおおらかさの中で、自分の課題を認識することが大事だと思う。したがって、授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。また、学生との信頼関係の構築にも努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		乳幼児心理学	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

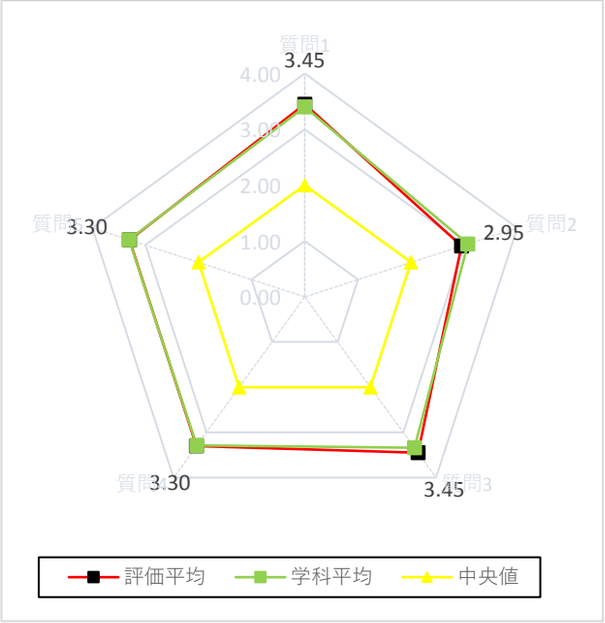
学科平均との比較については、質問1～5において学科平均よりも低い結果となった。
しかし、質問9、14～18においては、学科平均より高かった。
特に、「質問1の欠席回数」は、学科平均よりも低い数値であった。本授業は、選択科目かつ資格必須ではないため、受講学生の意欲を引き出す工夫が必要であると考えられる。また、今年度は、１年次と３年次の同時開講であり、１年次と３年次の両方の理解のペースや興味関心を見出すことが困難であったことが影響しているとも考えられる。このことは、「質問３の真剣な取り組み」「質問４自分での工夫」「質問５自分自身の総合評価」の結果にもつながると思われる。
一方、「質問9授業の工夫」では、学科平均よりも高く、スライドや、資料配布、DVD視聴などの視覚教材を用いたことや、心理学検定の過去問を導入することによって、乳幼児期の発達の理論などの理解につながったと考えられる。また、「質問14質問の対応」「質問16双方向なやりとり」においても、学科平均より高く、レポート課題に対するコメントを全体および個別にフィードバックするなどの取り組みが影響していると考えられる。

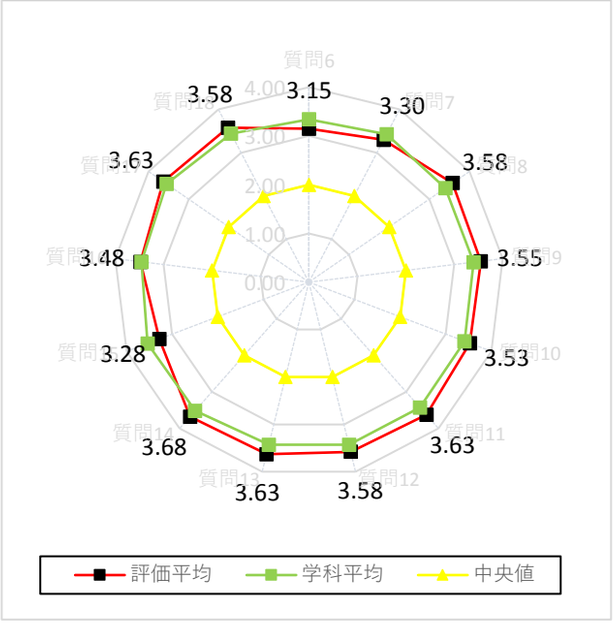
（３）次年度に向けての取り組み

授業評価結果における特に低かった項目に対しては、本授業が心理を学ぶ上で興味深い内容であることを示すことや、心理学検定などの資格取得に関わることを積極的に伝えることのよって、受講学生の意欲を引き出すことにつながると考える。
また、アクティブラーニングによって、学生自身が自分で能動的に考えて思考し、判断力につなげていくことも必要であるといえるだろう。
本授業では、乳幼児期の発達課題を考えるグループワークを行ったが、時間の確保が短く、じっくりと思索し、意見を交換するまでには至らなかった。
そのため次年度では、アクティブラーニングを活用し、主体的な学生同士の意見交換を促し、様々な観点から物事を捉える力をつけることと、知識の定着化を図りたいと考える。
また、質疑への応答など、学生との双方向のやりとりを重視することや、レポート課題によって理解の度合いを把握し、内容をフィードバックすることなどは、次年度も引き続き取り入れることが大切だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		児童臨床心理学	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

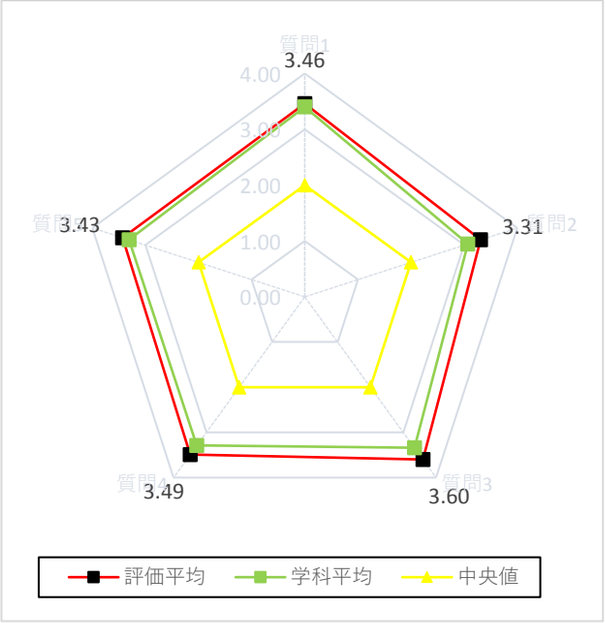
・学科平均と比較すると、質問2の学生によるシラバスの活用、質問6の教員によるシラバスの説明、質問7到達目標の説明、質問15の公平に学生に対する対応の　項目が若干低かった。確かに、シラバスについての説明は、最初にしておらず反省すべき点である。公平な学生への対応についてjは、気になる学生や対応に　苦慮する学生が数名おり、授業中に時々声掛けを行いながら情業を行ったのは事実である。しかし不公平になるようなことでもなく苦情はその場では出てい　ない。こういう場合の対応は難しいと感じる。
・学生による総合評価は、3.58と平均よりも高く、全体的にも平均値を上回っている項目が多い。新カリキュラムによりこの授業は最後になるため、、おのず　と力を入れた授業でもある。中でも、視聴覚教材や資料を用いて説明し、最後に小テストを行う方法を行った。中でも、児童への心理療法について心理技法　を用いた実践は全員がきょみを持ってくれたようである。

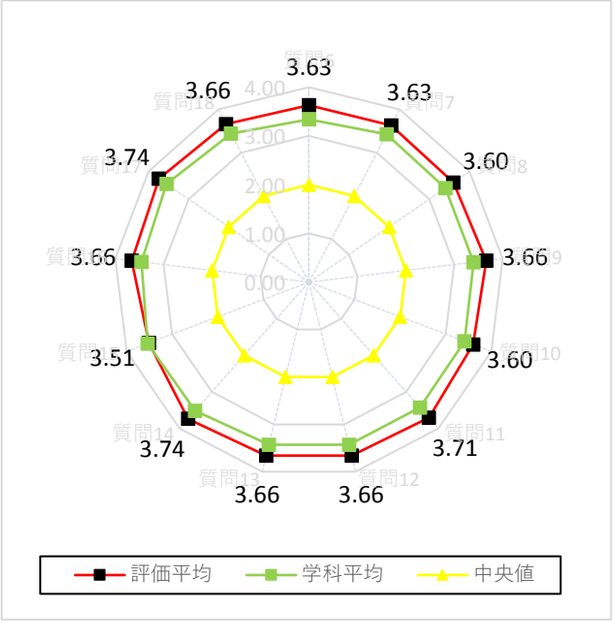
（３）次年度に向けての取り組み

・学科平均より評価が低かった項目については今後見直す必要を感じる。特に、シラバスの説明や、授業の目標、ねらいなど最初にきちんと伝えてからの授業　を展開する必要があると感じた。また、学生を公平に対応することは大切であるが、どうしても場を乱す学生や注意、関心を向けないといけない学生など多　くいる学科にとって、難しい課題である。特に今回が他学科（子ども学科）からの受講生がいて、場の雰囲気も違うためなおさら感じたのかもしれない。今　後そういう場合の対応の仕方も考慮しないといけないと感じた。
　シラバスに関していうと、授業開始時など学年が上がると、、持参する学生がほとんどおらず、最初の授業時間にきちんとアナウンスするようにしないとい　けない思った。今回が最後の授業であったが、比較的学生はまじめに取り組んでおり、特に児童に関心がある学生も多く、就職等にも影響を与える授業であ　ると感じた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科指導法	91名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

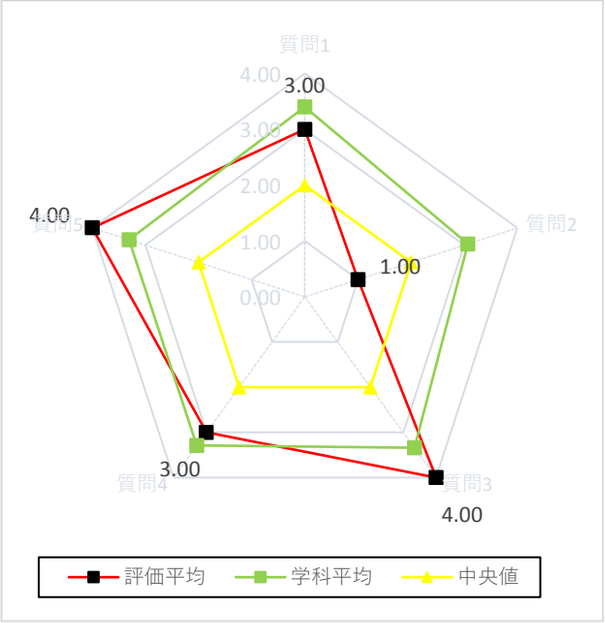
昨年度からの実践を深めるべく、学生自身が自分の学びを意識するような授業展開に努めてきた。具体的には、「毎時間の最初には必ず前時の復習をする」「一つのテーマ（学校現場で言えば「単元」）を学習するに当たっては、学生一人一人に自分の課題をもたせる場を用意する」「授業の前にテキストや配付資料を読ませたり、授業中に重要な箇所を音読させたりする」「丁寧で構造的な板書を行い、既習事項の整理と思考の道筋を明確にする」「グループ活動を数多く取り入れる。特に、教材研究においては、互いに意見を出し合う場を必ず設ける」「毎時間、授業の振り返りを行う」などである。このようなことを継続してきた結果が評価にも反映されているのではないかと考えている。

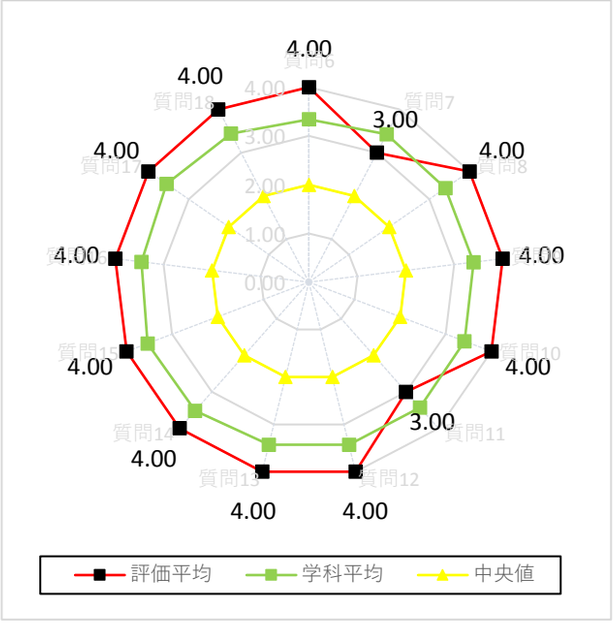
（３）次年度に向けての取り組み

本科目は、小学校教諭を目指す学生にとって「最初の」指導法を学ぶ授業である。他教科の指導法、3年「小学校教育実習指導」、4年「教育実習」につながる重要な位置を占めていることを自覚させつつ、学校現場に生きて働く実践的な授業になるよう努めていきたい。とりわけ「教えるとはどんなことか」「子どもに考えさせる授業とは」などを追究していく中で、具体的な学習活動、具体的な発問、具体的な板書、具体的な教材研究など、「具体性」を大事にした活動のある授業を展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

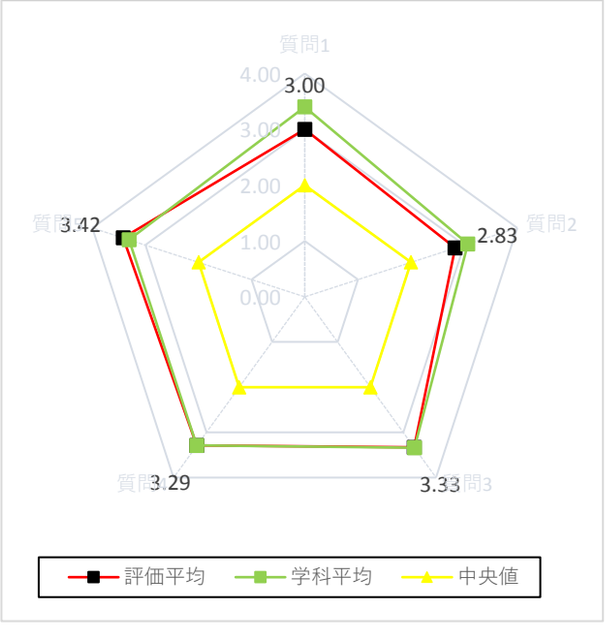
回答者僅少のため、分析と評価に意義が認められないので、記述を省略する。

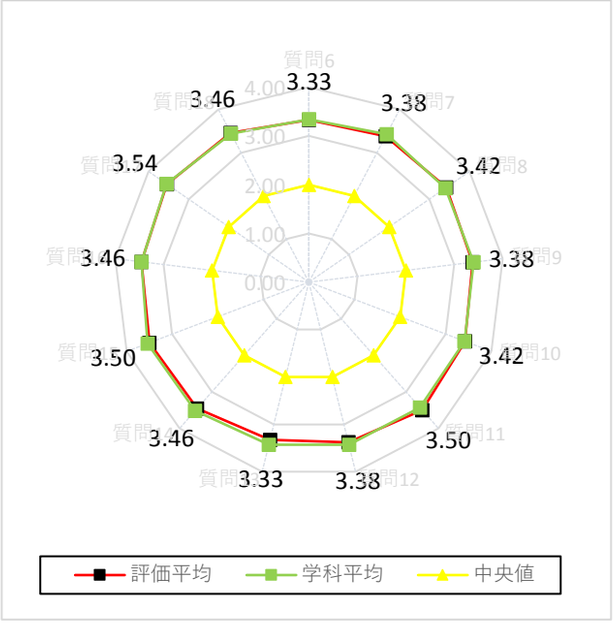
（３）次年度に向けての取り組み

回答者僅少のため記述を省略する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	84名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

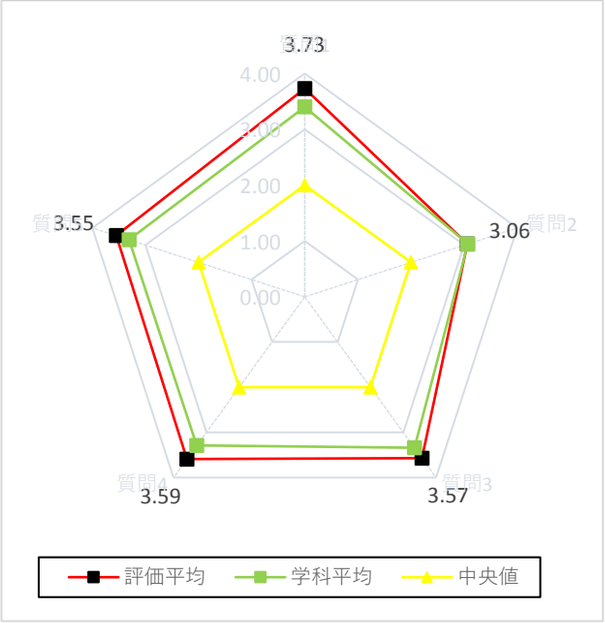
受講者８４名の中で回答人数が２４名であった。約３割の回答率である。また、２「やや悪い」の評価が全ての質問で１名おり、同一の受講者と思われる。授業評価の実施方法に改良が必要と思われた。また、授業者の評価に限ってのことであるが、１年次生の評価は高く、３年次生の評価は低いことである。これは授業のあり方を反映した評価というより、評価者の特性が色濃く反映された評価との考えも成り立つと思われる。さて、今回の評価である。全体に学科平均値より授業者の評価が低い結果となった。特に質問６「シラバスについて説明がありましたか」については、学科平均値が３．４２のところ、授業者の場合は３．３３と０．０９低い評価となった。授業者は一通り口頭で説明したが、受講学生には説明があったと捉えられなかったと思われる。学科平均値と比し、目立って低く評価された事項は質問１３の「授業の進む速さは適切でしたか」である。学科平均値が３．４５のところ、授業者の平均値は３．３３であった。授業者は３年次生であることを考慮し、説明を簡略化したり、やや理解が困難な内容を解釈したりした。そのことが反映されたものと思われる。

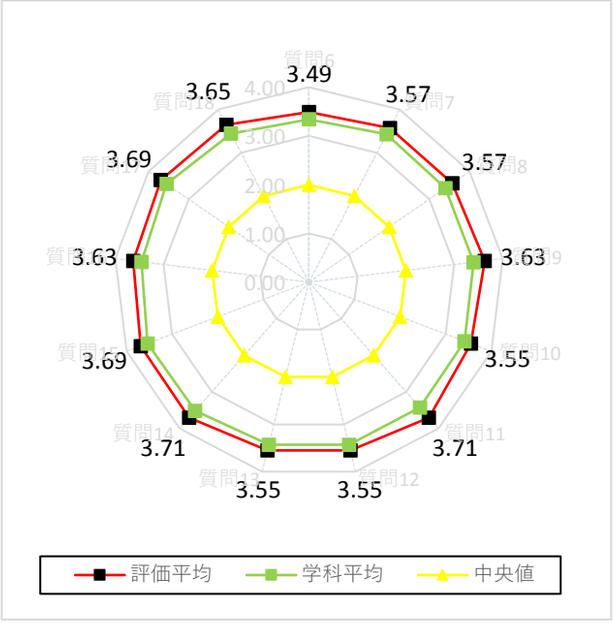
（３）次年度に向けての取り組み

総じて、学科平均の評価値より、授業者への評価が低かった。総合点で学科平均値が３．４７のところ、授業者への平均値は３．４６であった。個別には質問６「シラバスについて説明がりましたか」が学科平均値より、授業者への平均値が低かった。具体的数値は上段の通りである。今後シラバスをプリントにして配布することにしたい。また、授業の進む速さについて、他の項目に比してより低く評価されていた。３年次の理解の程度を再度点検し、その程度に合わせて授業の速度を調整したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別の支援を要する子どもの理解	88名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

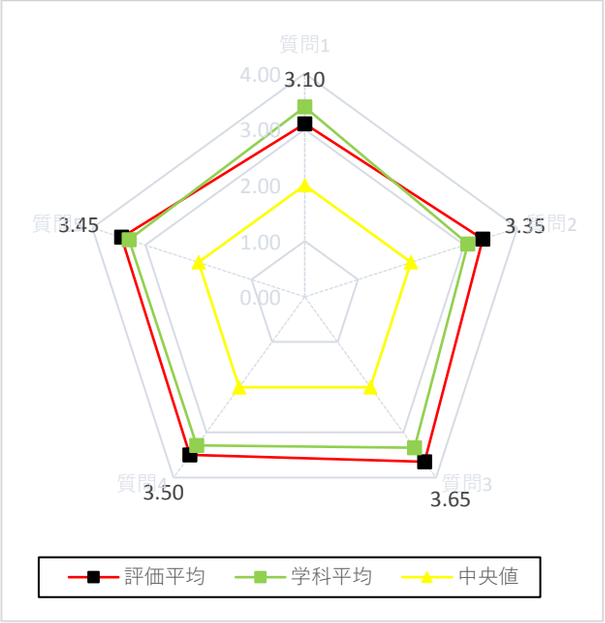
回答率58％（51/88）、総合評価3.58
自由記述：DVDなどの視聴覚教材がわかりやすかった（11件）、毎回の小テストがよかった（4件）、配布資料がわかりやすかった（4件）、特別支援に興味がわいた（3件）、経験談を聞くことができてよかった（3件）などであった。試験が簡単すぎたという記述もあった。
本授業の目標は、特別支援教育の理念や課題を踏まえ、特別の支援を要する子どもたちへの支援・指導の在り方についての理解を深めることである。
評価は3.55～3.71の範囲であり、高い評価を得たといえるのではないか。
質問2の「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」について3.06と最も低い評価であった。シラバスを提示したのは、初回の授業のみであったためと考えられる。
質問11「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。 」、質問14「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」の2つが最も高い評価であった。今後も継続して取り組みたい。

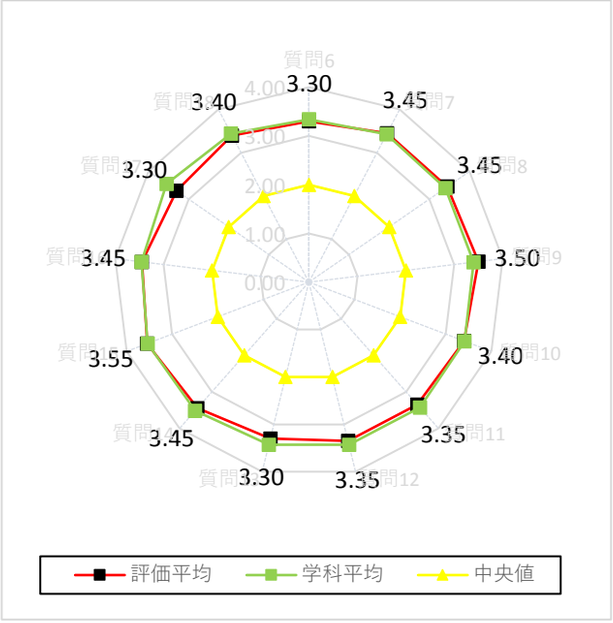
（３）次年度に向けての取り組み

・毎回の授業でシラバスを提示する。また、配布資料や、質問への対応をより良いものとしたい。
・質問項目がないにもかかわらず「３」の評価をつけているものが数名いた。内容を読まずにとりあえず３をクリックするだけの評価になっているのではないか。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科指導法	59名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

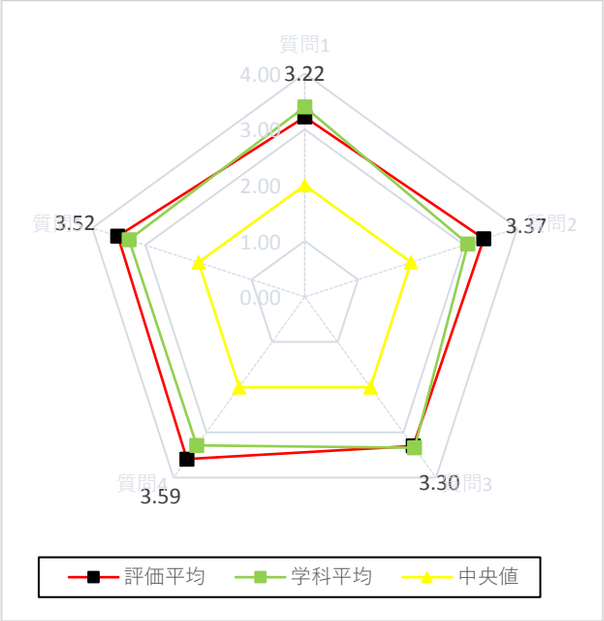
全体的には「学科平均」と近い評価であった。「質問１」が学科平均よりも低い点は，出席状況がよくない学生が少なくないという点で気になる。「質問17」が学科平均よりも低いという点は，自省しなければならない。但し，自身としては熱心に授業に取り組んでおり，熱意が学生に伝わっていないように思える。その点を踏まえて次年度の授業に活かしたい。

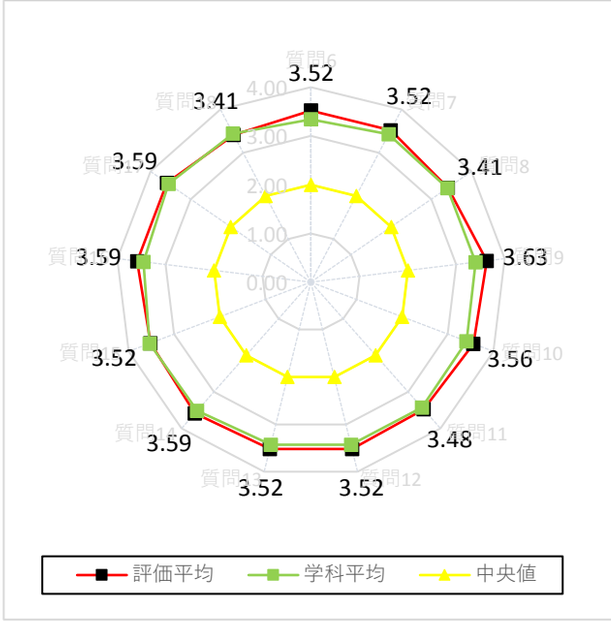
（３）次年度に向けての取り組み

結果の分析における反省を活かして，次年度の授業の改善に活かしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	84名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

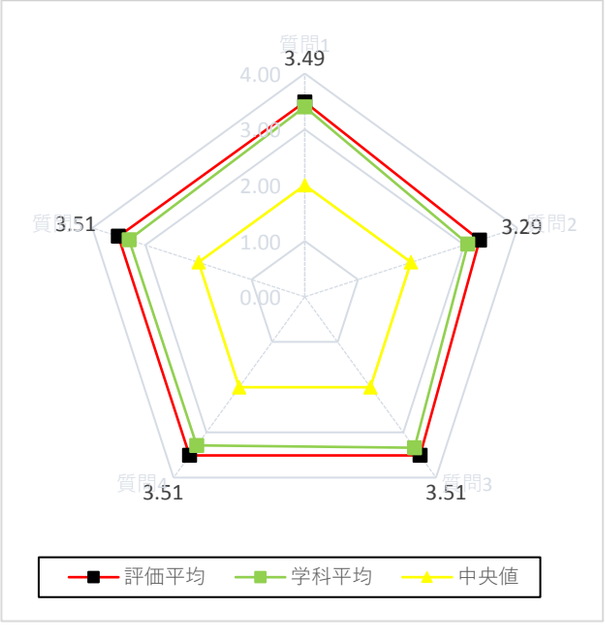
音楽科指導法では、複数回にわたって模擬授業を組み込んでいることから、他の学生の前で教師役を行う必要がある。特に、ピアノ伴奏や人前での歌唱等のような実技に対しては、苦手意識の強い学生が受講していることを配慮しながら授業を進めていく必要があった。質問1～５の学生自身の自己評価においては、特に際立って低い数値の評価項目は無かった。また、質問6～質問18の教員に対する評価においても自己評価同様、極端に低い数値の項目は無かった。今年度の授業では、再履修者を中心に音楽に対する苦手意識の強い学生たちが例年以上に多く受講していたが、受講態度は良好な学生たちが多かった。このことが各項目の数値の落ち込みが無かったことに繋がっているのかもしれない。

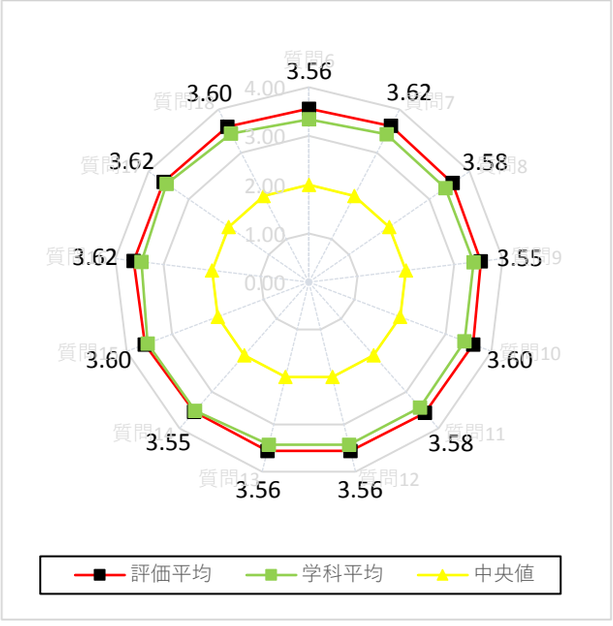
（３）次年度に向けての取り組み

今回の結果を踏まえ、到達目標の明示、配布資料、使用機器、教員の声の聴き取りやすさ、質問への対応等といった教員に対する授業評価の各項目に対しては、今後も引き続き留意ながら取組んでいきたい。また、教科に対する苦手意識の払拭という点についても、授業時の学生の様子を観察しながら細やかな対応を心掛けていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活科指導法	138名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

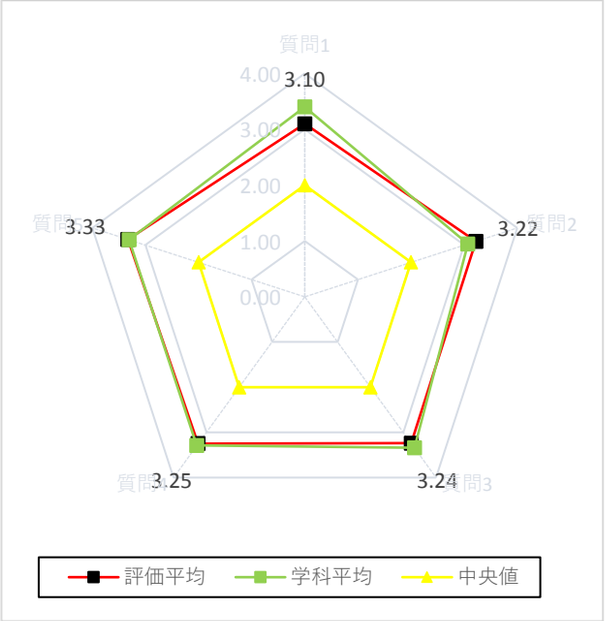
全ての項目で学科平均を上回っており，肯定的な授業評価を得られた。

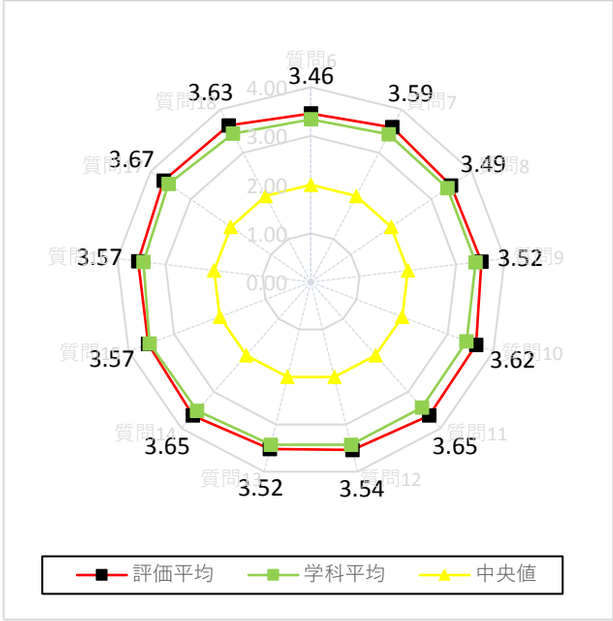
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も本年度と同様，良好な評価が得られるように，しっかりと取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		知的障害者教育総論	123名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

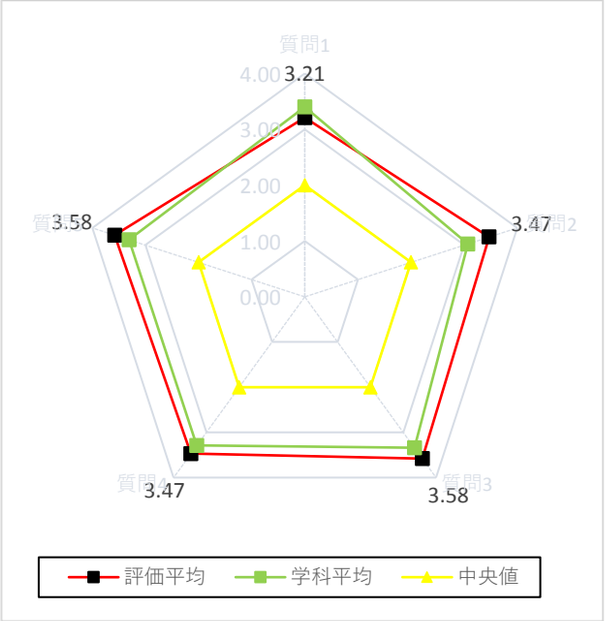
・評価平均を見ると、どの項目もおおむね3.5前後もしくはそれ以上となっており、全体的に良い評価であったと思われる。
・質問10、11については、学科平均を上回る結果であった。テキストは購入させず、教員が作成したパワーポイント資料により授業を進めたが、この科目に関しては、それが授業内容の理解につながったものと考えられる。
・学生の自己評価の中で、欠席に関する評価平均が低いことがやや目立っている。

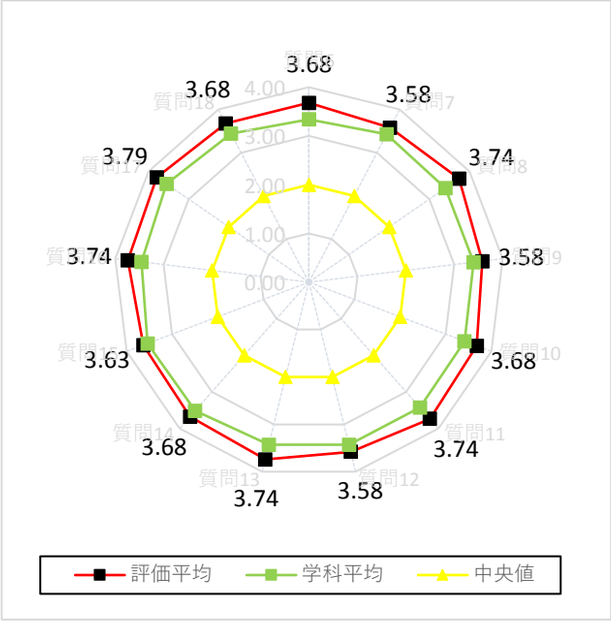
（３）次年度に向けての取り組み

・今年度の授業の実施方法を基盤として、次年度も授業の内容の充実を図る。1年次の科目であり、学科の特別支援教育関係の専門科目の中では最も早く履修する科目であることも踏まえ、以降の学びにもつながる基本的な事項の理解を徹底することを軸に授業を構成する。また、グループ協議などの活動を通して、自身の意見をブラッシュアップしたり、他者の意見に対して適切にコメントするなどの思考・表現的な活動も適宜行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育科指導法	61名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

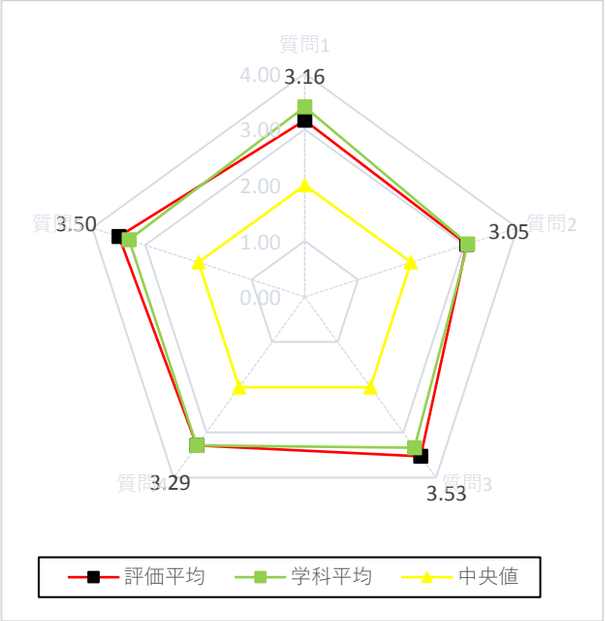
全ての項目において学科平均を超えかつ高得点である。
次年度以降もより発展的に授業を展開したい。

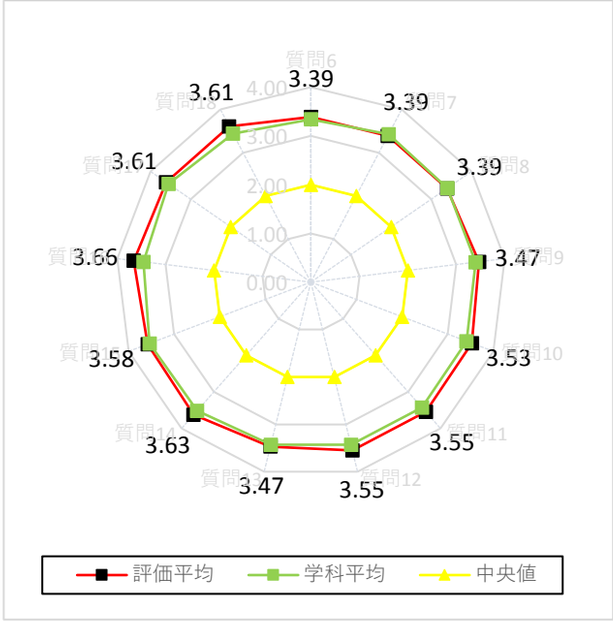
（３）次年度に向けての取り組み

授業内容以上にALを今まで以上に取り入れ学生の主体性を伸長させるように努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育・教職実践演習 （幼・小）	79名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

子どもに係わる専門職をめざしての大学における「総仕上げ」として、理論と実践がつながるように内容を工夫した。

オムニバス形式の中で、各教員の専門性をもとに、現代の保育・教育の課題解決につながるよう、ロールプレイ形式を取り入れた授業なども行った。ロールプレイ形式の授業については、導入段階でその形式、目的などを説明することが必要であり、また、ロールプレイ後の振り返りの時間も不可欠である。

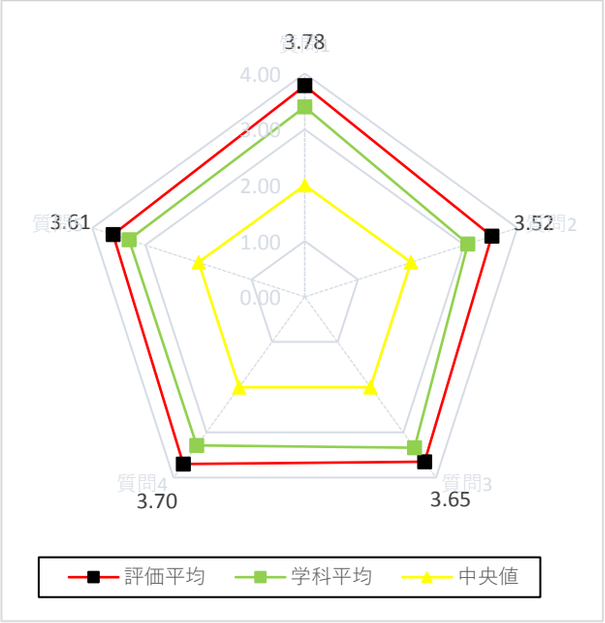
内容が、実践的であればあるほど、保育士、施設職員、幼稚園教諭、小学校教諭、一般企業などの進路の違いが、授業に対するモチベーションの温度差になったようである。

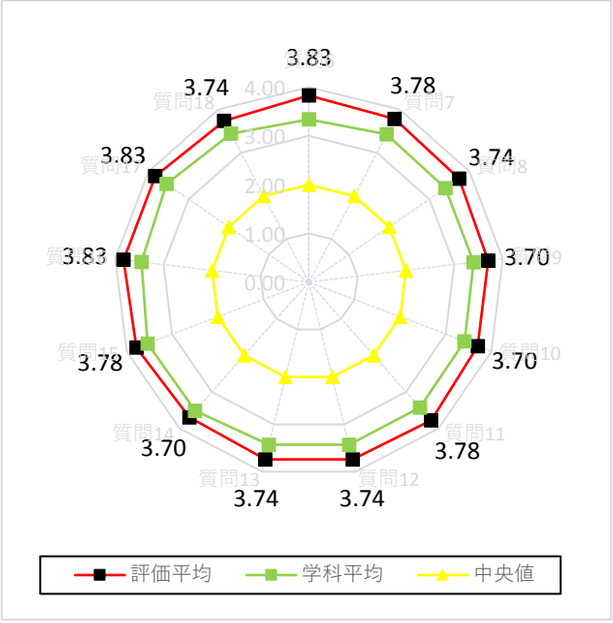
（３）次年度に向けての取り組み

理論と実践のつながりをさらに明確にするために、授業の内容等の工夫を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本授業は、保育現場の保育士と共にオムニバスで進める授業である。学生の授業評価については、すべての項目について一定以上の評価を得ている。

概論的な内容については主に櫻井が行い、具体的な園での子どもの姿や保育者の役割、遊びの実際等については保育所主任である土肥先生が行うというようにある程度分担して進めた。

学生については、ほとんどが家庭や地域において幼い子どもと接する機会がない状態で入学しているため、既存の視聴覚教材や実際に保育所で撮影された映像をもとに進めており、学生がよりイメージしやすい内容となっており、そのことがこのような評価の理由であると考えられる。

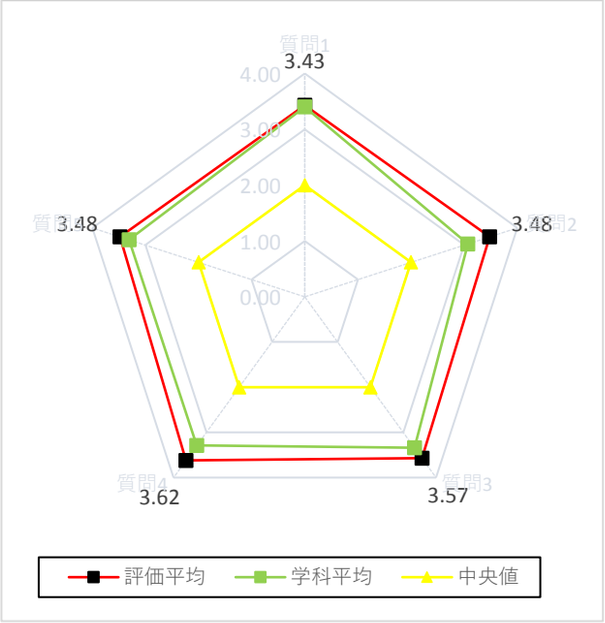
（３）次年度に向けての取り組み

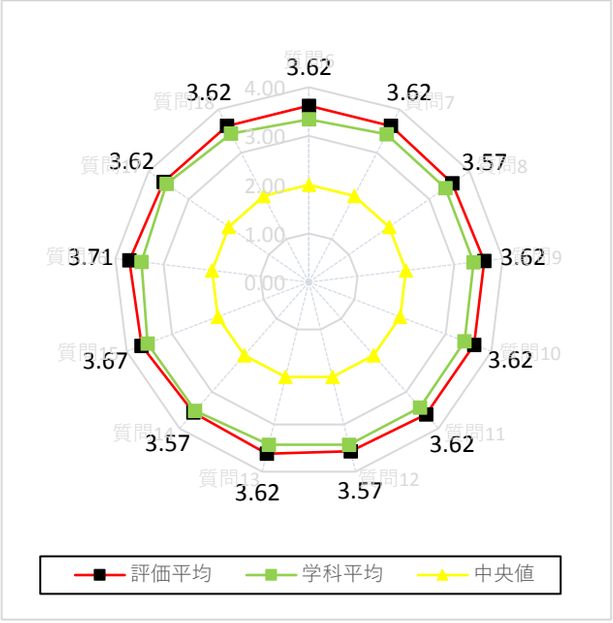
平成30年4月より、保育現場においては改訂された新法令のもと保育が展開されており、2年が経過した。「乳児保育」に関するねらい及び内容が強調され示されているのが特徴的であったが、本年度入学生からはさらに、「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」に分かれて授業が行われる予定であり、その内容はさらに深められるであろう。

今後行われる保育実習の際、保育現場において非常に役に立つ授業であるため、可能な限り現場を想定した授業ができるよう工夫し行う必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	62名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

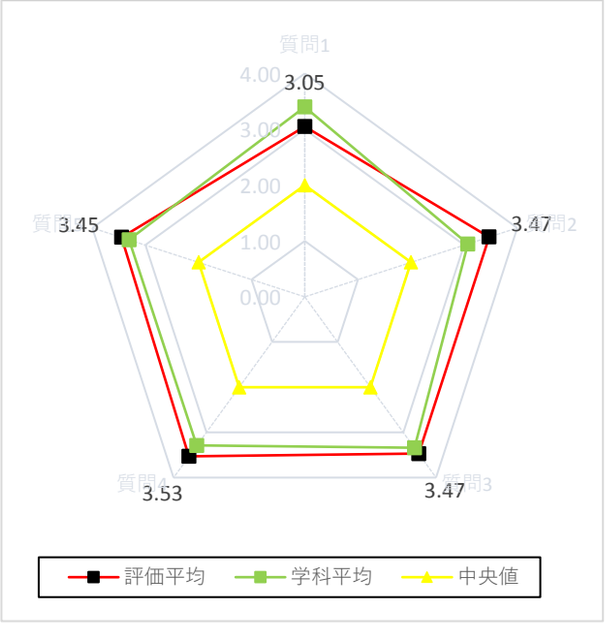
回答率34%（21/62）、総合評価3.60
自由記述：今まで受けた授業の中で一番いい授業でした。必要以上に注意せず、話も端的でわかりやすく、質問などにはしっかりと自身の経験や知識を含ませながらたくさんのことを教えてくださいました。毎回の感想や小テストなどの用意や、それらをどう活かすかなどをしっかりと伝えてくださいます。例えば、「感想は成績に反映されるから下まで書いたほうがいいよ」「質問も書いていいよ」「小テストは成績に入らないから間違っても大丈夫だよ。でもちゃんと覚えないとテストに出すからね。」など明確に伝えてくださいます。男女問わず、座席を回るとき、先生から声をかけるなどされていて、生徒との仲もすごくよかった印象です。
評価は、3.43～3.71と比較的高い評価を得た。質問１「授業は何回欠席しましたか」が3.43で最も低く、欠席者は他の授業より多い。実習の影響で別の時間帯に4回分の補講をしなければならない事や、補講の時間が他の授業と重なることが一因であると考えられる。質問16「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」が3.71と最も高い評価であった。

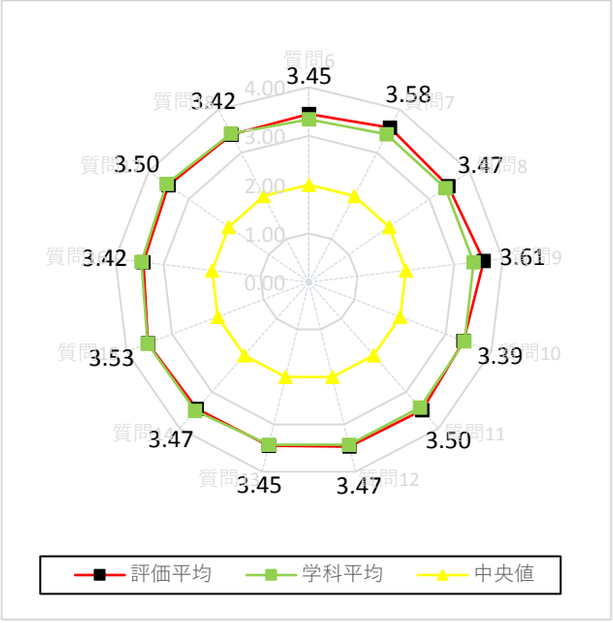
（３）次年度に向けての取り組み

自由記述で示したような良い評価が今後も継続して得られるように努めたい。
補講の時間帯については、検討が必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		家庭支援論	86名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

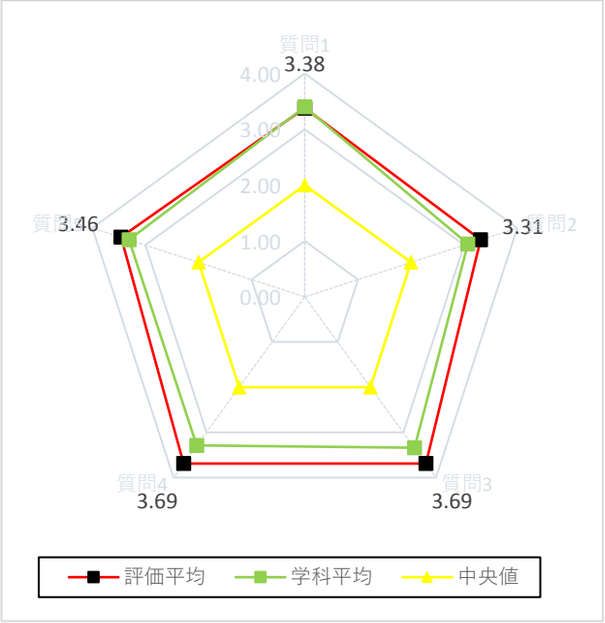
本科目受講学生の回答率は、86名中38名で、回答率44%と約半数であった。本科目への総合評価は3.46と高評価であり、学生の総合自己評価は3.45、授業に関する評価は3.42と共に高評価であった。学生の感想として、事例の紹介と検討、考察ができたことが有意義であったとの声を多く聞いた。やはり、実践につながる具体的な学びは学生にとって、興味関心が深いと考える。

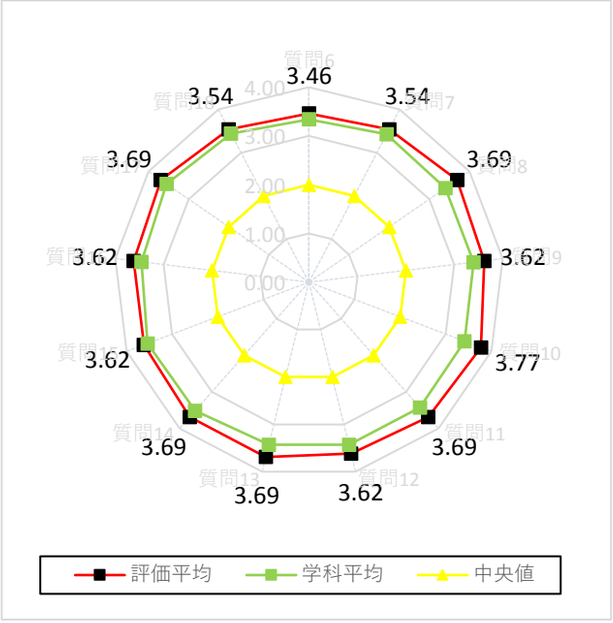
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、基礎的な学びと、事例紹介と考察を重視した応用的内容を大切にし、進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育相談支援	62名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

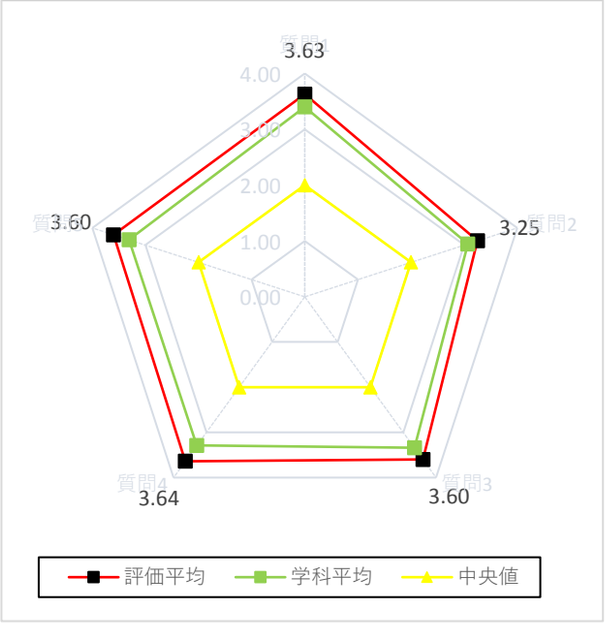
本科目受講学生の回答率は、62名中13名で、回答率21%と大変低かった。その上での分析となるが、本科目への総合評価は3.60と高評価であり、学生の総合自己評価は3.46、授業に関する評価は3.54と共に高評価であった。回答した学生は大変熱心に取り組み、学びを進めたことが窺える。

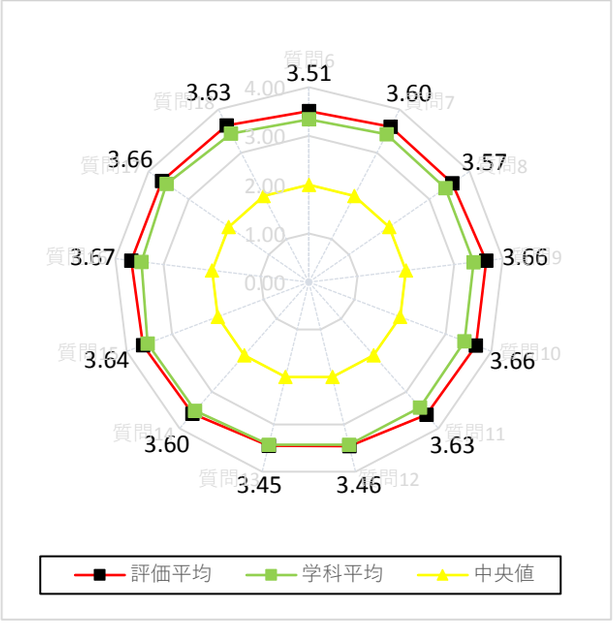
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度の授業内容及び方法を振り返り、シラバス及び授業到達目標を受講生に明確に伝えることを意識しつつ、実施する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会	160名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

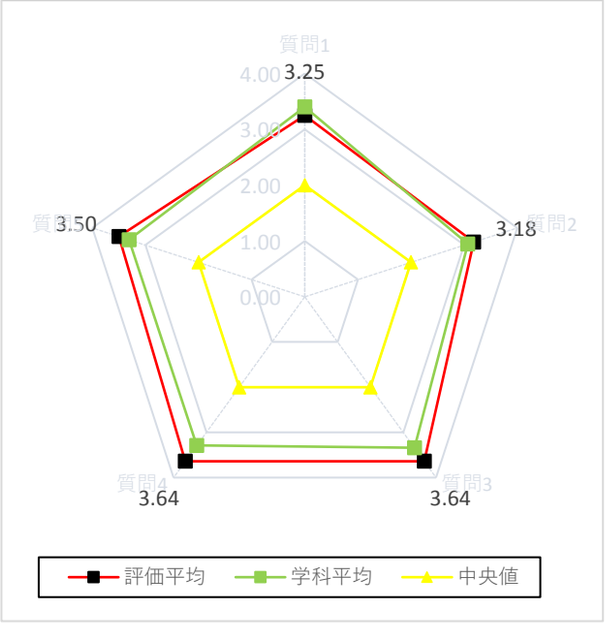
全体的に，学科平均とほぼ同じか，これを上回る良好な評価であった。質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか」と質問13「授業の進む速さは適切でしたか」に関しては，わずかに「学科平均」を下回った。

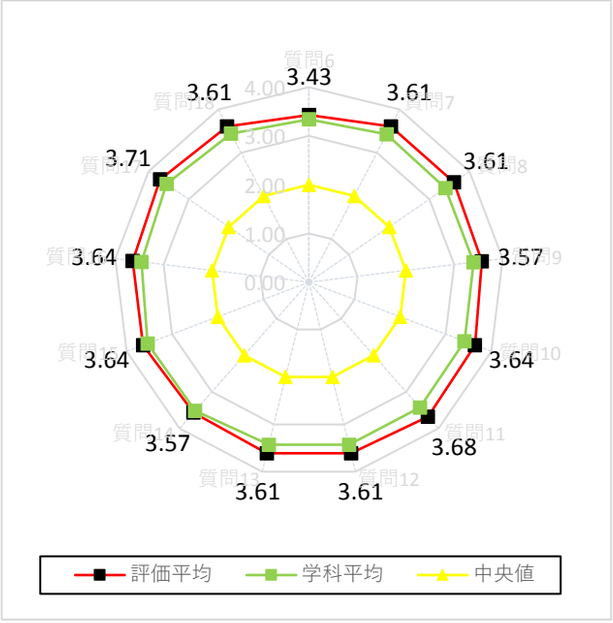
（３）次年度に向けての取り組み

わずかに「学科平均」を下回った質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか」と質問13「授業の進む速さは適切でしたか」の改善を課題として取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会的養護Ⅰ	50名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

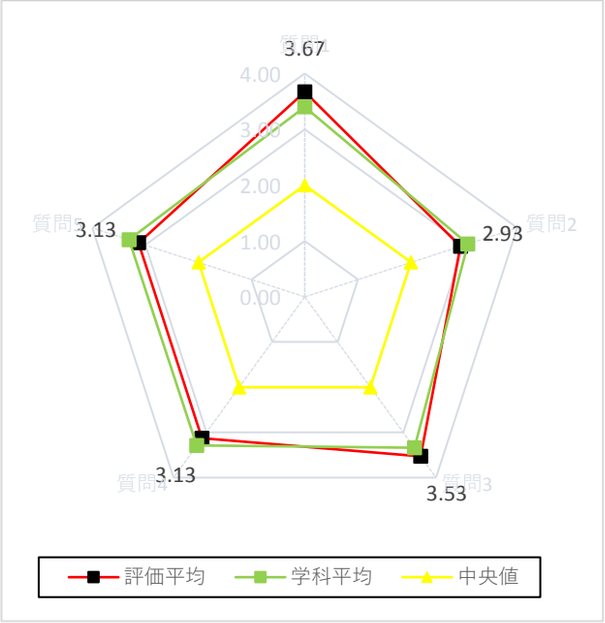
本科目受講学生の回答率は、50名中28名で、回答率56%と6割弱であった。本科目への総合評価は3.56と高評価であり、学生の総合自己評価は3.50、授業に関する評価は3.61と共に高評価であった。中でも教員の熱意と役立つ資料の配布は高評価であり、わかりやすい工夫と質問への対応については、さらに検討を重ねていくことが必要であると考える。

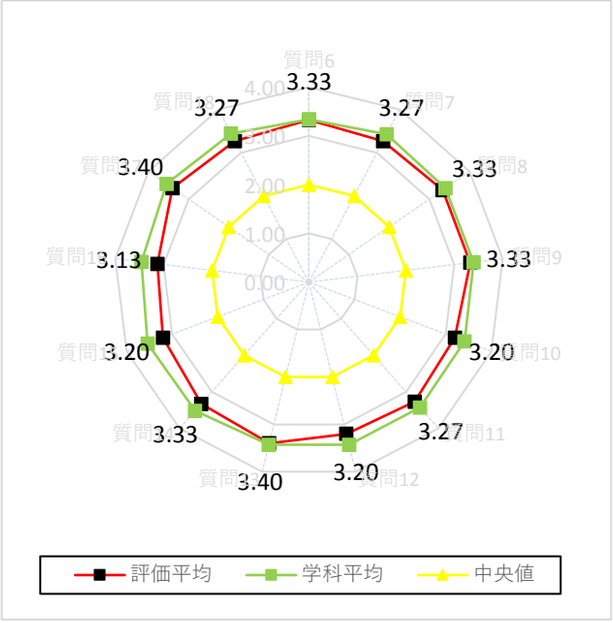
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、熱意を持って取り組み、配布資料のバージョンアップ、わかりやすい伝え方への検討を重ねていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

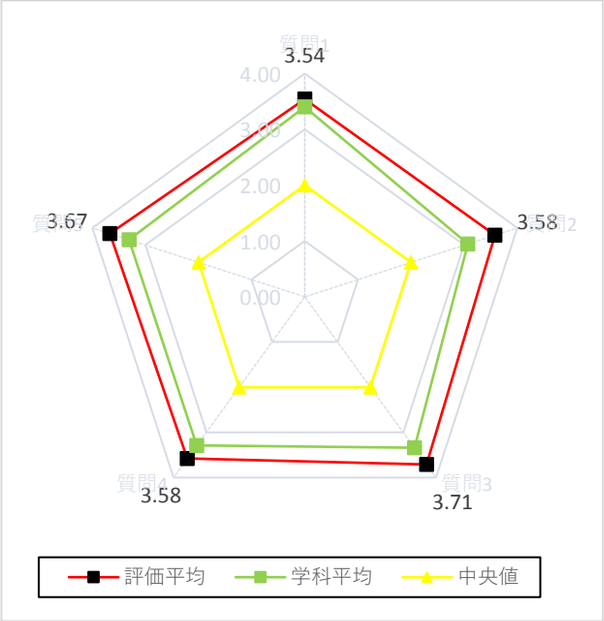
・学生の自己評価のうち、質問3の評価が高くなっている。この科目は、ワークショップや学外実習を主とする科目であり、学生の良い取り組み方が反映したものと思われる。
・授業評価の評価平均については、すべての項目で3を上回っていたが、ほとんどが学科平均を下回る結果となった。特に質問16、17で値の開きがある。学外実習等において抱いた疑問点等に対して、個別のフィードバック等が不足していたのかもしれない。

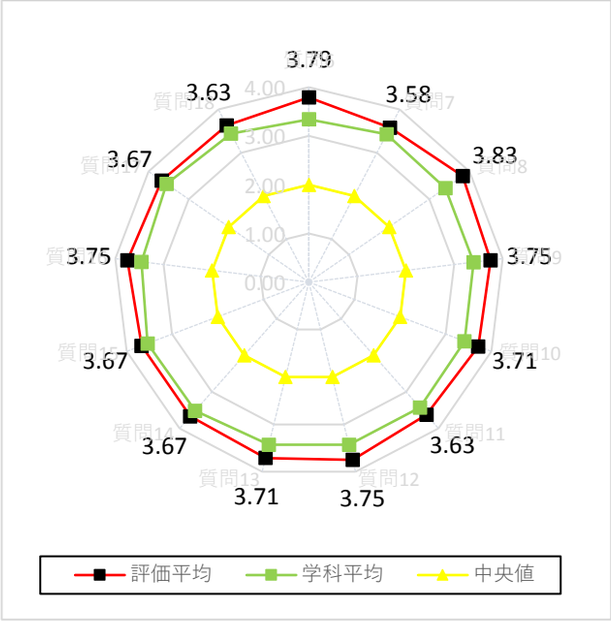
（３）次年度に向けての取り組み

・全体的に、評価を学科平均値まで向上させることを目指す。学外実習における成果や課題について、学生のニーズに応じて、個別の相談等の対応を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育	67名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

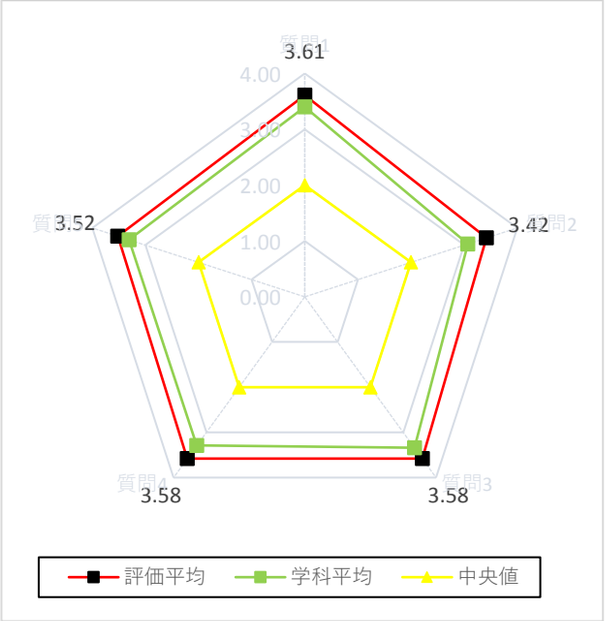
全ての項目において学科平均を超えかつ高得点であると考えられる。今年度は昨年度より丁寧な説明を心がけ教材の簡略化に努めたが、その成果であると考えられる。

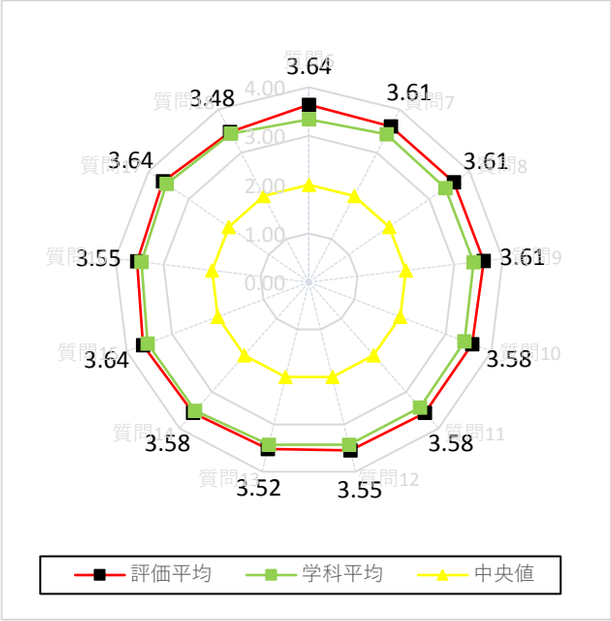
（３）次年度に向けての取り組み

次年度以降も継続的に行う部分は行いさらにより学生が主体的に授業に取り組めるように授業の方法についてより挑戦的に検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅰ（保育所・施設）	119名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅰでは、大学で習得した知識・技能を基礎にして、実際に保育の現場において実践を通してその役割や子どもの発達状況、1日の流れを把握することが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務内容について、実際に保育士の仕事内容を経験しながら理解することが必要とされる。

授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、すべての項目について一定以上の高い評価をしており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

この体験的な学びを基盤にして、大学において振り返りを行い、抽出された課題や問題点を解決できるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれをサポートしていくことが必要であると考える。

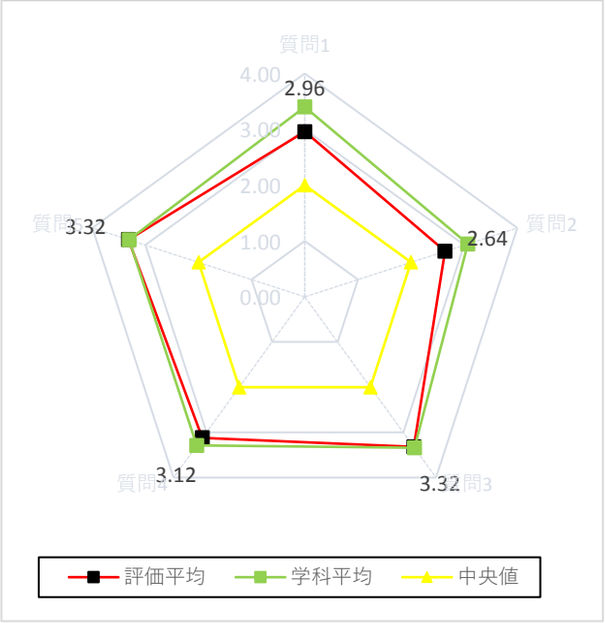
（３）次年度に向けての取り組み

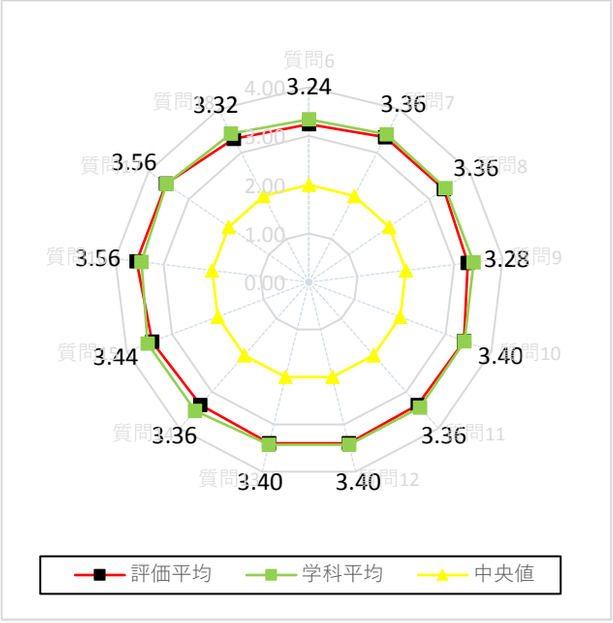
保育実習Ⅰ（保育所・施設）は、学生にとって初めての外部実習である。それぞれの学生の体調管理をはじめ、実習に臨むにあたっての姿勢をしっかりと確立させたうえで保育現場に送り出す必要があると考える。また、マナーや明るさ、積極性、闊達さ等の人間性が問われる実習でもあることを再度確認させる必要があろう。保育者に求められるこの部分が重要であることは言うまでもないことであるため、個別指導を行う必要性もある。

これらを踏まえ、次年度は実習園ともさらに緊密な連携を行い、進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	53名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、おおむね一定以上の評価をしている。

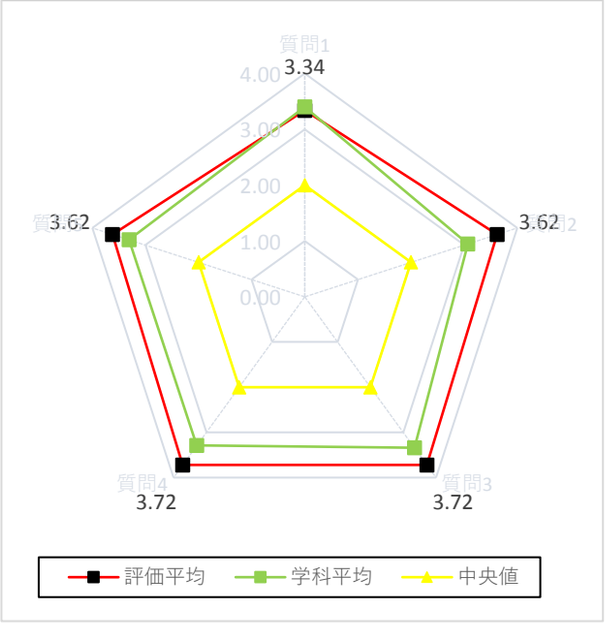
（３）次年度に向けての取り組み

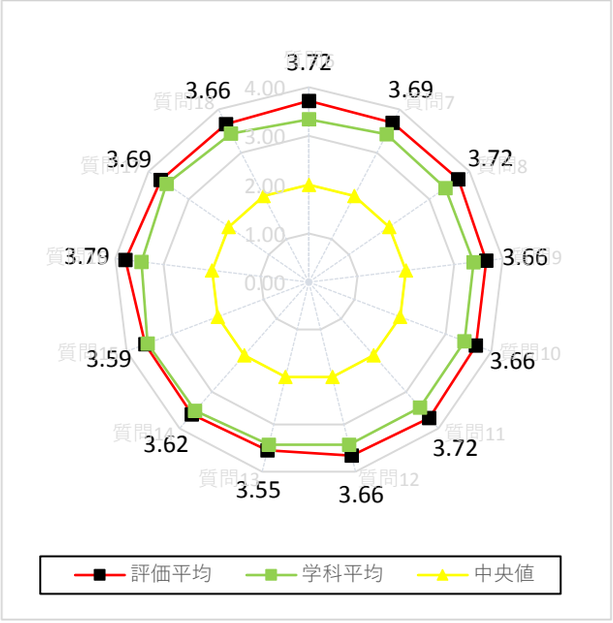
保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解やその実践についての学習、さらには、さまざまな社会資源との連携の実際などについても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園ともさらに連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立して行けるよう、サポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅰ	106名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習指導Ⅰにおいては、初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できるよう指導を行っている。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

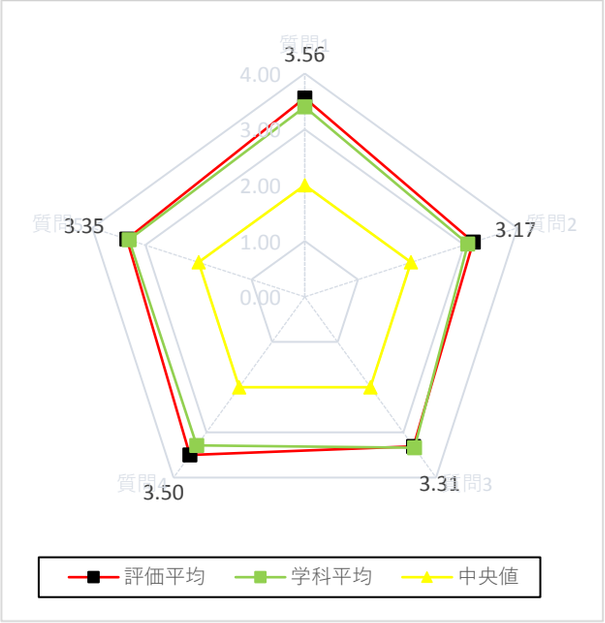
授業評価については一定以上の高い評価を得ており、特に大きな問題点はない。

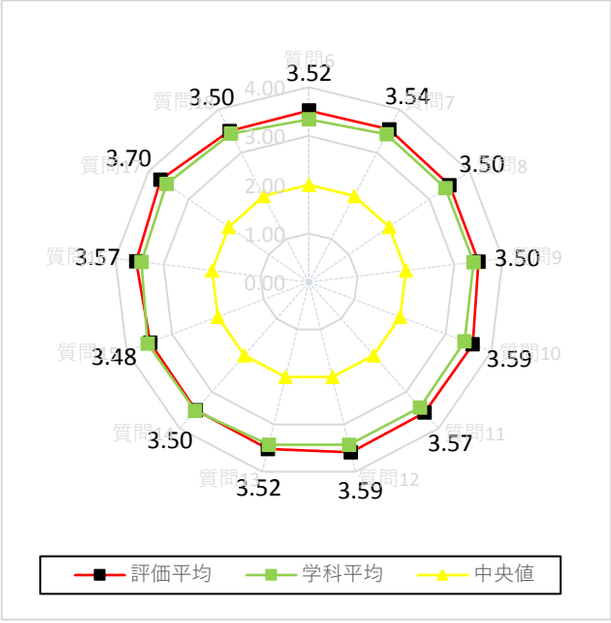
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、概ね同様の方法で進める予定である。前年度の課題にも挙げているが、学生が日頃あまり経験のない未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め、工夫して授業を進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語	101名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

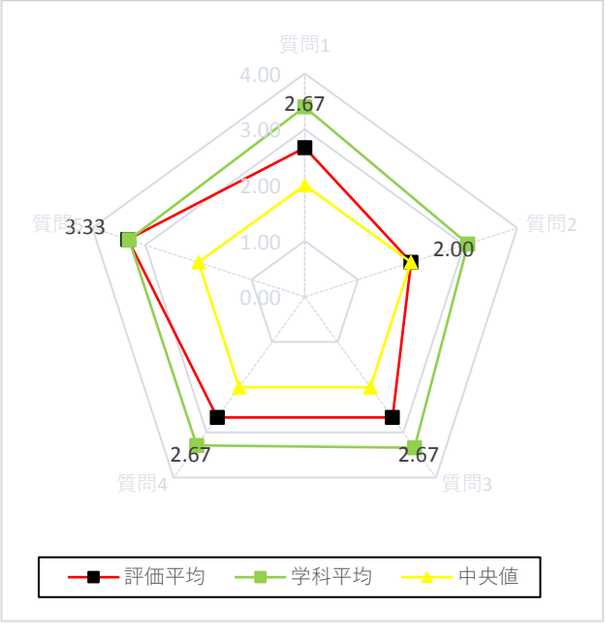
今年度も学生一人一人に「国語」に対する意識調査を行うことから始めた。100名を超える大人数ではあったが、個別学習、小グループでの演習、授業終わりの振り返りカード記入など、学習形態や学び方の工夫に力を入れてきた。また、保育内容指導法「言葉」において扱う「言葉の機能」との関わりを視野に入れた授業展開に心掛けてきたので、学生の学習意欲や学習態度が高まってきたように思う。

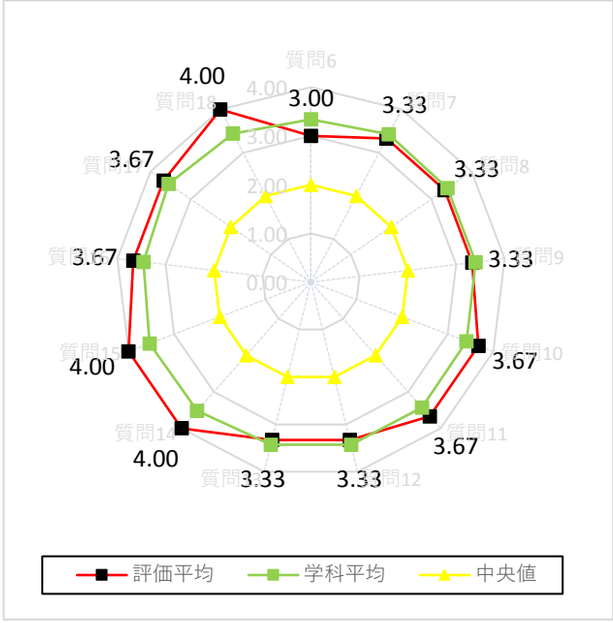
（３）次年度に向けての取り組み

学生一人一人の学力差がとても大きい。そのことが年々顕著になっているように思う。学生一人一人に自分が付けるべき国語力とは何かをはっきりと認識させることが必要である。それを踏まえた上で、日々取り組んでいくべき学習内容を考えていきたい。読書の方法、音読を生かすこと、新聞を活用した読解力の向上、語彙力を高める方法、書くことの日常化など、授業の中に組み込むことも含めて、「生活の中で言葉を学ぶ」という方法意識を持たせていきたい。「言葉を意識して使えば、自分の世界が広がる」という意識がもてる、そんな学生を育てていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰ（施設）における経験と自らの課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、各社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

この授業評価は、一人ひとりの学生がそれぞれの実習施設でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、すべての項目について一定以上の高い評価をしており、学びがすばらしいものであったことがうかがえる結果である。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員としてそれをサポートしていくことが必要であると考える。

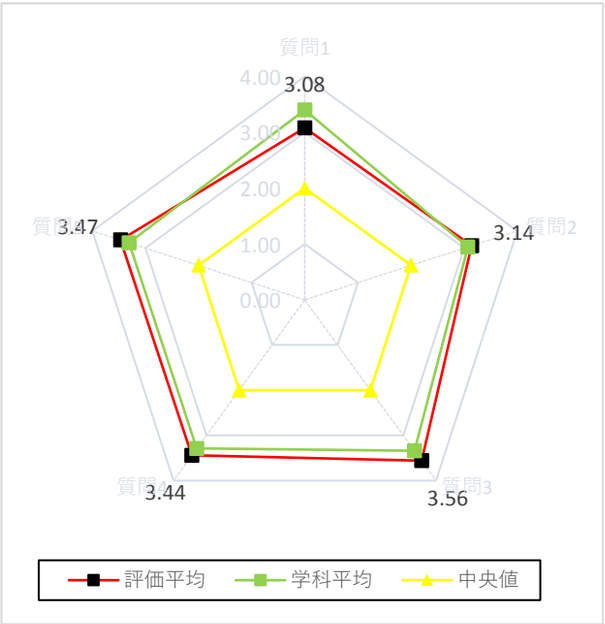
（３）次年度に向けての取り組み

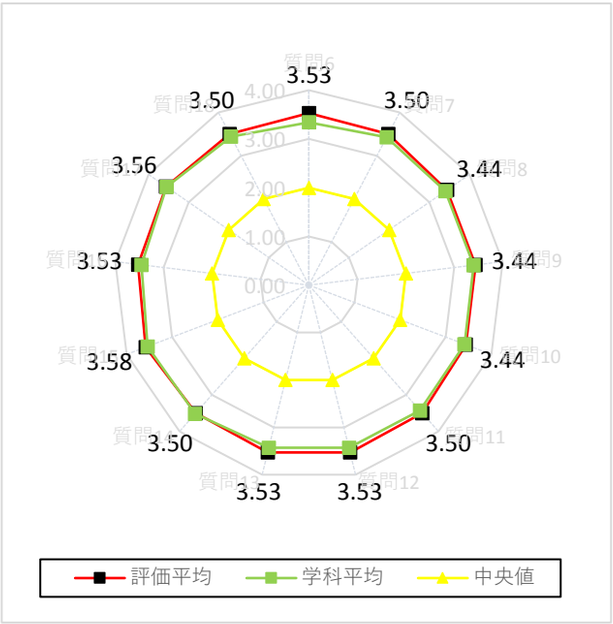
保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度はなお一層実習施設とも連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	103名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

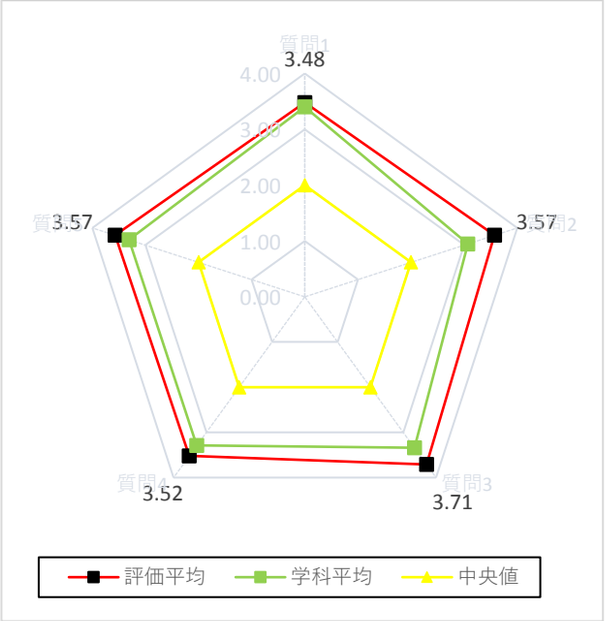
保育実習Ⅱは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人一人の子どもの実態、家庭の状況などを理解し適切な援助を行うことが目標となっている。グラフでは、出席回数がやや低くなっており、学生の意識と教員側の魅力ある取り組みの課題を突きつけられている。
授業に工夫して取り組めたという数値がやや高かった。個人で指導案を書き、グループでつきあわせ、模擬保育を行ったことによると考える。進む早さや公平性は気をつけていたのでやや高かった。今年度は真剣に取り組む学生が多く、助けられた。専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観を深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。一人一人の学生がそれぞれの実習園で様々なことを学び、その結果について自己評価をしたものであるが、殆どの項目について平均をやや上回っており、学ぶことが出来たのではないかと思われる。今後、社会に出て努力していける土台を作っていくことが大切である。

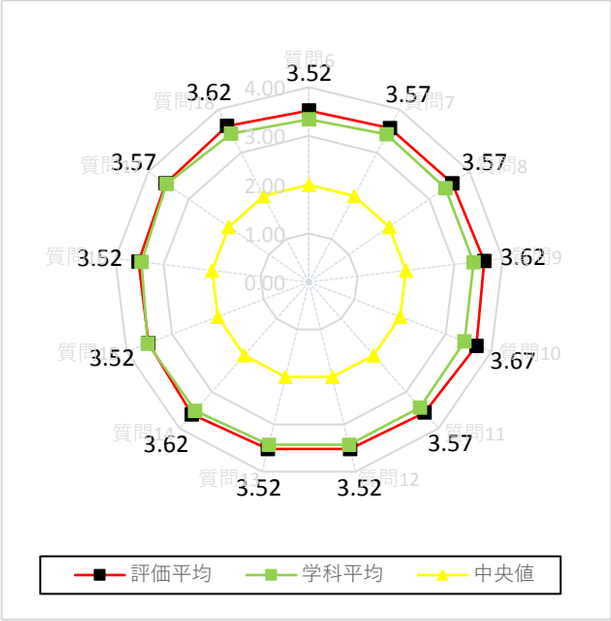
（３）次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、保育の実地の学びの集大成になる。自らの今後の進路を決める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。今後も実習の自己評価を行い、実習を振り返ると現場でどのような保育を目指したいかを明確にしている学生も多く見られた。これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携を密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅰ	65名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

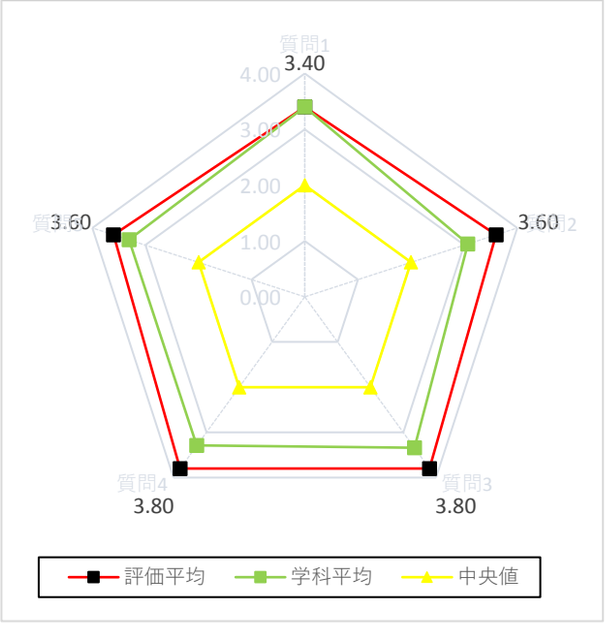
幼稚園実習Ⅰは、学生にとっての初めての実習であり、附属幼稚園での実習である。学生の自己評価は実習計画に基づき、真剣に取り組めたと数値が高かった。現場の受け入れ体制が整っているので、実りある実習になってると分析できる。実習日誌からも実際に子どもにかかわり、体験からたくさんの学びを獲ていることがうかがえる。園のクラスに配属された実習生同士の助け合いや学び合いも観察できた。また、夏休みから現場の先生に指導計画案の添削を委ね、子どもの興味関心をひく内容を考えてきた。観察実習、参加実習、部分実習、責任実習の段階を踏まえ、子どもや保育者から多くを吸収していると捉えている。今年度もA,Bクラスが実習を継続的に行えたので、実習の学びの図解づくりがスムーズに進んだ。そして、現場にお礼の言葉を添えて、学びを報告できたことは教育効果が高かったと捉えている。

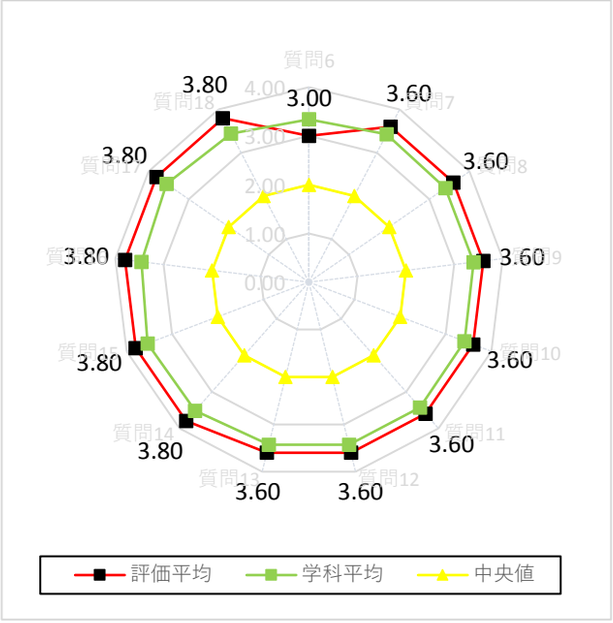
（３）次年度に向けての取り組み

次年度の学生も準備を整え、礼儀やマナーに気をつけ、謙虚な気持ちで実習に励んでほしい。幼稚園実習Ⅰが以降の実習の取り組みに大きく影響するので、個人の実習への姿勢や取り組みを重視していきたい。また、現場の先生との連携を図り、実習生の指導をより充実させたいと考えている。日誌や指導計画案が書けない学生もいると指摘を頂いているので、事前事後指導をもう少し対応できるようにしたい。実習で学びたい目標について、意識して1日を振り返り、日誌に残せるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	15名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては、対象となる学生が少ないため、ゼミ形式で授業を進めている。令和元年度は6月の実習直前期まで別の教員が担当していたが、諸般の事情によりその後は櫻井が事後指導まで担当した。

少人数のゼミの形ではあるが、実習先施設の種別としては、養護系・障がい系、利用者についても児童・者であるなどさまざまである。その前提のもとでの指導であるため、指導方法に配慮を要する。状況に応じて全体的に進めたり、実習直前期は可能な限り個別に対応するなど、指導の方法を工夫して臨んだ。

授業評価については、特に質問1から5の自らの学びの評価が低いようである。もう少し、学びの目標を明確に設定し取り組むことができるようサポートする必要があると考える。

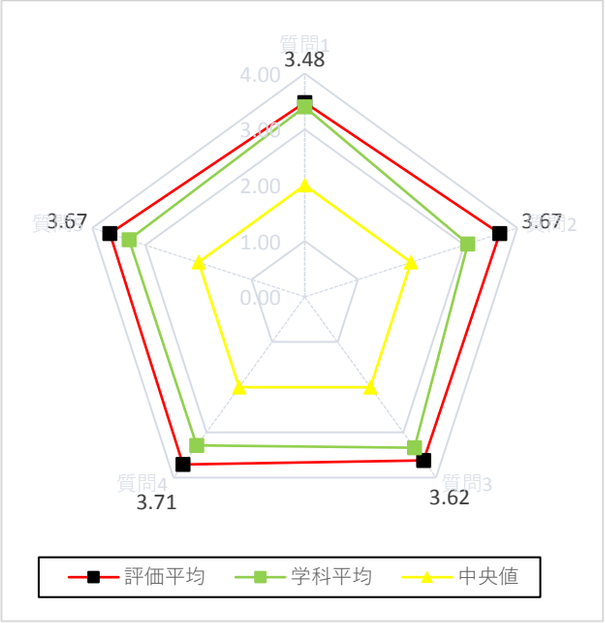
（３）次年度に向けての取り組み

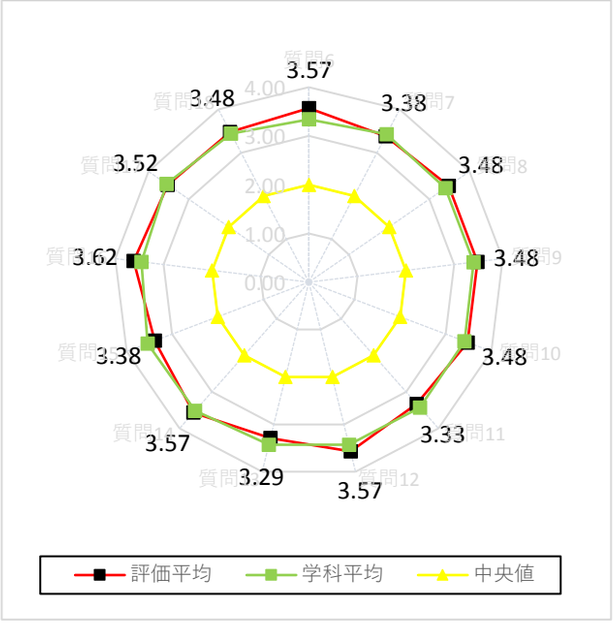
次年度も対象学生は少ない人数である。さらに、前年度と異なり始めから櫻井が事前・事後指導とも担当することになっている。そこで基本的にはゼミ形式で進めるとともに、一人ひとりの学生の学びを全員で共有して、アクティブラーニングの形で進めていきたいと考える。

そのためには、学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導やサポートができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	66名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

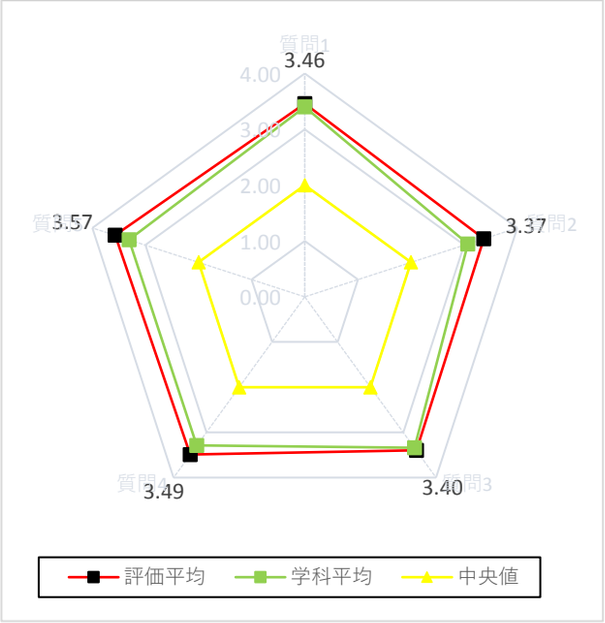
２年生の幼稚園実習指導については、各評価高めである。初めての実習において実習事前・事後の活動は、各自が実習に向けて取り組む目標と課題があり、受動的ではあるが懸命に取り組んだ自己評価だと推測している。特に、授業内容にあった資料と視覚に訴える写真や動画を活用し工夫したが、学生自身は活用出来なかったのは改善の余地があると察している。初の実習で附属幼稚園に尽力頂き、園との協力体制と連携もとれており、充実した実習指導になっていると考える。その基盤をもとに学外実習へ各々がそれぞれに取り組むというステップを踏んでいく。授業評価のスピードが早いというのは指導計画案の立案だと捉えている。今後も授業評価が高かった双方向のやり取りで指導案を立てメリハリをつけながら行いたい。

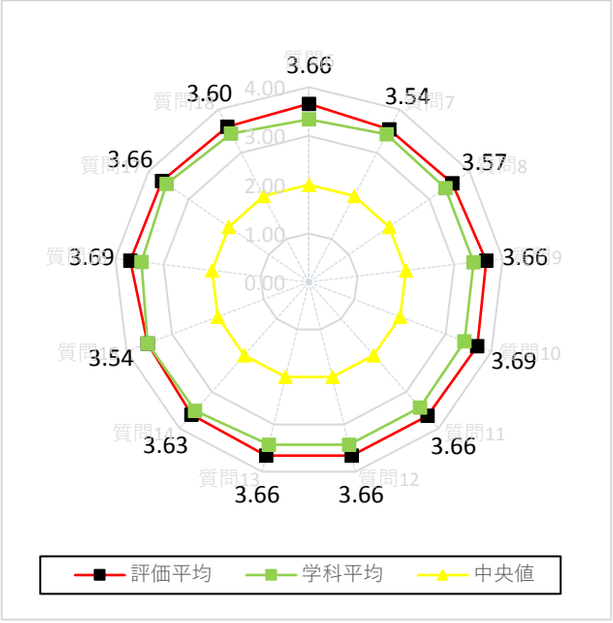
（３）次年度に向けての取り組み

授業評価の項目で、これからの改善の余地があると思われる。グループワークで「実習で何を学びたいか」の明確な視点を持つため、図解作成を行っている取り組みは有効であるが、２人組のグループにおいては進行が難しかった。説明にも作業にも時間と労力をかけており、初めての図解作成に苦戦している姿と楽しんで取り組む姿が見られる。結果的には学び取ったものを共有し、学生自身が満足のいくグループワークになっているようである。今後も、説明を分かりやすく行い、効率よく時間配分できるように改善していきたい。そして、この学びのスタイルが、子どもの成長発達を願い、保育現場で生かせるように取り組んで行きたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	138名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

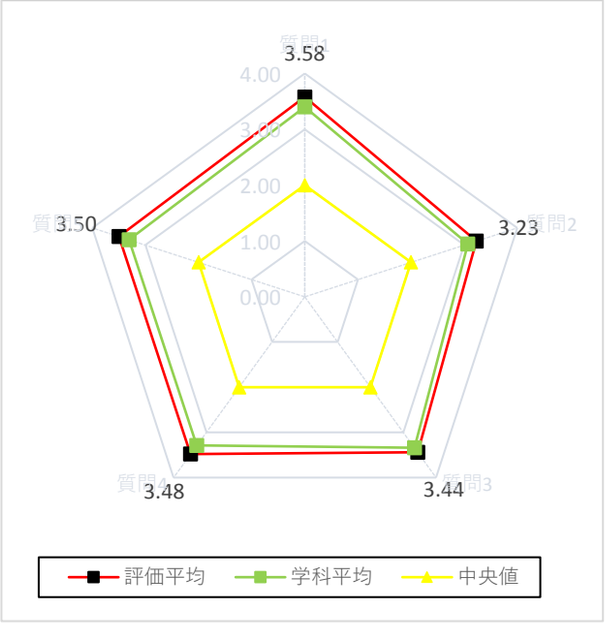
3年生の幼稚園実習指導については、全体的に平均より高めの数値だった。２回目の幼稚園実習の実習事前・事後の活動は、各自が自覚を持って実習に向けて取り組む目標と課題が明確にあり、積極的に参加した結果が数値に表れているのかと推測している。自己評価では私語以外は全て評価が高く授業内容に興味関心が持てたのではないか。学内の実習体験の基盤をもとに学外実習へ各々がそれぞれに取り組んだが、日誌の書き方のスキルアップを優先し、指導案を立てる余裕が個人任せであった。授業評価では、分かりやすさ・工夫・視聴覚の活用・誠実さ・双方向なやり取りで高評価であったので、今後も大事に進めていきたい。

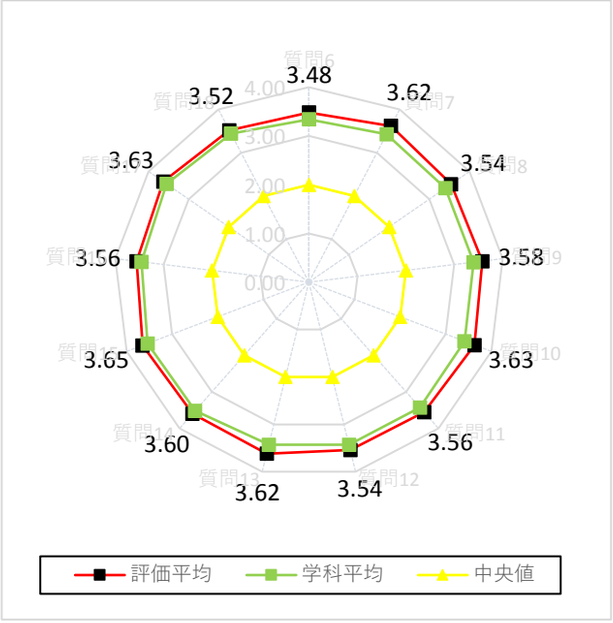
（３）次年度に向けての取り組み

個人がそれぞれの実習園で学んだ事を、テーマを設定し、さらに深めて図解作成を行っている取り組みは有効であった。図解作成に苦戦しながらも懸命に取り組む姿が見られ、個人の発表も充実し全体の学びに繋がった。学び取ったものを共有し、今後の保育の見方や実践に刺激になったものと考えている。今後とも礼儀やマナーを身につけ、謙虚な姿勢で実習に臨みつつ、日誌や指導案の基本的なことを復習していきたい。さらには、４年間で専門を学ぶ大学生ならではのスタイルで、子どもの成長発達を願い、保護者や地域に目を向けることの出来、向上心が持てるように取り組んで行きたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活	89名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

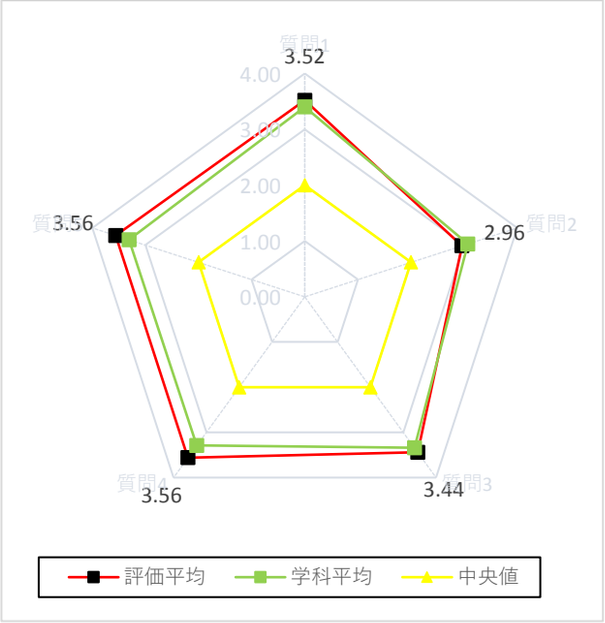
全ての項目で学科平均を上回っており，肯定的な授業評価を得られた。

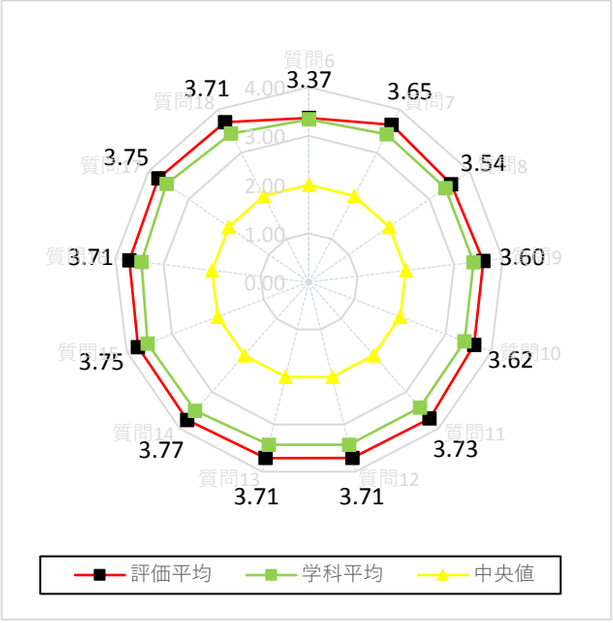
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も本年度と同様，良好な評価が得られるように，しっかりと取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	90名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

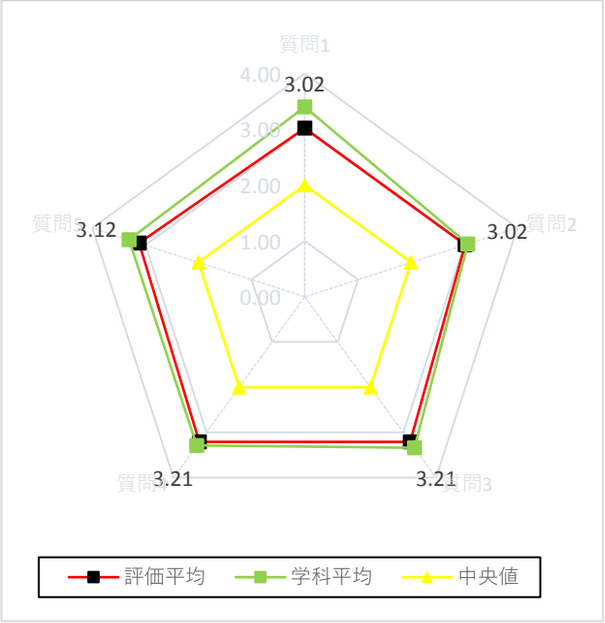
学生の各項目の自己評価は、おおむね良好であったと言える。5項目のうち質問２が、他の項目の評価に比べてやや低い結果となっている。しかし毎回、授業終了時には次週の授業内容の予告を行っているため、各自で授業計画を確認する必要が無かったことが影響しているものと思われる。授業への差しさわりは全くない状態であった。教員に対する評価も、おおむね良好であったと言える。高等学校で音楽を履修していなかった学生が半数を超えていたため、義務教育での学習内容を忘れてしまっている学生が目立った。そこで、復習を兼ねて基礎的な内容を丁寧に指導することを心掛けた。このことが質問18の総合評価の結果に表れていると思う。

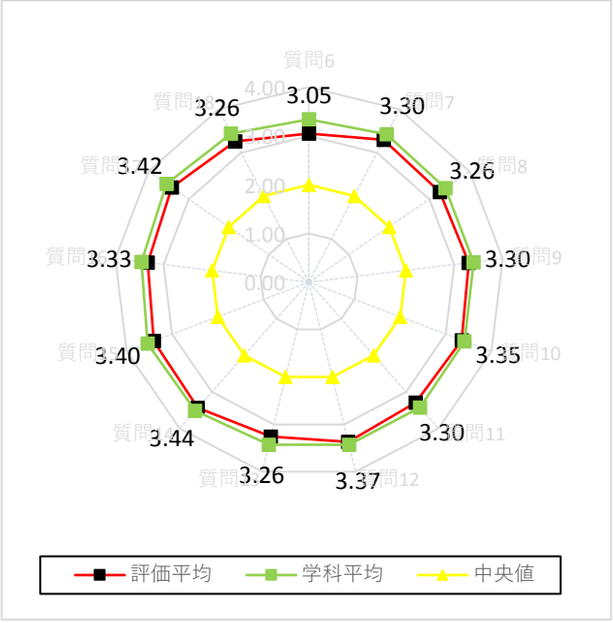
（３）次年度に向けての取り組み

音楽の授業では、保育所・幼稚園のような保育現場に加え、小学校における音楽科の指導においても必要となる楽典を取り扱う。これらの知識は、子どもたちの歌唱や器楽等の音楽活動を実践する際に必要となることから、基礎的事項から発展的内容までを反復して取り扱っていくよう工夫しつつ授業を進めて行くことを心掛けている。また、15回のうち複数回にわたって授業時間後半に習熟度確認のための課題に取組ませた。その結果、学生からは「自分の課題箇所を把握しながら受講することができた」との発言を得た。次年度も、学生の声を反映させながら、学生の実情を考慮した授業構成を工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		スクールカウンセリング と学校臨床	45名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

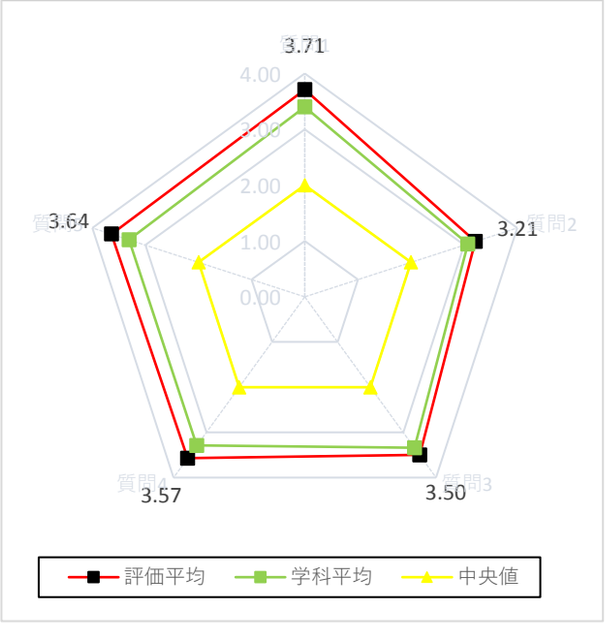
45人中43人（96%）回答。
１名低い評価「１」を付けている学生がいるようだが、具体的にどの辺りでどう感じたのか、自由記述もなく、不明。
全体的な傾向としては学科平均とほぼ同じ様な評価。
概ね良好に受け止められていると考えられる。

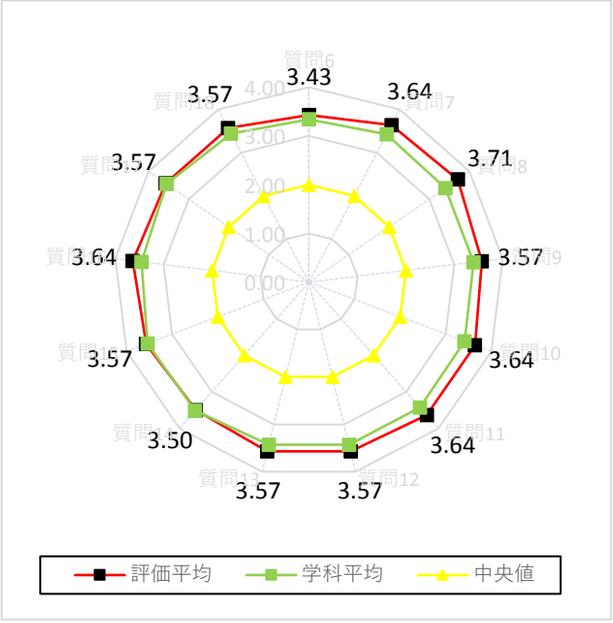
（３）次年度に向けての取り組み

従来から子ども学科の学生や、教職課程をとっている学生からは積極的に聴く姿勢が見られることが多かったが、聴講している学生はそのような学生ばかりではない。話していることはこれまで学生が経験してきた小～高校現場での話なので、もう少し自分の経験に引き寄せて興味関心を持って聞いてもらえると有難いが、よく考えてみれば不登校経験者も多いため、学校現場の話に対してはまだ直面するレディネスが育っていない学生も少なからずいるのかもしれない。しかし単位や認定心理士などのために聴講しているとすれば、学生にとっても辛い面があるのかもしれない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	67名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と自らの課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

この授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。しかしながら、一定以上の高い評価をしており、この経験が学生にすばらしい影響を与えていると考えられる。

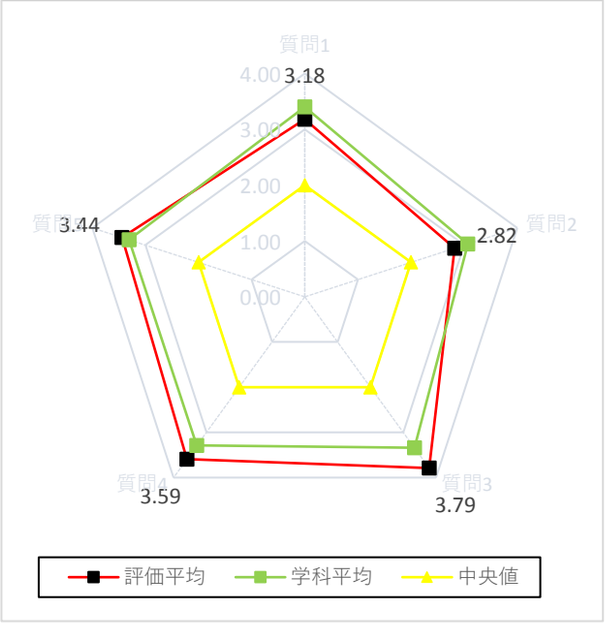
（３）次年度に向けての取り組み

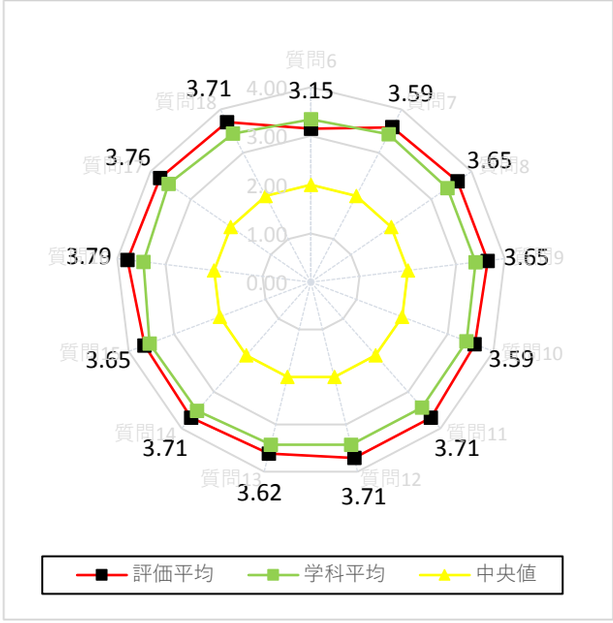
幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園教育実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園ともなお一層連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるよう努力しサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習	59名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

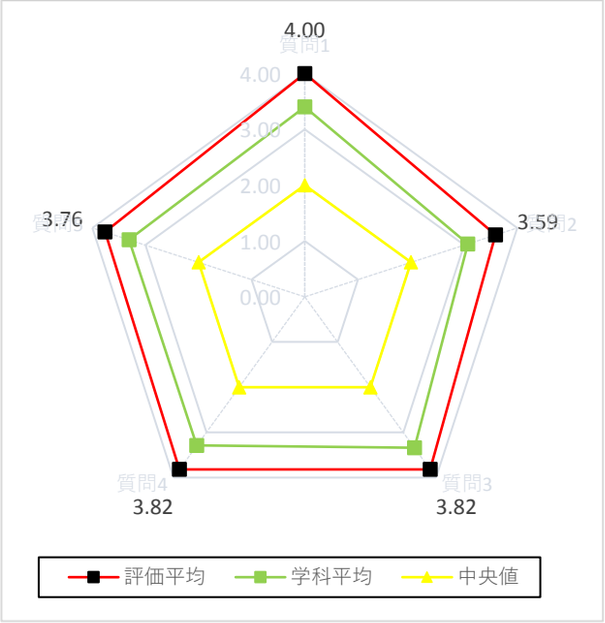
保育士、幼稚園教諭、特別支援学校教諭、施設職員、民間企業など、学生の小学校教諭に対する温度差はあるものの、問い２・６以外は概ね学科平均を上回っており、この評価は、大学での指導のみならず実習校での指導によるところが大であると考えている。

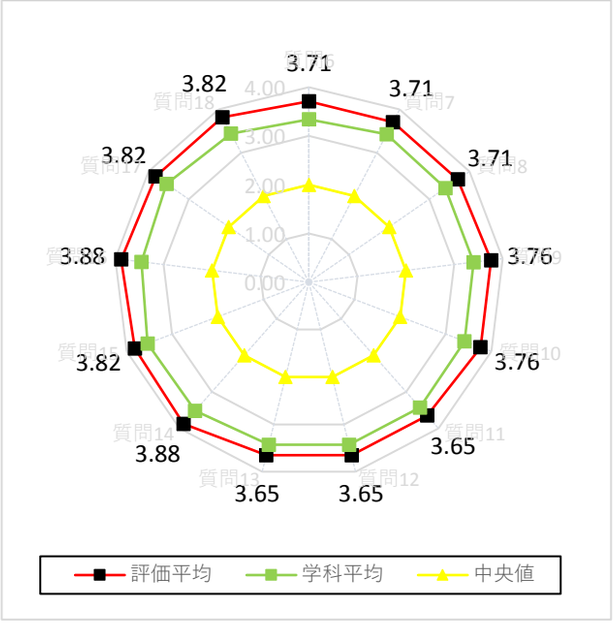
（３）次年度に向けての取り組み

早い段階から体系的・継続的、そして、組織的に小学校教員養成に取り組んでいきたい。子どもとしっかり向き合い、寄り添いながら、保育、幼児教育を踏まえ、特別支援教育の視点を持ち、粘り強く「生きる力の育成」、そして、「子どもの夢実現や課題解決」に取り組む小学校教員養成を目指していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		学校インターンシップ	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

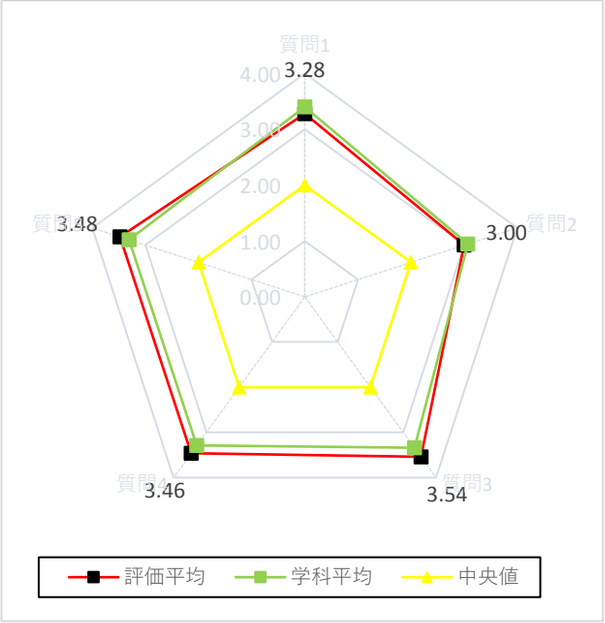
どの項目の評価も学科平均を上回っている。受講する学生は、将来の夢実現に向けた学校インターンシップの重要性を十分理解・把握しており、併せて受け入れ校の先生方の熱心な指導が、高い評価につながっていると考えている。

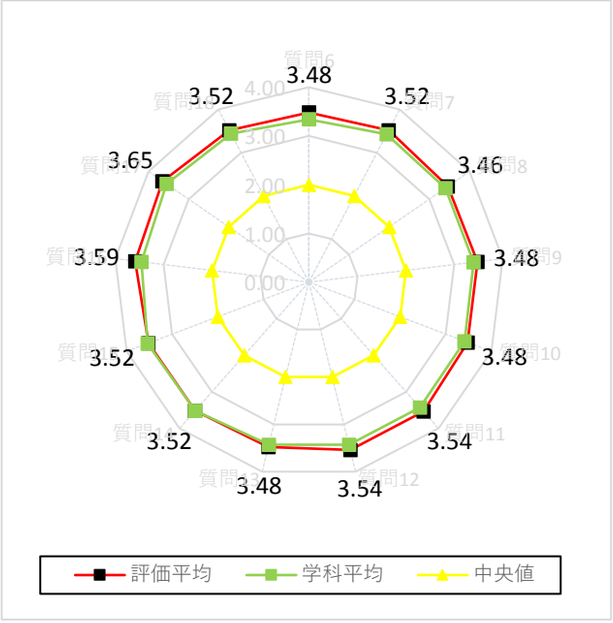
（３）次年度に向けての取り組み

受け入れ校との連携・協力をこれまで以上に図るとともに、事後指導の充実により、学生の夢実現に向けた大学での学びの充実に繋げていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	113名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

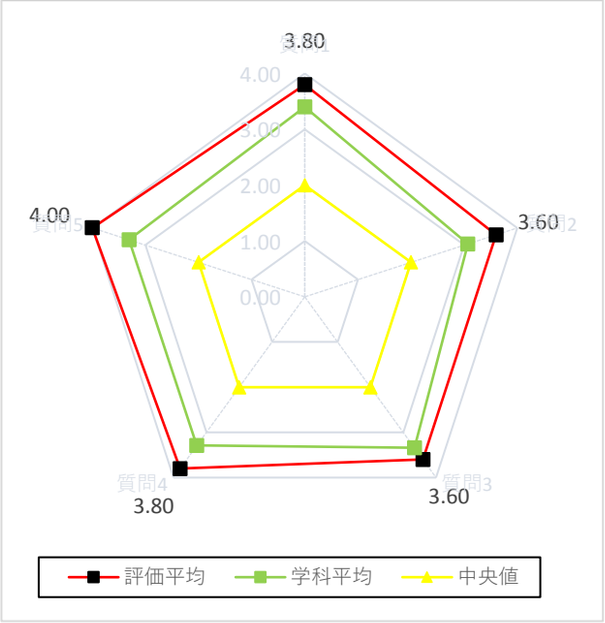
学生は、保幼、小学校、特別支援学校、施設、民間企業等希望が混在し、温度差はあるが、概ね学科平均と同じ評価となっている。授業は、実践的指導力の育成ということで、学習指導案作成とそれをもとにした模擬授業に取り組んでいる。１コマの中で２名がそれぞれ４０分ずつ模擬授業を行うが、温度差や負担感はあるものの、次年度の小学校教育実習にむけ、全員が真摯に取り組んでいると評価している。

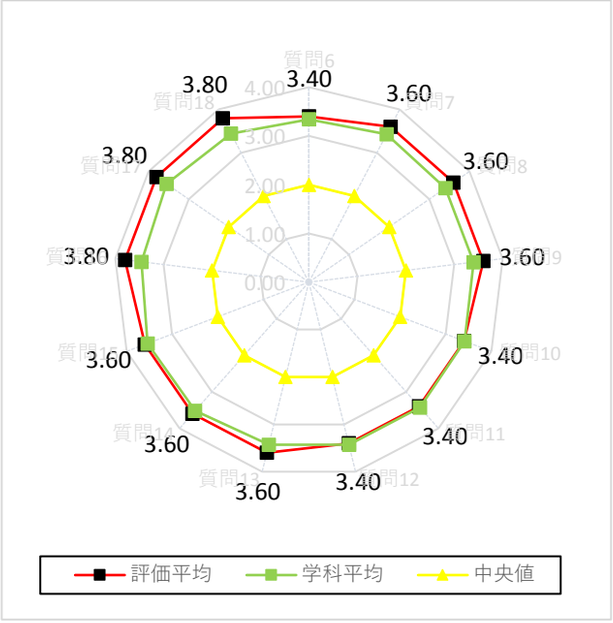
（３）次年度に向けての取り組み

保幼小特等のいずれが主であっても、小学校教育実習指導の重要性を指導することで、学生の教職に対する意識や力量などを高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

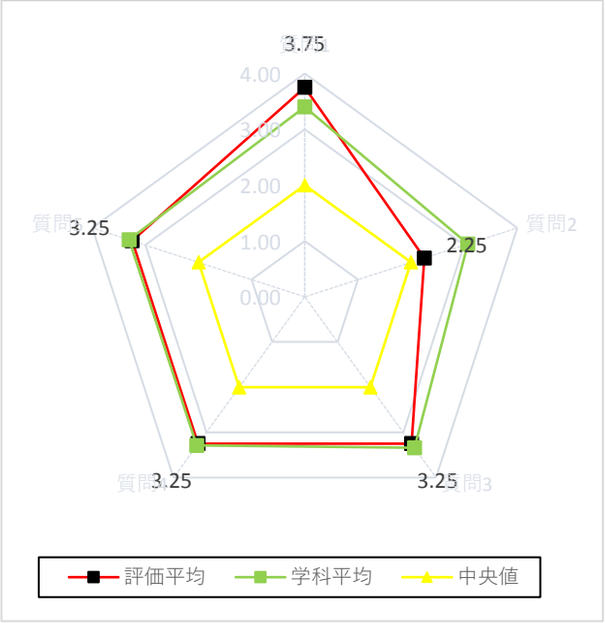
回答者は7名中5名である。高い回答率で、全般に、自己評価も授業のやり方についても大変良い評価である。卒業研究は、学生が主体的に進めていくものである。そして、学生は、非常に満足したということである。実際、学生たちは、協力的な関係の中で、良いゼミ運営をした。そのことに深く感謝をしている。

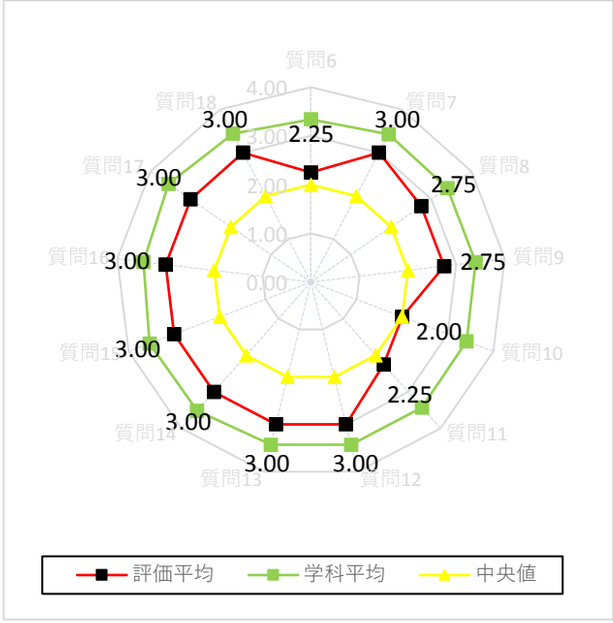
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の良い評価を糧として、力として、学生が自主的に、ある程度満足のいく成果を収められるように、今後も、学生自身と対話し、学生間のコミュニケーションを円滑にしながら、指導していくことを肝に銘じる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

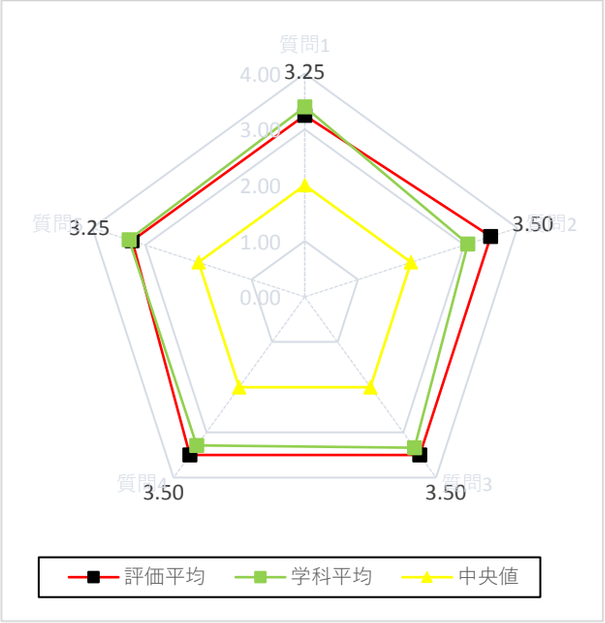
卒業研究は卒業必修の科目の一つとして位置づけられているため、必ず論文提出と発表要旨を提出し、口頭発表も行わなければならない。卒業研究に対する今年度の学生の取組は、例年になく個人差が極端に大きかったという現状を抱えていた。4年次での実習や就職活動と並行させながら計画的に卒業研究に取り組んで順調に書き進めていく学生もいたが、その一方で欠席が続き後期になっても遅々として卒業研究に取り組んでいくことができない状況の学生もいた。質問1～質問5の自己評価及び質問６～質問18の評価を見ると、これまで経験したことが無いようなばらつきのある評価となっている。この背景には、学生が抱える課題が大きく影響していると考えられる。最終的には全員が卒業論文を提出することができたものの、学生を登校させることの困難さも痛感した。全員が無事に卒業を迎えることができたことに対しては、安堵している。

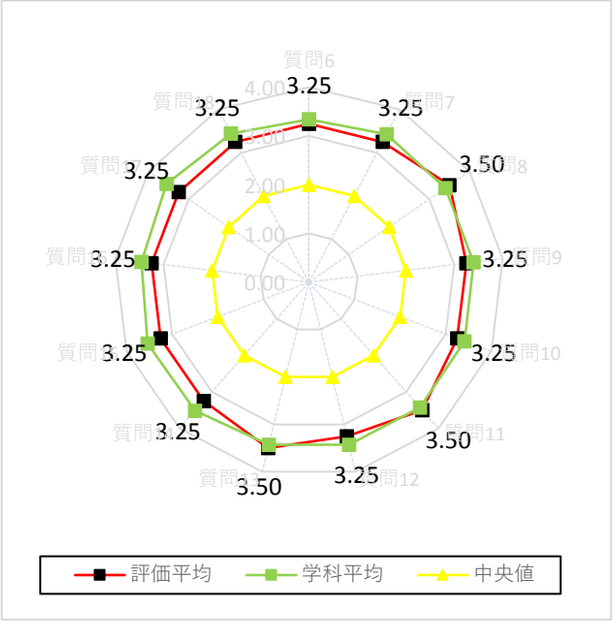
（３）次年度に向けての取り組み

卒業研究の授業では、学生一人ひとりに対して個別に時間をとって関わっていくことができる貴重な時間であると言える。卒業研究の指導は勿論のこと、それと並行して個々の学生に応じた細やかな指導にも取り組むことができる。教員のサポートを要する学生への支援のあり方を考えながら、教育に当たっていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

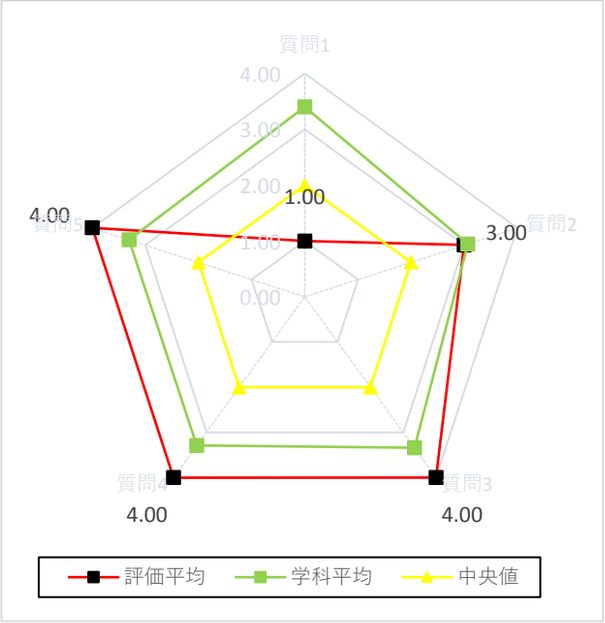
質問項目の１４から１８が学科平均より低数値となっている点は大きな反省点である。卒業研究は全体的な指導以上に個別の進捗状況に合わせた柔軟な対応が求められると考えられる。次年度以降はそこを意識して改善に取り組みたい。

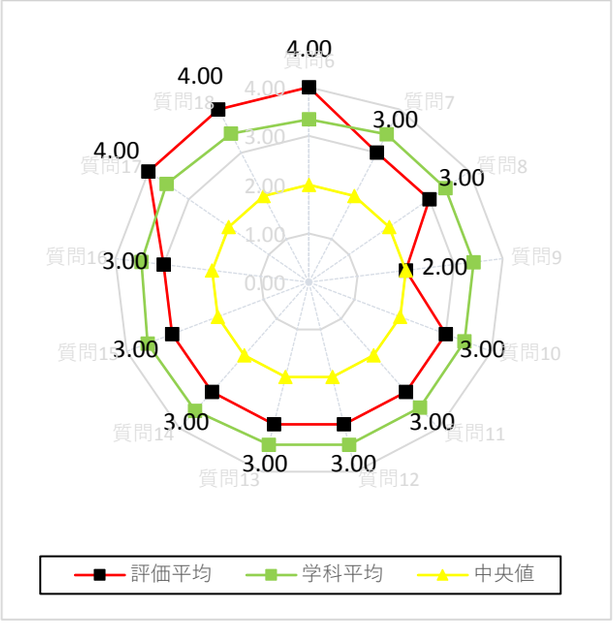
（３）次年度に向けての取り組み

全体指導以上に個別の進捗状況、及び学生のテーマや資質・能力を総合的に考慮に入れる必要がある。その上で全員に個別の指導時間を公平に設ける等で対応したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

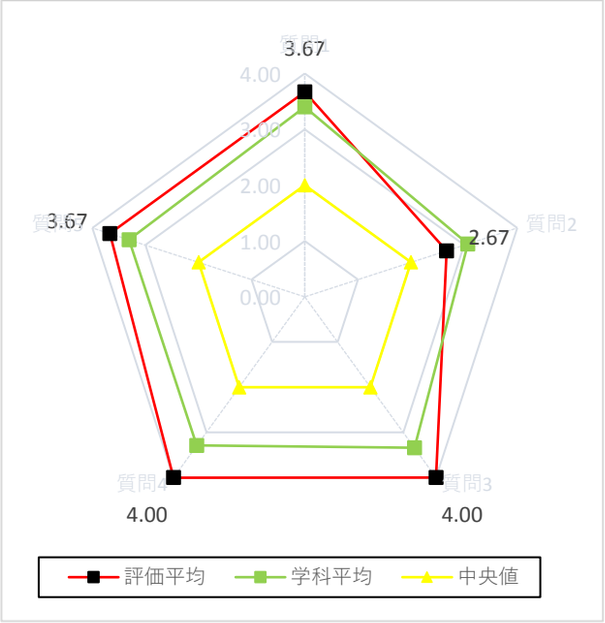
質問１の回答が極めて低いのは，「欠時オーバー」ぎりぎりの欠席の多い学生が複数名いたからである。質問17，18の回答が高かったのは，せめてもの救いである。卒業論文を提出できない学生が出そうであったが，何とか踏みとどまり，全員卒業させることができた。例年の３倍程の労力を割かざるを得なかった。悪夢のような日々であった。

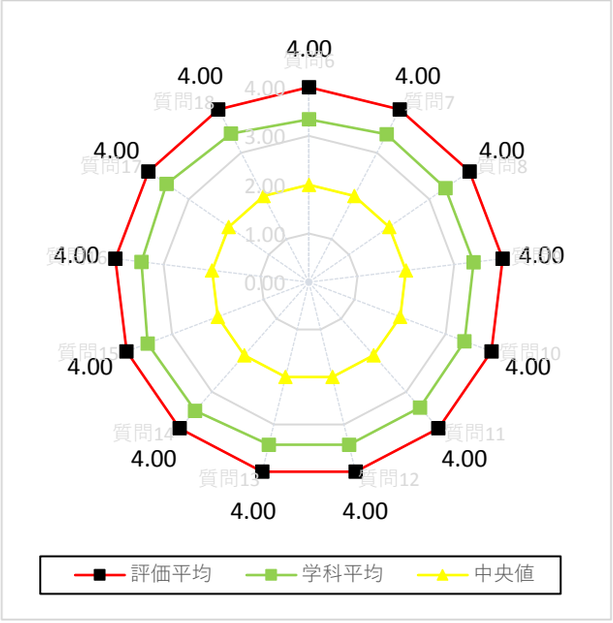
（３）次年度に向けての取り組み

本年度は，ゼミ生が全員男子学生であり，大半が「よく欠席する学生」であり，ゼミとしての一体感や士気を高めることが最後までできなかった。次年度は男女比も均等にして頂いた。コツコツ真面目に取り組む女子学生の存在がゼミにとっては大きいということを思い知らされた次第である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、身近な内容で興味や関心をもった研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、5名という少人数であったものの、その取り組みの姿勢や進度に大きな個人差が見られた。特に1名、どうしてもなかなか取り組もうとしない学生がおり、意思の疎通を図ることに苦慮した。

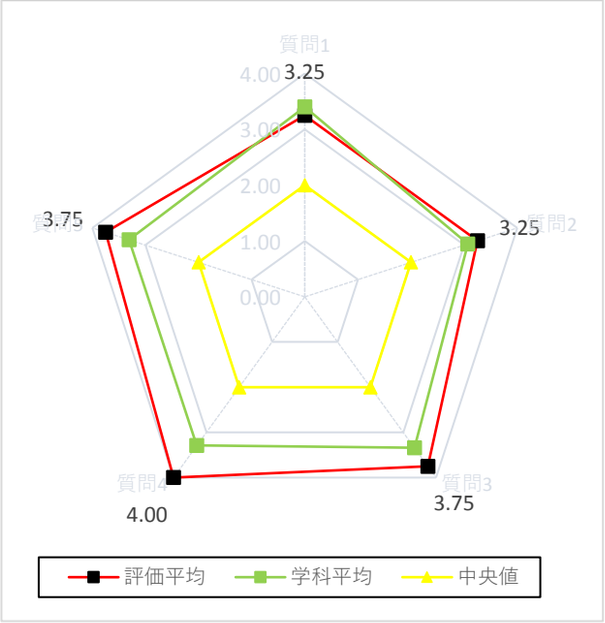
授業評価については、すべての項目について非常に高い評価を得ている。

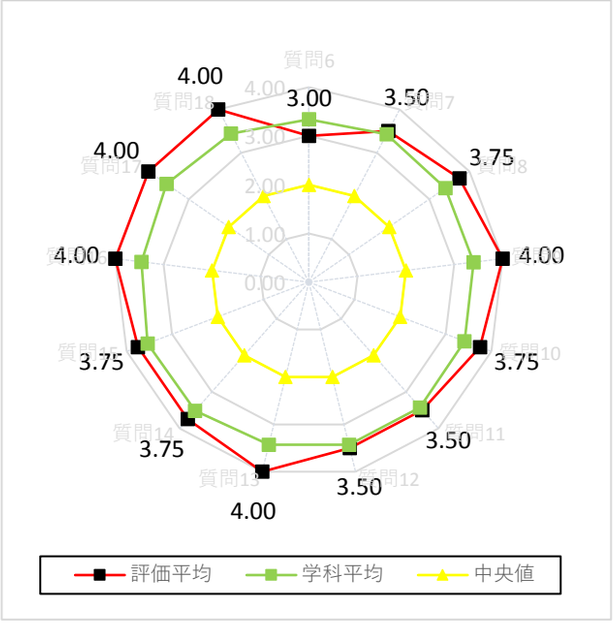
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も概ね同じような形式で進めていく予定である。3年生の段階からすでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるようしっかりとしたサポートをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

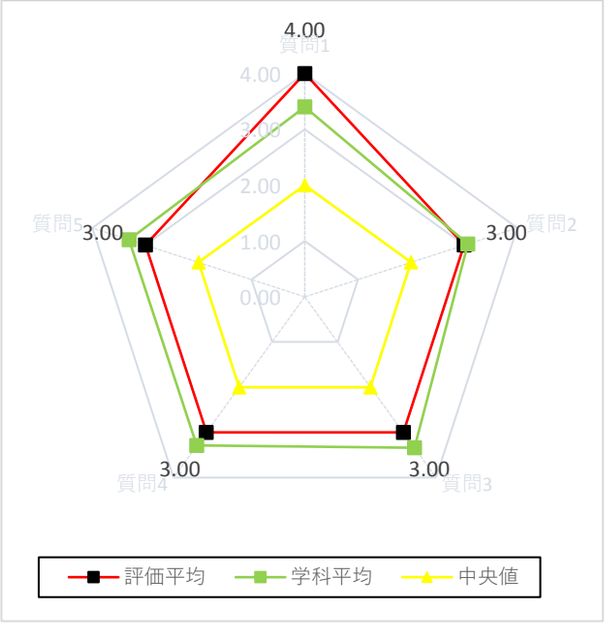
本科目受講学生の回答率は、9名中4名で、回答率44%と約半数であった。本科目への総合評価は3.69と高評価であり、学生の総合自己評価は3.75、授業に関する評価は4.00と共に高評価であった。本授業は、学生の興味関心の深い課題をもとに、研究を進めていった。また、その方法について、教員側で計画的に進め、学生は見通しを立てながら、進めることができたため、学びに対する充実感を持つことができたと考える。

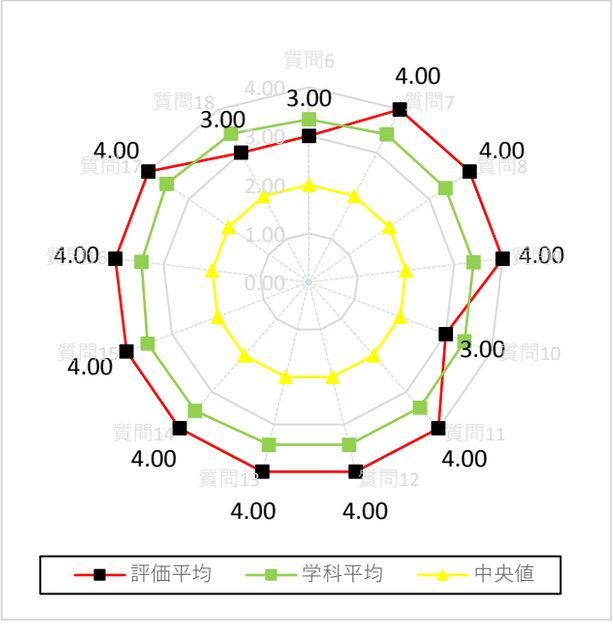
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、学生一人一人の興味関心と作業の進捗状況を十分に把握し、学生にとっての学び（研究）に対する達成感がより充実するように進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

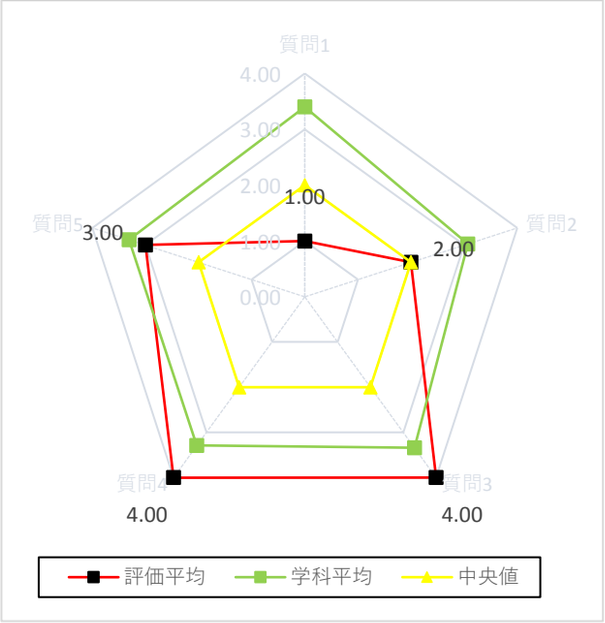
回答者僅少のため記述を省略する。

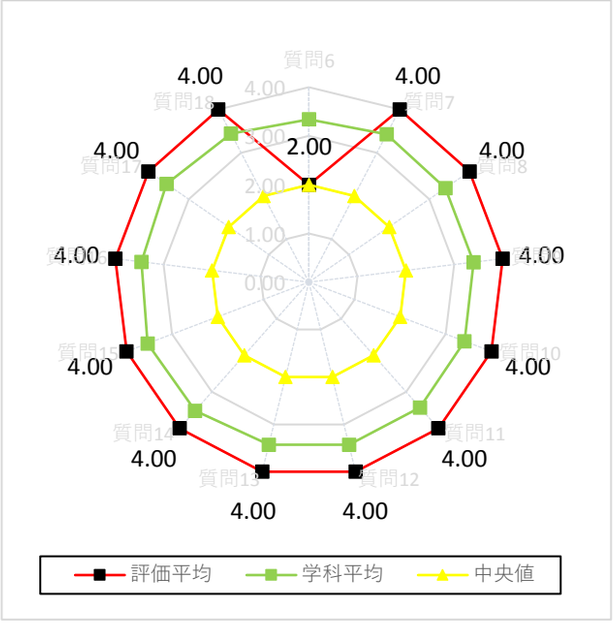
（３）次年度に向けての取り組み

回答者僅少のため記述を省略する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

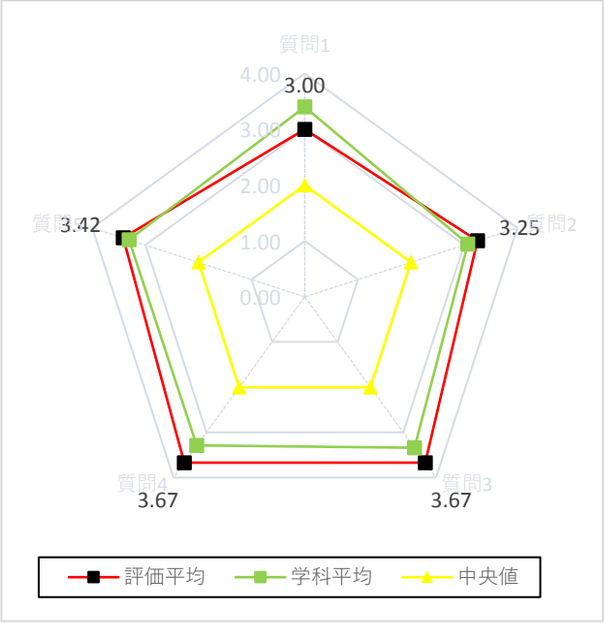
４年間の集大成であるという意識を昨年度よりも強く持って授業に臨むことができた。卒業論文の書き方、教育実習への臨み方、教員採用試験対策、これからの教師や学校の在り方、学校現場の現状など、自分自身の経験を基にした実践や思いについても授業の中で扱ってきた。こうしたことも学生にとっては勉強になったのではないかと自負している。しかし、学生の中には欠席が多く、計画的に取り組むことのできなかった者も少なくなかった。見通しを持って学んでいくことへの認識がやや不足していた。

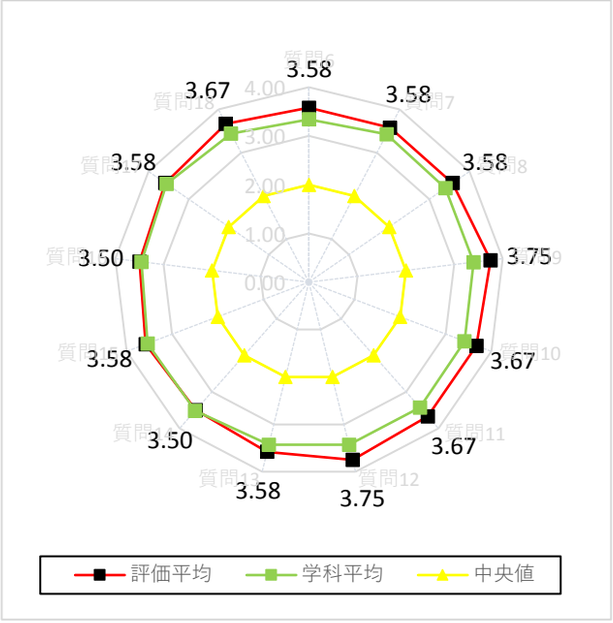
（３）次年度に向けての取り組み

次年度の受講生は今年度よりも２名少ない５名である。今年度の取り組みの成果を踏まえつつ、一層、学生個々の実態や思いをしっかりとくみ取り、指導に当たっていきたい。とりわけ、学生間及び、教師と学生間のコミュニケーションを密にした取り組みを行っていきたい。また、年間の見通しを常に持ち、「何を」「いつまでに」「どのようにするか」という目標を持った学びができるよう声がけや支援を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育（応用）	32名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

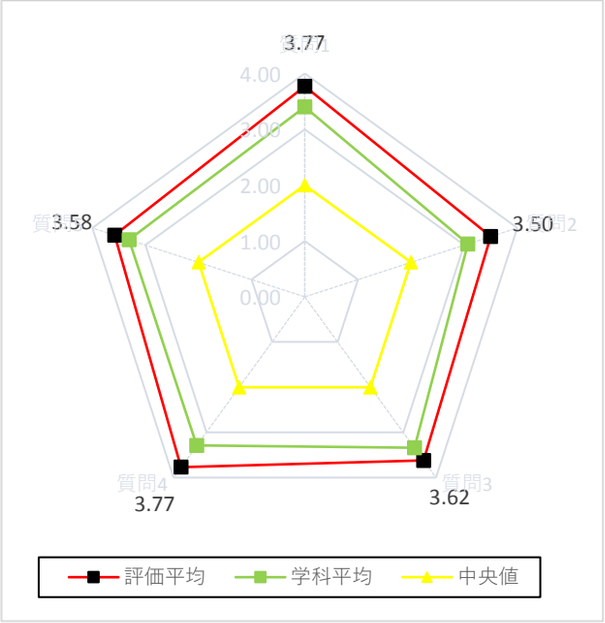
全ての項目で学科平均以上の数値である。質問１５が少し低いところであるが、実技である以上ある程度関わりに差が出る部分があるが次年度以降の反省としたい。

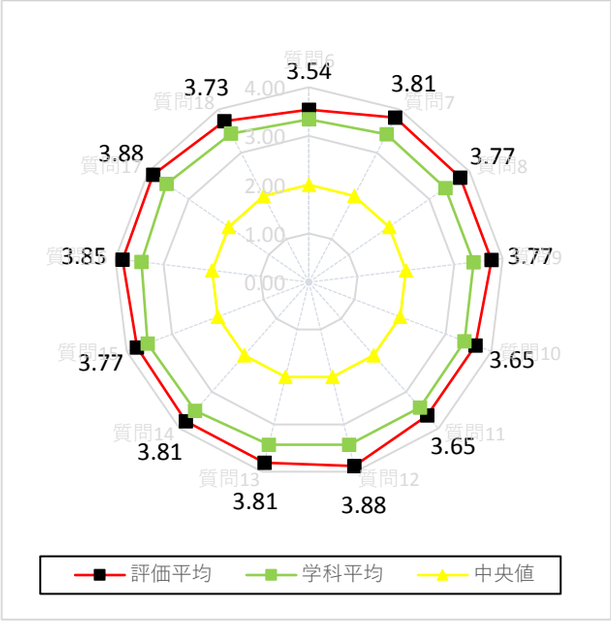
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けては学生への接し方に対して特に留意する。実技であるができるだけ全ての学生に不満ない関わり方をしたい。具体的にはコメントを記入できる学習カードの活用等を検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	66名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

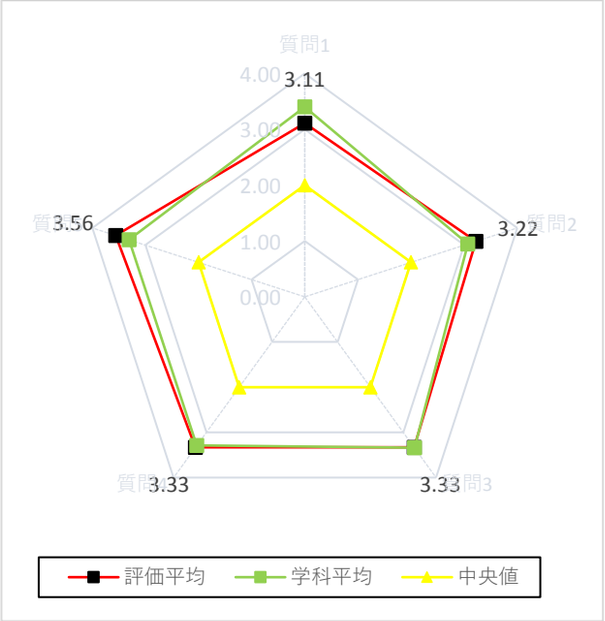
学生の自己評価は全項目とも学年平均を上回っていたことから、学生自身の自己評価は良好であったと言える。特に質問１の出席状況に関する項目と、質問4の授業を理解するための各自の取り組みを工夫したという点での評価が高かった。この授業では、保育現場で行う音楽表現活動の実践的内容を取り上げていく。音楽表現領域の実践力向上を図るためには反復して取り組む必要があるため、学生の出席状況が良好であるということは学生たちの実技面での力量を向上させていくうえでも大切なことである。より豊かな音楽表現を目指して工夫してみることをとおして、学生たちはそれらの過程で様々な気付きを得ていた。このことが、質問4の補油かに表れていると思う。教員に対する評価も、全項目とも学科平均を上回る結果となった。特に、質問12～14、?・17の評価が高かった。これらに対する学生の満足度の高さが、質問18の総合評価にも表れていると思う。

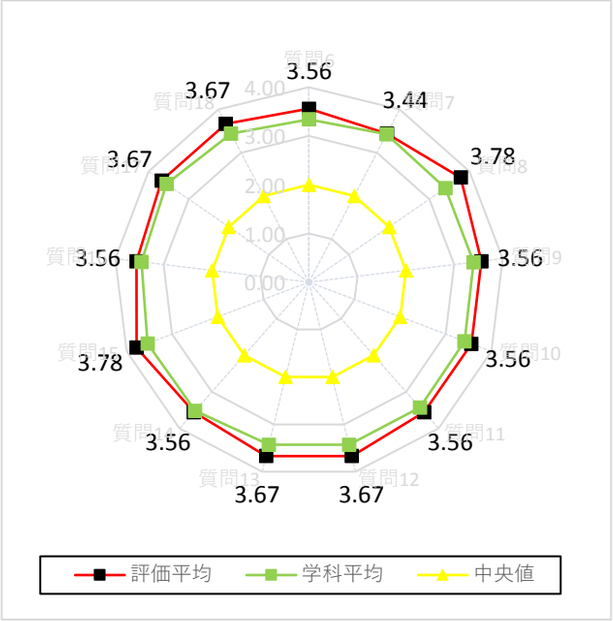
（３）次年度に向けての取り組み

学生の中には、音楽領域の科目に対する苦手意識を持っている者が少なくない。音楽表現指導法の授業をとおして、学生自身が音楽で表現することの楽しさや心地よさを身を持って味わいつつ、就学前の子どもたちとの音楽活動の実践上の留意点を理解していくことができるように導いていきたい。そのためには個々の学生の力量を把握する必要がある。必要となる適切な助言を行えるよう、個々の学生に向けた指導の充実を図っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科演習	39名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

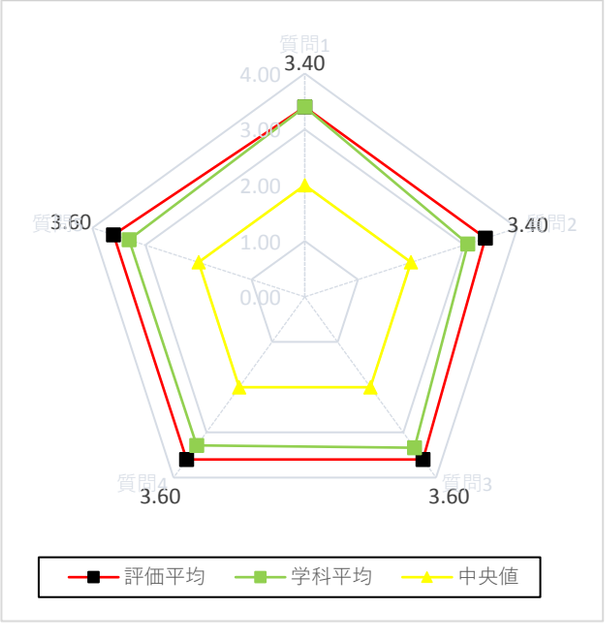
昨年度24名の受講者が今年度は39名に増えた。このことは授業者として嬉しい限りであるし、国語を教えることがいかに難しいものかという認識を学生自身が抱いていることの表れではないかと考える。本科目は今年度も、国語科指導法の発展として演習主体の授業に心掛けてきた。教材研究の具体的な方法、教材教具の作成、学習指導案の書き方、効果的な発問や板書の仕方、評価の具体的な方法など、実践に役立つ指導技術の獲得に力を入れてきた。授業を展開していく中で、自身の経験や学校現場の動向、具体的な授業例などを基にした授業展開であったので、学生の意欲がとても高まったように思う。

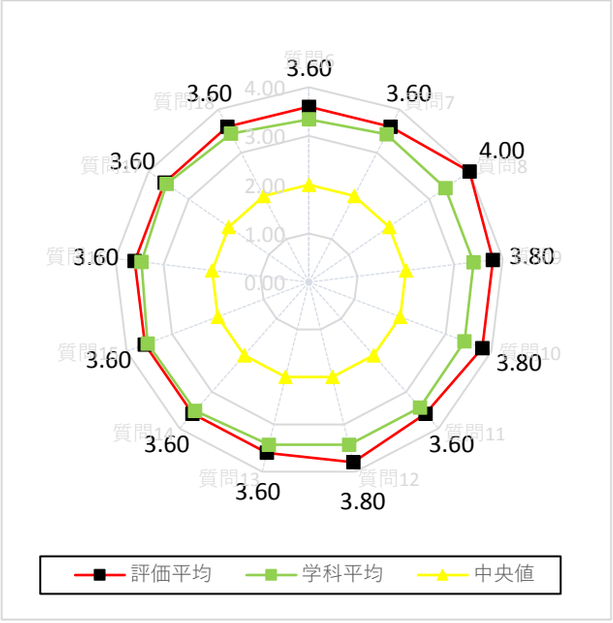
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も今年度のスタンスをもって授業に臨んでいきたい。今年度は全体的に学習意欲は高まってきたものの、受講者個々を見るとその差は大きい。基本は授業を欠席せず、学びをつないでいくことである。授業者である私自身も「学びをつないでいく」「授業をつないでいく」ことを忘れずに努めていきたい。本科目は「演習」なので、学習指導案の作成や教材研究を核にして、受講者が思いや考えを出し合う授業の展開をしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科演習	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

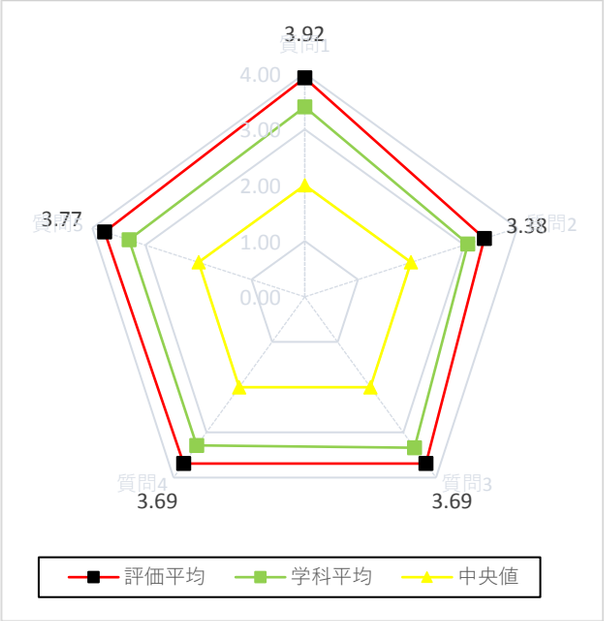
どの評価項目も学科平均と同じか、それを上回っており、授業の成果が表れていると考えている。授業では、社会科の学習指導案作成、学生一人一人による模擬授業、模擬授業後の反省会、個別の事後指導を行っており、４年時の小学校教育実習に直接つながるものとして、学生のモチベーションは高く、模擬授業を行う学生はもちろんのこと、児童役の学生たちも真摯に取り組んでいる。

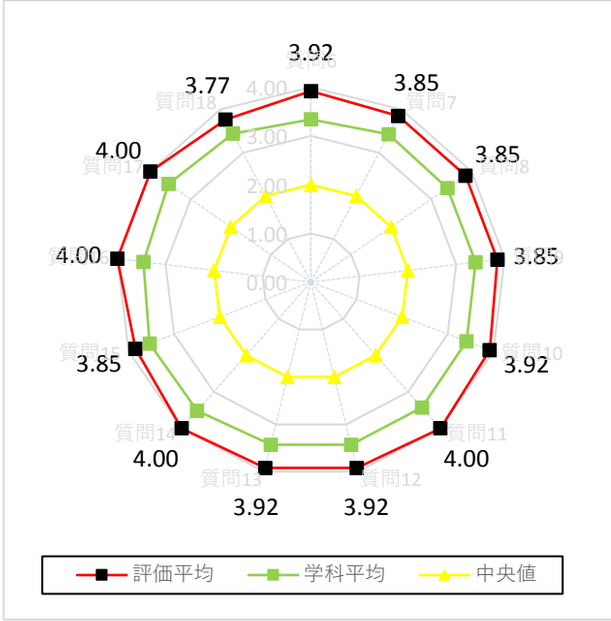
（３）次年度に向けての取り組み

学生の負担を考慮して、「社会科演習」と「小学校教育実習指導」の模擬授業が重複・前後しないように、学生の授業計画を把握し、時期をずらすなどが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	23名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

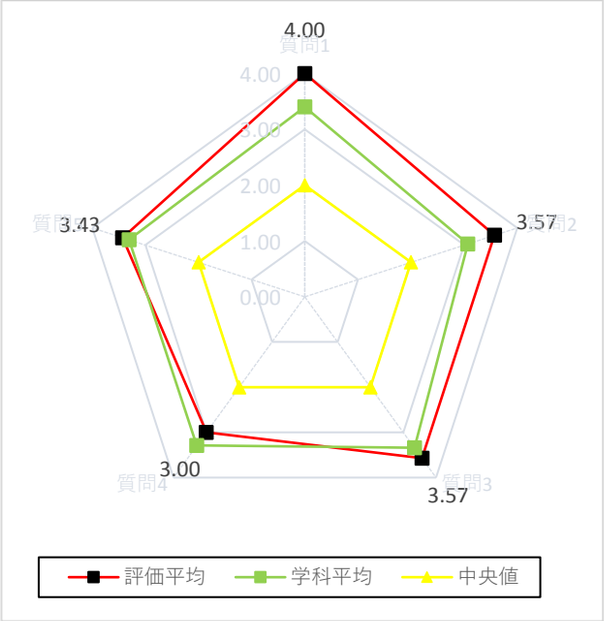
「総合的な学習の時間」の指導方法を学ぶということを明確にし、「地域の学習素材」の教材化に向け、文献研究とフィールドワーク、そして、学習指導案作成に取り組んだことで、学生の興味関心と学習意欲が向上し、どの項目も学科平均を上回ることができたと考えている。

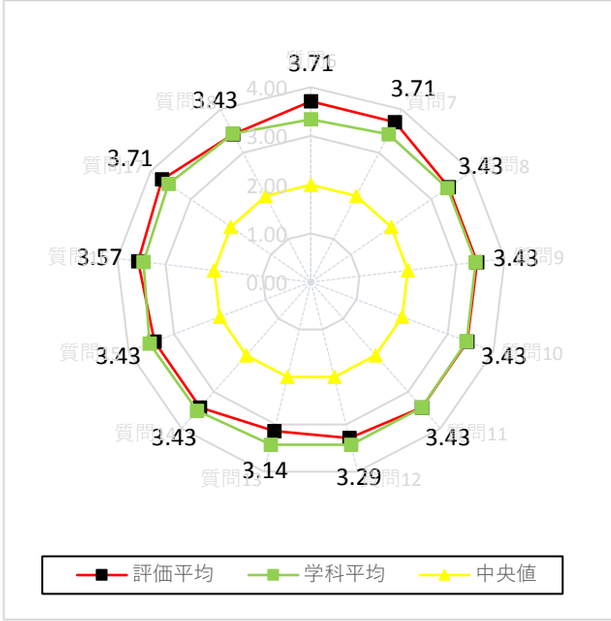
（３）次年度に向けての取り組み

「総合的な学習の時間」の指導方法を学ぶために、文献研究やフィールドワーク、学習指導案作成などを取り入れた「地域の教材化」に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

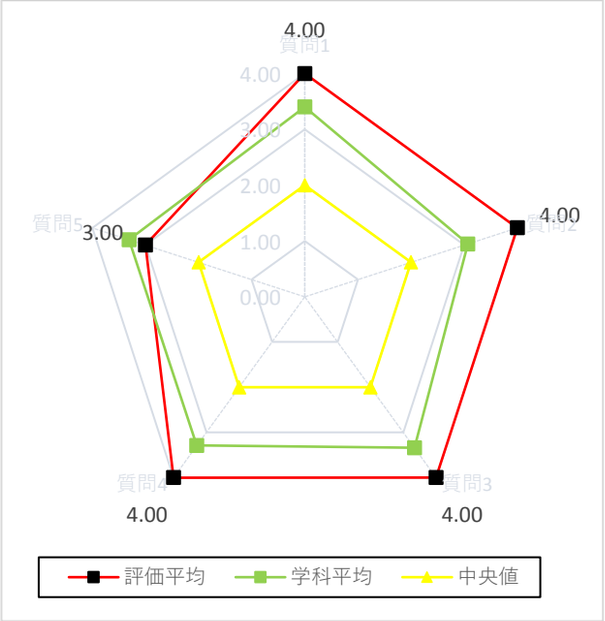
回答者は25名中7名である。回答率は高くないが、回答内容は非常に良い。1の評価は皆無であり、2の評価もわずかに散見されるだけである。全般に、学生の自己評価も高く、授業のやり方の評価も高い。学生の主体的な参加が重要であるが、出席率も良く、活動にもよく参加したので、とても楽しかったようであり、満足度が高くなったと言える。学生自身の授業への貢献力に感謝する。

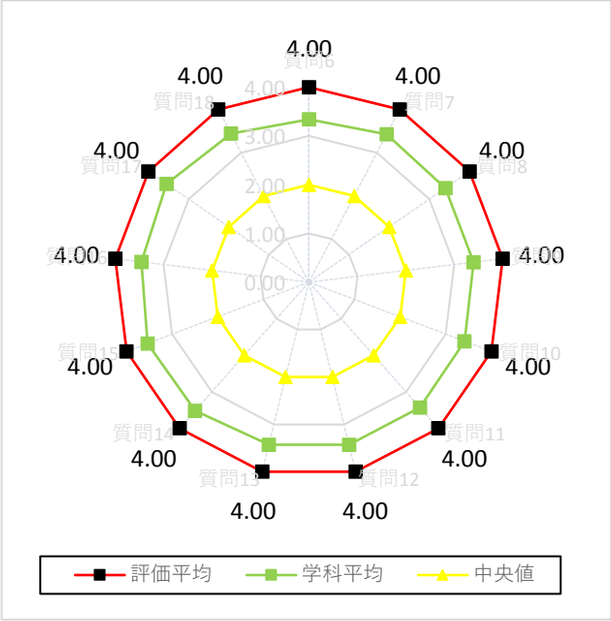
（３）次年度に向けての取り組み

この科目の授業は本年度で終了する。しかし、この授業で得た成果を糧として、この授業の成果を他の授業でも活かしていきたい。すなわち、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、授業のやり方を工夫・改善していくことの大切なことを肝に銘じて努力したい。また、どんな授業でも、学生との話し合いを大切にし、学生との信頼関係の構築とともに、楽しい授業を目指していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	21名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

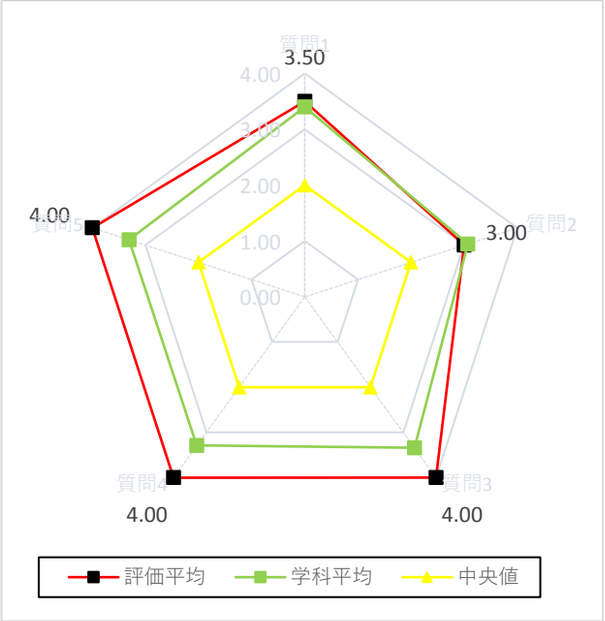
学生自身の自己評価（「質問５」）以外は，学科平均を大きく超える良好な評価であった。今後の励みとしたい。

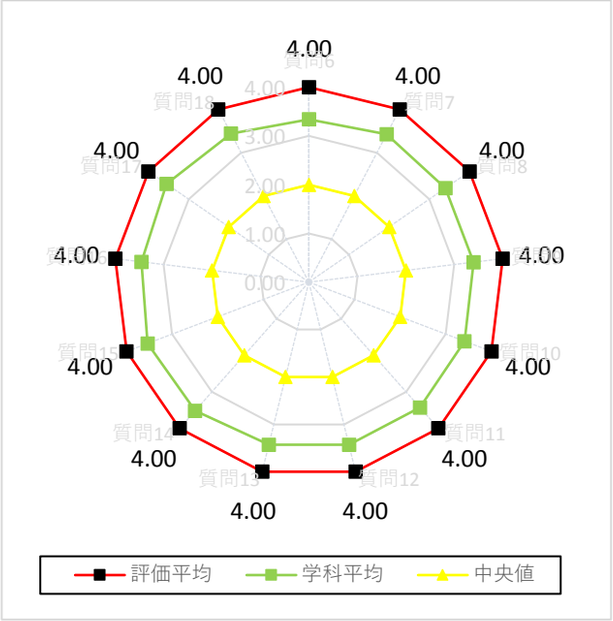
（３）次年度に向けての取り組み

本年度で，閉講の科目である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

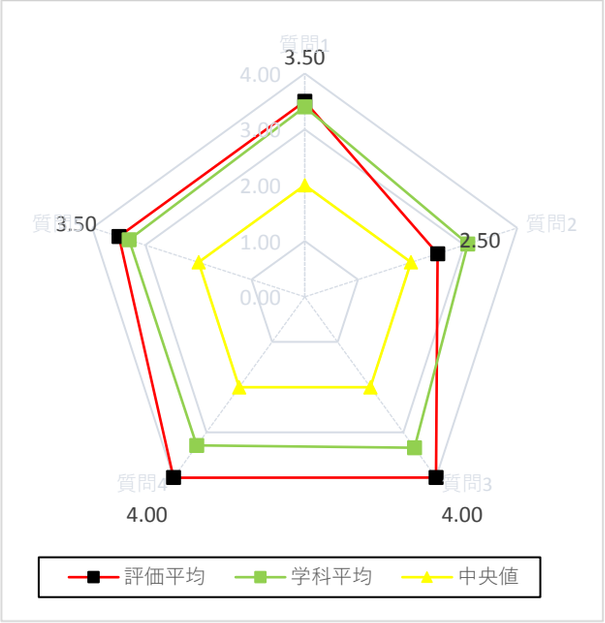
学科平均を下回った問２「シラバス活用」の評価については、年度初めの授業計画の説明、その後の進度・内容などの確認が十分でなかったことによるものと考えている。

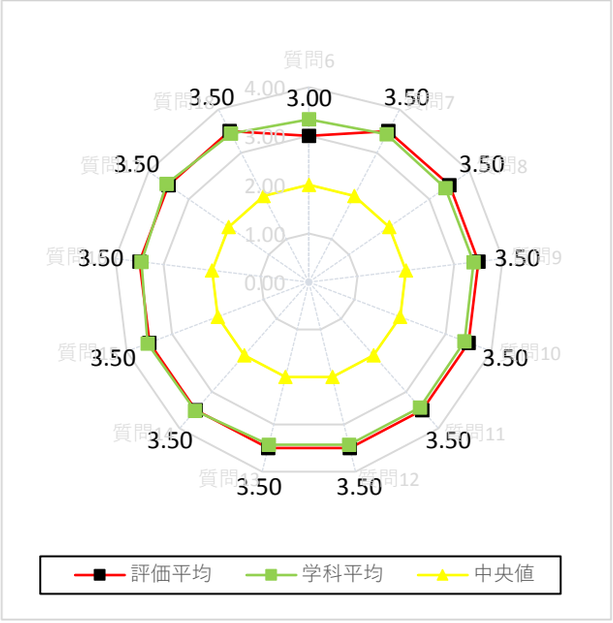
（３）次年度に向けての取り組み

問い２以外は、学科平均を上回っており、「子ども学演習」と次年度の「卒業研究」に対する目的意識を高めるとともに、見通しをもって意欲的に大学での学びに取り組むように授業の工夫改善に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。「子ども学演習」については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成し、中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要があった。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

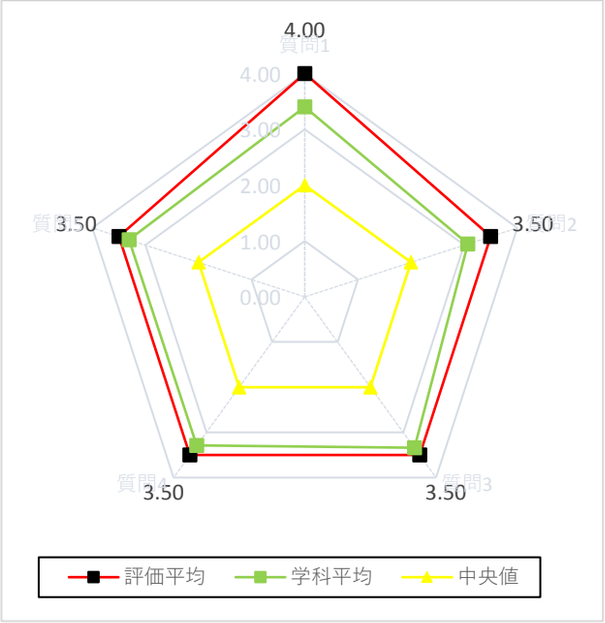
（３）次年度に向けての取り組み

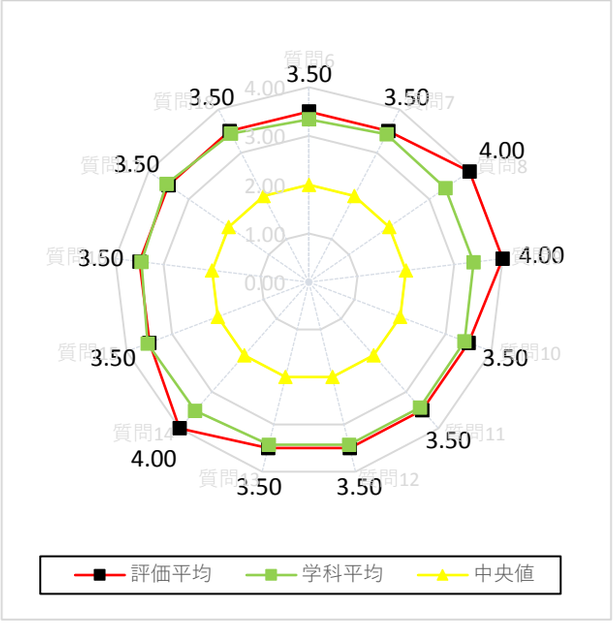
一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究にすすむことができるようしっかりと指導をしていきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるようにアクティブラーニング的な授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	15名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

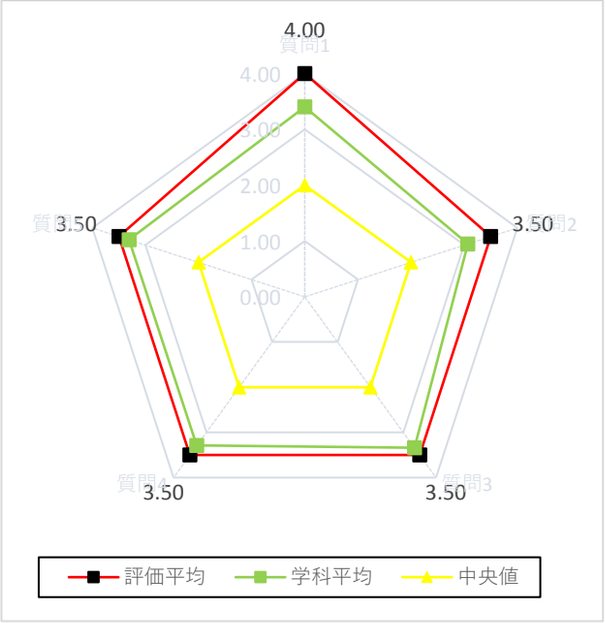
回答者は7名中2名である。回答率が低い。しかし、自己評価も授業のやり方も、3または4で、非常に良い評価である。本演習の授業は、学生の主体的な取り組みで成り立っている。評価項目が演習の評価に適するとは言えないが、制度上、評価回答が増えるように働きかけたい。

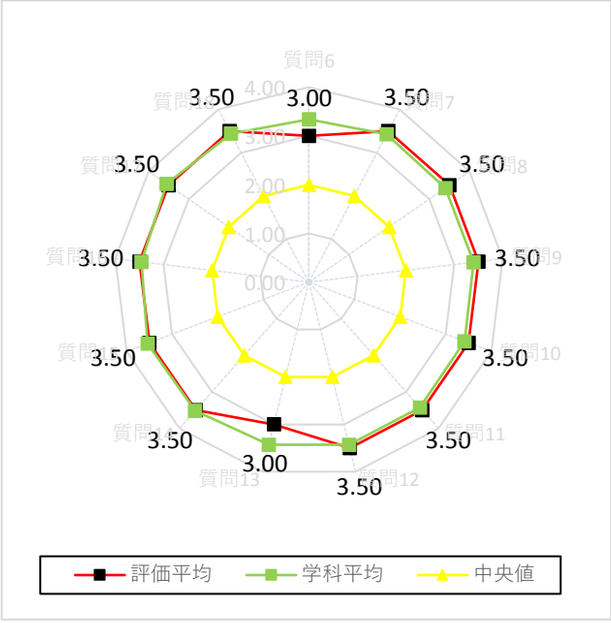
（３）次年度に向けての取り組み

引き続き、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、学生との信頼関係を打ち立てるように努力する。また、学生とともに授業の方法や進め方を工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

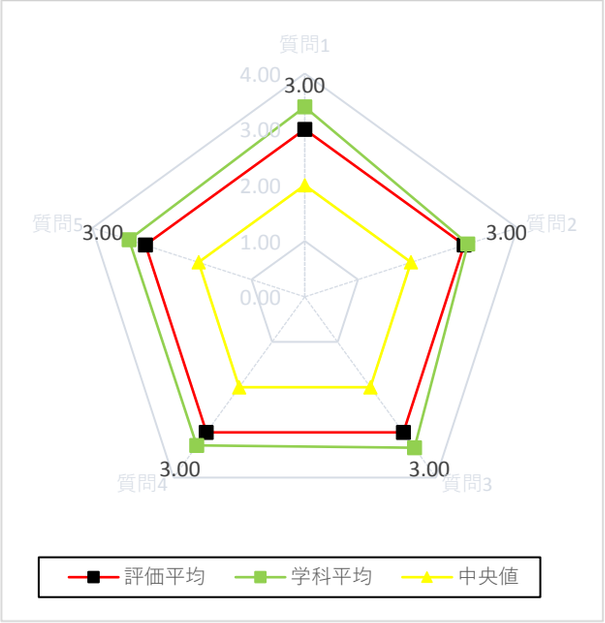
・アンケートの結果については、どの項目も評価平均がおよそ3.5であったが、質問6及び質問13は、ともに評価平均がおよそ3であった。
・全体的には、良好な評価結果であったが、シラバスの理解を図ることや、授業進度の適切さについて、不十分な点があったと思われる。
・学外でのフィールドワークにおいて、フィールドワーク先との日程調整によって、授業スケジュールの変更を行ったことが授業進度の面での評価に影響を及ぼした可能性がある。

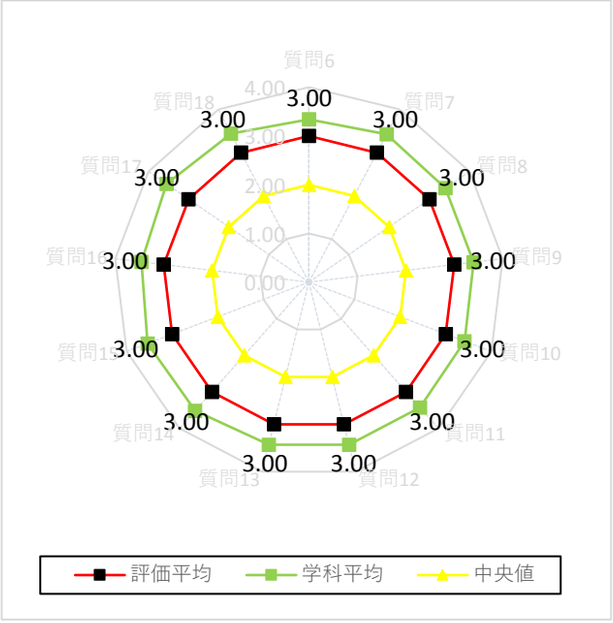
（３）次年度に向けての取り組み

・ゼミナール科目であり、授業のスケジュールや取り扱う内容について、柔軟に対応していく方針に変わりはないが、シラバスをよく説明し、学生が見通しをもって学習に取り組めるよう、一層工夫していく。
・学生の学びのニーズを常にゼミ全体で共有することにより、授業の目的や学生個人の目標を確認し、主体的な学修につなげるようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

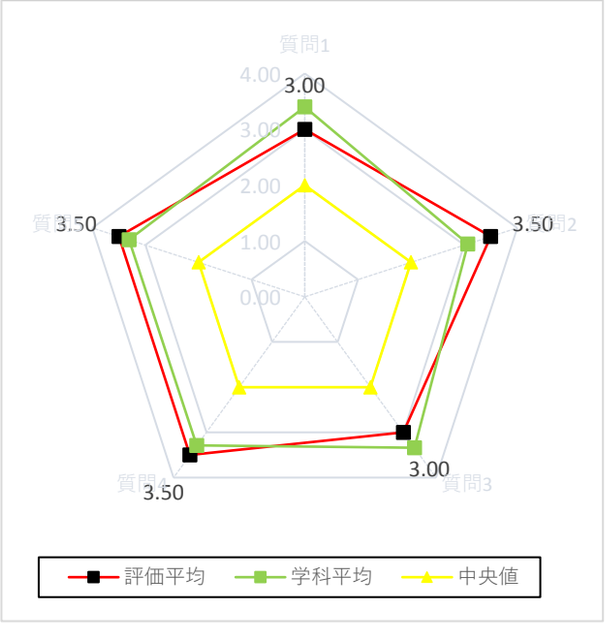
本科目受講学生の回答率は、4名中1名で、回答率25%で大変低かった。本科目への総合評価は3.00であり、学生の総合自己評価は3.00、授業に関する評価は3.00であった。1名についてではあるが、自身の学びと授業内容について、充実していたことは窺える。

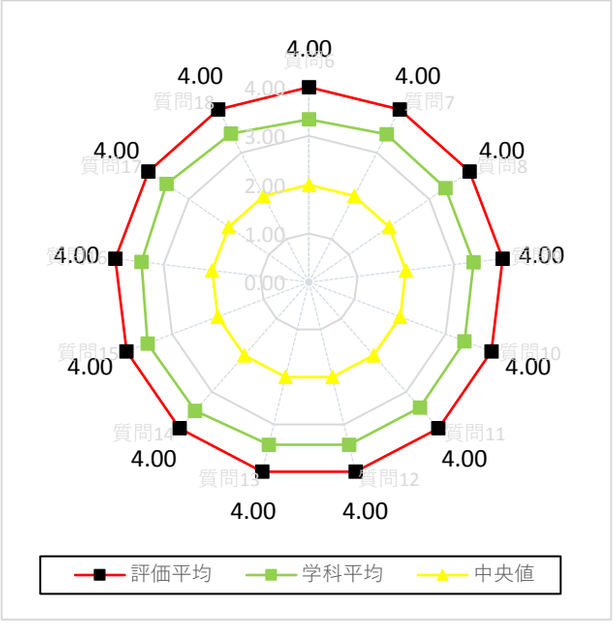
（３）次年度に向けての取り組み

来年度は、学生全員からの回答が得られるように、授業時に計画的な投げかけを、さらに意識を高く持ち、授業に取り組んでいきたい。授業については、今年度同様、学生自身の興味関心を大切にし、学びが深まるように進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

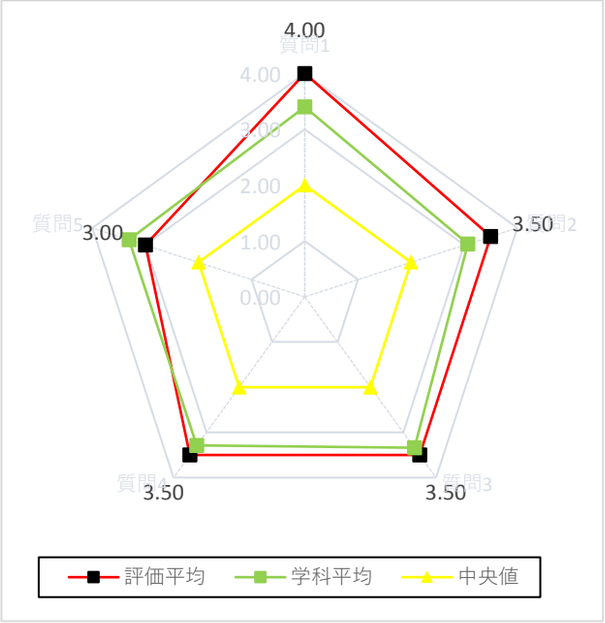
「質問１」「質問３」の評価結果が，学科平均よりも低かった。これは，出席面と授業への取組度に関する項目であった。他の授業に比べ，特に出席面での気の緩み等が見られたと思われる。授業への取組度に関しては，フィールドワークが多く座学が少なかったため，そのような回答傾向になったものと推察される。

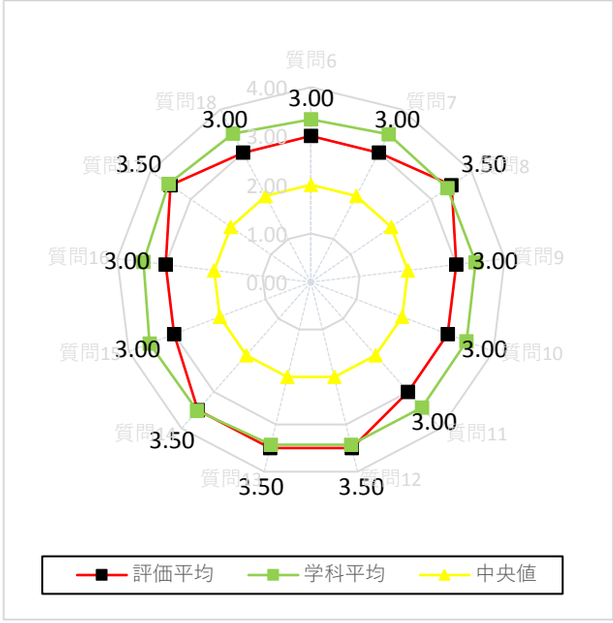
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においては，学生の意識をより高めさせ，「質問１」「質問３」の評価結果を向上させることを目指したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

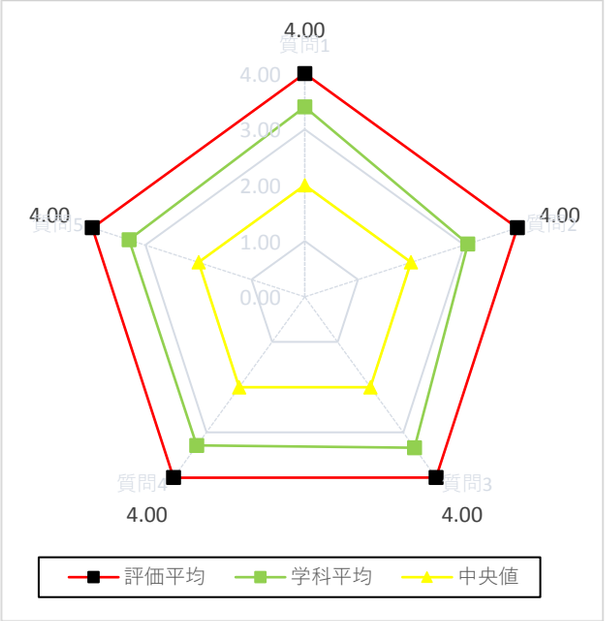
回答率35%（2/7）、総合評価3.28
自由記述：なし
本授業は、子どもに関する様々な事象に対して関心を持ち、自分自身の興味のあるテーマを決め、問題提起しその課題の解決に向けた情報収集や調査、観察、実験、考察を行うことができることをねらいとする。また、子どもの発達や障害のある子どもの理解と支援をテーマに、体験的学習を行う地域志向型科目である。
評価は4または3のみであり、1と2の評価はなかった。回答率の低さが課題である。

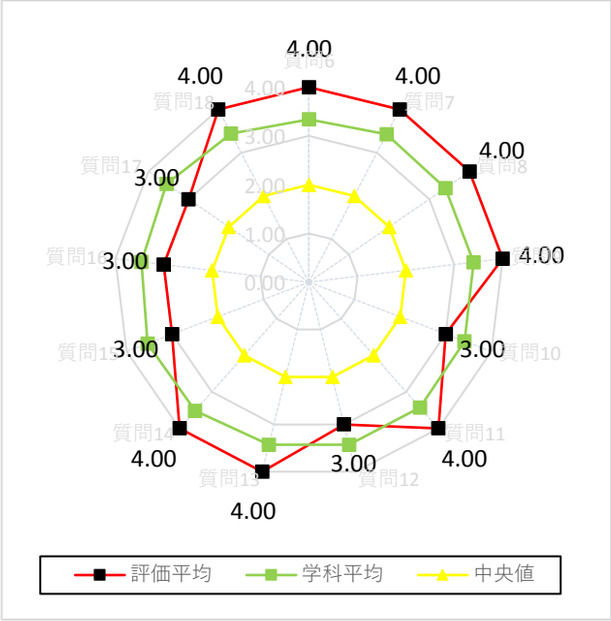
（３）次年度に向けての取り組み

回答者が2名のみであり、回答率の低さが課題である。授業評価の意図や意義について伝え、授業改善に生かすことができるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	4名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

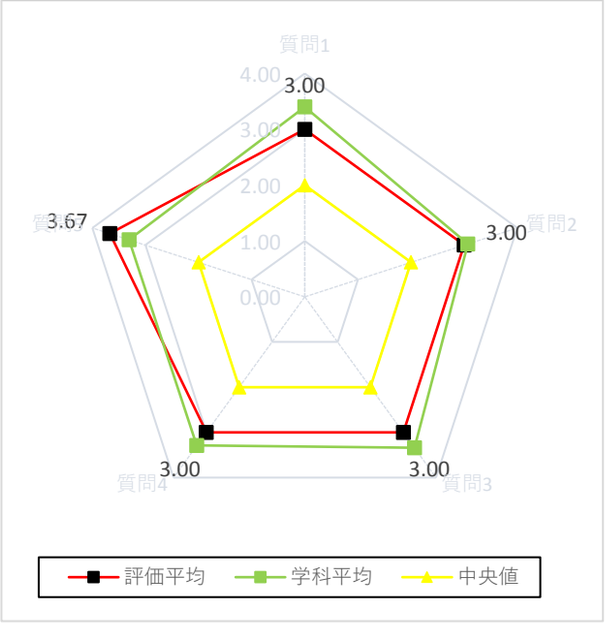
・４名中１名のみの回答であるため、評価はできない。
・子ども学演習で、ゼミ別に振り分けられ、学生が希望のゼミに入れない状況であり、モチベーションが高まらないのではないだろうか。
・実際に「障害のある方の余暇活動支援（かえでの会）」を２回企画したが、障害のある方の楽しめる活動を企画しようと意欲的に取り組んでいた。その中で、かかわり方や支援の在り方について理解を深めることができた。このような体験活動は大変有意義であった。

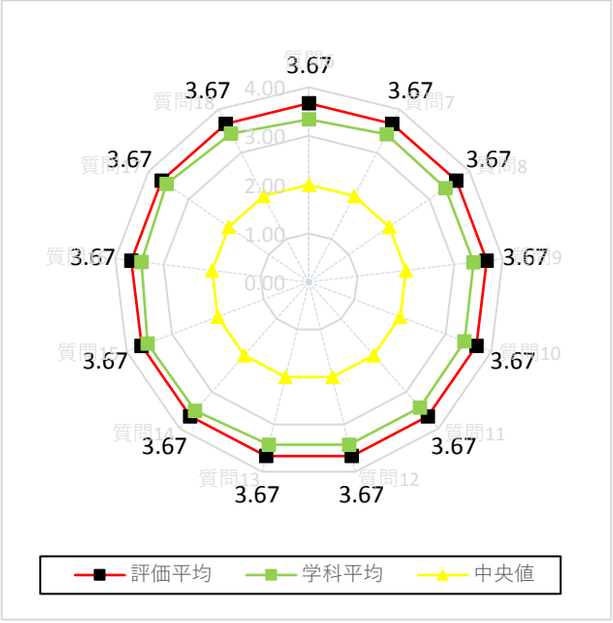
（３）次年度に向けての取り組み

・最終的に卒論のテーマ決定までは至っていない。卒論のまとめの方向性までで終わってしまったので、テーマまでは決定するように進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

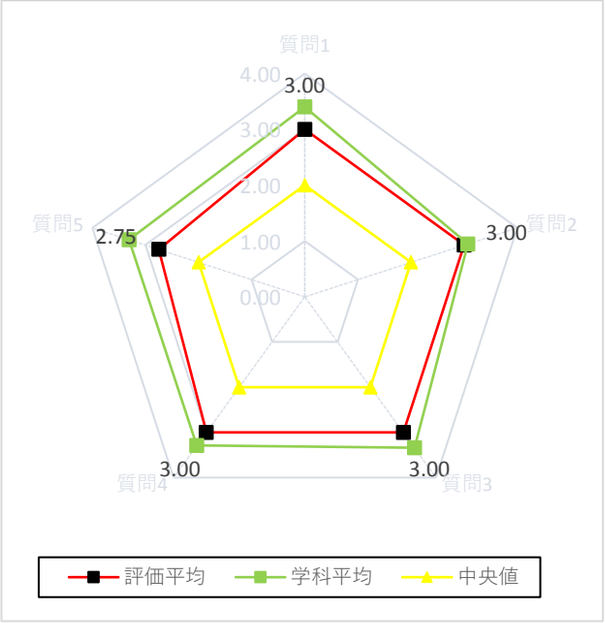
今年度の「子ども学演習」はゼミ学生からの要望を受け、授業の中に地域の子どもたちを対象にした音楽活動も組み込みながら行った。学内で開催する「子どもミュージアム」では0歳から1歳を中心にした活動内容を検討させ、親子で楽しむ音楽活動をテーマに掲げて取組ませた。この活動に参加した保護者から得た感想や要望を踏まえ3歳以上児対象の活動内容を用意して、地域の認定こども園（対象児は1歳以上の未満児と3歳以上児）や保育園（3歳以上児）での実践を重ねた。質問6～質問18の教員に対する評価は全ての項目において、学科平均を上回る高評価を得ているが、質問1～4の学生の自己評価はおしなべて低い結果となっていた。学生の受講態度は良好で、実践を振り返りながら積極的に課題に取組む姿勢が見られたことから、今年度のゼミ生の自己評価の低さはかなり謙虚に自己評価をしていると思われる。実践後の省察によって各自の課題や改善点が明確化したことが、学生の自己評価の結果に表れていると言えよう。

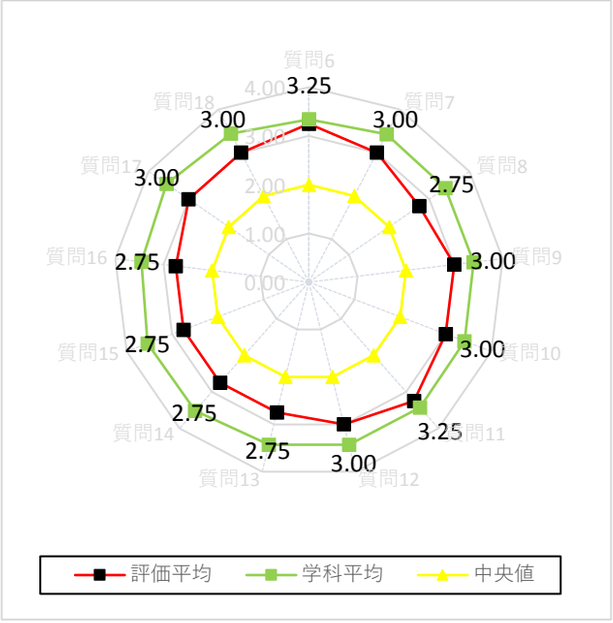
（３）次年度に向けての取り組み

「子ども学演習」の授業の中に組み込んでいる保育現場等での音楽活動の実践は、学生たちに様々な課題の発見とその解決の方途を探るための学びの場となっていることから、次年度の授業においても実践活動を組み入れながら展開していきたいと考えている。保育・教育現場への就職を目指している学生たちにとっては、子どもと直接係りあうことは貴重な体験だと言える。今年度の実践活動に関する学生の発言内容を整理し、次年度の学生の教育に反映させていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

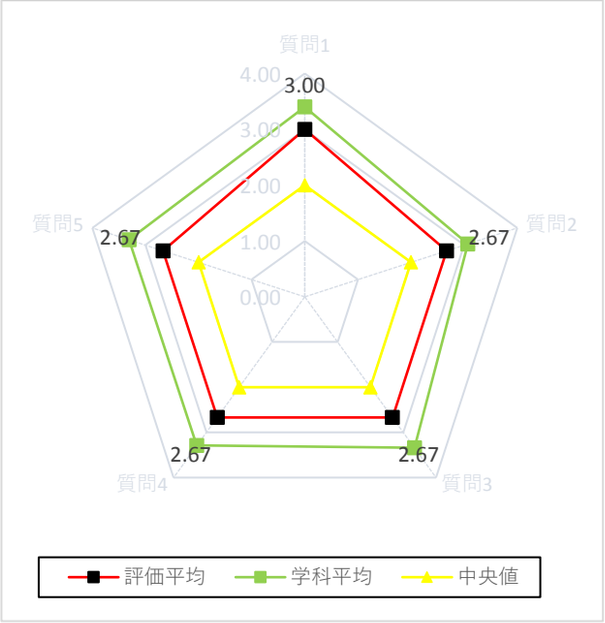
本講座は、アカデミックスキル、ビジネススキル、社会人基礎力養成、ポートフォリオの記述と活動内容が多岐にわたり、形式も全体形式、ゼミ別、個別指導と多様である。そして、その全体のマネジメントを行う役回りでもあったことで、多種多様な活動を「つくる」「こなす」ことに精一杯になってしまい、個々の活動の様態に対する指導援助が十分ではなかったように感じている。

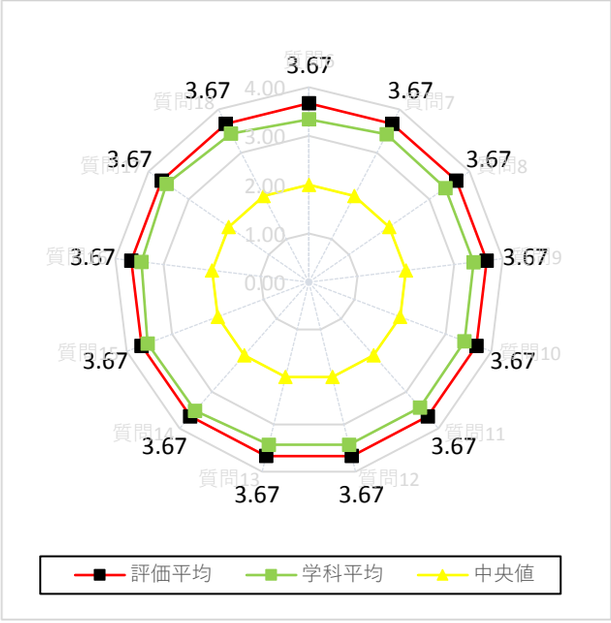
（３）次年度に向けての取り組み

今年度も活動及び立場が変わらないのであるが、マネジメントの２年目を迎え、「つくる」「こなす」ことへの注力から余裕が生まれることで、個々の活動様態により目を向けられたらよいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

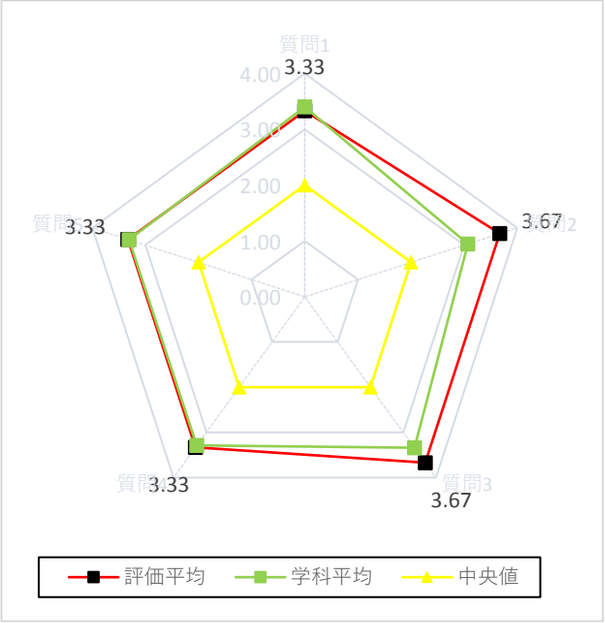
学生たちは、授業への自身の取り組みについて自覚した評価を下している。欠席が多い学生、退学者、休学者など、出席するメンバーが日に日に少なくなっていった。欠席が多い学生には、後期単位取得に影響が出ることを話すと、遅刻も少なくなり、時間通りに参加することができた。
学生による評価は、妥当かどうかはわからないが、各自の考えを自由に述べさせたり、お互いが工夫しあったり、指示したりと、自由かつ活発な動きが生まれ行ったと考えられる。
そうなったのは、バラバラな個性がうまく融合した結果であろうし、学生たちに考えさせ、こちらがそれをサポートしたからであろう。
また、学生たちの横に行って話してあげることが、学生の理解を促し、かつ意欲を出させることにつながったことが考えられる。

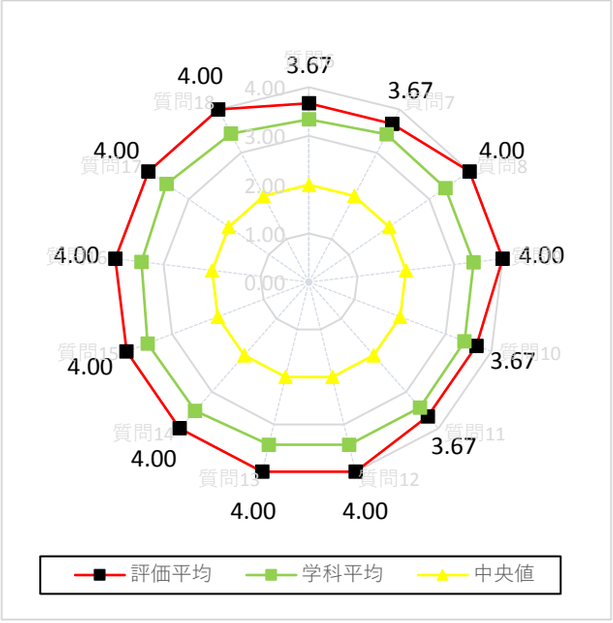
（３）次年度に向けての取り組み

毎年、様々な個性を持った学生が入学してくる。彼らの、個性を考えながら、得意なことを早く見つけてあげて、それを表現できるようにしてあげる。そのためには、日々の課題内容、行動をしっかりとみていく必要性があるだろう。
初めてのあすなろうであったが、次年度では少し慣れた分、学生への目配りを重要視したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

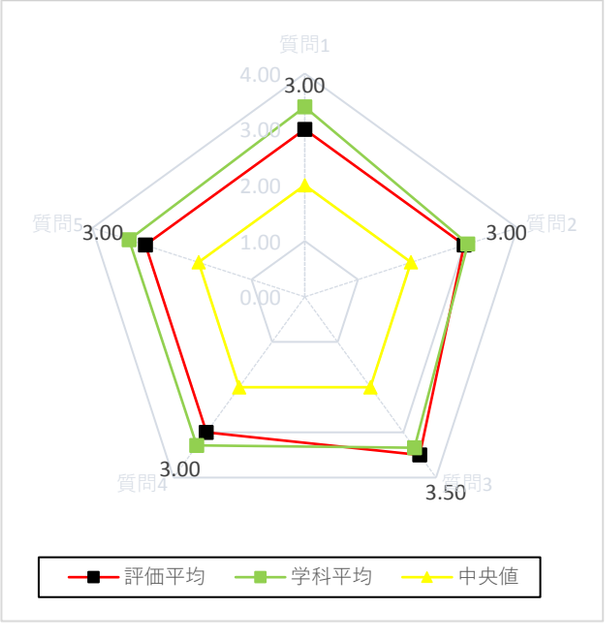
全体的に、学科平均よりも高い数値となっている。
ゼミ単位の授業では、補足資料なども用いて、学生に分かりやすく指導を行った。
また、少人数であるため、個別のつまずきや難しさを感じていることに対しては、学生の困り感を把握して個別的な対応を行った。
学生にとって、個別に応じた指導を受けたことが、高い評価に反映されたと思われる。

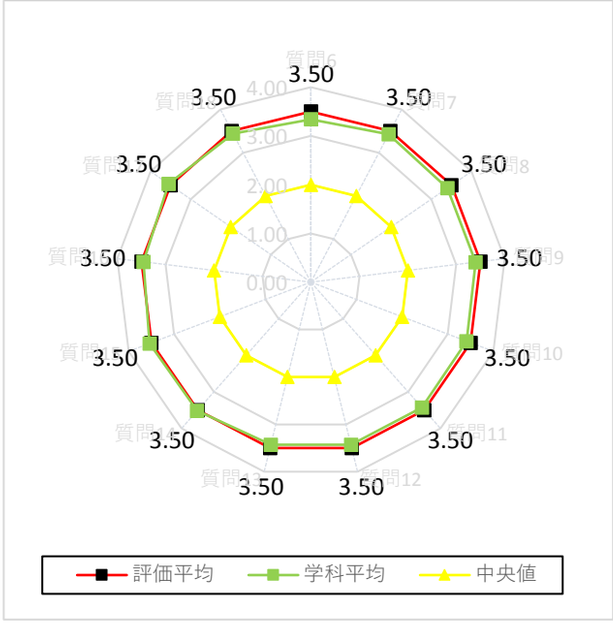
（３）次年度に向けての取り組み

少人数ではあるが、個別的な対応に偏りがでないように、全体のバランスにも考慮しながら対応をしたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

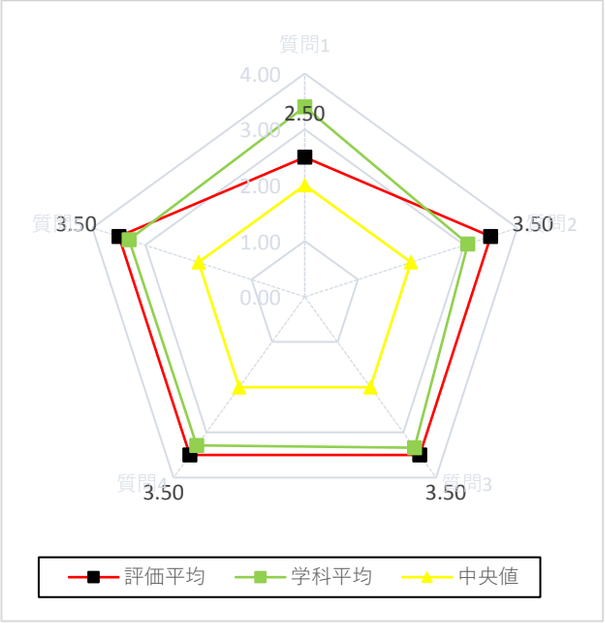
学科平均とほぼ同程度の結果となった。
本科目はゼミナールでの個別指導と全体講義との割合が半々～やや全体講義が多いという構成だったために、このような結果となったことが推察される。
回答者数が少ない状況もあったため、次年度は最終講義回等で十分な回答時間を確保する必要がある。

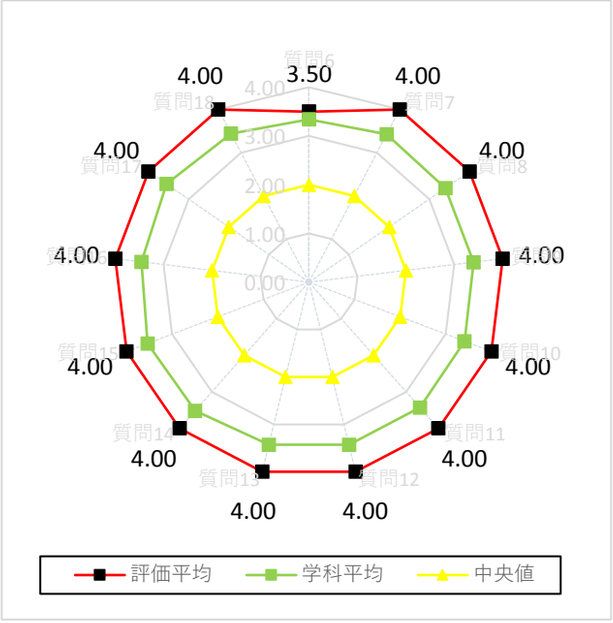
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においても、全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいく。
また、一人一人のポートフォリオも小まめに確認し、あすなろう体験実習の進度や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう支援を行いたい。
次年度は、最終講義回で十分な回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

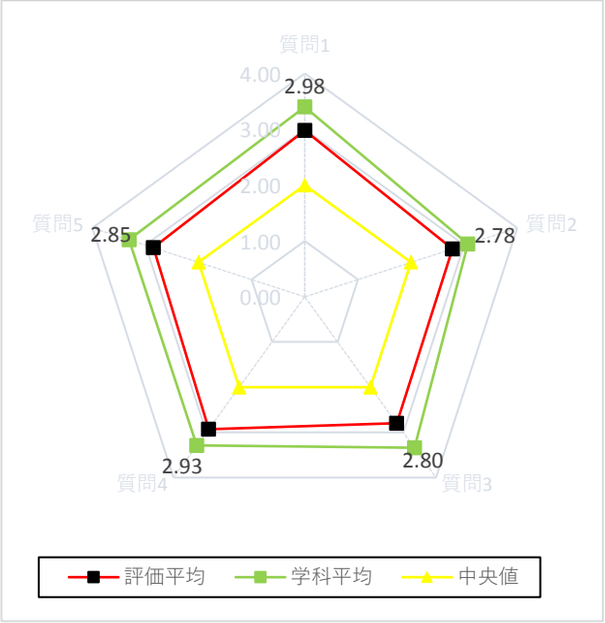
回答率が低かったのは、学生に対するアナウンスが足りなかったと思われる。
学科平均より高い値が出ているが、回答者が少なく、また解答した学生は優秀な学生だったため、このような値が出ていると考えられる。
数少ない受講生であり、また、１年生で緊張感も高く、話を聞く姿勢が充分できていたと思われる。

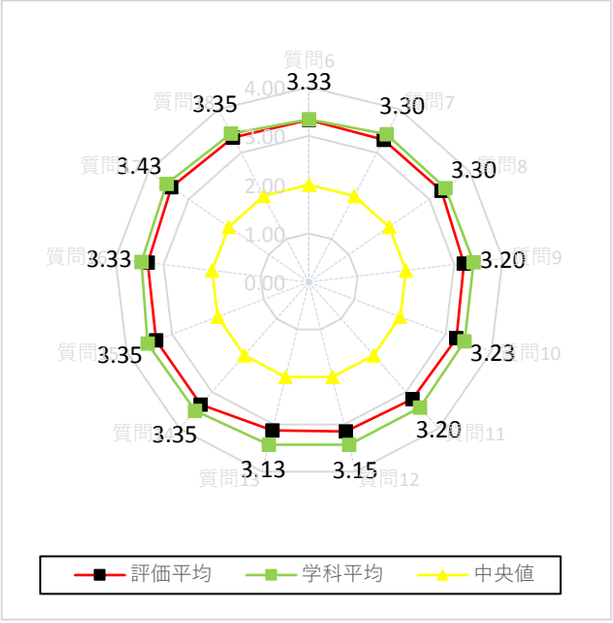
（３）次年度に向けての取り組み

ゼミ間の共通プログラムなので、各課題の意図を十分理解し、学生に伝えることが必要である。
学生の状況にも応じ、対応を考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		情報処理入門	48名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

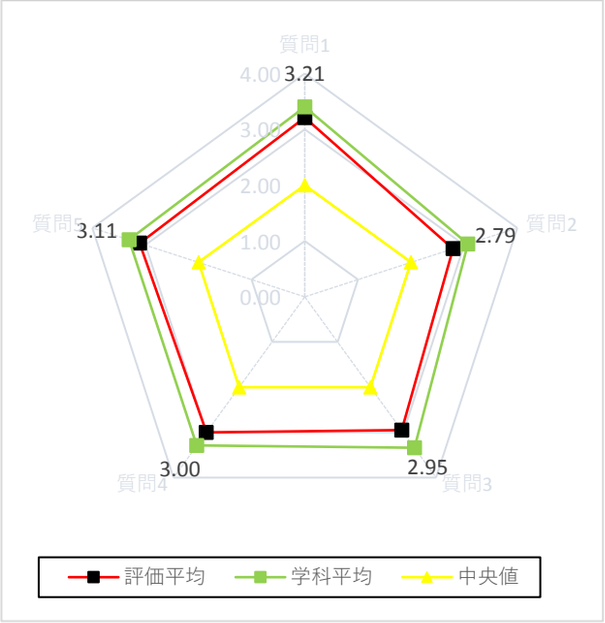
概ね良好な授業ができたものと判断する。

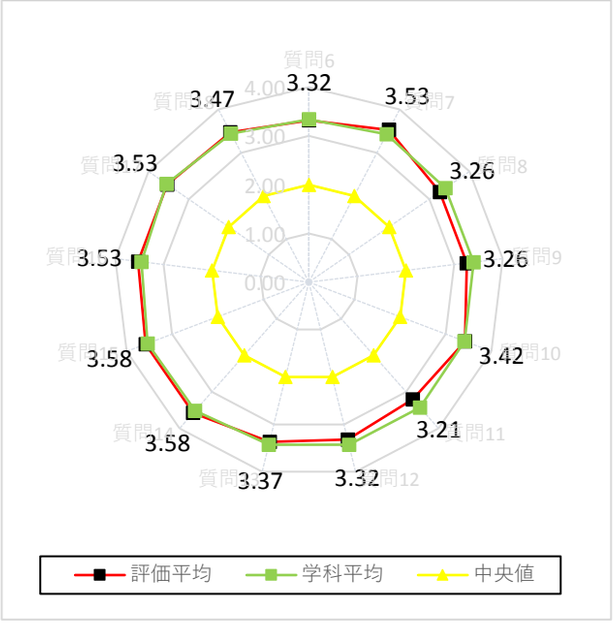
（３）次年度に向けての取り組み

次年度もわかりやすい授業を心掛ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		情報処理基礎	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

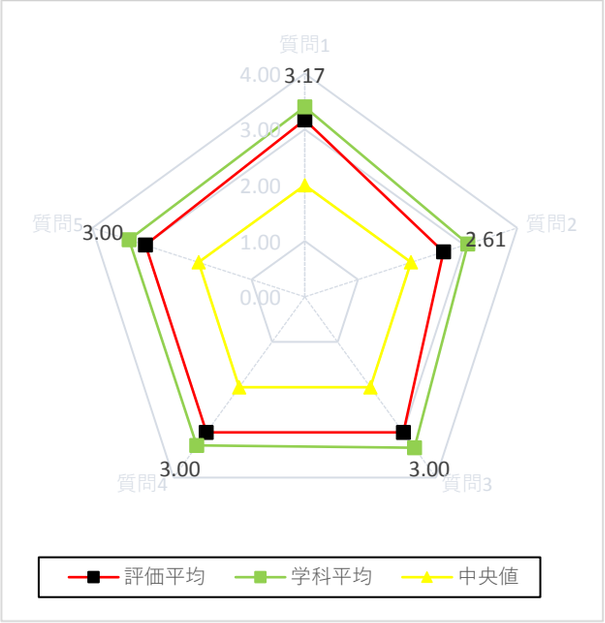
概ね良好な授業ができたものと判断する。

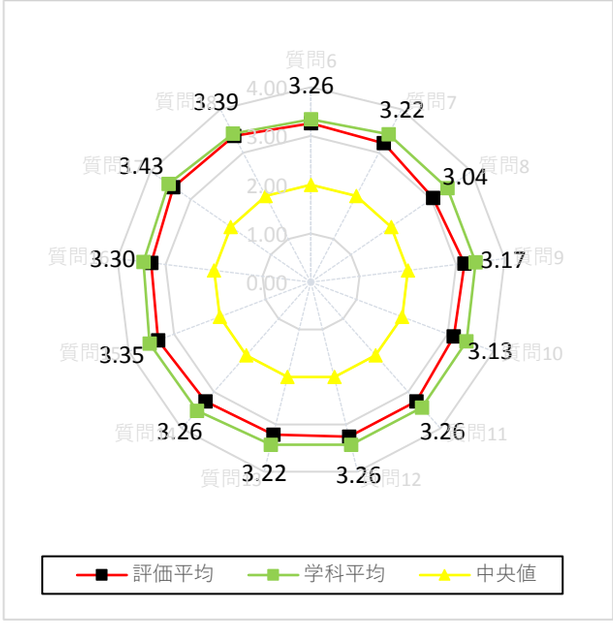
（３）次年度に向けての取り組み

次年度もわかりやすい授業を心掛ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論Ⅱ	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

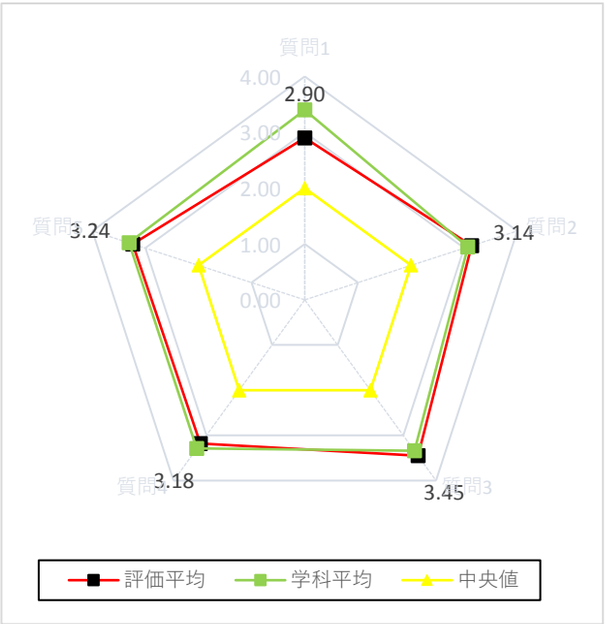
各項目とも、平均を若干下回っている。これは私自身の工夫の足りなさが大きな要因だと考えている。昨年度急に担当することになった科目ということもあり、私自身が内容そのものを深く吟味せぬまま進行してしまい、その結果何事も中途半端に終わってしまったと考えている。

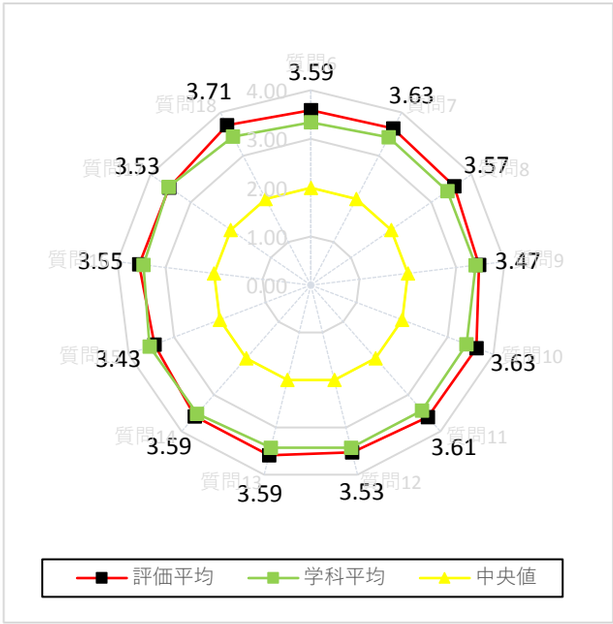
（３）次年度に向けての取り組み

内容をしっかり理解し、重要ポイントを明確に示し、説明し、そして分かりやすくするための資料を作成しながら、基礎を伝えていきたいと考える。同時に、学生の理解度を見るために、小テストのようなことも実施したいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理カウンセリング概論	54名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

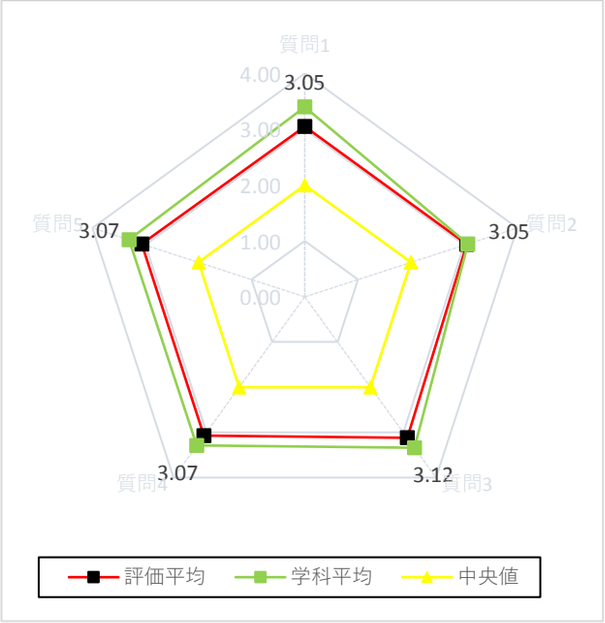
・学科平均と比較すると、質問1に関して2.90と平均（3.0）よりやや低いが、他の質問項目は学科平均より高い評価を得ている。
　特に総合評価は、3.7と高い評価を得た。
・特に低い項目、高い項目はなく全体的に3.0以上の高い評価を得ていた。
　以上のことを授業を振り返りながら分析する。
　この学年は、学習力に差があるため、授業の工夫を行った。資料を提示し、パワーポイントを使いながら資料を再確認していく授業を行った。
　さらに、その場で授業内容を確認する意味で、小テストを必ず行った。小テスト終了後、質問コーナー（紙媒体に書いてもらう）を設け、
　その場で回答していく方法をとり、理解を深めてもらう工夫を行った。
　特に、この科目はカウンセリングの入門編であるため、興味を持ってもらうことと、カウンセリングの概要について大まかに理解してもらうことを目標とし　た。反省点としては、もう少し質問時間を設け、カウンセリングへの興味を深められたらと思った。

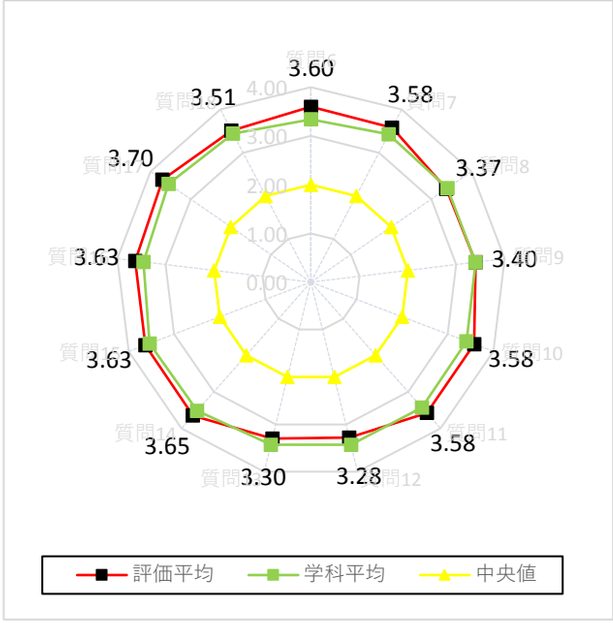
（３）次年度に向けての取り組み

・質問1の評価点が若干低かったが、これは、数名が3，4回ほど休む状態から低い得点が出たのではないかととらえる。今後、欠席者のフォローとして休みが続　いた場合など必ず本人に連絡を取り、声掛けを行い授業へのモチベーションを高められるよう支援したい。
・質問コーナーに関しては、質問しやすい雰囲気を作りながら、1日の授業の流れを確認していくようにしたい。そうすることにより、零れ落ちる学生への支援　にもつながると思われる。
・今年度取り組みたいと思っている授業内容は、昨年同様、視覚教材、資料、小テストなどを毎回取り入れ学習の進み具合と授業の目標とねらいについて確認　しながら行っていきたい。また、質問コーナーを大事にしながら、学生の疑問点について、丁寧に答えてあげるようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学研究法	48名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

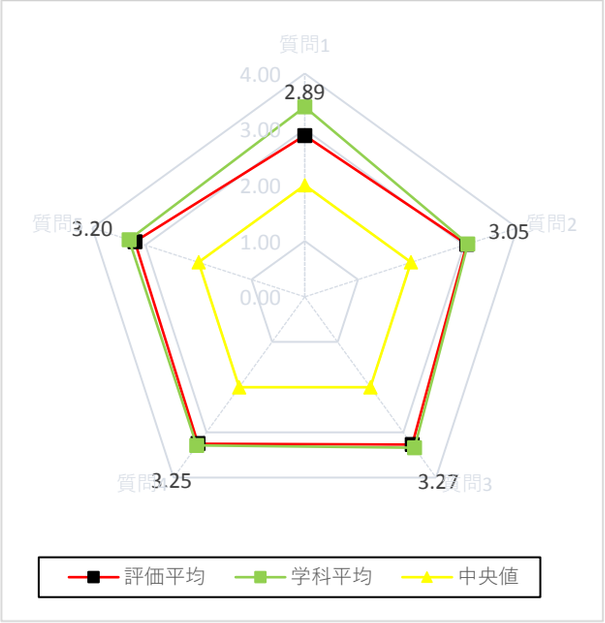
方法論の授業として、高い評価を得られた。前年度よりも課題の量を減らし適量になったことと、学生に教員に対する構えが出来ていたことが要因に挙げられる。

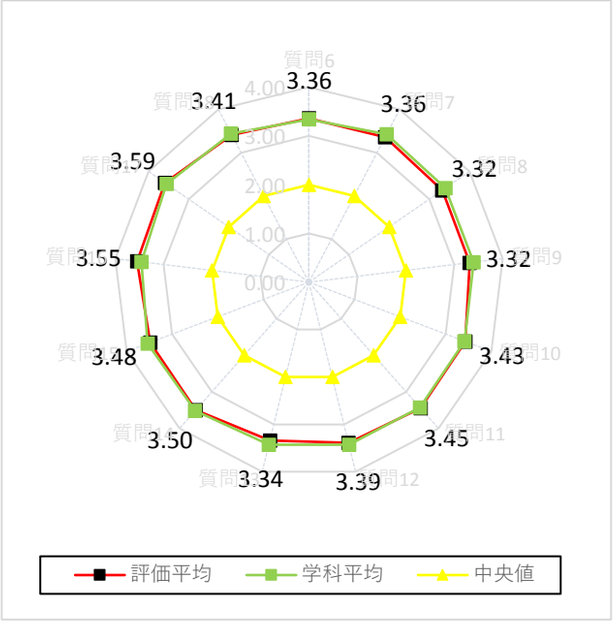
（３）次年度に向けての取り組み

今年度と同様に取り組みたいと思うが、次年度は再履修者が多数受講することが予想されるので、「この授業を理解するために自分で何か工夫」することも促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学統計法	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

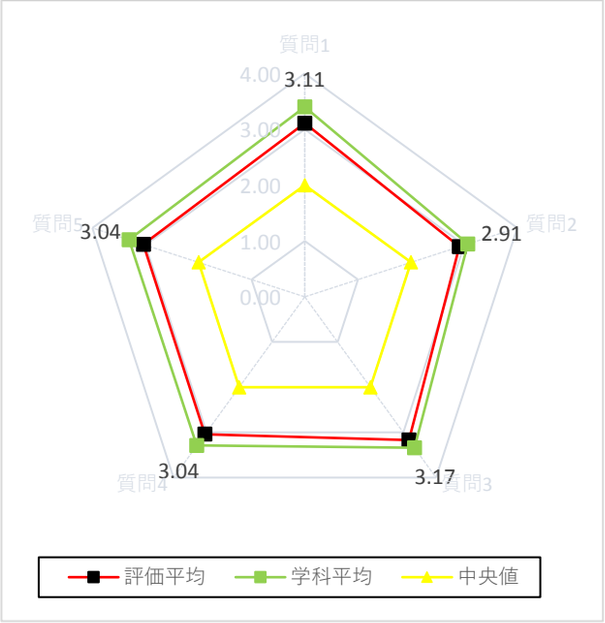
この種の教科において十分に高い評価をもらえたと感じている。反転学習による到達目標の明確化と、授業中の課題と発展課題を設けたことで学生が課題の量を調整できたことにより、各層に満足が得られたのではないだろうか。

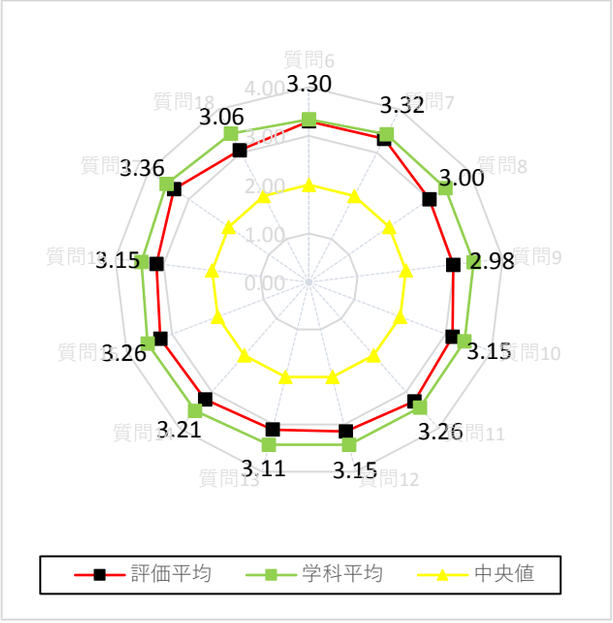
（３）次年度に向けての取り組み

今年度と同様に取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験Ⅰ	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

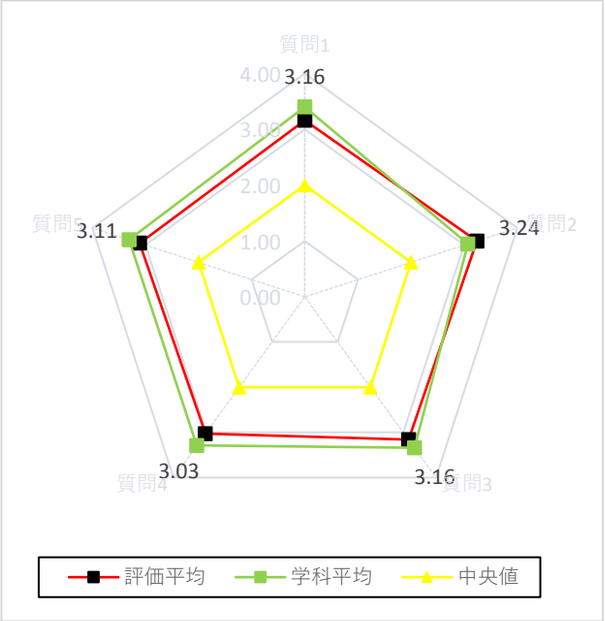
「興味・関心が持てる工夫」「授業は分かりやすくする工夫」において、授業の準備がやや不足していたと振り返る。

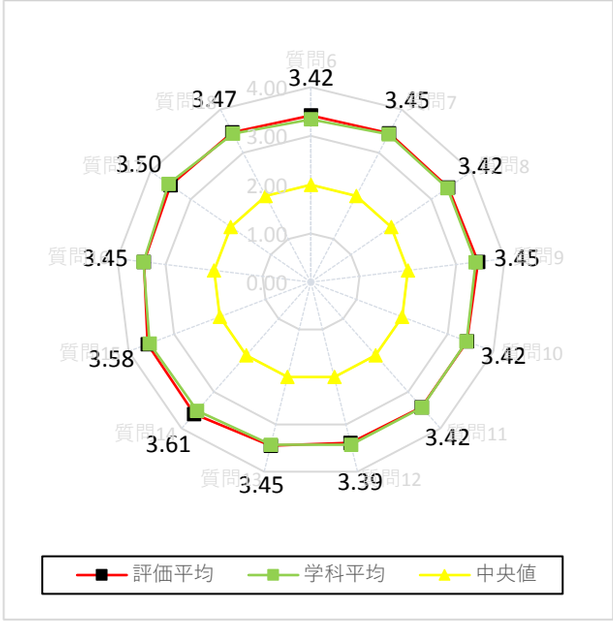
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の経験を活かし、授業の準備を入念に行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学検査法Ⅰ	40名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

概ね学科平均と同程度であり、一部上回る項目が見られる評価となった。シラバスについては、初回に説明を行い、評価基準については学期末にも再度シラバスを利用して説明を行ったことで、質問６の点数は平均を上回る結果となった。

講義では、各回授業後に感想や疑問点を求め、翌回に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮したことが、質問14の評価につながった。最終授業を終えての感想にはプリントの構成分かりやすいという評価や、実際の検査用具を書画カメラを用いてICT活用を行うことで、理解が深まったという評価を得たので、ICT活用や分かりやすい配布資料の活用などを引き続き行いたい。

今年度は昨年度の授業評価結果をふまえ、学生同士のディスカッションを行い発表させる時間を増やしたことも、質問８、９の結果につながったと考えられる。

（３）次年度に向けての取り組み

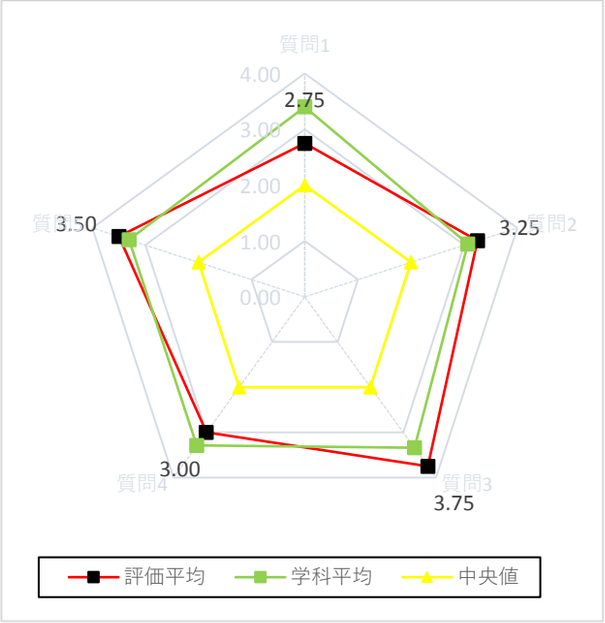
次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。また、引き続きICT活用を行い、検査用具の数の関係で多くの学生が手に取ることができない検査用具についても視覚的に理解を深める取り組みを続けたい。

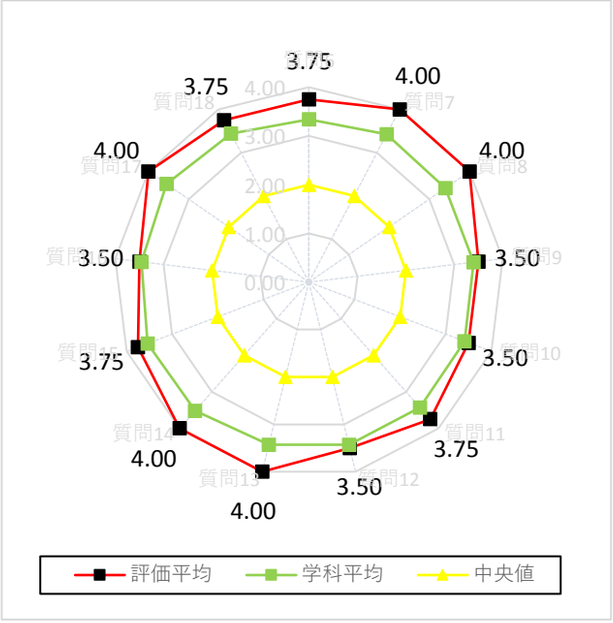
今年度は授業内でグループディスカッションの時間を増やすことで、学生がより主体的に授業に取り組むことができたため、引き続き踏襲していく。

今回、十分な回答数を得たため、次年度も講義内での授業評価回答時間を確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学検査法Ⅱ	40名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

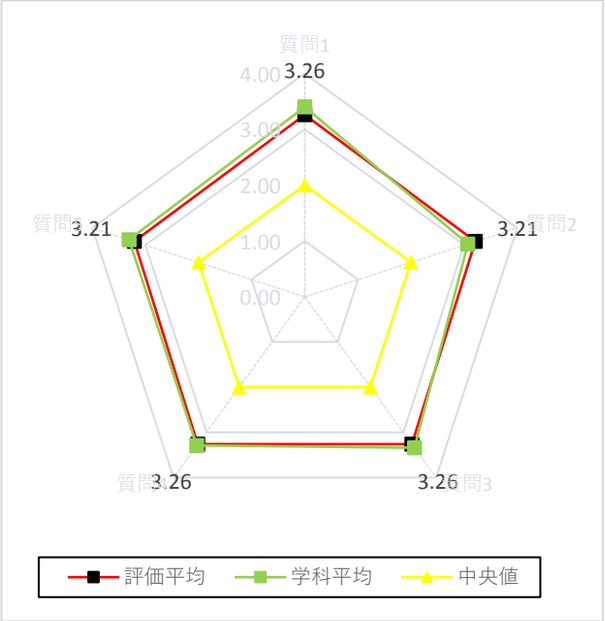
テキストを使いながら心理検査を実施する際の基本的な注意点について学んだうえで、実習に入っていった。特に実習と、心理検査場面が収録されている映画DVDの鑑賞とを織り交ぜながら、学習できたことが、上記のような結果に繋がっていることと考える。また実習を通して学生とのコミュニケーションが図れたことも大きかったと考える。

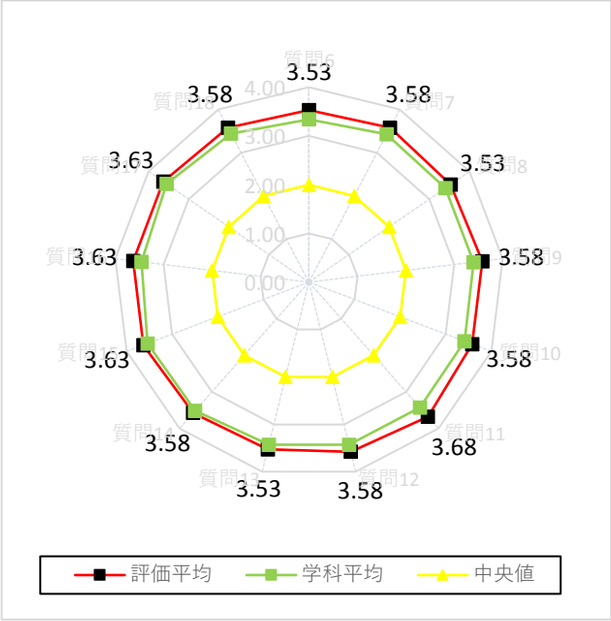
（３）次年度に向けての取り組み

基本的には、例年通りの進み方をとる。ただテキストが古くなったのので、新しい別のテキストに変更する予定である。これを用いると、さらに実習が増えるだろうし、様々な検査をしることが可能になるので、学生とのコミュニケーションをさらに増やしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング基礎演習	43名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

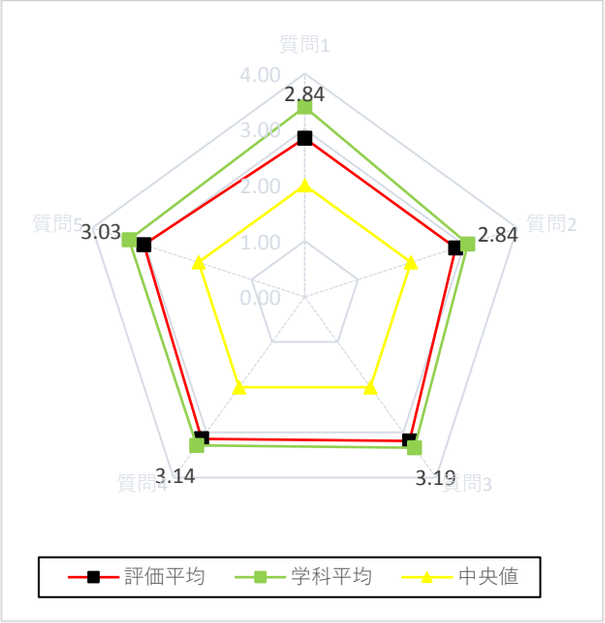
全ての質問項目において、学科平均よりも高い数値となっている。
本講義は、カウンセリングの基礎となるコミュニケーション力を培う科目であり、個別およびグループワークが取り入られている。
また、毎回のレポート課題によって、自己理解を深めることを促している。
その中で、コミュニケーションが得意ではない学生も多く、ドロップアウトしないように、細やかな配慮をしながら講義を進めることが重要であった。
毎回の活動の目的や内容を伝えながら、必要なとる知識や経験につながるよう意識化を図ったことや、レポート課題のフィードバックなどを行ったことが高い数値につながったと思われる。また、授業計画においても、学生の動向を見ながら組み立てることも念頭に入れ、学生の状況に応じた授業を行ったことも効果の１つだと思われる。

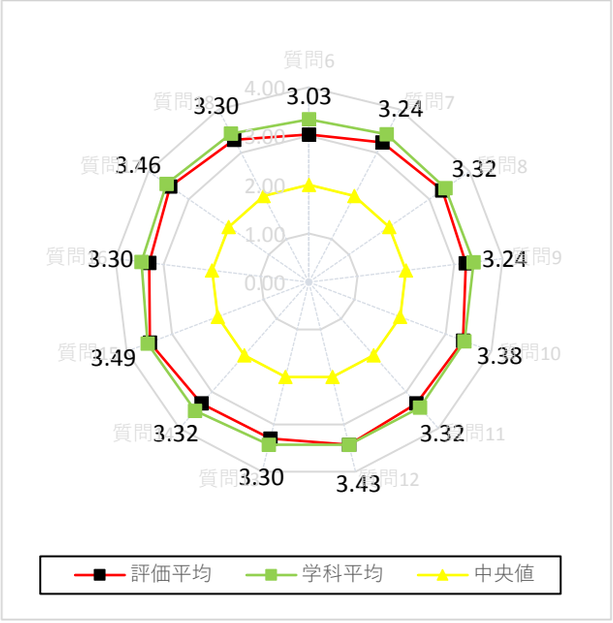
（３）次年度に向けての取り組み

授業の計画・内容について、担当者間での情報共有を行い、再検討をする。
さらに、授業の到達度は、適切かどうかを検討する。
そのうえで、今年度同様に、きめ細やかな対応を行いながら、カウンセリングの基礎を促していく必要があると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		命の尊厳	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

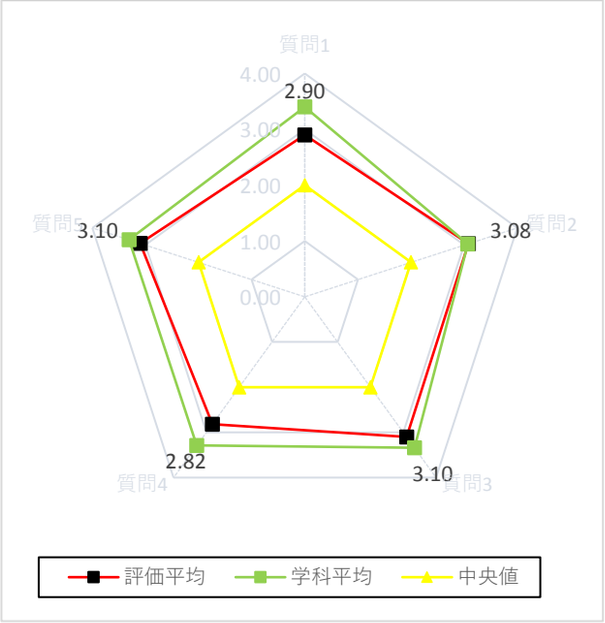
全項目ほぼ学科平均値に近い。

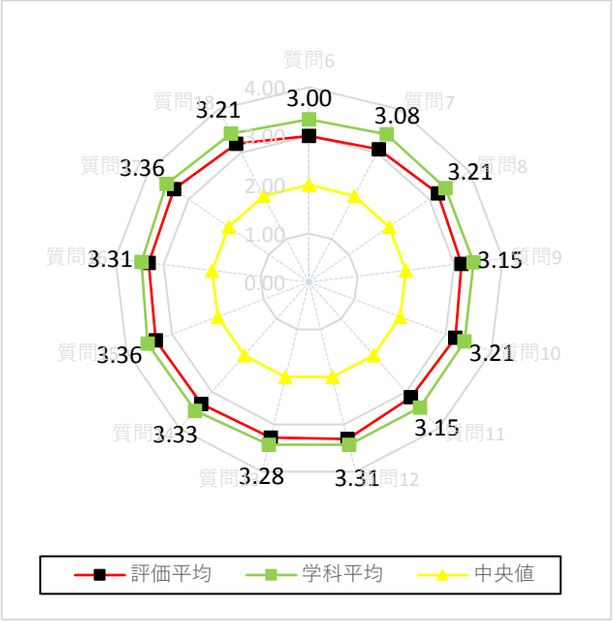
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスに関する説明を強化する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		倫理学概論	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

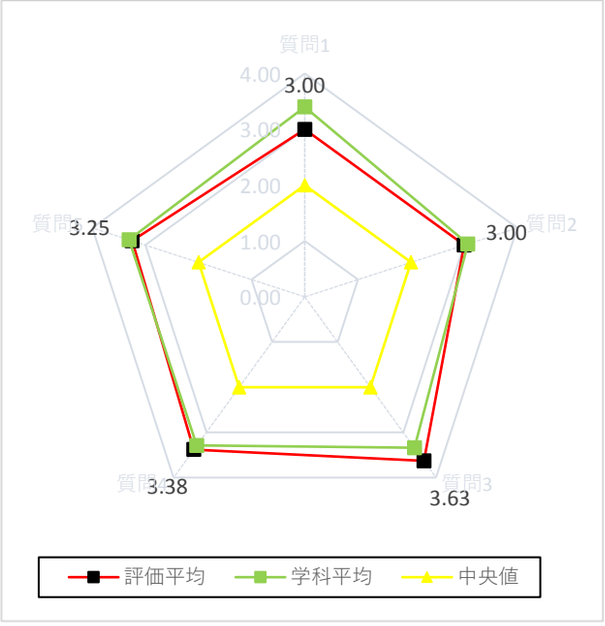
シラバス、到達目標の説明、教科書等の使用に関する評価が低位であった。

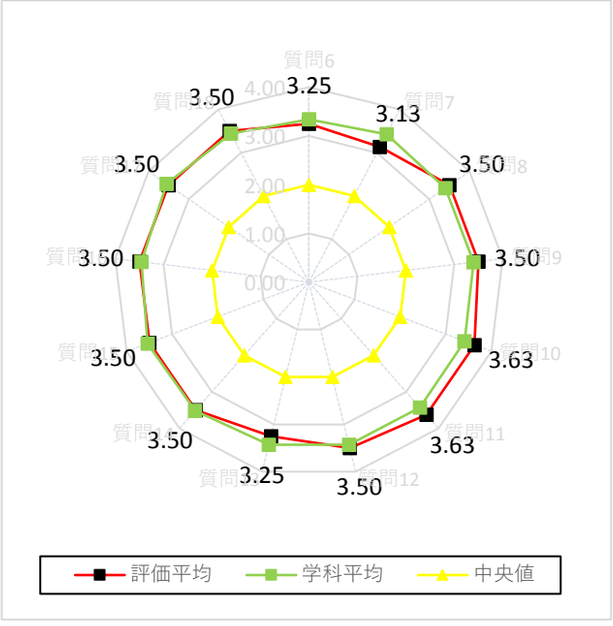
（３）次年度に向けての取り組み

低位にあった評価項目の向上をはかる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		対人関係論	58名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

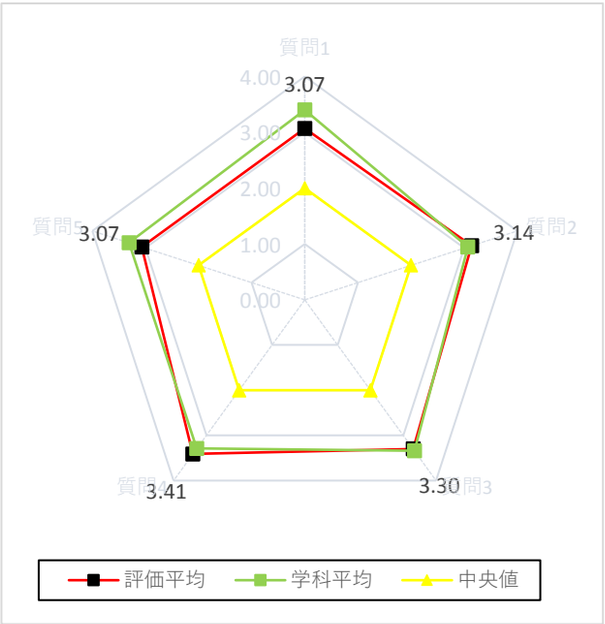
講義では、パワーポイントによる板書資料をノートにまとめることを求めた。レポート課題では、講義で学んだ内容にコメントしたり、日常例を挙げたりする解答を求めた。授業の最後に当日の講義に対する気づき・意見などをA5判の用紙に記述させ、講義の要点に触れた何人かの記述を講義の最初の時間帯で紹介し、復習の充実を図った。しかし、講義の内容を十分に理解できていないため、課題への的確な内容をレポートできていない者が少なからず存在した。指導の吟味・改善が必要と考える。

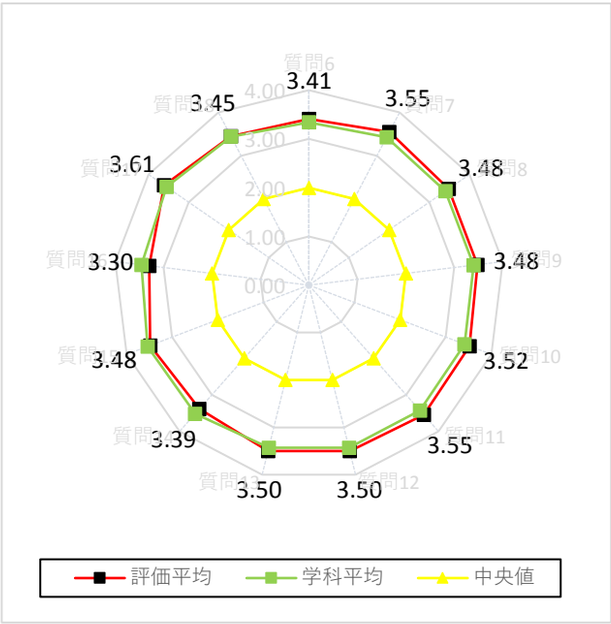
（３）次年度に向けての取り組み

学期末のみのレポートではなく、日頃から講義のまとまりごとに複数回の小テストの実施により、内容の定着と書き方の指導を行うなどの工夫・改善を行いたい。質問７への受講生の回答が、学会平均を若干であるが下回っている。この工夫・改善は、この点への取り組みとなることを期待したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅰ	46名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

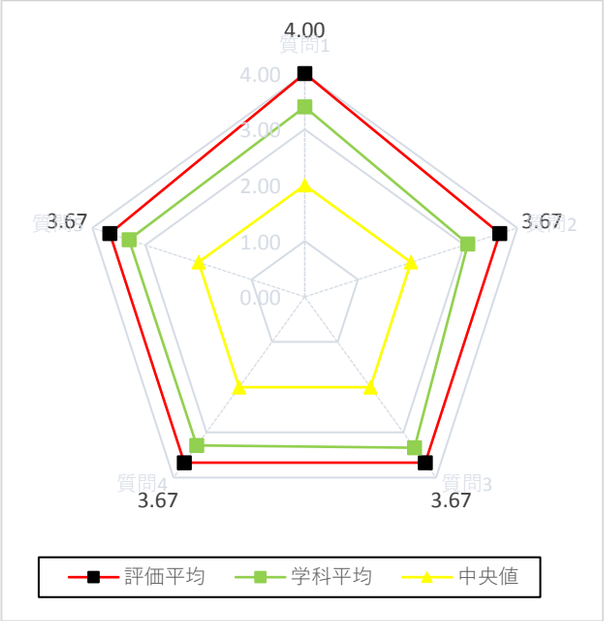
・学科平均と比べると、全体的に高い評価を得ている。総合評価は3.41であり、学生による総合評価も、3.45である。
・特に低い評価項目や高い評価項目は見られなかった。
　以上のことから、本授業を振り返りながら分析する。
　まず授業の形態であるが、、発達についてのDVD教材を用いて、毎回各年齢にお発達的特徴について20分程度視聴してもらう。その後、教科書と資料を用いて　パワーポイントによる視聴覚教材の振り返りを行っている。その後、内容の理解度の確認をするため、小テストを行っている。終了後小テストの解説を必ず　行い重要箇所のチェックをするようにしている。発達心理学は、「こころの発達」の基礎であり、入学してはじめて専門的学習をする科目でもある。
　学習力の開きがある学年にとって、心理学の登竜門のような科目でもあり、心理学及び人間に対する興味を深めてもらうことを大きな狙いにして取り組んで　いる。このことが、学生にも通じ興味を持ってもらっていると思われる。

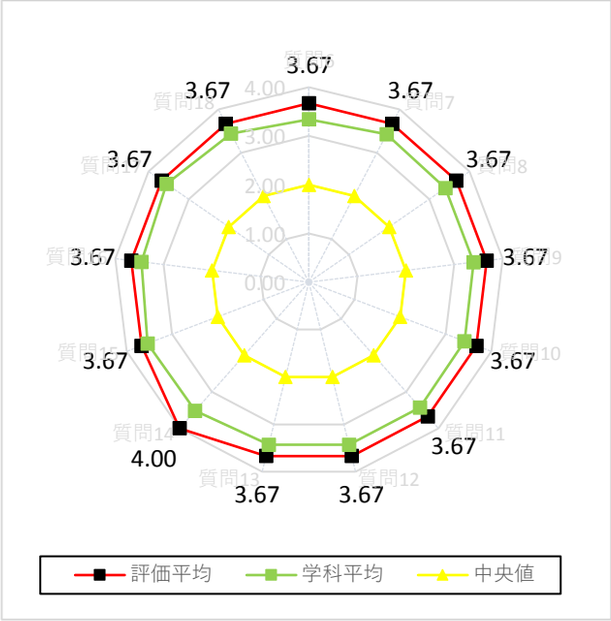
（３）次年度に向けての取り組み

・特に低い質問項目や高い質問項目はなかったが、入学してすぐに始まる授業でもあり、シラバスを用いての説明、資料提示、視覚教材など学生が興味を示し　てくれるような工夫をさらに続けていきたい。特に視聴覚教材は、年々変化する社会の様相を取り入れながら、人間の発達について、一緒に考えていけるよ　うな教材を見つけ、教材研究を行いながら取り組んでいきたい。さらに、教科書や資料を用いながらのノート作成など，書く力も強めてあげたいと思う。
　年々文章力が低くなり、レポートなど苦手な学生が多くみられる。見て、書いて、理解する力をつけてもらいたいと考える。
　そのため、今後の授業の展開も、昨年同様、本授業の目標やねらいに沿って、視聴覚教材の工夫、わかりやすい資料作成、わかりやすいパワーポイントの作　成など教材つくりの工夫を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		経済学概論	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

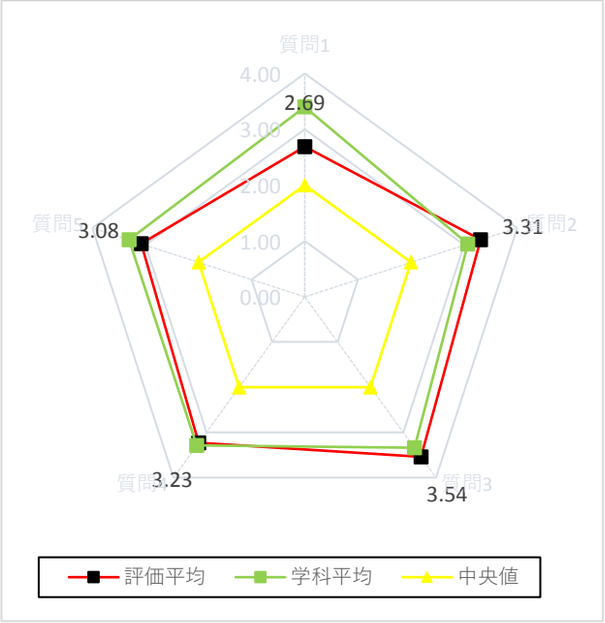
この授業の目的は、現代経済学を構成するミクロ経済学とマクロ経済学を理解することにあったが、授業評価および試験結果からみて、これは十分に達成できているものと思う。□

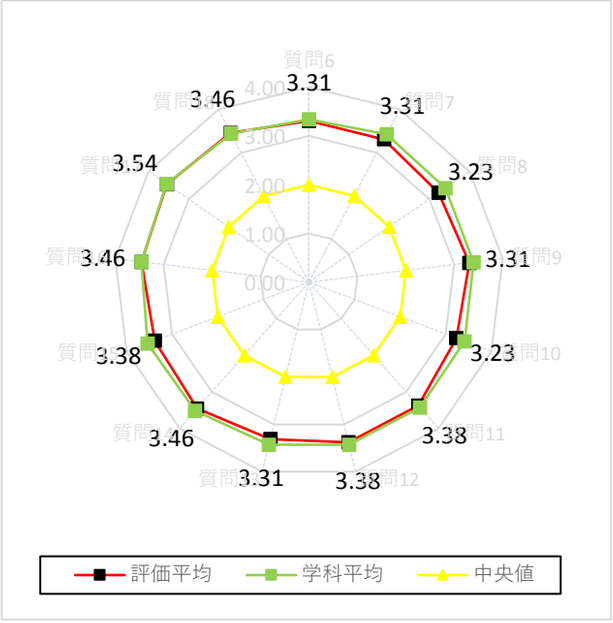
（３）次年度に向けての取り組み

今後はもっとわかりやすい資料の作成を心がけつつ、少人数でもあるため、一方通行的な授業ではなく、学生諸君と対話し、意見や質問を聞きながら、より興味深い授業に改善していきたいと思う。また、穴埋め形式のプリントなども作成・配布して学生諸君が飽きない授業を心がけたいと考えている。□

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		家族心理学	18名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本講義は、学生がテーマ毎にまとめのレジュメやパワーポイント資料を作り発表する演習形式を主に行った。また、発表後に受講生全員でディスカッションを行う主体的学習を行った。そのため、学生自身の取り組みについて高い評価となったと思われる。質問１０については、教員が主導しての講義ではなく、板書等も必要時以外は行わなかったため、評価が低くなっていることが推察される。しかし、学生の発表テーマに関連する資料などは教員側も準備し、その教材に関しては、質問11にあるように、平均程度の評価を得たと思われる。

質問１４，１５，１６，１７についても平均程度の評価を得ており、学生・教員間の双方向的なディスカッションを行う形式の本講義が一定の評価を得たと思われる。

最終回の授業時間内に授業評価を行う時間をとったが、十分な時間がなく、授業評価に回答しない学生も見受けられた。今後さらに多くの学生からの回答が得られるよう工夫していく必要があると考える。

（３）次年度に向けての取り組み

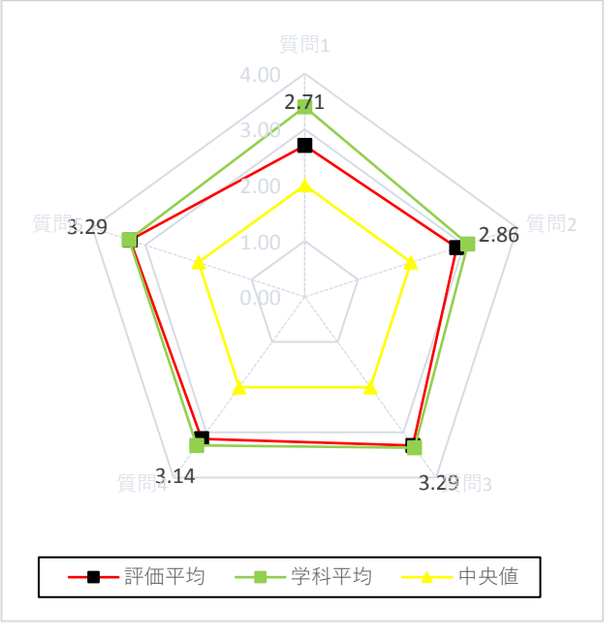
受講生がテーマに関する発表を行い、また積極的にディスカッションを行うという本講義形式は、学生自身の主体的な学びにつながるため、今後も踏襲していきたい。

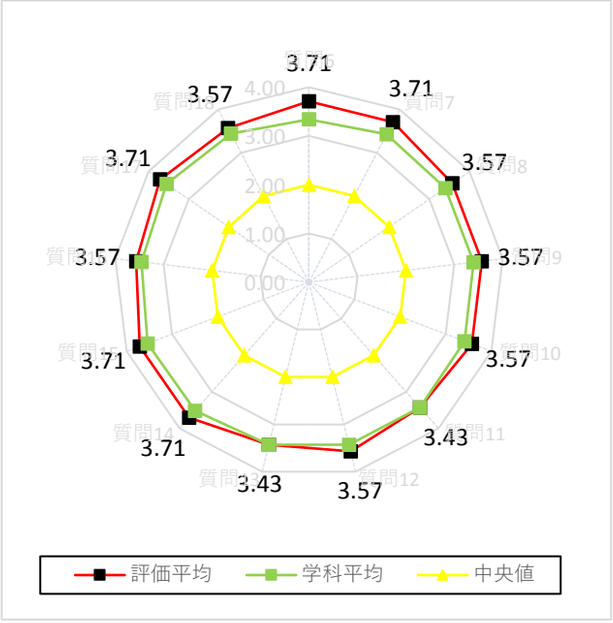
回によっては、発表時間とディスカッション時間のバランス調整が難しかった回があったため、次年度以降は時間配分にさらに留意しながら進めていきたい。ディスカッションでは、一部学生が積極的に発言したものの、こちらから指名しないと発言しない学生も見られた。より活発なディスカッションができるよう小グループでのディスカッションの後に全体で発表するなど、今後工夫していきたい。

授業評価回答数についても、授業時間内で授業評価に取り組む時間を十分に確保することで、多数の学生からの回答が得られるよう工夫を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		コミュニティ心理学	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

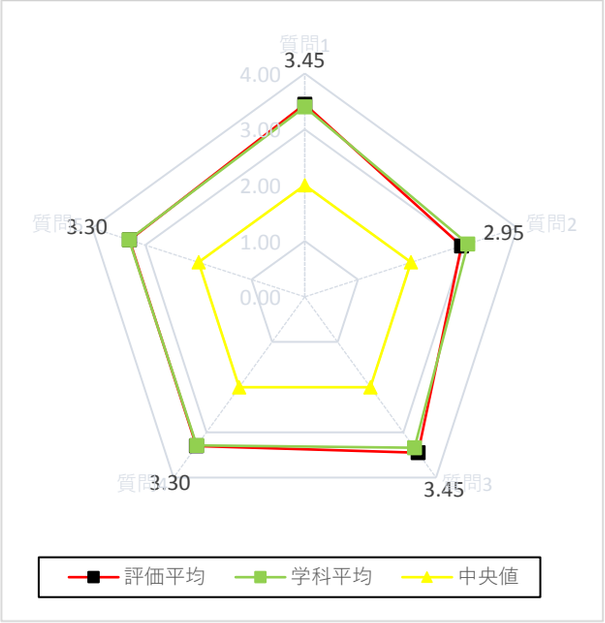
本講義では、質問６～１８において、学科平均よりも高い数値となっている。
しかし、質問１は学科平均より低い数値であり、一部の学生は、欠席が目立っている。そのため、講義への学習意欲を引き出す工夫が必要であった。
しかしながら、パワーポイントを用いた説明と、事例検討など実践につながるグループワークを取り入れたことが数値につながったと考える。
また、レポート課題では、全体だけでなく、書面による個別のフィードバックが学生の関心や取り組む意欲に結びついたと思われる。

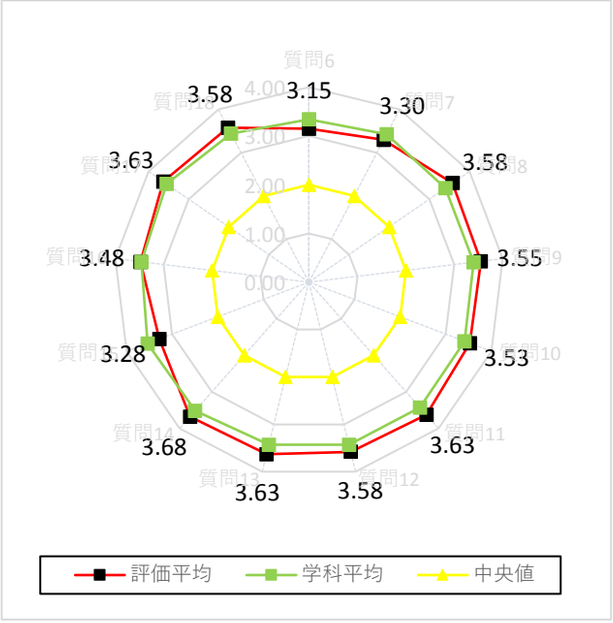
（３）次年度に向けての取り組み

認定心理士の資格に関連する科目のため、学生がコミュニティ心理学の学びから、心理職や指導員などの現場での実践と結びつけるような知識の習得と経験につなげるアクティブラーニングの工夫が必要となると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		児童臨床心理学	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

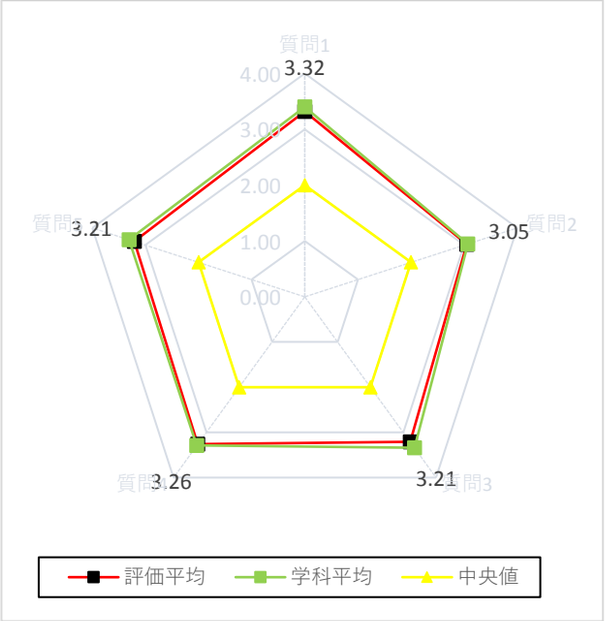
・学科平均と比較すると、質問2の学生によるシラバスの活用、質問6の教員によるシラバスの説明、質問7到達目標の説明、質問15の公平に学生に対する対応の　項目が若干低かった。確かに、シラバスについての説明は、最初にしておらず反省すべき点である。公平な学生への対応についてjは、気になる学生や対応に　苦慮する学生が数名おり、授業中に時々声掛けを行いながら情業を行ったのは事実である。しかし不公平になるようなことでもなく苦情はその場では出てい　ない。こういう場合の対応は難しいと感じる。
・学生による総合評価は、3.58と平均よりも高く、全体的にも平均値を上回っている項目が多い。新カリキュラムによりこの授業は最後になるため、、おのず　と力を入れた授業でもある。中でも、視聴覚教材や資料を用いて説明し、最後に小テストを行う方法を行った。中でも、児童への心理療法について心理技法　を用いた実践は全員がきょみを持ってくれたようである。

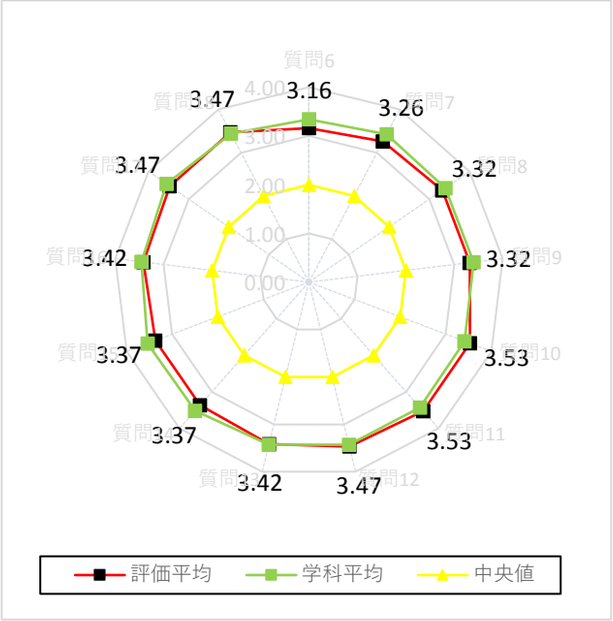
（３）次年度に向けての取り組み

・学科平均より評価が低かった項目については今後見直す必要を感じる。特に、シラバスの説明や、授業の目標、ねらいなど最初にきちんと伝えてからの授業　を展開する必要があると感じた。また、学生を公平に対応することは大切であるが、どうしても場を乱す学生や注意、関心を向けないといけない学生など多　くいる学科にとって、難しい課題である。特に今回が他学科（子ども学科）からの受講生がいて、場の雰囲気も違うためなおさら感じたのかもしれない。今　後そういう場合の対応の仕方も考慮しないといけないと感じた。
　シラバスに関していうと、授業開始時など学年が上がると、、持参する学生がほとんどおらず、最初の授業時間にきちんとアナウンスするようにしないとい　けない思った。今回が最後の授業であったが、比較的学生はまじめに取り組んでおり、特に児童に関心がある学生も多く、就職等にも影響を与える授業であ　ると感じた。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		児童臨床心理学	43名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

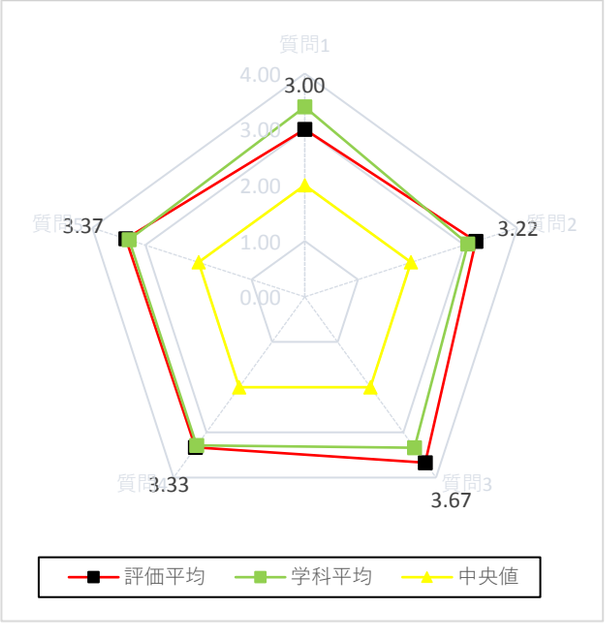
ほぼ平均値にあるものと推測する。教科を進めていくにあたり、到達目標を明確にして授業を進めていくことを疎かにしていたことに気づいた。
手作りの資料を配布し、穴埋めを学生してもらいながら、学生の集中力を途切れさせないよう努めた。結果として、可もなく不可もなくという成績におさまったのだと考える。

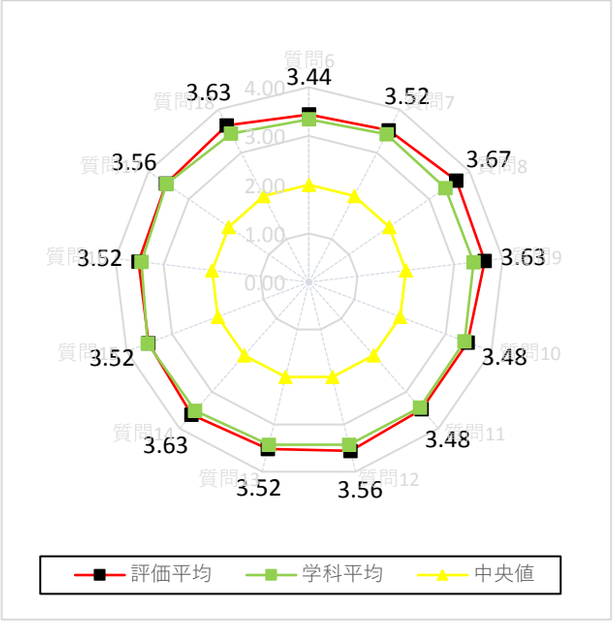
（３）次年度に向けての取り組み

具体的に学習到達目標を伝えるとともに、1回ごとに理解してほしいポイントを明確に伝えていこうと考える。また、学生自身が親として、セラピストとしてどう考えるかという視点も聞いていこうと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達障害者教育総論	40名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

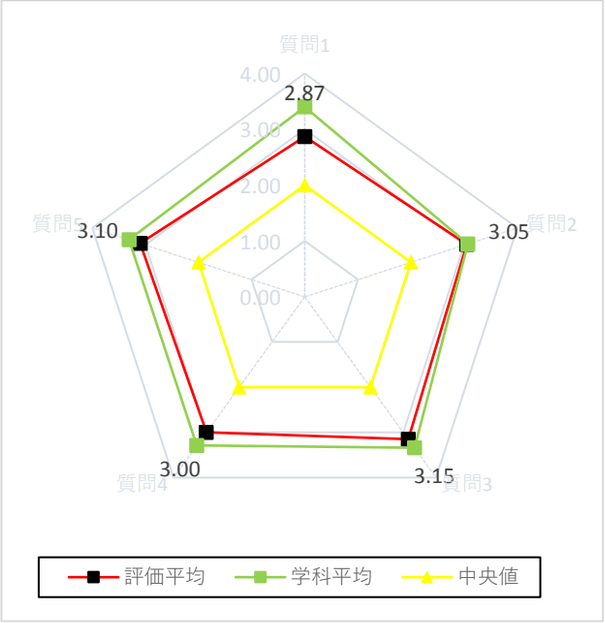
質問3「居眠り・私語をせず真剣に取り組んだ」が3.67、質問4「自分で努力した」が3.33、質問5「自己評価」が3.37と、平均値より高い評価であった。
また、質問8「興味が持てる工夫」は3.67、質問9「分かりやすさ」は3.63、質問14「誠実さ」は3.63、総合評価は3.63と、高い評価を得ている。
今期の授業では、これまでのDVD使用による授業教材の工夫に加え、架空事例を用いて受講生同士でアイディアを出し合うグループ・ディスカッションを、従来よりも時間を割いて行ったことが、学生への評価になったと考えられる。

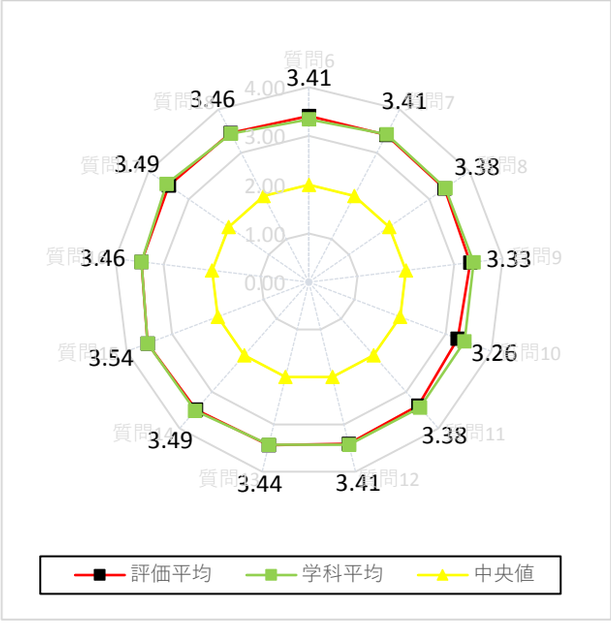
（３）次年度に向けての取り組み

継続して、学生自身が主体的に考える授業の工夫を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		医療心理学	43名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

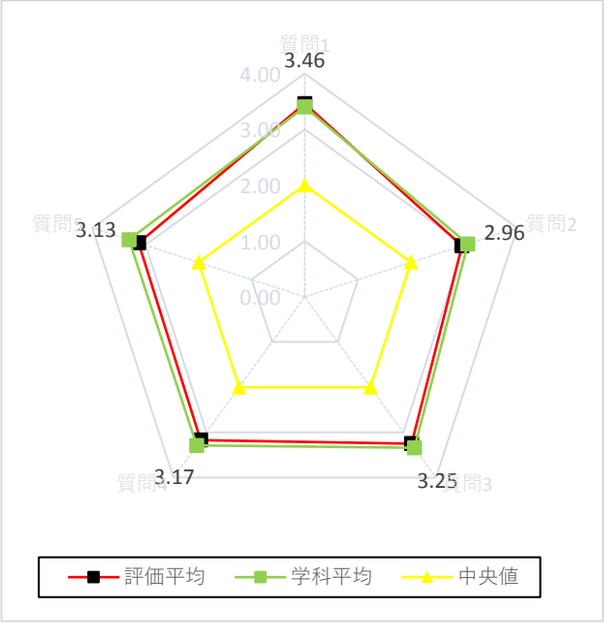
公認心理師受験に際して必要な科目である。内容的に幅広く、同時に細かいので、学生にとっては難しい教科かもしれない。専門用語の解説は必須になるだろう。こうしたことのため、学生は受動的な構えにならざるを得ないかもしれない。アクティブ・ラーニングに持っていくには、基礎となる知識を身に付けてもらう必要があるだろう。

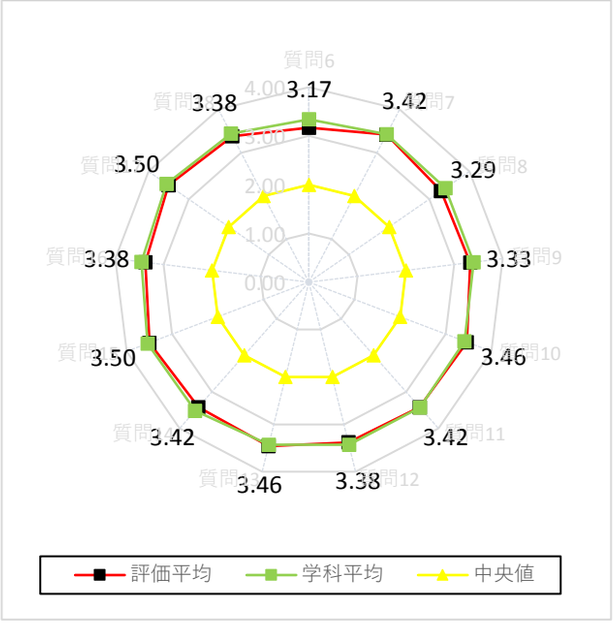
（３）次年度に向けての取り組み

基礎心理学がベースにないと理解しにくい領域がふくまれるので、基礎的な領域を伝えながら説明していき、理解を深めるように持っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		知的障害者の心理・生理・病理	48名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

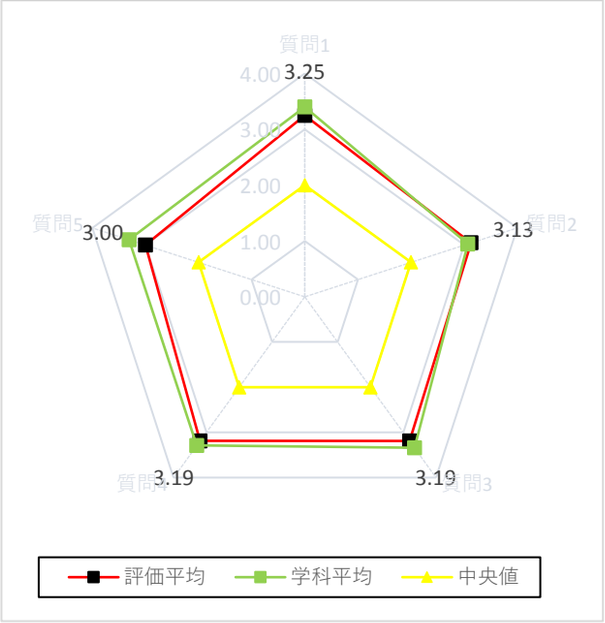
回答率50%（24/48）、総合評価3.34
自由記述：マイクを使って欲しい。〇〇先生のレポートに要する時間が毎回3～5時間かかり、非常に大変だった。
本授業は、知的障害心理に関する基礎知識や、心理機能と発達支援、知的障害児(者)に対するに心理検査やアセスメントについて理解することを目的とした。
質問6～18の評価については、3.17～3.50の範囲であり、学科平均と同等の評価であった。昨年度の評価より微増しているが、回答率は86%であったため考察は参考程度にとどめたい。

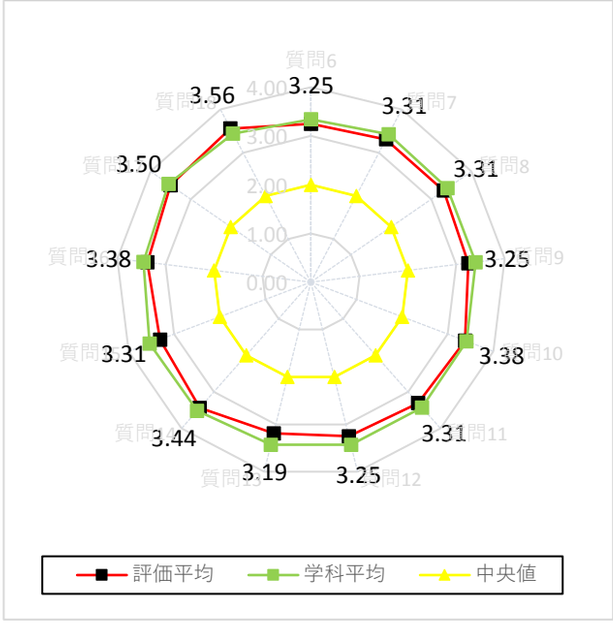
（３）次年度に向けての取り組み

オムニバス形式の授業のため、評価についての分析には課題がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		人格心理学	31名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

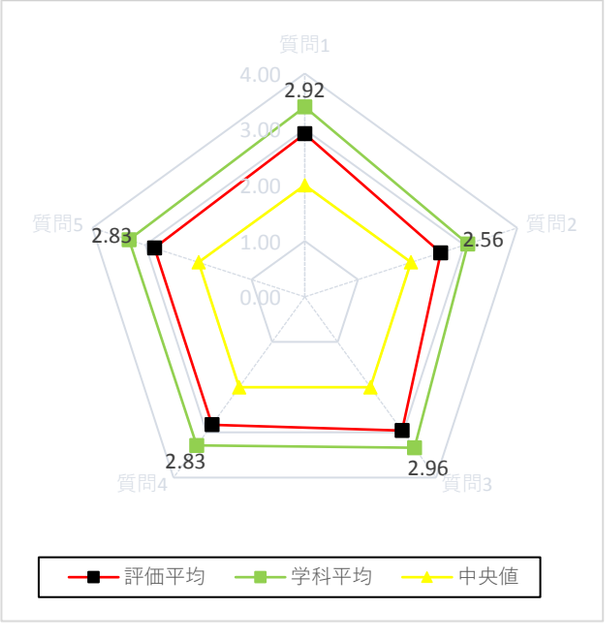
多くの項目で学科平均と同程度の結果となった。
今年度より授業内容が「感情心理学」と「人格心理学」の2部構成となったため、授業で解説するテーマが幅広くなり、内容量が前年度よりも増えたことで、質問１３にあるような授業進度について、学生の理解状況よりも早い進度となったことが懸念される。内容をさらに精選していきたい。
各回授業後に感想や疑問点を求め、翌回に疑問点に答えるなどすることで、疑問を疑問のまま持ち越さないように配慮した。そのため、質問１４や質問１６の点数につながったと考える。
配布資料は重要語句が分かりやすいよう工夫し、視聴覚教材の視聴やテーマに関係する質問紙を利用することで、自己理解とテーマ理解も深まることも狙った。総合評価が学科平均を上回ったのは、自己理解を深めるような機会となったことへの評価とも考えられる。
回答率が半数程度となったことが反省点として挙げられる。

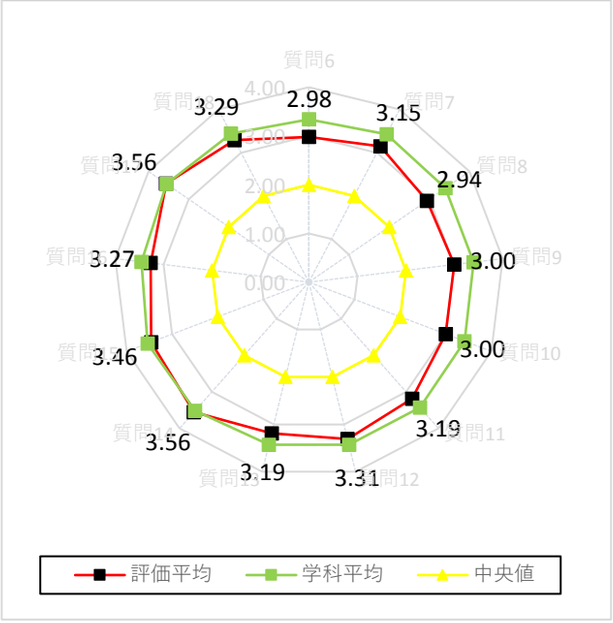
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においても、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。また、引き続き視聴覚教材やICT活用を行い、テーマを視覚的に理解を深める取り組みを続けたい。
4年生対象の科目でもあるので、次年度については授業内で適宜グループディスカッションの時間を増やすことで、学生がより主体的に授業に取り組むことができるよう改善を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床心理学概論	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

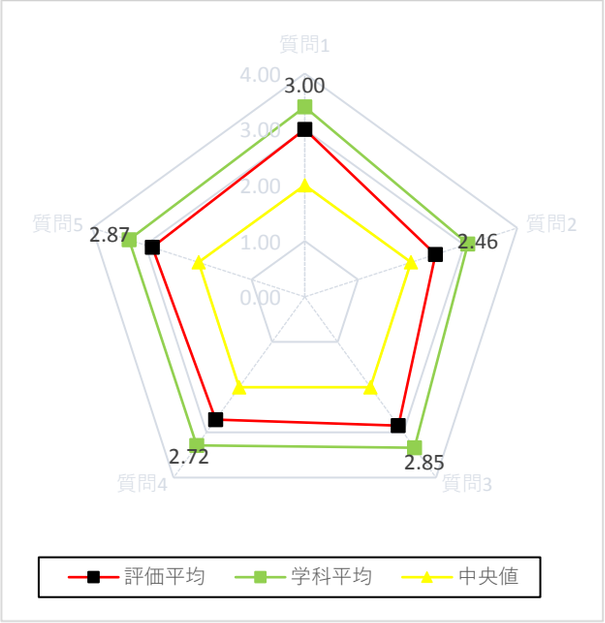
５２人中４８人（９２％）の高い回収率であった。
全体的に平均か、平均をやや下回る結果であった。
授業中教室を抜け出す学生が目立つ、やりにくいクラスであった。
授業をしっかり聞いていると思われる学生と、そうでない学生の差も激しいクラスであった。

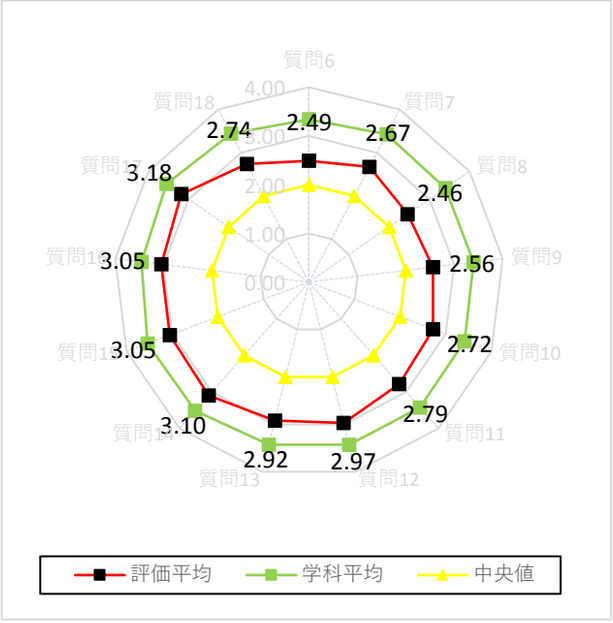
（３）次年度に向けての取り組み

学習についてのレディネスがそもそもできていないのではないかと思う学生が増えているように感じる。
まず学習に興味を持たせることが求められると思うが、学生個々の生活する世界が狭く、なにか共通の話題を
共有することが困難になってきているように感じられる中、どのような切り口で学生の興味関心を喚起していくか、
今後の大きな課題である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学的支援法	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

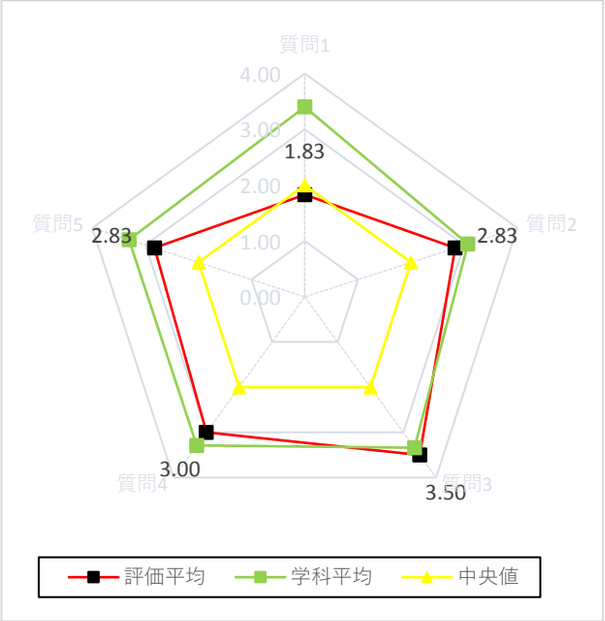
　５２名中３９名（７５％）の回収率であった。
>授業内容が自分語りでとてもつまらない、
　何に対する指摘なのか不明。
>心理学のこと話したと思うと、教科書を音読してるだけでつまらない。
　教科書音読の前後にはその説明をしているが、聞いていなかったものと思われる。
>学生が授業中、教室抜けると抜けた理由聞くのはわかるが、確実に贔屓している学生にはどれだけ遅刻しても何も言わないのはおかしい、
>考え方を変えて欲しい
　遅刻した学生に対しては出席簿で遅刻をチェックしており、同じ遅刻した学生でも指導する学生と指導しない学生がいるというのであれば贔屓という指摘も理解できるが、そうではないので、筋違いの指摘と言わざるを得ない。
　Q15公平に学生に対応しましたか、の問に対しても43.6%の学生が4. そう思う、30.8%の学生が3. だいたいそう思う、と回答しており、「贔屓」というのは一部の学生の偏った見方ではないかと考えられる。
　しかし一方で全体的に学科平均より低い評価になっている。ただ質問が設定されていないQ19～Q25までの設問に回答している学生もおり、評価自体の信頼性にも疑問を感じる。

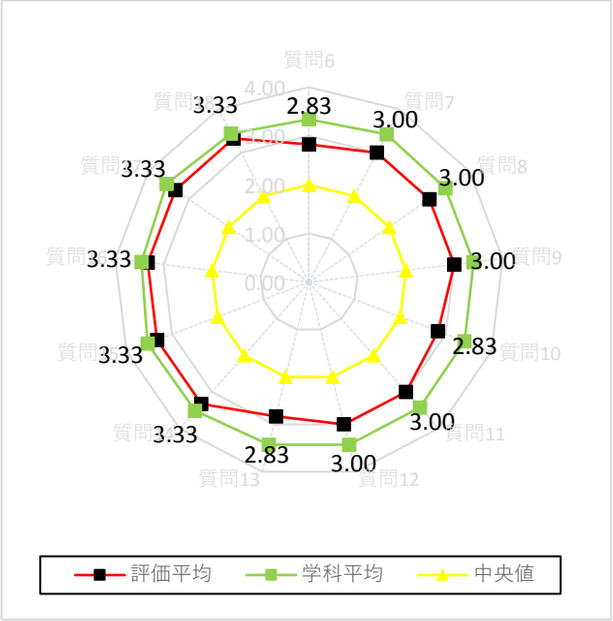
（３）次年度に向けての取り組み

　授業をしっかり聞く（姿勢ができている）学生と、そうではない学生の差が激しい。
　聴く姿勢ができていない学生にいかに、聴く姿勢になってもらうかは今後の大きな課題である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		精神分析学	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

履修登録者9名中6名が回答している。評価者の母数が少ないため、概ね3，4点の評価が多いものの、1人でも低い評価を付ける学生がいると、評価平均に大きく影響が出る。そのため、学科平均よりは低い評価になっていると考えられる。

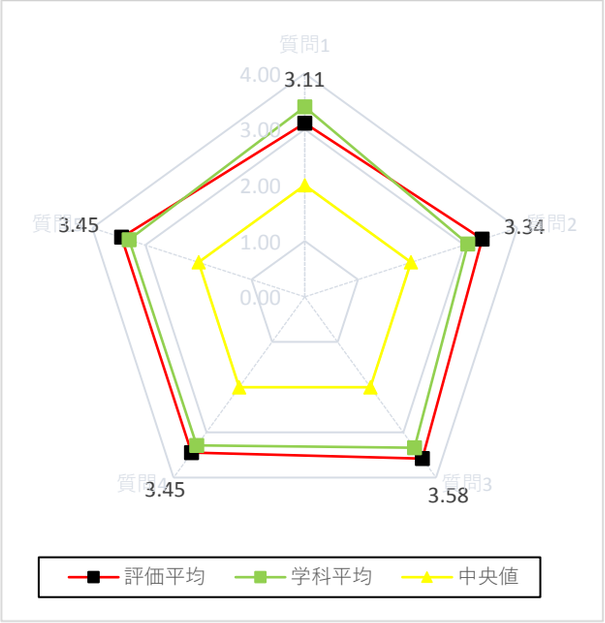
（３）次年度に向けての取り組み

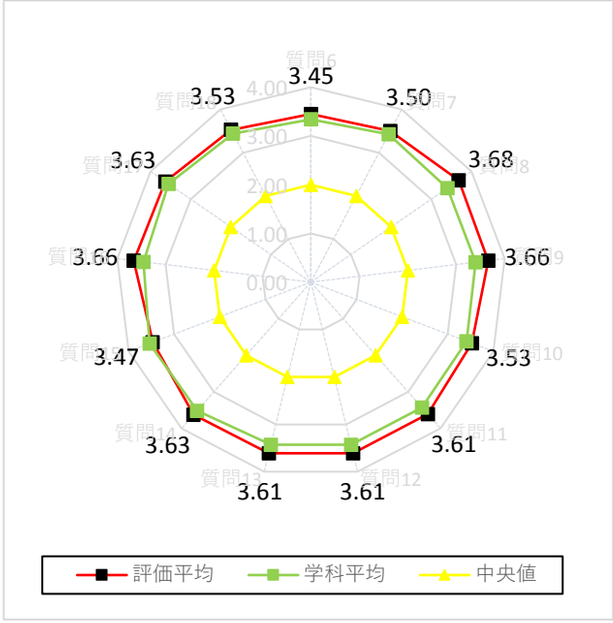
テキストには具体的な文言の例がふんだんに掲載されており、授業の中でも具体的な例をあげながら説明している。

カウンセリング、特に精神分析的な心理療法を解説するにあたり、かなり噛み砕いているつもりであるが、精神分析的な概念の性質上、わかりにくいところも残るのも無理はないかもしれない。私自身も何年もかかって少しずつ理解が深まっていく場合もある。学生にはすぐにわかろうとするのではなく、今後の現場での体験をふまえて再学習する中で少しずつ理解を深めていくことを伝えていきたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法	39名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

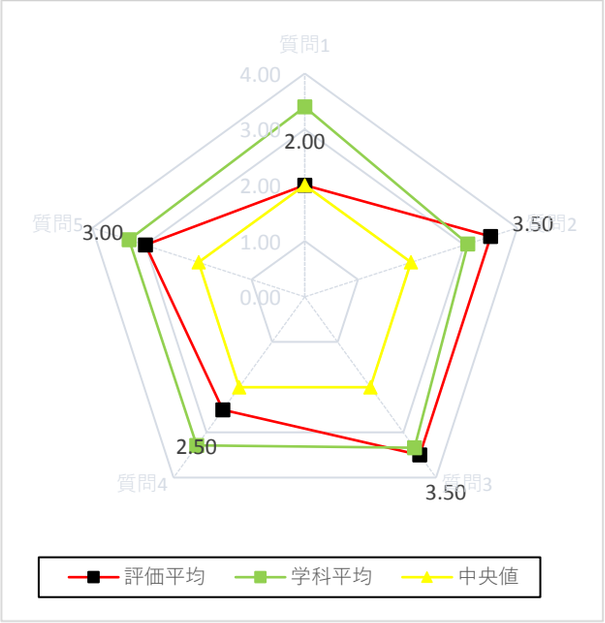
・全体的に学科平均より高く、学生の理解度3.45、学生による総合評価3.53と高い評価を得ている。特に、質問項目8の授業に対する興味関心度は3.68、
　質問9の授業ののわかりやすさなど3.66であり、学生による総合評価も3.53と高く、学生のこの授業に対する取り組む姿勢がうかがわれる。
　以上のことより、授業評価は、全体的に学科平均より高いことがわかる。
　授業を振り返りながら分析すると、教員は学生一人一人に対する双方向的なやり取りをしながら授業を行った。その結果が、質問16の3.66という高得点につ　ながったと思われる。また、芸術療法は、実践を多く取り入れているが、必ずレポート提出を義務付けている。
　学生自身が芸術療法を体験し、そこで生じた内的体験をレポートにするということを通して、自己理解。他者理解につながっていったと思われる。
　中には、この授業を通して、卒論のテーマや大学院進学を考える学生も出てきている。

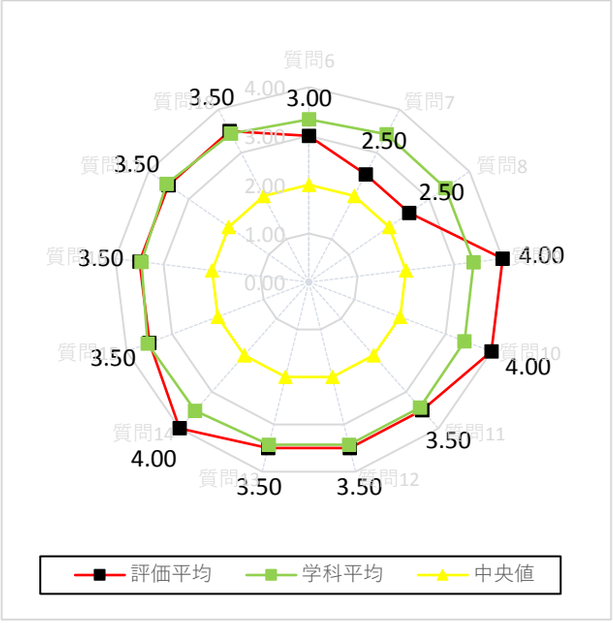
（３）次年度に向けての取り組み

・この授業は学生が非常に興味を持って取り組み受講してくれる科目である。そのため、オープンキャンパスでの箱庭・コラージュ体験でも手伝ってくれ、来　校する高校生とも、体験を通した双方向的なやり取りができており、こういう場面でも授業の効果がみられている。
　また芸術療法を学ぶ上で、必ず自己と向き合う体験をし、レポート等を通して自分の過去、現在、未来について振り返っていく学生も多くみられる。
　そうしながら方向性を見つけていくものと思われる。
　反省点としては、レポートを通した振り返りを行っているが、もう少し踏み込んで、グループワークを取り入れながら芸術療法を通して自分について考える　時間がとれればと思われる。TAとして参加してくれている大学院生にとっても学びの場であり、学部生との交流を通してよい体験にもなっている。もう少し　TAの人員が増えるならばより効率よく授業が展開すると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習Ⅱ	26名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

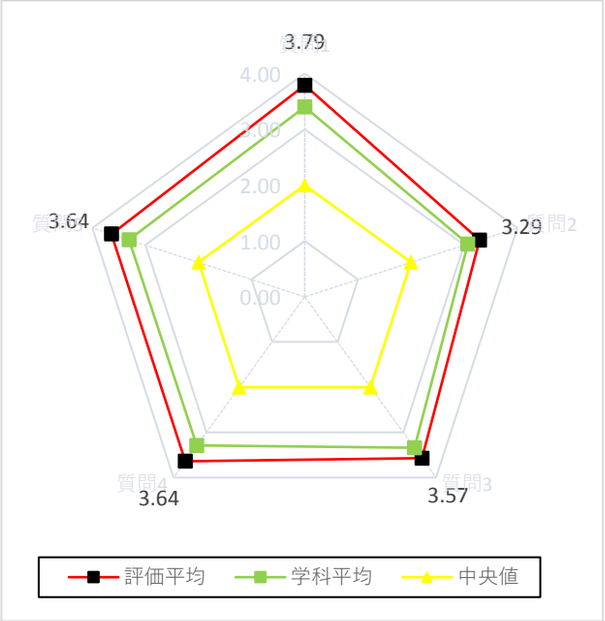
26人中2名回答（7.7%）。回収率が低かったのは、授業評価に対するアナウンスが弱かったためと考えられる。
2名の回答なので、ブレが大きく出たようである。統計的な判断は難しい。

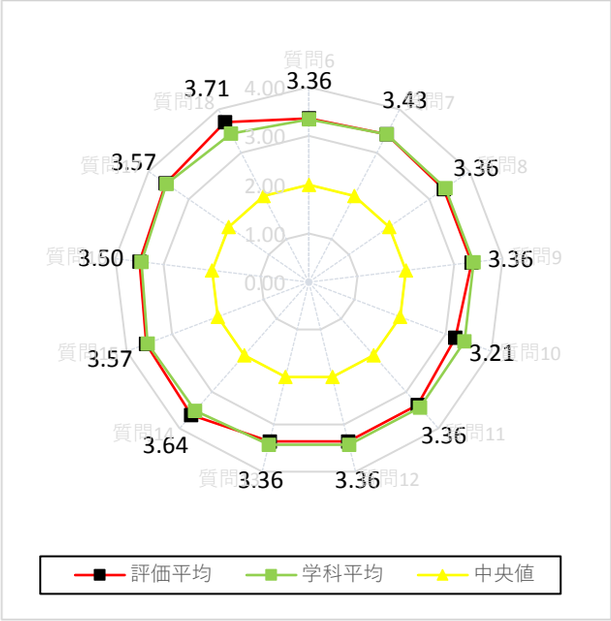
（３）次年度に向けての取り組み

まず授業評価の回答率を上げるようアナウンスを繰り返すことが必要であろう。
また時間が確保できれば授業時間内に回答を促すことも考えられる。
その上で授業の内容について改めて考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習Ⅲ	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

・本授業は、外部実習を通した心理実践演習である。小城市内の8つの小学校に年間を通して子どもサポーターとして1日4時間ほど入っている。実際に教室に入　り小学生の授業状態を観察したり、離籍する児童の支援を行ったり、一緒に遊んだりと内容はさまざまである。ほかに、児童養護施設での子どもたちとの触　れ合い、不登校を対象として適応指導教室に1年　間、東北大震災支援活動に参加、コラージュ研究会への参加など実践活動を通して学んでく授業である。そ　のため対面式での授業は少なく、学生の主体性の　中で地域の中で活動している。

　授業に対しては、最初の数回を使い、シラバスを用いて説明し、目標やねらいなどの確認を行っている。実習は、各領域担当を決めているため、自分の責任　で行動するため、無断欠席などは他者の迷惑となり本人たちも自覚している。そのため質問項目1，2，3，4，5と高い評価を得ている。また実習に際しては、　毎回記録を書いてもらい、報告会を最後に行っている。

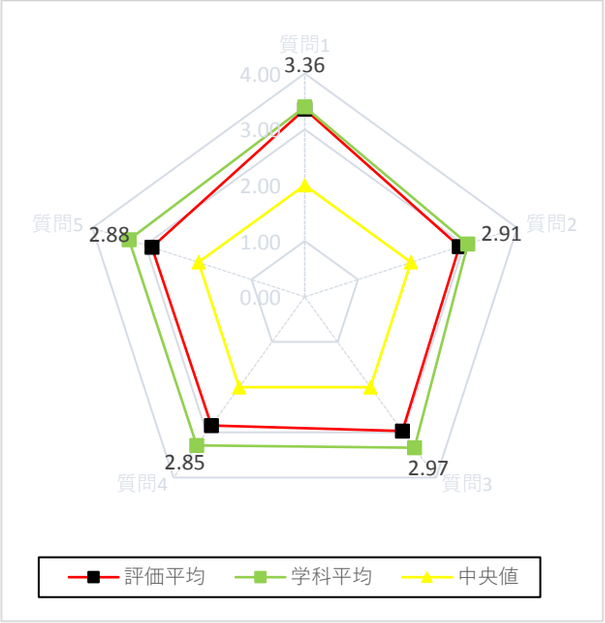
（３）次年度に向けての取り組み

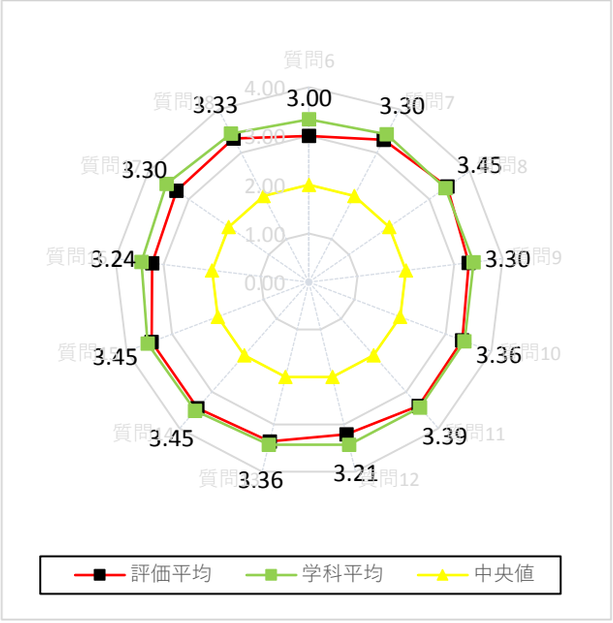
・児童への関心や将来心理職を考えたり、大学院進学を考えたりしている学生を対象としている。そのため、目的意識も高く、自分たちで考え話し合い実習に　臨んでいる。教員はそれぞれの領域を巡回指導を行っているが、どこも高い評価が得られ、特に小学校では回数を増やしてほしいという希望も多くみられる。改善ではないが検討しないといけなことは、公認心理師受験資格としての実習時間数が、本来は80時間である。実際、時間数的には多く実習に行ってお　り、今後実習施設の検討や方法について検討が必要である。

　しかし、地域における外部実習の体験は、1年間を通して成長の跡がみられ、インターシップなど就職活動に影響を与えており、、児童養護施設への就職や適　応指導教室への就職などつながっている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		思春期・青年期心理臨床	34名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

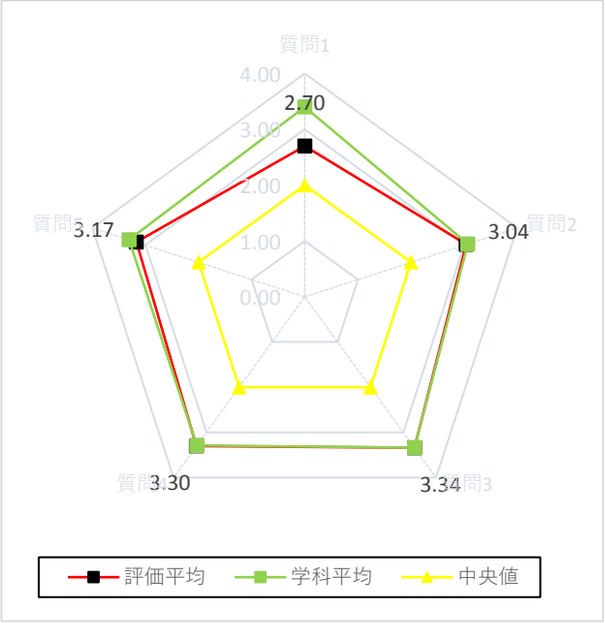
今年度、担当教員の代打で行った科目である。グループワークをして進めていったが、それがかえって学生間の不平等感を生んだようだ。そしてグループワークを取り入れることで、教員がやる気のないような姿に移ってしまったのが残念である。教員の発言をもっとしておけばよかったと考える。

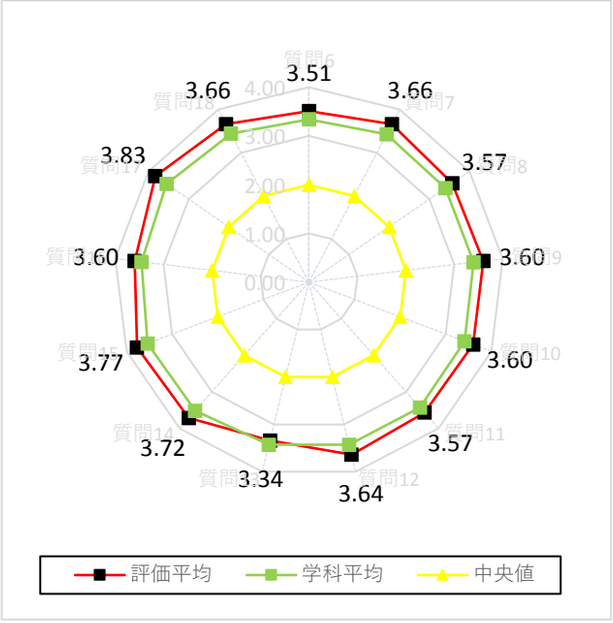
（３）次年度に向けての取り組み

この科目をもつことは次年度はありません。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		障害者・障害児心理学	53名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

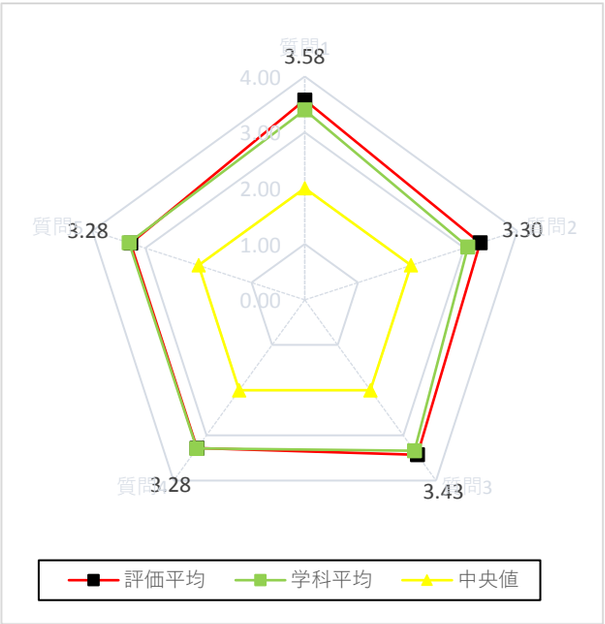
質問3「居眠り・私語をせず真剣に取り組んだ」が3.34、質問4「自分で工夫」は3.30、自己総合評価は3.17であった。一方、質問1「欠席」は2.70と学科平均を下回っている。
質問6から18までは全項目学科平均を上回り、特に質問14「誠実な対応」は3.72、質問15「公平性」は3.77、質問17「熱心さ」は3.83と高得点であった。
学生自身の生活リズムをどう構築させるかが、学科としての喫緊の課題である。

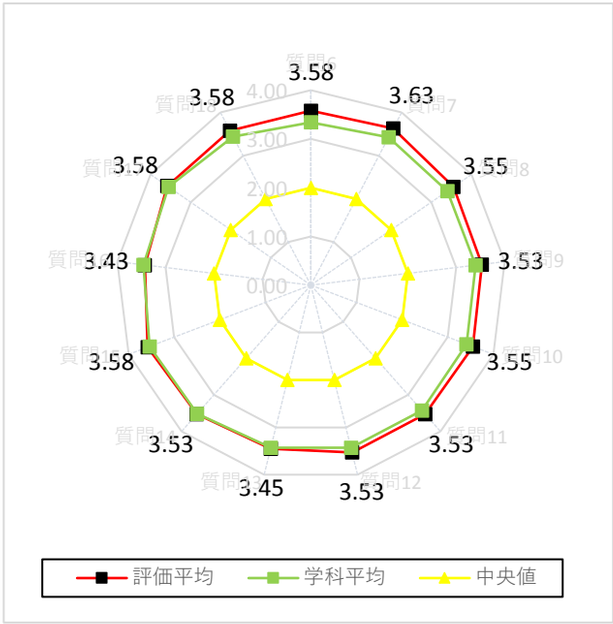
（３）次年度に向けての取り組み

1限に「来なければ」ではなく、「来たくなる」授業を検討したい。
方法のリサーチに努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		暮らしに潜む罠	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

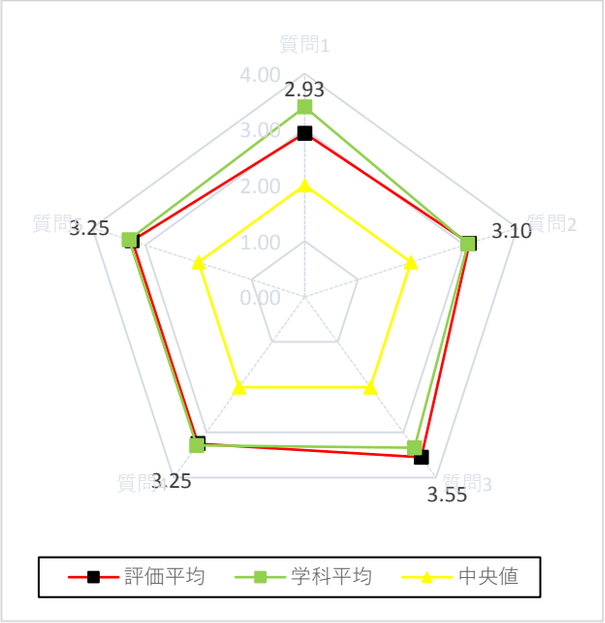
質問1「欠席」は3.58、質問2「シラバスの活用」は3.30、質問3「真剣に取り組む」は3.43という結果であった。
質問6～18までは均等に高い評価を得ていた。特に質問7「授業の到達目標の明確化」は3.63と最も高く、次いで質問15「公平性」は3.58、質問17「熱心さ」も3.58、総合評価も3.58であった。
毎回、次回の授業のための調査学習を行わせ、調査結果に基づきグループ・ディスカッションを行って授業を進めていたのだが、受講生は質問4「授業への工夫」を3.28と、あまり高くない評価をしている。これは学生は予習と思わずに調査学習を行っていたことを示している可能性がある。

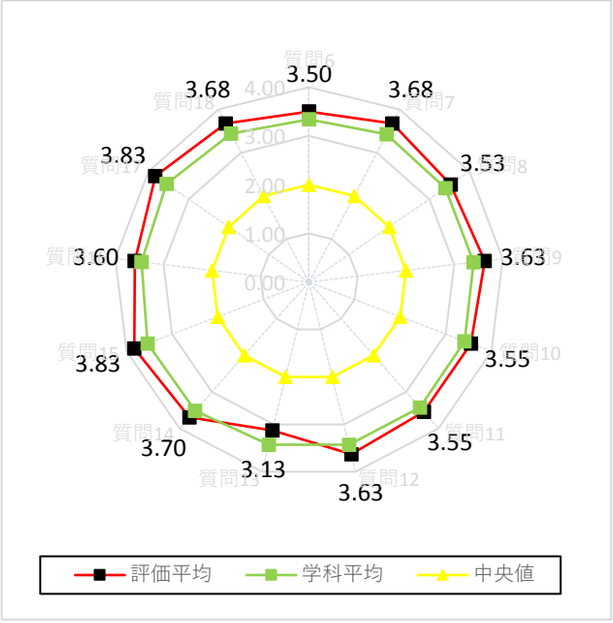
（３）次年度に向けての取り組み

今年度を踏まえ、本人たちが負担に感じない調査学習を毎回課題にし、アカデミックスタディスキルの向上に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		福祉心理学	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

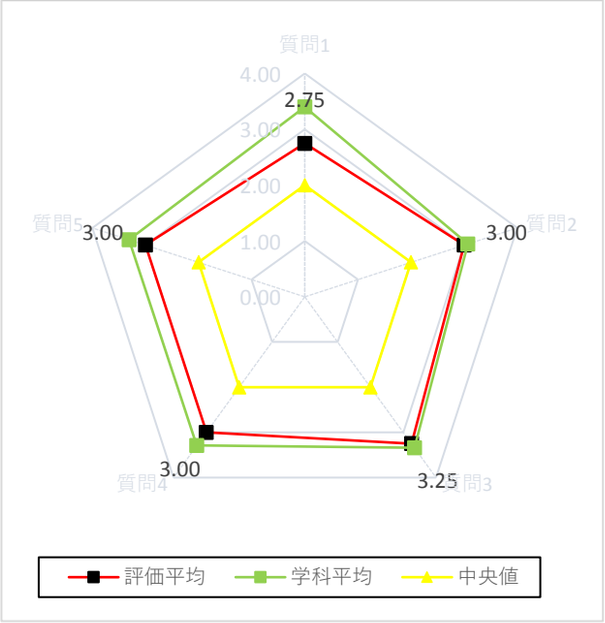
質問3「真剣な取り組み」は3.55と学科平均値を上回る評価であった。一方質問1「欠席」については2.93であった。
質問6～12、14～18までは、学科平均を大幅に上回る評価を得ている。しかし、質問13「進度の速さ」は3.13であった。
国家試験受験科目で、初めての授業であったことから、取り扱う範囲の選定をもっと絞る必要があったと考える。

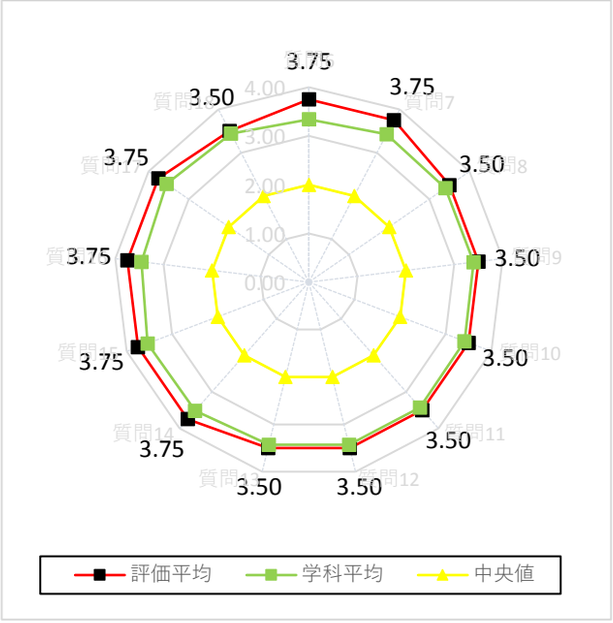
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の国家試験の内容、および市販されている国家試験対策書籍を参考にし、授業範囲を絞って授業展開していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅡ	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

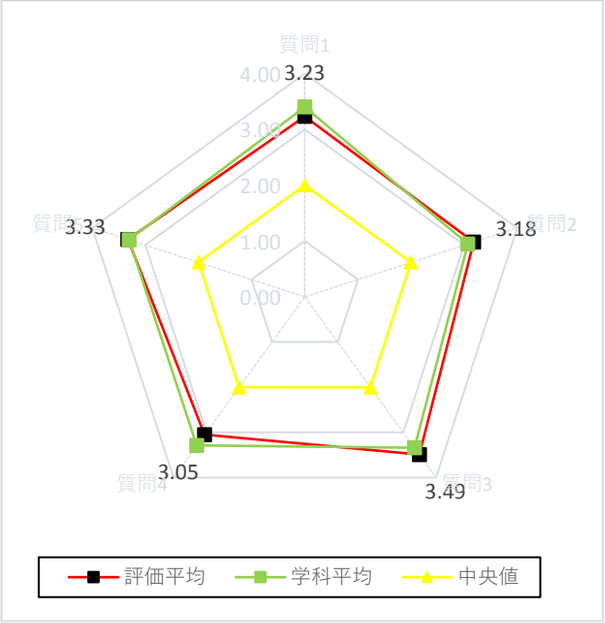
本科目では、多くの項目で学科平均を上回る結果となった。
前期はアカデミックライティングのスキル向上のための講義・演習を行い、その後学生個人の興味関心ある分野の先行研究の発表などを行った。論文検索の仕方については、図書館との連携も行い、再度検索の仕方なども周知した。また、授業時間外での個別指導や少人数指導も行い、発表資料作成について適時指導を行った。それらの取り組みが、特に質問14、15、16、17の結果に反映されていると思われる。
授業評価回答数が半数程度となったことは今後の課題である。

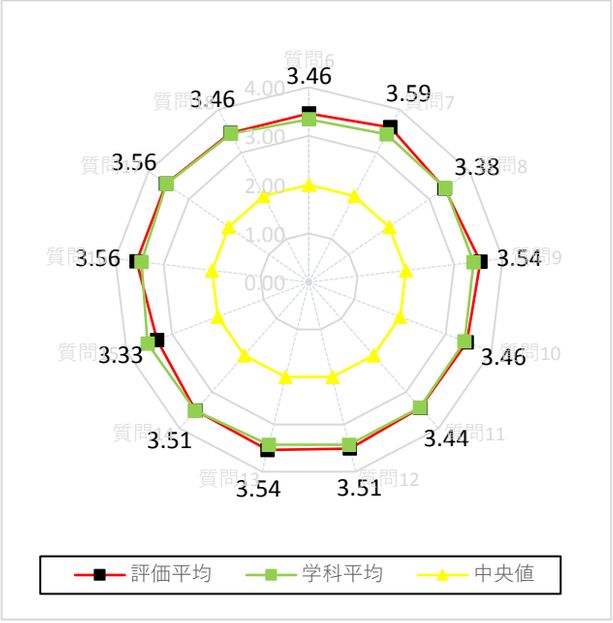
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、今年度同様にアカデミックライティングのスキル定着に向けての丁寧な指導を行っていきたい。その際、今年度高い評価であった誠実性や公平性、熱意などを今後も意識して学生指導にあたりたいと考えている。図書館との連携も引き続き行っていく。また、個別指導・少人数指導等も各学生に公平に行っていきたい。
次年度は授業評価の回答数を増やすために、授業内での十分な時間確保や授業評価の機会を複数設定するなど工夫していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

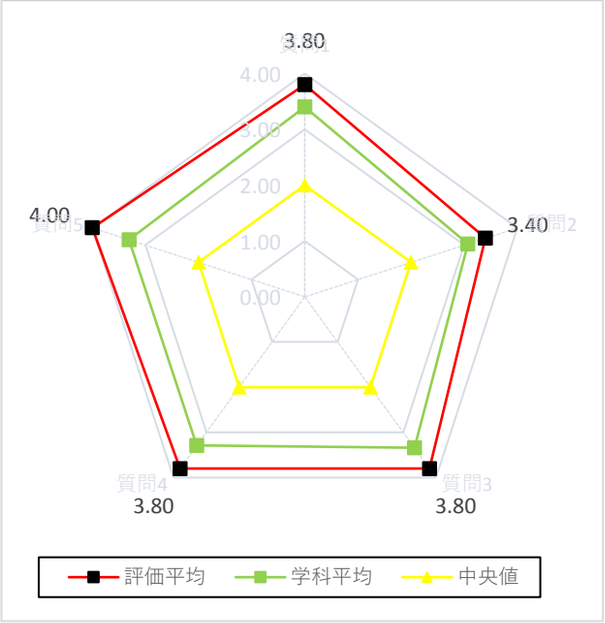
ほとんどの質問では、学科平均より同等か高い数値となっている。
しかし、質問４や質問９などは、学科平均よりも低い数値である。
本授業では、カウンセリグの基本となる傾聴の体験や、子どもに関する現場の見学実習を含んでいる。
そのため、グループでの体験学習など多く、緊張しながらの体験と知識が結びつきにくいことが考えられた。
しかしながら、質問３、質問５などのように、カウンセリングに必要な基本的な態度を学ぶために、意欲的に取り組んだと思われる。

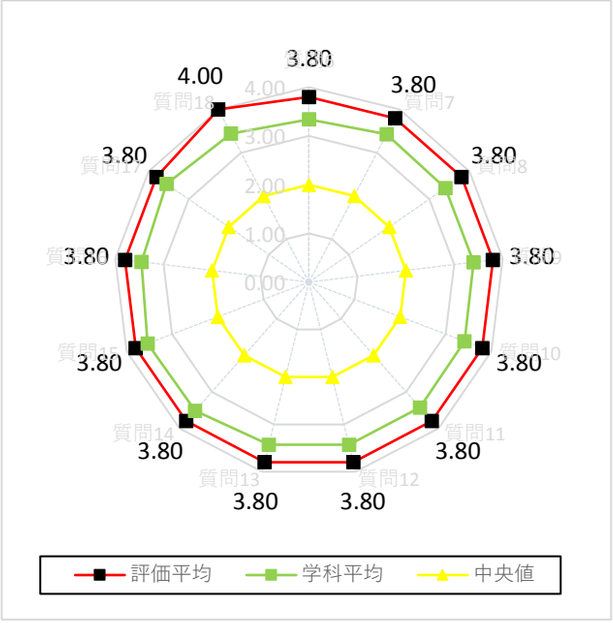
（３）次年度に向けての取り組み

授業の計画・内容について、担当者間での情報共有を行い、再検討をする。
さらに、授業の到達度は、適切かどうかを検討する。
その結果、シラバスの計画および到達目標を見直し、分かりやすいテキストの導入を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

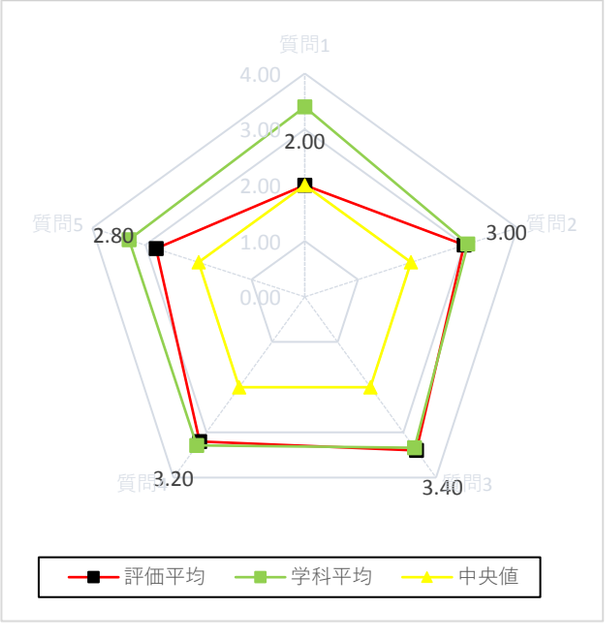
・学科平均と比べて、かなり高い評価を得ている。学生による総合評価も4.0であり、また学生による自己評価も4.0である。かなり満足したものになってい　る。今回のゼミ生は、3年留年の学生、1年間留学し復学した学生もいて、かなり学習力に差がみられ、卒業論文の進捗状況も集約できない状態であった。
　以上のことを踏まえて、学修過程を振り返り分析する。
　授業開始時、学修の到達目標及び授業のねらい、方法について説明を行った。
　とくに、卒業研究が、大学生活の集大成であることを伝え、意識化させるようにした。前半は、題目も含めて文献収集に時間を当て、その中から要約させ、　研究にどう役立てていくのかをレポートしてもらった。そこから、デザインを考え、章立て、調査研究の学生は、調査研究実施、文献研究の学生は、さらに　文献収集と課題絵を与え取り組んでいった。後半は、個別指導が主となり、ほとんどが時間枠以外の時間や、メールでのやり取りなど多様な方法で指導を　　行った。少しの指導で展開する学生と、1対1を継続して行わなければ進まない学生もいて、指導の難しさを感じた。

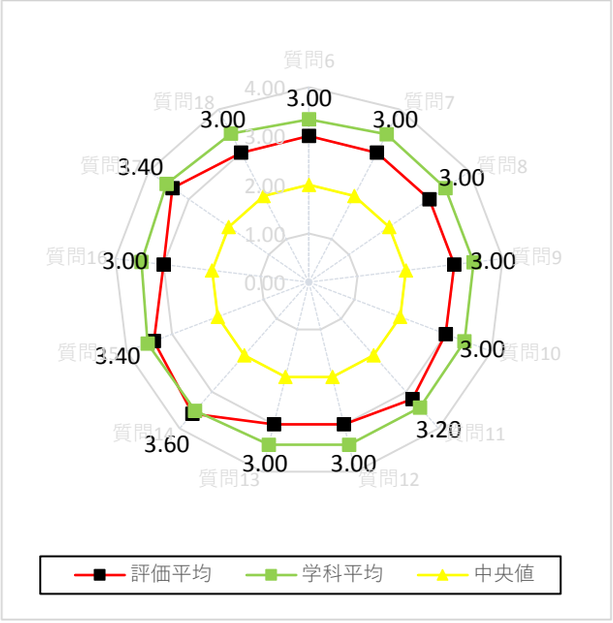
（３）次年度に向けての取り組み

・学生生活の集大成として、卒業研究を置き進めてきた。文章がなかなか書けない学生や文献指導から入らないといけ茄学生などさまざまであった。
　しかし、時間をかけ、学生に応じた双方向的な方法で行うと学生のモチベーションも上がり熱心に取り組んでくれた。
　卒業研究を通して、学修力も上がり、大学院進学が4名（内1名は学外大学院）が進学し、1名が公務員試験に合格した。
　しかし、学修の遅れを持つ学生は、時間を十分にとりながらの指導が重要であることを痛感した。週に数回、図書館において文献指導を行ったり、その場で　文章を書かせ添削したりなどかなりの時間を要した。次年度に向けては、やはり早くから、卒業研究に取り組ませるために、個別指導に重点を置き、卒業研　究への意識化を図ることが必要であると思った。学修の遅れを持つ学生に対しては、3年時よりの指導が必要であり、それだけ時間をかける必要があると思わ　れる。、

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

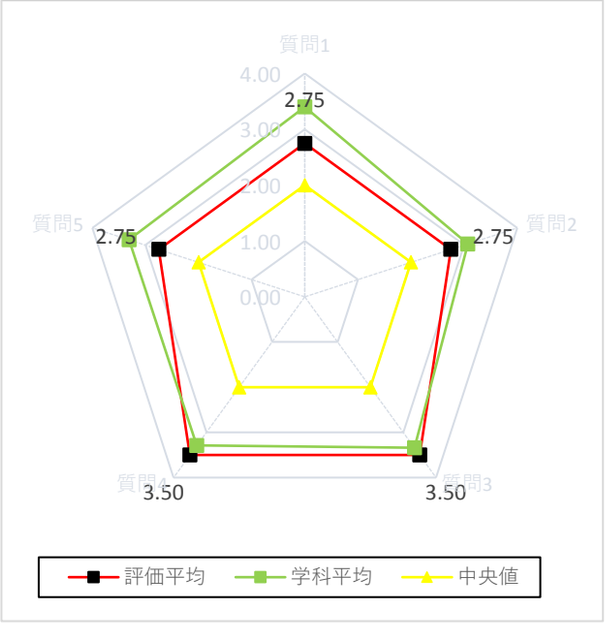
6名中5名回答。
1名が、「1」評価を多数付けているが、他は「3」ないし「4」であり、何をもって「1」と付けたか不明。
卒業研究自体についていまだに理解していないのであろうか。
せめて自由記述で何かコメントがあればそこから推測することもあるかもしれないが、統計上意味を感じられない。

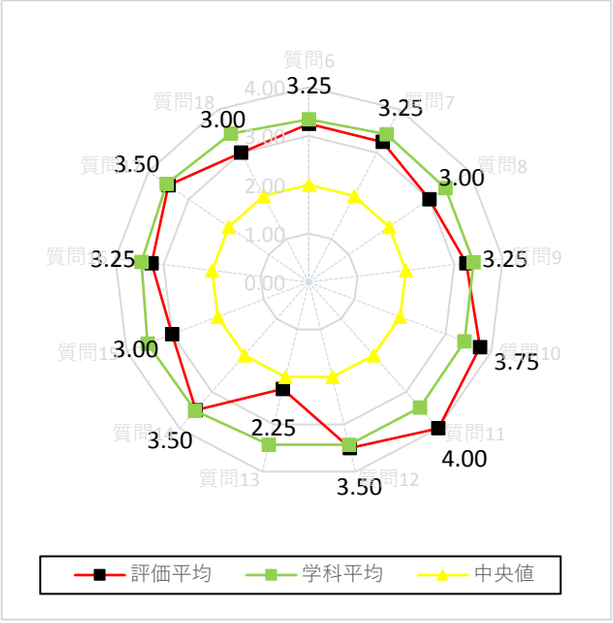
（３）次年度に向けての取り組み

あくまで卒業研究は学生が主体的に取り組むものであり、学生の求めには応じていきたいと考えている。
しかし、他の学生が進めている中、なかなか形になって現れない学生に対しては、指導の困難さを感じる。
本人が、自分が「できていない」ことを自覚していればまだしも、「できます」「やります」と言っていつまでもできない学生についてはさらに困難を覚える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

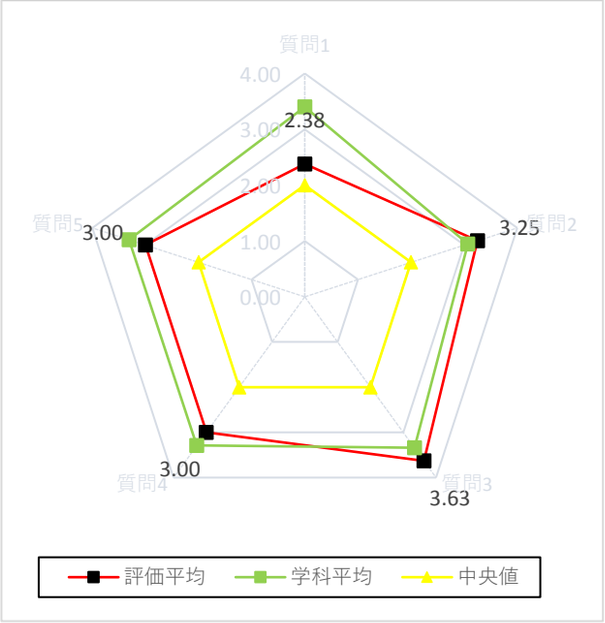
学生の水準に開きがある中で、一部の学生にとって授業についていくことが大変だったと思われる。しかし、各位とも学習に工夫をこらして頑張ったことがよくわかるとともに、全員にとって適切な学習支援材を提示することができていたことも分かった。

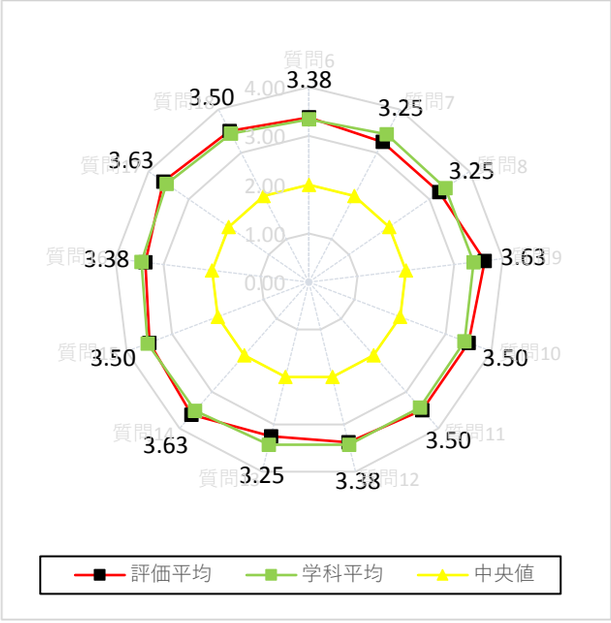
（３）次年度に向けての取り組み

学年全体のものとして書かれているシラバスに、自身の指導方針及び形態を落とし込み、学生に説明していけるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅠ	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本講義は、ゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。ゼミ指導で使用した教材はアカデミック・スキルの向上を目指すものであったが、昨年の授業評価の結果を活かし、卒業論文とのつながりなどモチベーションを上げる言葉かけなど増やすことができたため、昨年度を上回る結果を得た。

質問９の結果は学科平均を上回っており、自由記述でも「丁寧な説明で分かりやすかった」との評価を得た。一方で説明が冗長と感じられた学生もいたようであり、各学生の理解・進度のばらつきへの対応の難しさも感じられた。

授業評価回答数は、最終回で十分な評価時間を確保することが出来たため、前年度よりも多くの学生が評価を行うことができたと思われる。

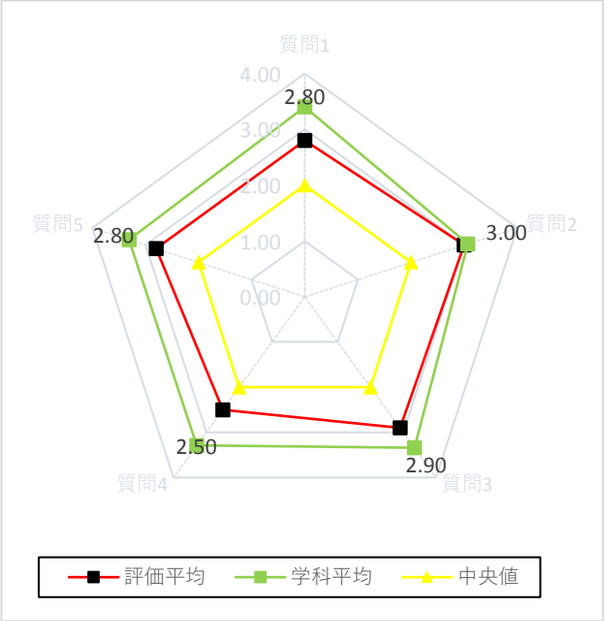
（３）次年度に向けての取り組み

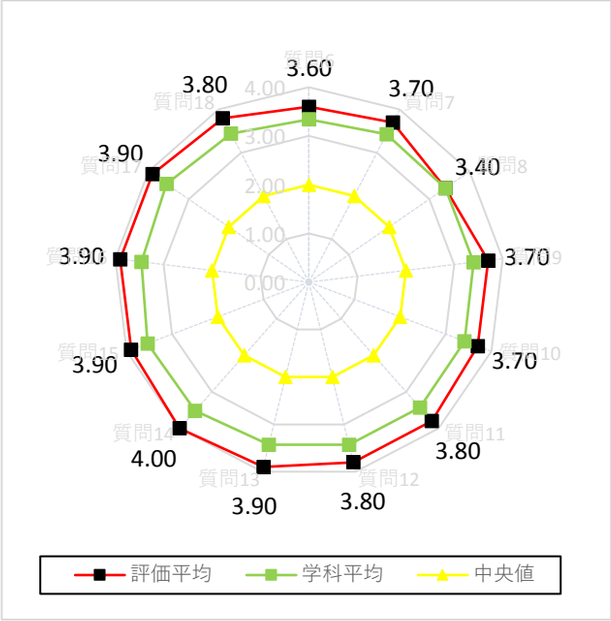
次年度に向けて、今年度同様授業担当の複数教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成を目指したい。また、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。

わかりやすく丁寧な説明を心掛けたことで高い評価とした学生がいた一方で、説明が冗長と感じられた学生も見受けられたため、説明・解説について学生の状況を勘案しながら行っていきたい。場合によっては全体説明を端的に行い、その後個別的なフォローを行うなどの工夫も検討していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅠ	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

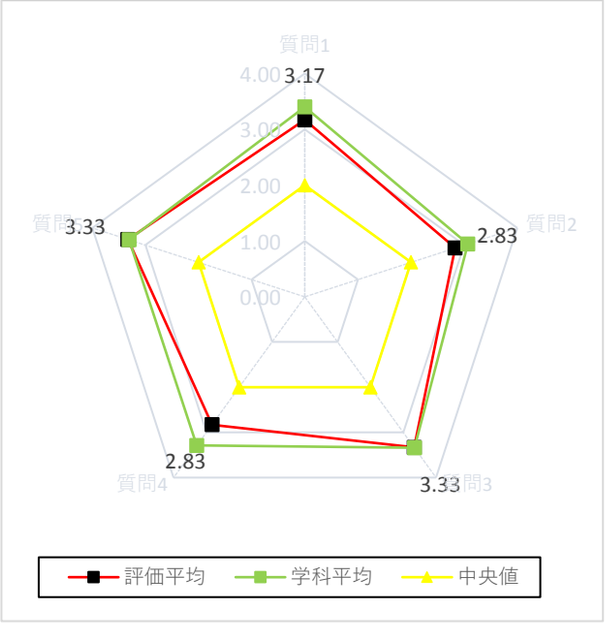
学生のキャリアアップを目指す個人面談の授業回が数回あったことで、自分が教員から対応してもらえているという感覚が得られたかもしれない。

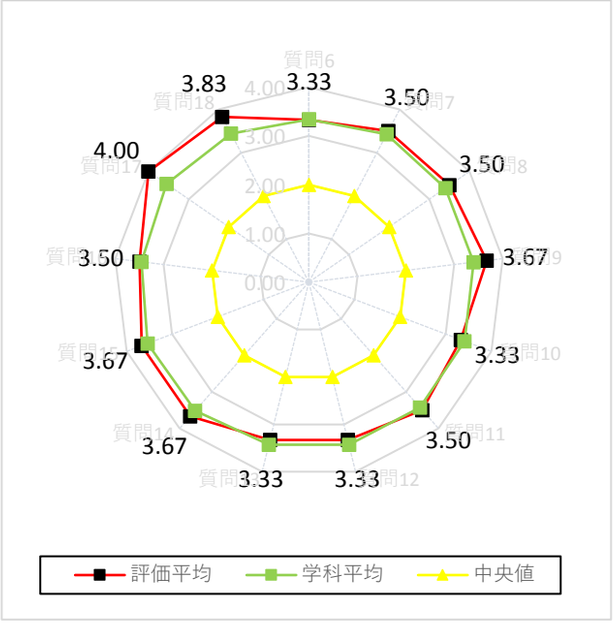
（３）次年度に向けての取り組み

相対的にも低い「この授業を理解するために自分で何か工夫」する部分においては、学習の汎化・日常化という視点からもう少し積極的に投げかけるようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅠ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

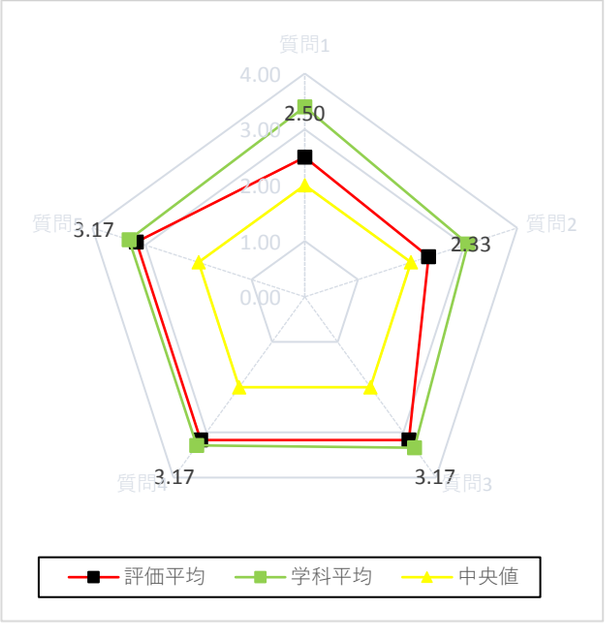
ほとんどの質問において、学科平均よりも高い数値となっている。
その中でも、質問13は若干であるが学科平均よりも低い評価であった。
特に、個別のレポート指導は、一人あたり１回7～8分程度と短時間であった。
しかし、授業全体の組み立てもあるため、学生への指導時間の確保が難しい状況であった。
それに伴い、学生によってレポートに取り組む速度にばらつきが見られていたこともあり、授業の速さが適切でないと感じた学生もいたのではないかと考える。
しかしながら、本講義への総合評価は高く、学生と双方向的なやりとりをしながら進めることができたと思われる。

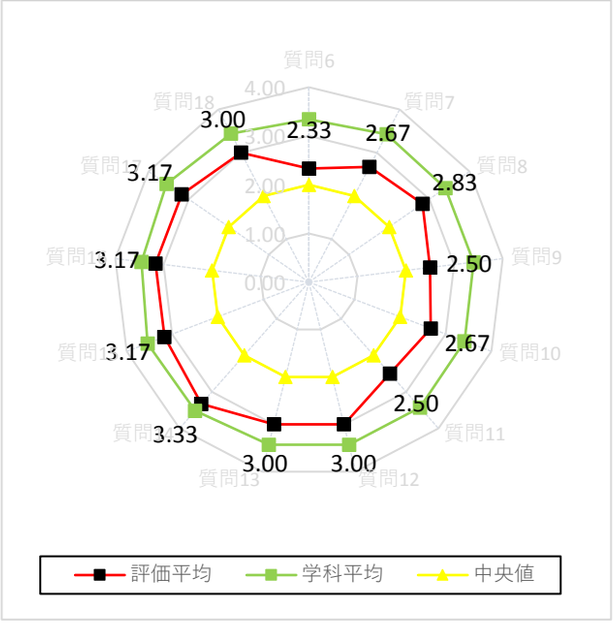
（３）次年度に向けての取り組み

少人数ではあるが、学生によって課題に取り組む理解やスピードが異なるため、個別に応じた対応が必要となる思われる。
特に、個別の指導においては、短時間ならも、指導のポイントを絞って学生の力につなげる工夫が必要だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		ゼミナールⅠ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

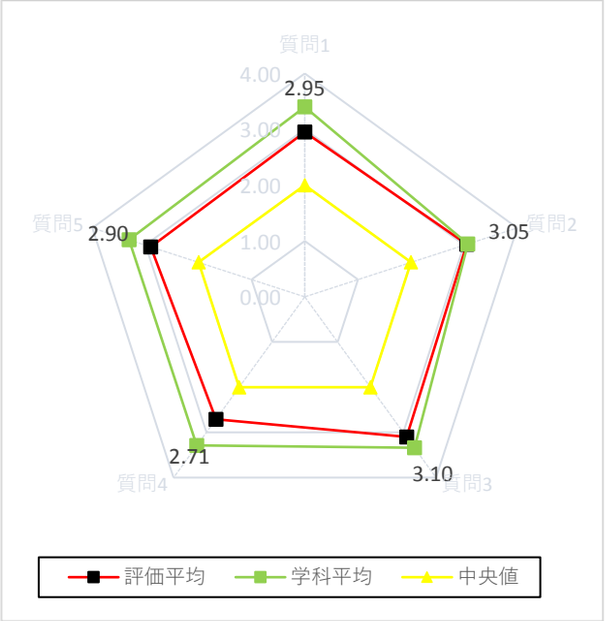
ゼミナールの目的そのものを教員が正確に理解していないこと、意味もわからないこと、によって学生には迷惑をかけてしまった。言い訳になるが、初めてのことなので、私としても戸惑いながら進行した次第である。なぜ大学生にもなって、これをしないといけないのか悩み続けた科目であった。

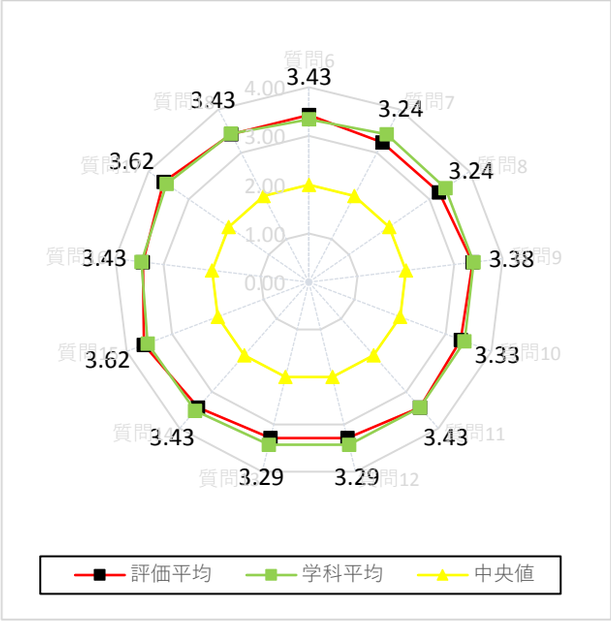
（３）次年度に向けての取り組み

ゼミナールの目的、意味を理解できたので、次年度からは比較的スムーズに進行できると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育	22名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

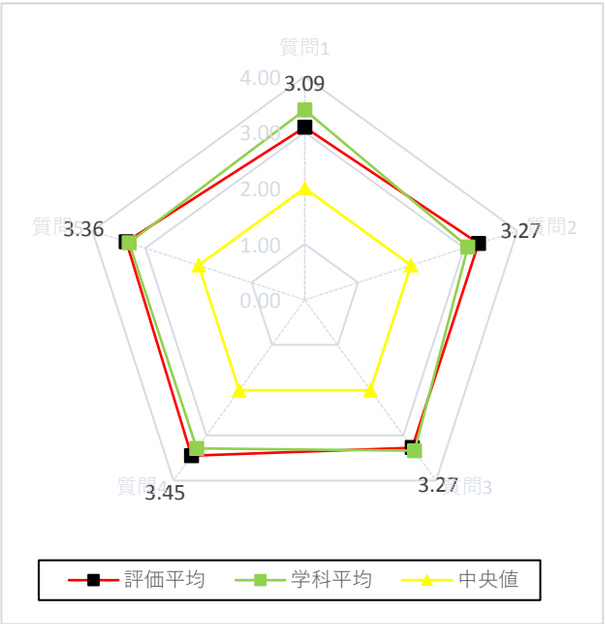
・評価平均がおおむね学科平均と重なっている。
・子ども学科の学生のうち、小学校の教育実習と重なって受講した学生が５名、心理の学生で高校の教育実習と重なっていた学生が１名いたため、シラバス通　りに進めることが難しい状況であった。
・学生の多くが肢体不自由の子どもとかかわった経験が少なく、ＤＶＤ等の視聴覚機器を活用して、子どもの様子等を視聴させたが、理解が進まなかった。
・肢体不自由特別支援学校の実際の授業場面を見学検討したが、時間割上困難であった。
・基礎知識である心理・生理・病理について知識が定着しておらず、肢体不自由児の子どもが理解が不十分なため、何を学ばせるのかなど、主体的に考えるこ　とができなかった。

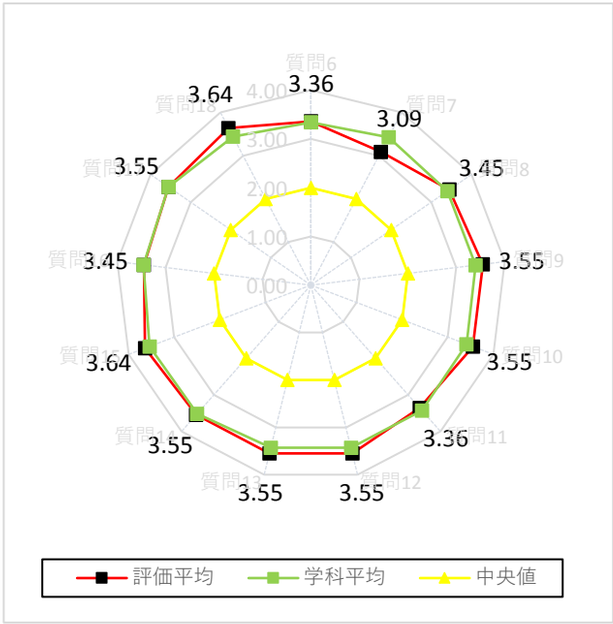
（３）次年度に向けての取り組み

・実際に特別支援学校の授業見学等の体験学習を入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		肢体不自由者教育の理論と実際	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

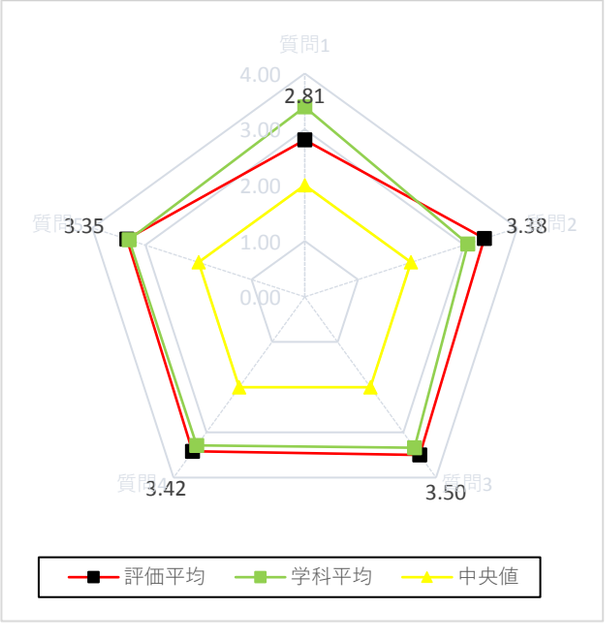
・評価平均がおおむね学科平均と重なっている。
・受講者１９名中７名が、前期の「肢体不自由者教育」を履修せずに、この科目を履修しているため、肢体不自由教育の教育課程や教科の指導、自立活動の意義等について学習しておらず、他の学生と一緒に授業を進めることが難しい状況であった。
・授業計画については、最初に説明していた。しかし、実際にワークショップ形式で授業を進めていったため、また、前期の「肢体不自由者教育」を履修していない学生が多かったため、授業が予定通り進まなかった。
・子ども学科の学生のうち６名が幼稚園実習と重なり、自立活動の指導目標の設定までのプロアセスについて学習できていなかったため、事例検討を進めるワークショップで予定以上の時間を要した。

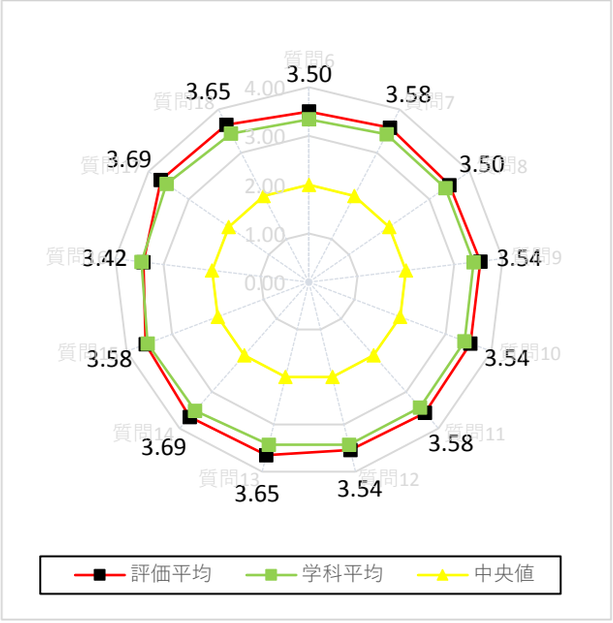
（３）次年度に向けての取り組み

・実際の具体的な実践事例等をビデオ等視聴覚機器を活用して示し、その事例をワークショップ形式で個別の指導計画（自立活動）を作成させていくようにしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		知的障害者教育	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

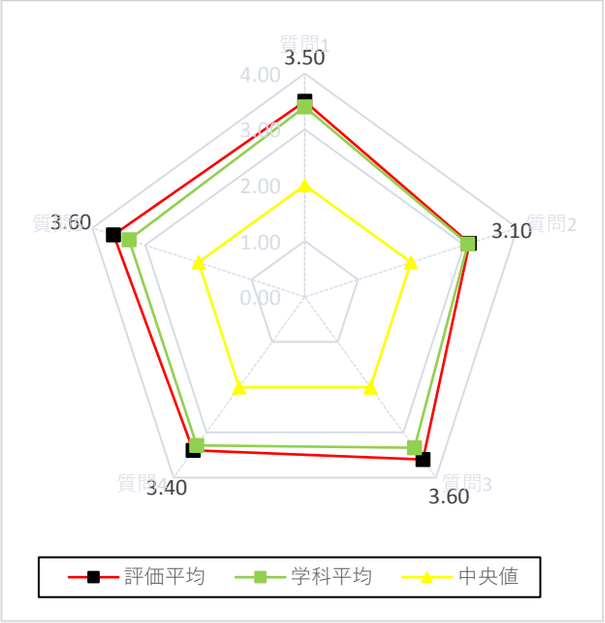
・評価平均を見ると、どの項目についても、3.5もしくはそれ以上となっており、おおむねよい評価であったと思われる。
・その中で、質問16については、他の項目と比べるとやや評価が低い。授業の進め方として、教員の説明の比重が多くなっていた面がと思われる。
・学生の自己評価については、欠席に関する評価が他の項目と比較して低いことが目立っている。1限目の開講であったことが影響を及ぼしているかもしれない。

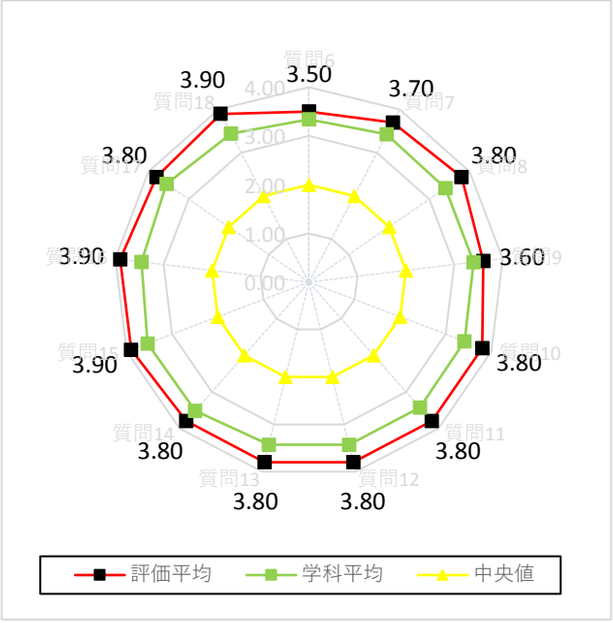
（３）次年度に向けての取り組み

・教員が詳細に説明する必要がある内容は多いが、そのことと、グループワークやディスカッションなどの活動とのバランスを再検討し、双方向的な授業の工夫を行う。
・シラバスに基づき、次回の授業の目的や内容の周知を図るなどして、学生の意識の一層の向上を図り、欠席せずに授業に参加することを促す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習事前事後指導	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

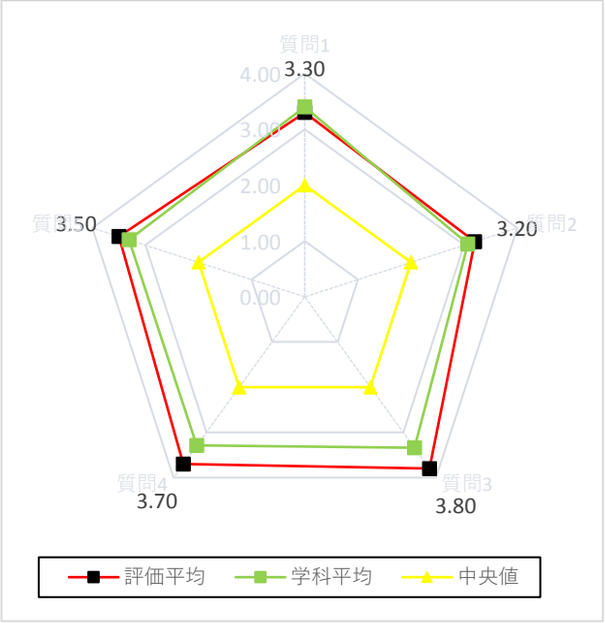
・すべての項目で評価点が高く、評価平均の総合評価は3.70であった。
・年間８コマ設定しているが、教育実習の時期が９月から１１月末までと、長い期間であるため、指導案作成の指導は、個別に時間を取って指導している。
　現在３名の担当で実施しているが、実習生が増加してきており、３名では困難が状況になってきている。
・事後指導として報告会を実施しているが、次年度の実習を希望する学生へのメッセージも含め、有意義なものになっている。

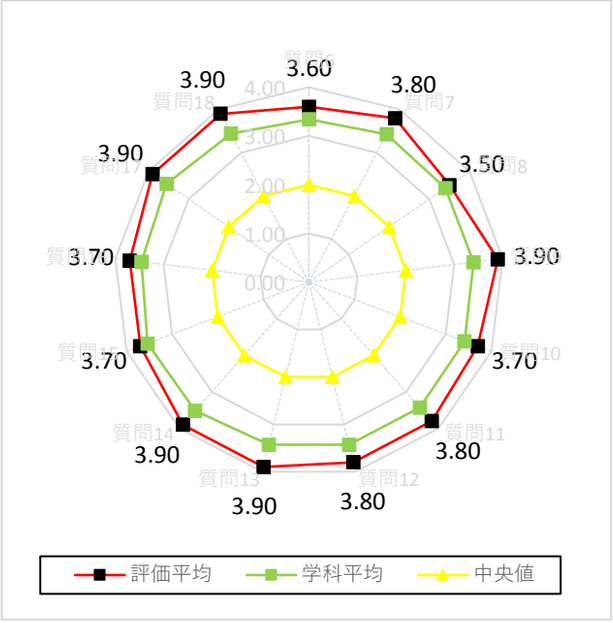
（３）次年度に向けての取り組み

・指導案作成の時間の確保。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		特別支援教育実習	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

・教育実習の評価は、学校現場での評価になりますので、ここでは控えます。
・学校の中で熱心に指導をいただいている評価であろうと思います。
・実習終了後の報告の中で、実習で多くのことを学び、先生になりたいと意志を強くする学生が増えてきています。

（３）次年度に向けての取り組み

・特別支援学校への教育実習希望者が増えてきており、今後実習先の確保が困難な状況になってきています。
　特に佐賀市内（大和、金立、中原特別支援学校）への実習生の人数確保が課題である。